

---

**魔法少女リリカルなのは Prima Star ~この星に願いを~**

星伝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Prima Star ～この星に願いを～

### 【Nコード】

N6310H

### 【作者名】

星伝

### 【あらすじ】

とある世界で行われた世界復興・繁栄のための魔法実験。しかし、その実験は失敗し、世界を救うはずだった魔法は世界を滅ぼした。実験素体選ばれていた少女はなんとか生き延びるが……。魔法少女リリカルなのはPrimaStar～この星に願いを～が始まります！

## 第00話 プロローグ（前書き）

この小説は「魔法少女リリカルなのは」の二次創作です。  
時間軸上ではJS事件半月後を想定しています。

苦手な方はお避けください。

最後はかなりのシリアスになる予定です（まだ未定ですが・・・）。  
コメディも一応は含む予定ですが、はっきり言ってるのれない可能性  
が高いです。ご注意を・・・

## 第00話 プロローグ

（プロローグ）

「これより、実験の最終段階に入る。」

朗々とした男の声が大きな空間に響き渡る。

その声を聞きながら、私は不安から頻りに辺りを見回してた。

しかし、目につくのは自分の寝かされているベッドと白い壁・天井のみ。

それだけが、この空間に存在するもの。

まあたとえ、ほかに何か存在していたとしても、ベッドに縛り付けられ、起き上がってそれを見ることさえできない私には存在しないにも等しい。

「アストラルよ、我が世界に復興と栄光を与え、導きたまえ。」

その言葉と同時に空中にいくつもの魔方陣が表れる。

その一つが光ると呼応するようにしてほかの光る。

そして、幾度かそれが起こる激痛が体を貫いた。

「く・・・かは・・・つつ・・・」

光る頻度が高くなるにつれ体が悲鳴を上げる。

バチンツといういやな音とともに負荷に耐えかねたのか体の毛細血管がはじけ飛ぶ。

白い床が赤く染まっていった。

しかし、それを認知するまもなくあたりは光の渦に巻き込まれて

いく。

そのまま、私は意識を白く染められていった。

その日、世界が一つ滅んだ。

\* \* \* \* \*

髪が動く感触に目が覚めた。  
空気の流れも一緒に感じる。

「か、ぜ・・・？」

目を開けると白い天井が目に入った。  
ボケーとしばらく眺めているが、今度はゆっくりと首を動かす。  
私が寝ているベッドの横の窓が開いていた。  
再び風が吹き込んできて今度は草木の青いにおいを感じる。

「・・・いい香り。」

途端、窓の外が見たくなる。

ベッドに手をつけてゆっくりと体を起こす。

「包帯・・・。」

体のあちこちに白い包帯が巻かれていた。  
動かすたびにあちこちから鈍い痛みを感じるが、それを押して両  
膝に力を込める。

意外にもしっかりと立つことができた。

サイドテーブルやベッドの端などを掴みながら窓際まで歩く。

そのまま体重を窓の縁に預けて外を見た。

「きれい！！」

思わず小さな歓声を上げてしまう。

青々と茂った木々。

風にそよぐ芝生。

何となく久しぶりに見たような気がする景色に心が躍った。

それを落ち着けるように深呼吸を一つして、気分を落ち着ける。

しばらく、景色を眺めていると扉をたたく音が聞こえた。

「はい？」

返事をする。「失礼します。」と見知らぬ女性が入ってきた。

「目、覚めた？」って起き上がってるの！？平気！？」

私が立っているのに気づき、慌てたようにこちらにきて私を抱える。

「もう、勝手に起き上がったらだめだよ。」

サイドにくくった長い髪を揺らしながら私をベッドに連れて行く。

「だ、大丈夫です。全然・・・とまではいきませんが。」

「問答無用！！かなりの重傷だったんだからしばらくベッドで寝てなさい！！！」

あまりの剣幕に気圧されてしぶしぶベッドに転がる。

「けどよかった。その感じだったらだいぶ回復してるみたいだね・・・」

冷蔵庫からお茶を出して注ぎながらいろいろ小言を言われる。

その言葉から私を心配してくれているのがわかる。

しかし、それにしても・・・

「・・・あなた誰ですか？」

はつきり言っただけ見覚えがない。

赤の他人であるならこんなによくしてくれる理由がわからない。  
少しぶしつけ気味な質問に彼女は笑顔で答えてくれた。

「ああ、まだ自己紹介がまだだったね。私は高町なのは。ミッド  
チルダ地上本部所属の一等空尉だよ。」

初めて見たその笑顔はとてもきれいで、優しかった。

↳ t o b e c o n t i n u e ↳

## 第01話(前書き)

しばらく、ギャク&コメディはお預けです。  
自分が苦手なもんでして・・・



## 第01話

### 第01話

なのはさんの自己紹介の後、私が病院にいるいきさつを伝えてもらった。

「つまり、私はなのはさんが宿舎に帰る途中に、空から降ってきたのですか。」

「うん。」

うわ、信じられない。というか、空から降ってくるってどんな小説だよ。

「しかもその時、私は傷だらけの血みどろだったと。」

「そう、しかもその血の量が半端なくて・・・あの制服はもうだめだね。」

・・・なんか、責められてる？遠回しに責められてる？

「・・・すみません。」

「あ、いいのいいの。別に責めてるわけじゃなくて・・・それよりも名前教えてくれない？」

そういえば、自分の自己紹介がまだだった。

「えと、私はアストラル・シルビア・キャロメイです。アストラルが名前でキャロメイが姓です。」

「シルビア・・・」

しかし、なのはさんが反応したのは私が説明したのとは別のところだった。

しかもなんか顔しかめてるし。

「・・・もしかして、あなた第37観測指定世界シルベンスの人？」

「はい、そうですけど・・・どうかしました？」

第37観測指定世界現地名称シルベンス。

そこが私の出身世界だ。

だけど、ミッドの人が知ってるなんて、かなり珍しい。

「あ、うーん・・・後ででいいや。それよりもキャロメイさんだっけ？」

「アストラルでいいですよ。なのはさんの方が年上みたいですし。」

「そうなの？アストラルは何歳？」

「私は10歳です。」

「なら私が年上だ。私は19歳だから。」

「やっぱ年上だ。・・・ていつか今自分「なのはさん」のこと「なのはさん」で名前と呼んでた。

「それならなのはさんじゃなくて高町さんと呼んだ方が・・・」

「ううん、今まで通りなのはさんでお願い。それよりも少し聞きたいんだけど。」

「はい？」

「何で空から落ちてきたの？」

確かに気になるよな、いきなり人が振ってきたら。

「えーと、確か落ちる前に・・・」

あれ？何があつたんだっけ？

というか、何で空にいたんだろう。

そういえば、大けがの原因は？

空から落ちるだけでは血まみれにはならないよ。

別に地面に落ちたわけでもないみたいだし。

・・・というか落ちたら死んでる。

それならどうして・・・

病院の白い壁が目が目がいく。

「くっ・・・あっ・・・」

途端、すさまじい寒気におそわれた。

頭が割れるように痛く、のどは焼かれたようにいたい。

「かはっ・・・」

こみ上げてきたものを思わずはいてしまう。

なのはさんが何か言っているようだが耳鳴りがすごくて聞こえない。

身を小さくするようにして苦痛に耐えているとふわっと暖かいものに包まれた。

「だいじょうぶ？」

なのはさんだった。

私の肩を抱いてぎゅっと抱きしめてくれていた。

その暖かさに、体中の力が抜ける。

ゆっくりと身を預けて、息をついた。

いつの間にか頭痛もやんでいた。

「お水いる？」

差し出されたコップを受け取るとゆっくりと嚥下する。水がなくなってからサイドテーブルにコップを置く。

「すみませんでした、もう大丈夫です。」

「ううん、いいの。・・・今お医者さん呼んだから。」

それにしても何で頭痛がしたんだろう。

ただ昔のことを思い出そうとしただけなのに…

\* \* \* \* \*

診察結果。

“ 心因的逆行性健忘症 ”

いわゆる、精神的影響の部分的記憶喪失。

どうやら自分の場合は、何かつらいことがあって、それを受け入れられずにいるらしい。

「自分ってか弱かったんだ。」

思わず呟くと「いや、強さは関係ないから」とあっさり切って捨てられた。

体の傷の方はほぼ全快で、医者もこれにはすごく驚いていた。

まあ、こんな簡単に治るんだから、それほどひどいものでもなかったのだろう。

退院も出来るとのことなので即決行、したまでは良かったんだけど…。

「私どこにどうやって帰ればいいんだ？」

いまさらだけど、私は記憶喪失だ。

記憶がある前に知っていたかはわからないが、はっきり言って帰り方がわからない。

いや、シルベンスに向かう客船に乗ればいいんだろっけ。

「私お金もってないしなあ。」

というわけで途方に暮れていると、私の代わりに会計をしてくれていたのはさんがやってきた。

「一応、会計は済ませたよ。」

もちろん、私はお金を持っていないのでなのはさんが立て替えたのだ。

「有り難うございます。」

「どういたしまして。それでね、アストラルは今後どうする？」

「……」

どうすると言われましても……

「あれだったらうちに来る？少しの間ならおいとけるから。」

「本当ですかー!!」

やったー!!これではらくは何とかかなりそうだ。

……といっても、問題を先送りにしたただけだね。

「それじゃあ、いい。」

私の体を気遣ってか、手をつないでくれる。

ちょっと恥ずかしいけど・・・うれしかった。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

## 第01話（後書き）

次回は、機動六課隊舎でのお話です。

## 第02話(前書き)

なんと、思いがけないくらいアクセス数が増えています。  
ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。



## 第02話

アストラルが目覚める少し前、私はお医者さんに呼びだされた。

「高町なのはです。」

呼び出された部屋をノックすると返事があった。

中に入ると私を呼び出したお医者さんと騎士カリムが応接テーブルに座っていた。

「あ、きたわね。」

騎士カリムは自分の横の席を示して座るように促してきた。

「すまないわね、いきなり呼び出して。」

座ると、お医者さんが私に紅茶を差し出した。

「いえ、それよりも何か？」

とつさに浮かんだのはつい最近まで起こっていたJS事件のことだった。

「キャロメイさんのことなんだけど・・・」

しかし、的は外れた。

まあ、少し考えれば当たり前か。

事件関連だったら私よりもはやてちゃんに話に行くはずだし。

「あの子、何者？」  
「えっ？」

意味がわからずに聞き返す。

すると、お医者さんが数枚の資料をこちらに見せた。  
そこにはアストラルの検査結果が書かれていた。

「…特に問題はないみたいだけど。」

身長、体重、推測年齢、怪我の状態。

いや、怪我を入れたら問題は大きいかな？

「問題は、そのページじゃなくて。」

さされたのは二枚目だった。

そこには魔法検査に関する結果が書かれている。

魔力量、魔力出力、魔法の形態、リンカーコア、レアスキル特殊技能などな  
ど。

「・・・何これ。」

絶句した。

魔力量：測定不能

魔力出力：測定不能

魔法形態：ベルカ・ミッドの混合、および不明×1

リンカーコア：測定不能

レアスキル：不明×2

備考：封印魔法が被者にかかっている

つまり、何もわかっていないのと同じだ。

「その備考欄だけど、どこにどんな封印魔法がかかっているかまではわかってないわ。見たこともない魔法パターンだったから。」  
魔法にはベルカ・ミッドのようにそれぞれプログラムの癖が存在する。

その癖から魔法の形態を割り出すのだが、今回ののは、どちらにも当てはまらないと言っていることだ。

「レアスキルの方は私自身も調べてみたわ。それがこれ。」

差し出された二枚の紙は何かのコピーのようだった。

そこに二つの単語とその意味が書かれていた。

一つ目が、

エカリスト

「聖櫃？」

エカリスト…生まれつき魔力量に制限がないこと。

つまり、どれだけ魔法を使おうが、魔力がなくなることはない。

ただし、あまりに大量の魔力を消費すると体が持たない。

もう一つが、

リング・オブ・フュイト

「運命の環」

リングオブフュイト…RFと略される。時間を逆転させることが出来る。

ただし、その範囲、及び効果等は魔力に比例することだが詳細は不明。

「…どういうこと？」

読んで愕然とした。

ダブルレアスキル自体かなり希なのに、その内容がこれ。

はつきり言って、やばい。やばすぎる。

「つまり、この子がその気になれば世界が変わるってこと？」  
魔法は体の負担になる。結果どれだけ魔力を持っていても体が持たなくなる。

しかし、この二つのスキルが合わされば、魔力は無限。しかも体は破綻が来る前に体の時間を戻して魔法行使前と同じ状態に持つて行ける可能性がある。

なるべく考えたくないことだが、現状把握だけはしなくては。今後何が起こってもいいように・・・

「そういうことになるわね。」

そのあと、いくつかの話をして、私はアストラルの目覚めた部屋に行くこととなる。

\* \* \* \* \*

「もしかして、なのはさんの家って・・・」

なのはさんに誘導されながら連れてこられたのは大きな建物の前。横には地上部隊隊舎らしきことが書かれている看板が見える。

「うん、ここ機動六課隊舎だよ。」

いや、考えれば当たり前か。

なのはさんは軍人なんだから。

「・・・部外者が入ってもいいんですか？」

「ん？別にいいよ。一応私のお客さんって扱いになるから。」

そういつて、中に入っていく。  
私も慌ててついて行く。

「あ、なのはちゃんや。おかえり〜。」  
「ただいま〜、はやてちゃん。」

エントランスに入ると向こうから歩いてきていた人が声をかけてきた。

側には小さな人が浮いている。

「浮いてる!?!?・・・」

別段浮いているのは不思議ではない。  
実際私も魔法を使えば空中に浮くことくらい出来る。  
けど、大きさが、あまりにも小さい。  
あやうく、誤って「小さっ」と叫ぶところだった。

「お、この子がアストラルさんか？」  
「そうだよ〜。」

なのはさんに肩をたたかれたので慌てて自己紹介する。

「アストラル・S・キャロメイです。初めまして。」  
「私は八神はやて。一応ここ機動六課の部隊長をしてるよ。で、この子が…」

「リインフォース・ツヴァイ空曹長です。はやてちゃんのデバイスです。」

へ〜、こんなちっこいのが。

・・・いや、失礼か。

「はやてちゃん、今から仕事？」

「そうや、見回りと報告を受けにな。帰るのは遅くなるからアス  
トラルのことは明日で。」

「りよゝかい！リインもガンバ！」

「はいです〜！」

そのままはやてさ…八神さんはエントランスから外に出て行った。

「じゃあいこっか。」

いつの間にか受付で何かを書き込んでいたなのはさんが呼んでいた。

「はい。」

\* \* \* \* \*

「ここが私の部屋です。」

「お帰りなさい、なのはママ！」

「お帰り、なのは。」

「ただいま〜ヴィヴィオ、フェイトちゃん。」

なのはさんを出迎えたのは綺麗な金髪の人と、その膝に抱えられて  
いるオッドアイの小さな子だった。

「なのは、その子が？」

「うん。」

そういうと、私の肩を押しながら部屋に入って金髪の人の前に座らされる。

どうやら自分で自己紹介しろと言っただろう。

「えと、アストラル・S・キャロメイです。しばらくお世話になります。」

「はい、フェイト・T・ハラオウンです。よろしく。」

「高町 ヴィヴィオです。よろしくお願いします。」

フェイトさんにヴィヴィオちゃんね。

よし、おぼえた！

「じゃあ、自己紹介も終わったところで早速晩ご飯にしよう！」

「はい！」

「そうだね。」

「わかりました。」

そして着きました食堂。

「んんん、おいしいー！」

ハンバーグを一口食べて、思わず叫ぶ。

「よかった。食堂の料理は口にあっただみただね。」

「はい、とってもおいしいです。」

「ぶぶぶ。」

なのはさんに笑われるがおいしいものはおいしい。

「ほら〜ヴィヴィオ、こぼしてる。」

フェイトさんがヴィヴィオのスカートの上に落ちたハンバーグのカケラを拾っている。

なのはさんもそんなふたりを見て笑っている。

それにしても、なんかヴィヴィオの顔ってあまりなのはさんに似てないよな。

髪も全然違うし。

どちらかと言えばなのはさんとフェイトさんを混ぜたような・・・

「……………」

あり得ない妄想が頭に思い浮ぶ。

「ま、まさかね。」

「何が？」

自分の妄想を振り払っているとなのはさんが独り言に入ってきた。

「い、いえ・・・ヴィヴィオちゃんってなのはさんの子供ですよ

ね。」

姓が高町なんだから。

「……………うん、そうだよ。」

一瞬、なのはさんの顔がこわばった気がした。



しかし、次の瞬間には普通の笑顔だった。  
気のせいかな。

「もしかして、フェイトさんも・・・」

「フェイトママもヴィヴィオのママだよ。」

今度はヴィヴィオも参加してきた。

というか、今・・・

「も、もしかして、なのはさんと、フェイトさんは・・・」

両方の顔を見て、思わず赤くなる。

頭の中ではものすごい妄想が膨らむ。

「ち、ちがうよ、アストラル！私とフェイトちゃんはただの親友、  
幼なじみ！」

私の顔を見て、思い当たったのかなのはさんが慌てて弁解をする。  
その言葉で思い当たったのか、フェイトさんもなのはさんを援護  
する。

「そうだよ、アストラル！私となのははただの親友！・・・そり  
ゃ、同じ部屋にすんでるし、少しは期待してるけど・・・」

「「えっ！！」」

絶句。

な、なんかフェイトさんが今・・・

「な、何でもない。私となのはは親友、幼なじみ！」

・・・気にしない方が身のためみたい。

「それならヴィヴィオは？」

瞬間、空気が重くなる。

地雷？私もしかして地雷踏んだ！？

こ、これはやばい！！

「そ、それよりも、ヴィヴィオって今何歳？」

「ああ、ヴィヴィオは・・・四歳だよね。」

こ、これも空気が・・・

ここでヴィヴィオに関する話題は地雷なのか！？  
けど、もう話題が思いつかない。

しょうがないので箸で脇の小皿のものをつまんで口に運ぶ。  
途端、舌に刺すような痛みが走る。

「んんん~~~~~！！？！？」

辛い！辛い辛い辛いカライからい！！！！

涙目になりながら慌てて水をつかんで飲み干す。

それでも舌のひりひりが収まらない。

水差しからコップに水を入れて再び一気にあおる。

何を食べたんだろう。

小皿の方を見ると白い葉野菜が赤く染まったものが・・・

「・・・キムチ？」

なぜにキムチ？

ハンバーグにキムチ？

あつのか？  
それって合うのか？  
普通ないだろう。

「もしかしてアストラル、辛い駄目？」

なのはさんが苦笑しながら聞いてくる。  
ヴィヴィオは驚いたような顔をしていて、フェイトさんは口を押さえながら笑っていた。

そんなに私の反応、おもしろかったのだろうか？

「はい・・・根っからの猫舌です。」

基本的に猫舌は熱いものが駄目だと言われているが、度が極端だと辛いのも駄目なのだ。

私は暑いのも辛いのも駄目。

好きなのは甘いもの。

リンゴとか桃とか、後はケーキ！

ただケーキは食べ過ぎると・・・ねえ。

「へえ〜猫舌なんだ。そういえば、ヴィヴィオは辛いのは平気だよね。」

「うん、辛い平気。」

「けど、ピーマンは苦手だったよね。」

「い、今は食べれるもん。」

「そうだね、なのはママに怒られてからちゃんと食べてるからね。」

「ううう〜、なのはママ、フェイトママがいじめる。」

「あはは、フェイトちゃん、あまりいじめないの。」

「はあ。」

さっきの重い空気はどこやら、一気に食卓が明るくなる。  
ううう、キムチは最悪だったけど、これだけは感謝かな？

そのあと、しばらくみんなで談笑してから私たちは床についた。

あ、もちろん一つのベッドじゃなくて、私だけが床に布団を敷いてもらってそこに寝ただけだ。

幸せだった。

記憶はないけど、体が、心が弾んで楽しかった。

一日がとても濃くて大変だったけど、今日はなんか、いい夢が見れそう。

1st day ended, and to be continued

## 第02話（後書き）

やっと、1日目が終わりました。

次は2日目です。

感想や、意見などたくさんお待ちしています。

### 第03話(前書き)

今回は、キリの悪いところで終わってます。

(いや、いつものことか)

明日からお盆ですので、更新頻度が遅くなるかもしれません。ご了承ください。

## 第03話

### 第03話

夜の公園で、私は友達に泣き付かれていた。

「……が、……が、私のこと嫌いだって!!」

「そんなわけないじゃない。……だって本当にあなたのこと  
が嫌いなわけ無いじゃない。」

「でも……」

「……それなら、こうしよう。」

まだくずる……に私は一つ提案する。

ただ、……に泣き止んでほしいから。

私は魔法を発動する。

淡い紫色の魔方陣が私の前に浮かび上がり、そのまま天に昇って  
いった。

そして、

「……うああ、綺麗!!!!」

雪のように舞い、蛍のように点滅する小さな光が空から降ってき  
た。

これは私だから発動できる魔法。

唯一、私のお気に入り魔法。

それを五分くらい見せると、私は魔法を消した。

「……もう終わり?」

……は不満そうだ。

「うん、今日はここまで。それでね、もし……と仲直りした

ら、今度はふたりに見せてあげる。」

……はぱっと華やいだ。

「わかった、じゃあがんばって仲直りする!!」

そういいながら彼女は……と仲直りする約束をして帰って行った。

\* \* \* \* \*

シュルツという衣擦れの音で目を覚ました。  
まだかなり眠く、まぶたをこすりながら時計を見た。

「まだ六時前だ。」

ぼそつと呟くと、服を着替えているのはさんがこちらに気づいた。

「ごめん、起こした？」

小声だったのでこちらも小声で返す。

「いえ、……それより今から仕事ですか？」

「うん、これからスバル達……私が教えている子達の朝練なの。」

「そうなんですか……」

うわー、こんな朝早くから。

ご苦労様です。

それじゃあ、と部屋を出て行くのはさんを見送ってから私は再び布団に転がった。



なんだか、懐かしい夢を見ていた気がする。  
いや、おかしいことはわかっている。

昔の記憶がないのにそんな懐かしいなんて。  
けど、理論じゃない・・・感情がこう、なんというか・・・響いていた。

「何だったんだろう。」

呟いた声が思った以上に部屋に響いた。

ベッドを見るとフェイトさんとヴィヴィオちゃんはまだ寝ていた。  
起こすとかわいそうなので身だしなみだけ整えると部屋を出た。

廊下を適当に歩いていると、食堂に行き当たった。

カウンターをのぞくと給仕の人たちが忙しそうに働いていた。  
私がいざらくのぞいていると、給仕の一人が私に気づいた。

「まだ、朝食は出来てないし、時間もまだだよ。」

「いえ、食事をしに来たわけでは・・・ただ朝早く目が覚めて、  
暇だったので。」

「なるほど・・・そういえばあなたは昨日ここに来たばかりだったね。」

その給仕さんも今は少し暇なのか私の話につきあってくれる。

「はい。なので今から探検です。」

「そう・・・ならその入り口にパンフレットがあるだろう。あそこ  
そこに簡単な館内図とかが書いてあるから、ゆっくり散歩でもすればいいよ。」

「ホントですか。有り難うございます。」

「ちよつとまちな。」

パンフレットを取りに行こうとすると、給仕さんにとめられた。

「これあげる。」

渡されたのは小さなおにぎりだった。

「腹減ってるだろう。おやつだ。」

「・・・有り難うございます!！」

お礼を言ってからその場を離れた。

館内案内図に従いながら適当にぶらぶらと歩く。

建物を一周すると今度はエントランスから外に出た。

そういえば、なのはさんはどこで訓練をしてるんだろう。

案内図を見るが、特にそれらしい場所は・・・あった。

「訓練シミュレーターか。」

いかにもいそうな場所の名前。

ここからそんなに遠くないみたいだし・・・

見に行っちゃえ。

歩くと、水上に森林が立っていた。

「ここ……だよね。」

地図上ではそうなっている。

それに、さつきからすさまじい打撃や破碎音が響いている。

いや、よく聞くとそれだけじゃない？

「ほら、スバル！また同じ回避パターンしてるよ。それじゃ打ち

落としてって言われてるもんだよ！！」

「はい！」

「ティアナも！玉の誘導率が下がってる。それじゃ私にあたらないよ！」

「よ！」

「はい！」

ドカンドカンとその後に爆発音が響く。

「これが、朝練？」

普通、朝練っていわば一日のウォーミングアップみたいなものじゃない。

これじゃ一日持たないような……。

「いや、もっからやってるのか。」

呟く。

しかし、それにしても……

なのはさんは人間か？

あんな強い二人を相手にして、十分押ししてるんだから。

しかも、時々わざと玉を外しているようにも見受けられる。

ピーとどこかでアラームが鳴った。

「はーい、今日はここまで！今日の朝練のスコアは撃墜できず、  
的を二つ取り逃がした。」

そついいながら、悪かったところを指摘していく。

「最後に、レイジングハート。今日の点数は？」

『「About seventy five.」《75点ほどでしょうか。》』

「だって。今度は80点以上を目指そう！各自クールダウンして、  
解散！」

そついうと、なのはさんは空中に浮かんだ画面に向かって何かを  
打ち込み始めた。

どうやらこちらには気づいていないようだ。

なんかまだお仕事してるみたいだしなあ。

邪魔するのも悪いけど・・・  
でも声かけたいなあ。

声をかけるべきか、かけないべきか。

・・・えええい！迷うならかけてしまえ！！

「なのはさん！！」

「ん？あ、アストラル。」

「はい！おはようございます。」

「うん、おはよう・・・結局起きちゃったんだ、ごめんね。」

「いえ、私も隊舎の中を見て回ることが出来ましたから。」

別に目が覚めたのはなのはさんのせいじゃないし。  
そう、夢見が悪かったんだ、夢見が。

「それならいいけど・・・明日からは起こさないようにするね。」  
「いえ、別に気にしないでください。」

そういつて、彼女の胸元に光る赤い宝石を見た。

「それって、デバイスですよ。」

「うん、私のインテリジェントデバイス、レイジングハート・エクセリオンっていうの。」

『Hello, Austral. 《おはよう、アストラル》』

「おはよう、レイジングハート・エクセリオン。」

『Please call me "RaisingHeart"』

「レイジングハートとお呼びください。》』

「りょーかい、レイジングハート」

なのはさんは、画面をチェックしながら私の話につきあってくれる。

おそらくレイジングハートも一緒なのだろう。

「さっきの二人が朝言ってたなのはさんの・・・」

「そう、私が六課で教えてるメンバー、髪が青い元気な子がスバル。」

そういつと、私の前に先ほどいたコンビの一人の顔写真が現れる。

「もう一人の、髪を二つに結んでいる子がティアナね。」

その横に先ほどのオレンジ色の髪の子が移り出す。

「スバルさんにティアナさん・・・お二人とも強そうでしたね。」  
うん、となのはさんはうれしそうに答える。

「かなり強いよ。スバルはとにかくクロスレンジでのシューティングアーツはかなり上手だし、ティアナもガンナーとして、リーダーとしてすごい才能を発揮してるよ。」

「へへ、けどなのはさんには勝てないみたいでしたね。」

「あはは、そうなんだけど・・・けどそれも経験の差だよ。」

「経験・・・ですか。」

「そう、経験。」

なのはさんが画面の一つのボタンを押す。

すると、今度は目の前にあったはずの森が消え更地になっていた・・・どうやらここは魔法による模擬実地訓練場のようなものみたいだ。

「・・・魔法ってすごいですよね。」

思わず呟く。

「人の傷は治せますし、訓練みたいに人を傷つけることも護ることもできます。」

ぼろぼろになっていたスバルさん達の服を思い出す。

「人を喜ばせることも、人を悲しませることも・・・」

今朝見た夢を思い出す。  
夢の中の少女は私の魔法で喜んでいた。

「……やっぱり魔法はすごいです。」

なのはさんに同意を求める。

しかし、なのはさんは手を止めて首を横に振っていた。

「魔法がすごい訳じゃないよ。」

ふと、彼女の顔が悲しそうにゆがんでいるのに気づく。

「魔法をちゃんと正しく使える人がすごい。」

再び画面に向かって、手を動かし始める。

「魔法はただの力。そこに正も悪も存在しない。あるのは使用者の意志とそれを叶えるための力だけ。」

ピッピッピッとコンソールのキー音があたりに響く。

「だから、魔法を悪にするのは、ゆがんだ意志。正しくない使い方。」

「ゆがんだ意志……」

なのはさんは何を思っだしているのか、すぐくつらそうな顔をしていた。

しかし、私がそれに気づいたときにはいつもの笑顔にまた戻っていた。

「まあ、それを正すのが私たち管理局員のお仕事。だから、アストラルも正しく魔法を使おうね。じゃないと・・・」  
「じゃないと?」

そこでなのはさんは言葉を匂切ると、凄絶な笑みをこぼした。

「お・し・お・き、だからね。」

せ、背中が・・・寒い。

なのはさんは笑っているだけなのに、なんか・・・怖い。

コクコクと頷くとなのはさんは画面を閉じた。

「お昼食べに行こっか。」

私の手を引いて、食堂に歩き出す。

なんか、子供扱いされているみたいで恥ずかしい。

・・・けどなんか慣れた。

それよりも、夢の中の自分を思い出す。

「私も魔法使ってみようかな。」

途端、なのはさんの足が止まった。

「?」

なのはさんを見ると、彼女はじっと私を見ていた。

「・・・いいかもね。時間があれば私が見てあげるよ。」



再び歩き出したのはさんに首をかしげながらも、私はうんと返事した。

\* \* \* \* \*

朝食の後、私はなのはさんに部隊長室に連れて行かれた。

「高町なのはは一等空尉です。」

「どうぞ〜。」

中に入ると、正面の机にははやてさんがいた。

ほかにも、フェイトさん、スバルさん、ティアナさん、・・・それから知らない人がぞろぞろと。

「ほなみんな、その子に注目。」

はやてさんに言われてみんなの目が私に向く。

「その子が、アストラル・S・キャロメイさん。」

「よろしく願います。」

「アストラルは現在、身寄りがないからうちの隊で預かることにしました。みんなよろしくね。」

はいつと返事が部屋に響く。

「ならついでに、わたしがこっちも紹介しとくわ。」

そういうと、一人ずつ指しながら名前を言っていく。

「シグナムとそのデバイス、レヴァンティン」

「よろしく。」

「ヴィータとそのデバイス、グラーフアイゼン」

「ん。」

「スバルとそのデバイス、マツハキャリバー」

「よろしく〜!」

「ティアナとそのデバイス、クロスミラージュ」

「よろしくね。」

「キャロとそのデバイス、ケリユケイオン」

「よ、よろしくお願いします。」

「エリオとそのデバイス、ストラータ」

「よろしくお願いします。」

「あとは、なのはちゃんとレイジングハート、フェイトちゃんとバルディッシュ、私とリインやな。それから、医療関係に携わるシヤマル先生とクラールヴィントで今のところ全員かな?」

ぐるっとはやてさんが見回して確認する。

「ま、みんなでなかようしてこつや。」

それだけ言うと、はやてさんは真剣な表情になる。

「ま、今までは前座でこれからが本題や。」

そういうと、目の前に一つの星の映像が浮かび上がった。

「……これって!?!」

見覚えがある、多くの灰色と、点々と見える水色と緑の惑星。

星の多くが灰色なのは地表のほぼ八割を人工的に開拓し、ビルを建てたためだ。

「そう、第37観測指定世界、文明レベルA、魔法文化レベルA  
+、現地惑星名称シルベンス。」

「私の故郷だ。」

途端、周りの人たちは息をのんだ。

私から顔を背けたり、つらそうな、悲しそうな顔でこちらを見たりする。

「……アストラル、落ち着いて聞いてほしいんや。」

妙にはやてさんの声が固く聞こえる。

「アストラルの星はな……」

後ろにいたなのはさんが、私の肩に手を置いた。

「……滅んだんや。」

「………うそ。」

呆然とした。

言われた意味が、よくわからない。

いや、理解はしている。

わかりたくはないが。  
不意に、夢の中の少女が思い浮かんだ。

『うわ〜、綺麗!!』

『わかった、じゃあがんばって仲直りする!!』

彼女のあの笑顔ももう、見ることが出来ない。

彼女に二度と、あの魔法を見せてあげること出来ない。

「アストラル・・・」

なのはさんが私の肩から手を離し、いつの間にか私の顔を伝って  
いた涙をすくう。

悲しかった。

昔の記憶なんて無い私だけど、とにかく悲しかった。

「・・・一応、崩壊の時の映像見るか？」

はやてさんが、私を見ながら聞いてくる。

頷くと、はやてさんは画面を切り替えた。

はじめは、さっきの写真と変わらない星だった。

しかし、ある一点から突如、閃光が上る。

ほとんど白に近かったが、よく見ると淡い紫色が混じっていた。

そのひかりが、地表を覆い尽くし・・・

・・・星が爆発した。

私は不意に、白い天井を思い浮かぶ。

「が、・・・あつ・・・」

途端、脳がかち割られるような激痛に私は苦しんだ。

「くっ……あ……っう……」

病院でのあの激痛と似ていた。

耳鳴りがすごく、全身が針で刺されたかのようにいたい。

「アストラル、落ち着いて!!」

言葉は聞こえないが、かがんだ私に触れようと、なのはさんが手を伸ばしてくる。

いつもは暖かく感じるその手が、今は……怖い。

「いやあああああ……!!」

私の声に呼応するように魔方陣が展開。

シールドを張ってなのはさんの手を弾く。

あっさりとなのはさんは弾かれて、床に叩きつかれる。

フェイトさんが駆け寄ると、なのはさんは体を起こす。

右腕の部分を左手で押さえている。

腕の部分が魔力の熱量に火傷していた。

なのはさんの言葉が私の中に蘇る。

『魔法はただの力。』

魔法に意志はない。

『魔法を悪にするのは、ゆがんだ意志。』

今の使い方は、間違っていないのだろうか。

『だから、アストラルも正しく魔法を使おうね。』

私は、今、なのはさんを傷つけた。

それは、私のわがままによるもので、正しい使い方ではない。

他人をただ無意味に傷つけるのが正しい使い方であるわけがない。

すさまじい頭痛を押して、魔法の発動を止める。

やり方は知らない。

ただ単純に願う。

( 傷つける魔法は駄目。 )

シールドが消え、魔方陣も消える。

( なのはさんに許してほしい。 )

魔方陣がなのはさんの真下に現れる。

さっと警戒の色を濃くするフェイトさんを見ながら発動を促す。

( なのはさんの傷を癒して。 )

瞬間、なのはさんの腕が淡い紫色の光に包まれる。

周りを小さな魔方陣が飛び交い、泡のようなものふわふわと漂い、時々淡く光る。

光が消えると、そこに火傷の跡はなく、いつもと変わらないなのはさんの腕があった。

「レアスキル」  
リング・オブ・フェイト  
「運命の環」

はやてさんが、そう呟くのを最後に、私は意識を失った。

to be continue

### 第03話（後書き）

明日からお盆ですので、更新頻度が遅くなるかもしれません。ご了承ください・・・



## 第04話(前書き)

不定期と宣言しながら今日も投稿します！

今話をはじめがうまくまとまりませんでした。

すみません>(一一)<

つたない文章ですが、今後よろしくお願いします。

## 第04話

### 第04話

目が覚めると、薬品の臭いがツーンと鼻を刺激した。

「医務室……か。」

目を開けると、なのはさんのぞき込んでいた。

「目、覚めた？」

コクンとうなずいて体を起こす。

なのはさんはまだこちらを見ていた。

「……ごめんなさい。」

思わずわがままで傷つけてしまったから。

「ううん、いいの。ちゃんとわかってくれたみたいだし。」

クシャクシャッと髪をなでてくれる。

「それよりも、体調は平気？」

「はい、何ともないです。」

まだ少し、疲れがあったがそれも夜に寝れば治るだろう。  
なんか昔もこんなことがよくあった気がする。

「そういえばなのはさん、手は平気ですか？」

慌てて頭をなでていた手を取ってみる。  
見たところ、別段以上はないみたいだが・・・

「うん、平気。アストラルが治してくれたから。」

「・・・本当にすみません。」

もう一度謝ってから、考える。

いったい、あの魔法は何だったんだろう。

ただ治療するなら手を軽くかざして、発動するだけで、じわりとだがゆっくりと治っていく。

しかし、私が使った魔法はあまりにも強くて、治りも異常に早かった。

「レアスキル、リング・オブ・フェイト運命の環」

なのはさんがいきなり言った。

どうやら私の考えていることには見当がついていたようだ。

「リング・オブ・フェイト、ですか？」

聞いたこともない。

いや、記憶無いから当たり前なんだけど。

「うん、よくわからないんだけどそうらしいよ。」

それから、私についての検査結果を聞いた。

「……そうですね。」

はっきり言って、よくわからない。

……いや、実感が無い。

時間をさかのぼれるというのはすごいと思う。

実際、レアスキル以外の魔法では存在したことがないとなのはさ  
んは言う。

「それから、今後住まう所なんだけど……」

その一言で、私はシルベンスの消滅を思い浮かべる。

実際、すごく悲しかった。

自分の半身を失ったような、心に穴が開いたような、そんな感じ。  
大事な家族も、いたであろう友人も、公園も、ビルも……すべ  
て無くなった。

どうして、私はここにいるんだろう。

何で私だけ助かったんだろう。

……けど助かったからには生きなくてはならない。

それが、わたしの使命だろう。

そのためには生きる場が必要だ。

「しばらくはここに滞在でいいでしょ？」

「……よろしく願います。」

頭を下げる。

私に、ほかに行く所なんて、無いんだ。

私の居場所はもう消えてしまったから……

\* \* \* \* \*

シャマルさんからいくつか注意を受けた後、なのはさんが昼の練習に行くと言ったので私もついて朝の訓練場に行くことにした。

「朝も思いましたけど・・・派手ですよねえ。」

空気の震えと、すさまじい撃破音があちこちから響いている。

訓練場は今、市街地廃ビル群の様相を呈している。

ときどき、オレンジ色の玉や、黄色い光が天に向かって突き抜けてくる。

「にははは、そうだね。けど仕方がないよ。どうやら今は模擬戦中みたいだし。相手は・・・フェイトちゃんとヴィータちゃんか。」

訓練場の近くまで来ると、なのはさんはバリアジャケットを着てコンソールをいじりだした。

「なのはさん、訓練の様子、画面で見てもいいですか?」

「ん? いいよ。なら監視用のスフィアをひらいてあげるね。」

なのはさんが別のコンソールをいじると、私の周りに画面がいくつが出て今の訓練の様子が映し出された。

「これは・・・スバルさんとティアナさんか。」

スバルが青の魔力光を散らしながらヴィータさんに殴り込み、後でティアナが援護射撃をしている。

ティアナが打つ球は絶妙にスバルを避けて、ヴィータさんにたたき込まれる。

スバルさんも、ティアナの玉などは一切気にせず青い道上をマツハキヤリバーでかけていく。  
すごいコンビネーションだ。

一方、エリオ・キャロチームはフェイトさんを追いかけていた。こちらも独特の戦いで、キャロが高々度からブラストフレアを白い竜に打たせたり、チェインバインドでフェイトさんが避ける方向に罠を仕掛けたりしている。

エリオもすさまじい速度でフェイトさんを追いかけて、剣の形をしたバルディッシュと火花を散らせ、隙あらば突きを繰り返していた。  
とはいうものの、やはりというか何とというか。

「ウィータさんもフェイトさんもお強いですね。」

涼しい顔で彼女たちの攻撃を受け流している。

いや、ちょっと目が燃えてるか？

「しょうがないよ、もしこれで私たち隊長陣がぼろ負けしたら、立つ瀬無いじゃん。」

それを言ったらおしまいよ。

じゃなくて、私が言いたかったのは、涼しい顔で受け流してるってことなんだけど。

「そろそろ、タイムアップかな？」

ピーッとホイッスルの音が響いた。

「はい、時間切れ〜!!」

なのはさんの声が響き渡る。  
しばらくすると、ビルの合間からフェイトさん達が出てきた。

「オーッス、なのは、アストラル。」

「ふたりとも平気？」

ヴェータさんとフェイトさんが片方は元気に、片方は心配そうに声をかけてくる。

「うん、さつきも言ったけど平気だよ。アストラルも異常はないって。」

「そう、ならいいけど・・・」

フェイトさんと目があったので、頭を下げる。

「先ほどはすみませんでした。ヴェータさんも、ティアナさんやスバルさん、エリオくんやキャロさんも。」

「ううん、私は平気だったから。」

「別に気にしてねーぞ。」

フェイトさんとヴェータさんはすぐに返してくれたが、スバル達からの返事がない。

頭を上げると、

「・・・ああ。」

四人はばてあがっていた。

息も絶え絶えにこっちまで来ると、その場に寝っ転がっている。

ふと近くに、タオルがおいてあるのに気づいた。

「これ、どうぞ。」

それをとって、四人に手渡す。

「ああ、有り難う。アストラル。」

「ありがとね。」

「有り難うございます、アストラルさん。」

「アストラルさん、有り難うございます。」

それぞれ、汗をぬぐい始めた。

「それにしても、皆さんすごいですね。あんなに早く正確に魔法  
が出せるなんて。」

「んん？そんなこと無いよ。要は練習だよ練習。」

「そうです、はじめ私は鈍くてなかなか上手く魔法使えませんで  
したから。」

スバルとキャラロが両手を振って否定する。

「それでもね、すごいよ。・・・そうだ、私も練習してみよっか  
な。」

「あ、いいですよそれ。なのはさんに教えてもらえると  
思いますよ。」

エリオが賛成してくれる。

「けど、その前に・・・ちょっと何か魔法使ってみよっかな。」  
「やめなさい、何かあったら怒られるんだから。」



私が言うと、ティアナさんがいさめてくる。

「いいじゃない、ティア。そんなにすごいものぶっ放さなければいいんだから。」

スバルさんは簡単に言った。

そうだよ、少しだけなら・・・

ちらつとなのはさんを見ると、話が聞こえていたのかはあっとため息をつかれた。

『しょうがないな、一回だけだよ。一応危険がないように訓練場の中でやりなさい。』

「はい！」

念話での了解を得ると、私は訓練場に足を踏み入れた。

ところで、何を発動させよう。

夢で見たあの魔法は却下。

夜じゃないから映えなし・・・あれは自分にとって特別だったみたいだから。

ほかには・・・

「そうだ！」

訓練の映像で見たティアナのあの砲撃をやってみよう。

たしか・・・そう、ディバインバスター。

魔力を収束させて打ち出せばいいのかな？

・・・まあ、そんなところだろう。

「なのはさん、的を用意してもらえますか？」

いつの間にか話をやめて、こっちを見ていたなのはさんに聞く。  
彼女は一つため息をつく、手元のコンソールをいじって私の前方50m位に大きな的を出した。

「それでは、いつきまぐす。」

目を閉じて集中する。

まずはどんな魔法を出すか、イメージ想像する。

右手を出して、的の方向に向ける。

自分の魔法を感じながらそれを手のひらに集める。

左足を後ろに出して、反動に備える。

目標を最終確認して、

「シュート!!」

魔力をそのまま打ち出した。

すさまじい轟音とともに淡い紫色の光が一直線に伸びた。

砂煙が舞い上がって、よく前が見えないが。

どう考えてもやり過ぎた。

風が吹いて、煙が晴れると、私の前幅10mほど、距離500m  
ほどは何もなくなっていた。

確か、的の後ろにはビルもあつたはずだが、それすら跡形もなく  
吹き飛んでいる。

ふと、冷たい空気を感じた。

振り返ると、なのはさんが笑っていた。

「レイジングハート、エクセリオンモード！」

しっかりとバリアジャケットを着、手にはレイジングハートが握られている。

「やり過ぎだよ、アストラル。」

思わず一步下がると、バインドが出現して、私を縛る。

「にげちゃだめ。前にも言ったでしょ。間違った魔法の使い方を  
する人を正すのが私たち管理局員のお仕事だって。」

いやいや、そんな殺る気満々の表情で言われても、説得力無いよ！

「ちゃんとお仕置きしてあげるから。」

ぶんぶんと頭を振って嫌がる。

だって、なんか命が無くなりそうなんだもん。

「んん、そんなに嫌がらないで。私だって好きでやってるわけ  
じゃないんだから。」

絶対嘘だ！！

「しょうがないなあ、なら選択肢を残してあげるよ。」

空中に光の文字が浮かび上がった。

- 1 体に聞いてみる。
- 2 精神に聞いてみる。

3、両方に聞いてみる。

「どれもいやだ〜〜!!」

なんか、すごいやばい臭いのする選択肢ばかりなんですけど。

「もう、文句ばかり。仕方ないから三番ね。」

そ、そんな!!

「私も本当はやりたくないけど、」

だから嘘つくな!!

「これもアストラルのためだし、私のストレスも解消できるし。」

それが本音か!!

「みんなもきつと楽しめるよ。」

いったいどんなお仕置きなんだよ!!

「それじゃあ、お仕置き、開始!! レイジングハート。」

『Load Cartridge』

ガシャンガシャンとカートリッジが3発ほどロードされる。  
つて、3発も!?

「ガード抜いて、模擬魔力攻撃だけ、通すよ。」

『OK, Master!』

いやいや、ガード抜くってどうよ!?!?  
というか、レイジングハートも了解すんな!!

「デイベイーン、バスター!?!?!」

「うわああああっ!?!?!」

ピンクの閃光が私に迫り、すさまじい衝撃に意識が一瞬飛んだ。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

## 第04話（後書き）

ただいまお盆期間中です。  
更新が不定期になります。  
あしからず・・・

## 第05話(前書き)

明日は投稿できないので、フライイングの投稿です。

なんと、本日2009/08/13のアクセス数が過去(といって  
も約六日ですが)最高となりました。

うれしいです！感激です！！

これからもよろしく願います。

## 第05話

### 第05話

「・・・いつ〜」

お仕置きとか言われていきなり魔力砲撃をくらってしまった。  
いやね、いいんだよ。よくないけど・・・

確かに私がやり過ぎた感ってのはあったから、多少の傷みも覚悟  
してましたよ。

けど、けどね・・・

「これってやりすぎでしょ!?!」

「あれ、意識あるんだ」

『She opened her shield. 《シールド  
を展開されましたから。》 But it's so taff.  
《それにしても頑丈ですね。》』

「いや、そんなのぶっ放したの!?!」

「ん〜、私のバスターってそんなにやわだったっけ?」

『No, Her skill is higher. It's  
s admirable. 《いいえ、彼女の才能が高いだけでしょ  
う。賞賛に値します。》』

「そっか〜。」

「そっかーじゃなあい!ほら、フェイトさんもなんか言って!?!」

「え、私に振るの?・・・なのは。」

「うん、なに?」

「殺さないようにね」

「もちろん!?!」



「ちがうだろ〜!!」

「それなら私は何も言わないよ。」

「フェイトさ〜ん!!」

はあ、はあ、叫びつかれた。

「それじゃあ、上手く当たらなかったし次はエクシードモードね。」

『OK, Exceed mode.』

「次はバリア張られてもいいように、ガードとシールド抜いて魔力ダメージでノックダウン!!」

ええ!! 最後はやっぱノックダウンさせられるの!?

『OK, Load Cartridge.』

いやいや、だからOKするなって!! しかも今度は5発も!?

『StarLightBreaker.』

ちょっと待って待って、なんかすさまじい大きさの光球が出来てるんですけど!?

あんなにくらったら終わりだし!!

「おい、なのは!」

見かねたのか、ヴィータさんがなのはさんに声をかけてくれる。

「もういいだろう。さっさと帰るぞ。昼飯だ昼飯!!」

ヴィータさん、大好きー！！

「えー、けどもうここまで魔力集めたんだけど・・・」

なんかなのはさん、趣旨変わってませんか！

「オイオイ、このシュミレーターまで壊す気か。やめてくれ。はやてに怒られるぞ。」

つて、ヴィータさんは私の心配じゃなくてシュミレータの心配ですか。

「あ、そうだね。なら仕方ない。レイジングハート。」

『OK, Master. 《了解、マスター》 I have

a little objection... 《少々不服ですが・・・

》』

「しょうがないでしょ。一応お仕置きって名目は一部終わったんだから。」

名目だったのか！！

いや、わかってたけど。

いつの間にかバインドが解けていたので、みんなの所に行く。

「アストラル、平気？」

「アストラルさん、大丈夫ですか？」

スバルさんとキャラロさんが心配そうにあちこちへたべたと触る。なんか、くすぐったい。

「平気でしょ。あれでもなのはさん、模擬弾とか上手だから。」

「経験者は語るって、ティアア？」

「うるさいわよ、スバル!!!」

「え、ティアナさんってあれ受けたことがあるんですか？」

「ええ、一度バカなことしかしてね。・・・あれは痛かったわ  
」。

「確かに・・・一瞬意識が飛びましたからね。」

「ああ、違う違う。」

え、違うって？

「確かに肉体的にも痛いけど・・・あれは心が痛いよ。」

「心・・・」

「そう。」

ティアナさんは思い出すように虚空を見つめる。

「滅多になのはさんって怒らないんだけど、ある一線ってものがあつてね。それを超えるとあんな風にして怒ってくれるの。」

「怒るってよりは、少し楽しんでたような・・・」

「まあ、それもあつたらうね。」

あつたのかよ！

「あの人はね、がむしゃらに、ただ強くなるって言うのが一番嫌いな。」

「・・・それって、ただのひがみじゃ・・・」

「ああ、言い方が悪いわね。何をしてでも・・・例えばその人の能力キヤパを超えて無理矢理魔法を使ったり、その人自身を傷つけるような練習の仕方って言うのかな。」

・・・なるほど。

つまり、今回の場合私はまだ未熟なのに、あんな強大魔法を使って私自身、それから周りを傷つけそうになったから・・・

「そういう上達方法が、一番駄目なのをあの人は知ってるから。」

「ほら、スバル達、お昼食べに行くよ!!」

なのはさんがシュミレータから少し歩いたところに立っていた。

「はーい、今行きまーす。」

私もなのはさんの近くに走り寄る。

「なのはさん、さっきはすみませんでした。」

「うん・・・」

「・・・それと、有り難うございます。」

「・・・どういたしまして。」

グシャグシャとなのはさんが頭をかき混ぜてくれた。

\* \* \* \* \*

私は今、なのはさんに謝って、さらにはお礼まで言ったことを悔いていた。

いやね、確かにティアナの話を聞いて、私も感動したし、納得もした。

「ただ、それはそれ、これはこれ。」

「きゃー、可愛い!!!」

「ちよつとスバル、あまりはしゃいだらアストラルもかわいそうだよ。」

「けど、ティアも可愛いと思うでしょ。」

「・・・まあ、ね。そこは認めるわ。」

「けどなのはさんも考えたよね。猫耳にしっぽ、手には肉球。」

「そうね、まさかこんなにもアストラルにあうなんて、私も驚きだわ。」

「というわけで、肉体的お仕置きは終わって、現在は精神のお仕置  
き中です。」

「なのはさんに「昼食に行く前ちよつと付き合って」と言われて、  
私だけ別室に連れていかれた。」

「そのまま、なのはさんはレイジングハートをこちらに向けると「  
ちよつと動かないでね。」と、ニコニコと魔法をかけた。」

「結果、さつきまで着ていたラフなシャツは無くなり、ピンクのゴ  
スロリと猫耳しっぽ、肉球が私についた。」

「「こんにゃのお仕置きじゃにゃ〜い!!!」」

「言葉まで変わっている。」

「恐るべし、なのはさんの魔法。」

「・・・というか、こんなのホントに着てられない!!!  
しっぽをつかむと思いつきり引っ張った。」

「いた〜い!!!」

「すさまじい激痛が走った。」

尻が抜かれるというか、はがされるといっか・・・とにかく痛かった。

「こらこら、アストラル。私がいって言うまでとっちや駄目ですよ?」

いや、とれませんから。

「というか、動いてるんですね、このしっぽ。」

「頭の上の耳もぴくぴくしてるよ。」

エリオとキャラロが珍しそうに見てくる。

「ていうか、本当にくつついてるんだ。どうやったの、なのは?」

フェイトさんが私のしっぽをいじくりながら聞く。

なんか、すごくむずがゆいというか、何というか、変な声が出そう。

「ん?変装魔法を無限書庫から引つ張り出して、私流に改良しただけだよ。基本はバリアジャケットと同じにして、とれないようにバインド系で接着。浮遊魔法の類で動くようにしてみたの。」

「へへ、すごい。今度教えて。」

「いいよ、ただまだ改良中だからもう少し待って。」  
「わかった。」

今度は耳の裏をかかれる。

う、もう、だめ、・・・限界、こえが・・・

「ぶにゃ~~~~」

「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」

や、やばい、白い目で見られた。

というか私のせいじゃない!!!

「にやはは、アストラル、今日一日その格好だからね。」

「そんなにや〜」

私の声が食堂に響き渡った。

\* \* \* \* \*

食堂で昼ご飯を食べた後、なのはさん達は行くところがあるとのことではなのはさんの部屋に帰ることにした。

廊下で人とすれ違うたび、じつとこちらを見られるが、しばらくすると慣れた。

「今思ったけど、これって気にしなければそんなにいたくないよね。」

使い魔とかは結構人型でも、耳出したりしっぽ出したりしてるものな。

・・・でも猫の使い魔なんて私見たことない。

というか、こんなピンクのゴスロリとか着てない。

「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」

人はこれを現実逃避という。  
部屋に入ると、ヴィヴィオがお絵かきをしていた。

「ただいま、ヴィヴィオ。」

「お帰りなさい、アストラル。」

ヴィヴィオは私の近くまで来ると、ジーとこちらを見た。

「……アストラルの趣味？」

「ちがうー!!」

「でも似合ってるよ?」

「……ありがとう。」

でもうれしくないよ。

そのまま、ヴィヴィオと一緒に絵かきしていると、アイナさんがお茶を入れてくれた。

そしてさらに三十分くらい後、

『宅配便です。』

ドアのアラームが鳴った。

「はい。」

アイナさんが玄関に出る。

「ヴィヴィオ、宅配便だって。誰宛かな?」

「うん……なのはママとフェイトママの両方。」

「なんで?」



「ここ、ママ達の部屋だから。」  
「・・・なるほど。」

そうきたか。

「おつかれさまでした。」

お、アイナさんが戻ってきた。

「アイナさん、誰宛でした？」

「それが・・・」

アイナさんが困った顔をしている。

「・・・？どうかしました？」

「アイナさん？」

ヴィヴィオも心配そうにアイナさんを見ている。

そのアイナさんというと、私と小包を交互にちらちらと見ていた。

ん？わたし？

「・・・もしかして。」

「・・・そう、アストラル。あなた宛よ。」

私は小包に駆け寄ろうとする。

だって、もしかしたら私の手が入ってるかもしれない。  
これを機に記憶だって戻るかもしれない。

「駄目よ、アストラル。」

しかし、アイナさんは小包を高く持ち上げると私の手の届かないところにやった。

「なんで!？」

「怪しすぎるからよ。」

「どこが!？」

「この部屋に直接届く所がよ。」

「それが・・・」

「冷静に考えなさい。何で送り主はアストラルがここにいることを知ってるの？」

「それは私がここに入るところを見たからで。」

「じゃな、この部屋がわかったのは？」

「入るとき、なのはさんが一緒にいたから。」

「それなら何でアストラルを知っていて迎えに来ないの？」

「・・・・・・」

私は答えられなかった。

当たり前だ、そんなのわからないから。

・・・もしかして、私は捨てられた？

いや、それなら何で小包なんて届ける。

「とにかく、まずは誰か隊長さんに相談してくるから、開けるのは待ってね。」

「・・・はい。」

私の返事を聞き届けると、アイナさんは部屋を出て行った。

しばらくその場に立っていると、ヴィヴィオが私の顔をのぞき込

んでいた。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。お絵かきの続きしよっか。」

私はテーブルに戻ると再びお絵かきを始めた。

しかし、気づいたらあの箱のことを何度も考えていた。

） to be continue ）

## 第05話（後書き）

前回は微妙となりましたが、今回もまた微妙ですね。

けどこれで少しは話が前に進む予定です。

なのはさんのシーンは、まあお約束ですかね？

我が現実の友によくこのシーンの話をされて、一人盛り上がられて  
おります。

実はこんな派手なのはさんは私自身苦手です。

それでもやるのが、作者魂でしょうか。

ああ、友に私の心が犯されていく・・・

## 第06話(前書き)

更新遅れました！。

お盆も終わりましたが、明日、更新できない予定です。

申し訳ありません。

## 第06話

### 第06話

結局、小包は今日中に帰ってこないこととなった。

「隊長さんに相談したら、ちょっと調べてみるって。何もなければ明日には返すみたいよ。」

アイナさんが戻ってきてそういった。

私はそれに頷くと、再びヴィヴィオと一緒に絵かきを続けた。

そのあと、洗濯をたたんだり、なのはさん達は今日は送れるとのことだったのでヴィヴィオとスバルさん達と一緒にご飯を食べ、今は一回にある談話室でみんなと談笑していた。

77

「今日の昼間のなのはさん、すごかったわね。」

「うんうん、あのモードなのはさん、久しぶりに見たよ。」

ティアとスバルが昼間の砲撃事件を話し始めた。

「けど、あのモードなのはさんの攻撃をとっさに防ぐなんて、アストラルさんもすごいです。」

「あのディバインバスターもすごい威力でした。」

エリオくとキャロさんがべた褒めしてくれる。

「そ、そんなことにゃいよ。唯唯夢中だったただけだし、・・・にゃのはさんにも怒られちゃったし。」

「そういえば、まだお仕置き中なんだね。」

スバルさんが近づいて耳をカリカリとする。

「ふみゅ〜」。

「あはっ、可愛い〜!!」

「あ、ずるいスバル!」

ティアナさんが私のしっぽをいじくる。

「んみゅ〜」。

「・・・癖になりそう。」

「ホントだね。」

ティアさんとスバルさんが嫌なことを言うてくる。

「テ、ティアナさん、あまりしっぽを持ち上げにやいで・・・ス  
カートが」

「おお、ごめんごめん。」

「ん、エリオなんか顔が赤いよ?」

「えっ、な、なんのことですか?」

そっぽを向いたエリオが必死にこっちを見ないようにしている。

「ふっふっふっ。」

「す、スバルさん?」

なんか変な顔をして、なんですか?  
って、どこに手をやってます?

「ほら、エリオ！」

「つつつ！！！！！！！！！！」

「にゃ、にゃにしてるんですかー！！！」

「バカスバル、何してるのよ！！！」

いきなりスカートをまくられた。

しかもエリオはばっちり見てるし！

「いたついたい、ティア、そんなに怒らないで〜！！！」

「何言ってるの！アストラルに謝りなさい！！それでも恥ずかしい格好してるんだから！！！」

・・・なんか今グサツツてきた。

ティアさん、そんなこと思って私を見てたんだ。

「あ、アストラルさん、泣かないでください。」

「うづうづうづう〜〜〜」。

談話室に様々な、されどみんな楽しそうな声が響いた。

\* \* \* \* \*

暗がりの狭い一室に四人の男が目深くフードをかぶって顔を寄せ合っていた。

「例のものはどうなった。」

男達の中心には八面体の透明なガラス細工がくるくると光を発し



ながら回っている。

盗聴防止の遮音結界を張る道具だ。

「小包として、機動六課の被験体の部屋に届けました。ただ、  
」

「ただ、・・・どうした。」

「ただ、その部屋には三名の部外者がいる相部屋でして、さらにはそのうちの二人は管理局の人間です。」

「なんだと！！そんな部屋に小包を置いてきたのか！！」

「まて、・・・ある意味好都合かもしれん。」

「どういうことだ。」

「上手くすれば、魔法について学ぶ機会が増えるかもしれん。そして、」

「・・・成功確率が上がる、と。」

「そうだ。」

「それなら、今後とも計画通りに。」

男が手を振ると、シャンパンの瓶とグラスが四つ現れた。慣れた手つきで栓を抜くと、シャンパンをグラスにつぐ。

『Caution! 《警告》、Someone comes here. 《何者かが接近してます。》』

一人の男の胸元から男の電子音声がしゃべった。

四人はその声に慌てず、グラスを掲げあう。

「アストラルよ、我が世界に復興と栄光を与え、導きたまえ。  
」

チーンというグラスをぶつけ合う音とともに男達はその部屋から

消えた。

しばらくして、部屋の外から声がする。

「ここです、ここですよ。いつも誰かがこの部屋で何かしてるんです。」

歳をとったおばあさんの声とともにドアが開き、明かりが部屋をとます。

「……誰もいませんよ。」

管理局の制服を着た青年が、聞き返す。

「あそこを見てください、食べたゴミや飲んだ瓶があるでしょ！」

「本当だ……これで五件目か。」

青年ははあ、とため息をつくと回線を開いた。

「鑑識をこっちによこしてくれ、……ああ、例の件のようだ。」

ピツと画面を消すと青年はおばあさんに向き直る。

「ここはしばらく立ち入り禁止にします。おばあさん、ご協力に感謝します。」

そういつと、二人はドアを閉めて部屋から出て行った。

\* \* \* \* \*

次の日、晴れて猫耳から解放された朝食の後、私ははやてさんに呼ばれた。

なのはさんやフェイトさんも一緒だ。

「おはようございます、はやてさん。」

「ああ、おはようアストラル。それでな、昨日の小包やけど、」

そういつて、はやてさんは机の脇から封の開いた段ボールを出した。

「申し訳ないけど、開けさせてもらった。」

「あの箱にね、強力な封印魔法がかかったの。ちょっとやそつとの攻撃じゃビクともしないくらいの。」

へー。

「そんで開けてみるとな、これが入ってたんや。」

はやてさんは段ボールの中から透明な金色のネックレスを取り出した。

「デバイス・・・？」

強力な封印魔法とネックレスの先についた紫色の宝石から推測する。

「そうや。」

はやてさんが、私の手にそれを握らせる。

「それはね、どうやらあなたに贈られた本当にただのインテリジエント・デバイスみたい。昨日シャーリーに頼んでそれを分解、解析し

てもらったんだけど、特に異常は見つからなかったって。」

「私に贈られたもの。」

ジーツと紫色の宝石部分を見つめる。

いったい誰がくれたんだろう。

私の友人？知り合い？それとも・・・父さん、母さん？でも、だとしたら、何で迎えに来てくれないの？  
ねえ・・・

「アストラル、起動してみてください。」

フェイトさんの声になのはさんが視線で促す。

そこではたと気づく。  
・・・どうやって起動するの？

不意に名前が浮かんだ。

「Shining Aster?」

きらつと宝石が光った気がする。

私は覚悟を決めた。

失敗してもいい。  
やるだけやってみる！！

「シャイニングアスター、セーットアップ！！」

『Stand by ready, set up!』

私の声に反応するようにして、若い女性の電子音声が響く。  
ネックレスから宝石が外れ、私の側に浮く。

光が中心から漏れだし、棒状に伸びる。

1mぐらいまで伸びるとその両端に紫色の宝石が付いた。

続いて、私の服が消えて、代わりにバリアジャケットが現れる。

上は黒いセーラーに、下は紺の長ズボン、肩から白いマントが掛かり、髪は紫色の宝石が付いた髪留めで一つにくくられる。

「オー、かつこええ。」

「デバイスは杖型だね。」

「ん〜バリアジャケットは私とフェイトちゃんを合わせた感じ？  
色は逆だけど。」

「いや、二人ともスカートだよ。アストラルはズボンだから。」

「ホントだ、女の子がズボンというのも珍しいね。」

起動が終わると、はやてさん達はあれこれ評価してきた。

『What do you think, Master?』ど

うですか、マスター』

「うん、いい感じ。気に入った。ありがとう。」

『Your Welcome』.

「よし、無事に起動も出来たし、何ともないみたいだから解散！」

「はい、なら私はスターズの訓練見てくるね。」

「あ、なのは。出来ればライトニングの方もお願い。私これから本局の方に行かなくちゃ。」

「うん、いいよ。ヴィータちゃんと一緒に見てるよ。」

「よろしくね。」

「あ、アストラルはどうする?」

私は・・・どうしようか。

別にすることもないけど、見に行ってもなあ。

「一緒に来ない?あれだったら少しぐらい魔法教えられるかも。」

「行きます!!!」

それなら話は別だ。

別に見てるだけでも勉強になるし、その上魔法まで教えてもらえるなら。

「なら、三人とも気お付けてな。私はここでデスクワークやから。」

「「「はい、お仕事がんばって。」」」

私は隊長室から出ながら、ネックレスに戻ったアスターを見る。

「これからよろしくね、アスター。」

私が呟くと、宝石はきらっと光った。

） to be continue ）

## 第06話(後書き)

明日の更新はできない予定です。  
申し訳ありません。

## 第07話(前書き)

一日遅れの更新です。

今回で、ちょうど第一部クライマックスに近づきます。

次の話で第一部は終了予定です。



## 第07話

### 第07話

私かなのはさん達と出会ってから一週間がたった。

今日は、なのはさんとフェイトさんが同時に休暇の日で、ヴィヴィオと一緒に町に出ることとなった。

「ヴィヴィオ、どこに行きたい？」

なのはさんがヴィヴィオと手をつなぎながら話している。

「うん、・・・動物園！」

「動物園か、でもここからじゃ遠くてちょっといけないかなあ。」

「え、・・・なら水族館！」

「水族館も・・・確か今度、新しい水族館が出来ると言っていたからそこがオープンしたらまたママ達と一緒に行くからね。」

「うん！」

「ならどこがいい？」

「うん・・・」

二人をほほえましく見ていると、フェイトさんが声をかけてくる。

「アストラルは行きたいところとかある？」

「そうですね・・・私は特には。それに私はお邪魔虫のようなものですし。」

「そんなこと無いよ。アストラルだって、今は家族のようなものなんだから。」

「ありがとうございます。……とは言われても、実は何があ  
るかわからないんですよね。」

「それもそっか。」

「フェイトちゃん、アストラル、ヴィヴィオが遊園地に行こ  
うって！だからこのバスに乗るよ〜！」

「わかった〜、今行く！」

「は〜い！！！」

私はバスに乗り遅れないよう、走ってなのはさんの所に向かった。

\* \* \* \* \*

遊園地、たとえば小学校低学年まで、もしくは高校生以上のカツ  
プルが行くところだと私は認識している。

実際、学校行事とかではない限り、中学生で遊園地に来ることは  
ないだろう。

中学生くらいになると、変にプライドが高くなり外ではしゃぐの  
がお子様のように感じるのだ。

だからといって、家族と来るのは恥ずかしいし、一人だと盛り上  
がりに欠ける。

「ヴィヴィオ〜、次は何に乗る？」

「メリーゴーランド！！！」

「メリーゴーランドかあ。よ〜し、いっくぞ〜」

「おお〜〜！！！」

なのに私はテンションマックスでヴィヴィオと一緒にしゃいで

いた。

いや、だつてね。あまりに久しぶりで楽しいんだもん。

・・・記憶無いけど。

けど、そんなの関係ない。

心が躍るんだから、はしゃいでいいのだ!!

ヴィヴィオと一緒にの馬に乗っていると、フェイトさんが手を振って、なのはさんがカメラを構えていた。

「「いえ〜い!!」」

二人でピースをすると、カシャツとシャッターを押してくれる。

そのあとも、コーヒークップ、ジェットコースター、お化け屋敷、観覧車に乗った。

お昼は持ち込みのサンドウィッチを食べて、また色々と乗って回った。

そして、気がつくとき・・・

「もう、三時か。」

そろそろ帰る時間になった。

えっ、少し早いつて？

それはしょうがない。

ヴィヴィオはまだ小さいし、なのはさんやフェイトさんも夜からはまた仕事だ。

「それじゃあ、帰ろうか。」

今度はフェイトさんがヴィヴィオと手をつなぎ、私となのはさんがその後ろに立った。

「今日はどうだった、アストラル？」

「はい、とても楽しかったです！」

元気に答えると、なのはさんは苦笑した。

「みたいだったね。あれだけはしゃいでたから。」

「うつ・・・いいじゃないですか、楽しかったんですから！」

「別に私は悪いなんて言っていないよ。」

今度は意地悪く笑われる。

「そ、そういうなのはさんだって楽しそうだったじゃないですか！」

「うん、私も楽しかったよ。」

くっそ〜、あっさりと返しやがった。

ふとヴィヴィオを見た。

なんか、足がもつれそうになったりしてかなり危ないんですけど。

「なのはさん、ヴィヴィオ・・・」

「うん、疲れてるみたいだね。」

「だったらおんぶかだっこでもして・・・」

「だ〜め。」

なのはさんは首を横に振った。

「だめって、そんな。」

「だってヴィヴィオのためにならないもん。」  
き、きびしい。

「けど、アストラルもフェイトちゃんと同じで甘いね。」  
「え、フェイトさん？」

視線をずらしてみると、フェイトさんの視線はヴィヴィオとな  
のはの間を行ったり来たりしていた。

どうやら念話でも使ってたのはさんを説得しているようだ。  
しかもなのはさんは、それをも却下しているみたいだ。  
それでも食い下がって説得を続けるフェイトさん。

激甘のフェイトさんと厳しいなのはさん。  
共通してるのはどちらも優しいという所、かな？

そんなことを考えながら歩いていると、人とぶつかってしまった。

「す、すみません。」

相手がこけてしまったので慌てて起こす。

自分と同じ年ぐらいの少女だった。

ショートヘアの活発そうな女の子だった。

「い、いえ、こちらこそすみません。」

少女は膝に付いた土を払うとぺこっとお辞儀した。

「怪我はありませんか？」

「はい、ありがとうございます。」

膝の土を払い終わり少女が顔を上げるお目があった。

「・・・アストラル？」

「ふえ？」

何で少女が僕の名前を知ってるんだ？

「もしかしてあなた、アストラル・S・キャロメイ！？」

「え、ええ、そうですけど・・・」

そう答えると、いきなり少女に押し倒された。  
なのはさんも私の後ろで目を白黒させている。

「会いたかったー、アート!!!!!!」

ぎゅーっと抱きつかれる。

というか、この子だれ〜!?

\* \* \* \* \*

いきなり抱きつかれて、往来の注目的的となってしまうた私たちはどにかくまらずは喫茶店にということ近くの喫茶店に入った。

フェイトさんは「先にヴィヴィオを家に連れて帰る」とのことで先に帰っていった。

「それで、あなたは？」

全員分の飲み物・・・なのはさんはコーヒー、私はあまーいミ

ルクココア、少女はアイスレモンティー。――が来て、一口飲んだところではさんは話を切り出した。

「はい、私はシュリテイ・S・ウォルティ。第37観測指定世界シルベンス出身です。」

「シルベンスってアストラルと同じ星？」

「はい、アート、もといアストラルとは小さい頃からの幼なじみで小学校くらいまではよく遊んでました。」

にこつとシュリテイがこつちを見て笑う。

「そうなの・・・シルベンスは大変でしたね。」

途端、彼女の顔が曇った。

「はい・・・かなり突然だったので私自身驚いていて・・・私は運が良かったのかちょうどミッドに用事があったので。」

「そうなの・・・」

「はい・・・」

ずーんと空気が重くなる。

「私、友達も家族もそこでなくしてしまったので、ちょっと最近まで落ち込んでまして。けど、今日たまたま、外に出てみようと思っただけで歩いたら・・・」

「アストラルにぶつかったと。」

「はい！」

再び彼女の笑顔が戻った。

「もう、夢かと思いましたよ！こうして再び親友と出会えたんですから！」

「そう……」

なのはさんはニコニコと、でもどこかつらそうに笑う。

「ねえ、アートはどうしてここにいたの？」

「ふえ……」

いきなり話を振られて返事に困った。

何をしていたかといわれれば、六課でお世話になってたと答えればいいけど、なぜっていわれると……

返事に困る。

なんせ記憶がないから。

「あのね、シュリテイさん。」

「はい？」

見かねたなのはさんが、切り出した。

「実はアストラル、記憶がないの。」

「……へ？」

「詳しくは、ここに来る前の記憶……一週間前かな……それ以前の記憶は無くなってるの。」

「……うそー！」



彼女はガタンと席を立つと、私の肩につかみかかった。

「嘘だよ、ねえアート。嘘なんだよね！嘘だっていつて!?!」

彼女は信じたくないと瞳で必死に訴えながら私の肩を揺する。

「ごめん・・・」

辛かった。

彼女の瞳はとても真摯で、曇りがない。

こちらも望む答えを返してあげたいと思わず思ってしまうほどの  
思いを訴えてくる。

だからこそ、彼女を裏切ることとは出来ない。

その瞳に、思いに嘘をつくことは出来ない。

だから、ごめん。

「う、そ・・・」

彼女はパタンといすに座ると放心したように私を見る。

「きおくが、ない・・・」

目には光るものが浮かび上がっている。

「わたしを、おぼえて・・・ない・・・。」

そのまま彼女は泣き出した。

辺り構わず、大きな声で。

「ごめん・・・」

私は、彼女の隣に座ると、肩を抱いて、背中をさすってあげる。すると、彼女は私に再びすがりついて、泣き続けた。

「ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、シユリテイ。」

結局彼女は、泣き疲れて寝てしまった。

「……うちにつれて帰ろっか。」

今まで黙っていたのはさんが、お会計をするため、席を立ちながら言う。

私は、なのはさんお気遣いを感じ、頭を下げた。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

## 第07話（後書き）

次で第一部終了します！（宣言！）

実はついこの前、一万アクセスを突破しました！

もうちょく感激ー！！

皆さん、ありがとうございます。

今後ともよろしくお付き合いください。

## 第08話

### 第08話

夕飯の時間になってもシュリティは起きなかった。

スバルさんが夕食の時、彼女のことを私に聞こうとして、

「スバル、しばらく黙ろうね」

となのはさんに脅されていた。

その言葉で気温が一気に五度ぐらい下がった気がしたが、私はそこになのはさんの優しさを感じた。

私もまだ理解していないのだ。

彼女が何者かということはわかってはいるが、それが私とどういう関係なのか。

いきなり・・・彼女にとってはそうではないかもしれないが・・・

見ず知らずの親友という存在が現れたのだ。

実際かなり戸惑っている。

色々思い出そうとするが、鈍い頭痛が私の中で邪魔をした。

「うつうつと・・・」

思わずうつなりながら、目の前の豚カツを箸で刺したり抜いたりする。

結局、あまり食事がのどを通らなかった。

部屋に戻ると、まだシュリティは私の布団で眠っていた。

「シユリテイ……」

彼女の髪をなでる。

亜麻色の髪はとても綺麗で、私の手のひらからさらさらとこぼれていく。

「……アート？」

彼女の口からいきなり名前をよばれて、慌てて髪から手を離れた。胸がどきどきして、口から心臓がこぼれそうだった。

シユリテイはいつの間にか目を開けてこちらを見ていた。

「アート、だよな。」

コクンとうなずくと、彼女はパッと笑い……すぐに泣きそうな顔をした。

どうやら寝起きで一瞬私の記憶喪失のことを忘れていたようだ。

「アート……」

手を伸ばされたのでゆっくりとつかんで握った。どこか懐かしいような、覚えのある感触だった。

「えへへっ……」

感触を楽しむようにシユリテイは手をニギニギして、目に涙を浮かべながらも笑った。

不意に夢の中の少女と面影が重なる。

夢の中の少女は泣いていたが、最後には笑って帰って行った。

その時の涙を浮かべた笑顔が、目が、雰囲気がとてもよく似ている。

あの少女の髪は・・・亜麻色だった。

「ねえ、ちよつと外に出ない？」

私は彼女を散歩に誘った。

\* \* \* \* \*

エントランスのところではなのはさんにあつたが、目で礼をして外に出た。

『あまり遠くには行かないだよ。』  
なのはさんに念話でそういわれたが、止められはしなかった。

「ねえ、昔もこんな風にして私とアートは散歩したんだよ。」

夜の涼しい風が私たちの髪をさらっていく。

彼女と私は手をつないぎながら六課の建物の横を歩いて行く。

「それでね、アートって方向音痴でね。よく一緒に迷ってたんだ。あそこって似たような高層ビルばかりでね。私も何度も迷ったんだよ。」

主に私が聞き役、彼女が話し役で、時々私が相打ちを打ちながら、会話が進んでいく。

「それでさあ、どこに向かっているの？」

十分ぐらいたっただろうか。

周りに建物が無くなってきて、彼女は心配そうに聞いてくる。

「・・・まさか迷ったんじゃないよね。」

「ううん・・・着いた。」

海に浮かぶ、更地の訓練シュミレーターに私は足を踏み出した。

「ここは？」

「実地訓練をする時に使うシュミレーター。」

「入るの、やめた方がいいんじゃない？」

一応、管理局の物だ。

関係者以外立ち入り禁止なのは考えるまでもない。  
しかし・・・

「ううん、平気。なのはさんに許可はもらったから。」

嘘だ。

そんなことは一度もないし、ましてや二人だけなら絶対にくれな  
いだろう。

それでも、あのときなのはさんと目があつたとき、なんとでもし  
てくれると私は感じた。

「そう、・・・ならいいけど。」

彼女もおそらくは私の嘘を見抜いているだろう。

あたりをしきりに気にしながら私と一緒にシュミレーターに踏み  
出す。

「ここで待ってて。」

私は真ん中あたりで彼女を止めると、少し離れた位置で首に掛かっていたアスターを取り出す。

「それ、デバイス？」

彼女は珍しそうにのぞき込んできた。

「うん、シャイニングアスターっていうの。」

「そうなの・・・アスター、でいいのかな？」

『Yes, Ms. Shritty. Nice to meet you!』  
「はい、シュリティさん。よろしくお願ひします。」

「うん、こちらこそ。」

「アスター、起動いい？」

『Ok Master. Stand By Ready. Set up!』

さつと私は紫色の光に包まれると、バリアジャケットを羽織り、伸びた杖を握った。

「うわー、かつこいい!」

彼女は手をたたいてはしゃぐ。  
な、なんだか照れくさい。

「アートはこれを見せたかったの？」

「うーん、これもあるけど・・・」

「けど・・・?」



私は視線を彼女から話すと、杖を構えた。  
答えるより、見せた方が早い。

『Faintly Snow』

私が魔力を込めると、杖が反応する。  
思い描くイメージを魔法に込めると、魔方阵が展開した。  
杖の先に小さな光球が出来る時、私はそれを空に振り上げた。  
光は空に吸い込まれていく。  
そして……

光の粒が、振ってきた。

空からちらちらと点滅しながら、フワッと雪のように降りてくる。  
途中で光同士がぶつかり、そのままパリンと光は砕け散る。  
私が夢で見た魔法のように……とても綺麗に舞い降りてくる。

「どうかな、シユリ？」

振り返ると、シユリは大きく目を開けて涙を流していた。

「……思い、出したの？」

期待に満ちた目で見られるが、私は首を横に振る。

「夢を見たの。昔々の夢。」

一歩、シユリに近づく。

「私は小さな少女と公園にいたの。」

一歩、前が出る。

光の粒が私に当たってはじけた。

「その小さな少女は泣いてたわ。名前まではわからなかったけど。」

一歩、進んでシュリの前に立つ。

「誰かとけんかして、仲直りしたいけど出来ないって。」

シュリの目から溢れる涙を指ですくう。

「だから私は自分の一番お気に入りの魔法をその子に見せた。・・・笑顔になってほしかったから。」

シュリの肩に光が当たって、今度ははじけずに転がった。

「私はあなたの笑顔が見たかった。・・・仮初めじゃない、本当の。」

頭をなでると、シュリは私に飛び込んできた。

「笑顔になって・・・また私の親友になって笑顔を見せて。」

シュリの涙声が私の肩から聞こえる。

バカ、私たちはすでに親友よ、アーク。

淡い魔法の光に混じって、紺色の星空が二人を照らしていた。

\* \* \* \* \*

コンクリートむき出しの内装がまだ施されていない建物。  
その建物の一角にフードを目深くかぶった男達はいた。  
男達の中心には正八面体の不可思議な魔道具が輝いている。

「状況を報告しろ。」

男の一人、・・・フードから赤い髪がのぞくその男が冷徹な声を  
発した。

「どうやら、この男がこの4人の中で一番偉いらしい。」

「はい、現在被験者にシルベンスの出身者と思われる人物との接  
触がありました。」

途端、その横にいた男が、声を上げる。

「おい、それはどういうことだ。まだ接触には時間があるはずで  
は・・・」

「いや、予定にない者だ。仕方あるまい。」

赤髪の男が男の声を遮り、報告を続けさせる。

「はい。・・・現在のところ、被験者の魔法技術の習得に予想以上の結果が出ています。これは管理局の人間のおかげでしょうか。」

「そうか、・・・して、魔力の方は・・・」

「はい、順調に蓄積中です。このままいけば・・・」

男が空中にスケジュールを表示して、ある日付を指さす。

「この日には、決行できるかと。」

おおっ、と歓声が一瞬広がる。

『Master, Someone Coming.』主、誰かがきます。』

男の胸に光るデバイスが警告を発す。

男が、空中に手をかざすとシャンパンの注がれたグラスが、それぞれの手に収まっていた。

「それでは、アストラルが、我が世界に復興と栄光を与え、導いてくれんことを・・・」

チーンとグラスをあわせる音とともに男たちは消えた。

しばらくして。

「管理局のものだ！武器を捨て、投降しろ！！」

管理局の制服を着た魔導士たちが部屋に入ってきた。

しかし誰もおらず、空のシャンパングラスだけがそこにあった。

「くそっ！また逃げられた。」

一人が、シャンパングラスを思いっきり蹴飛ばす。

それを別の魔導士が魔法でグラスを止めて、回収する。

「やめろ！貴重な証拠だぞ！」

「けっ、証拠つたって今までのも全部シャンパングラスだったろうが。」

忌々しそうに、足下にあった石ころを外に蹴る。

「隊長！」

部屋の中を搜索していた一人が声を上げる。

「どうした。」

「これを……」

持っていたのは紙切れだった。

まだきれいな紙で、表には何かが書かれている。

「……これは！」

紙を読んでいた隊員はある文字で目が止まった。

「……すぐに機動六課八神部隊長と高町一等空尉、テストロッサ執務官に連絡を！」

「はいっ……」

隊員は何度も読み返しながらつぶやいた。

「また、六課で何か起こるのか？」

そこに書かれている文字の一つに名前があった。

“アストラル・S・キャロメイ”

六課で保護している人物の名前だった。

） t o b e c o n t i n u e （

## 第08話（後書き）

この話は第一部のクライマックスです。

自分としては、ここで一区切りになります。

次から第二部に移って、物語全体のクライマックスとしては第三部、後日談的に第四部を予定してます。

・・・まあ、どうなるかはわかりませんが。

## 第09話（前書き）

最近あまり中身がないねと突っ込まれた星伝です。

確かに、・・・読み返してみると初期の文章に比べて、伝えたいこととかが抜けてきてます。

・・・まあ、いいではないか！

聞き直って、今日も投稿させていただきます。



## 第09話

### 第09話

「フェイト・テストロッサ執務官です。」

「おお、まつとつたで、入ってな。」

久しぶりのライトニングとの訓練をやっているときにいきなりはやてから連絡があつた。

なのはも呼び出されていたから、何か重大なことなのだろう。すぐに訓練をヴィータとシグナムに頼んで部隊長室に向かった。

「よお、テストロッサの嬢ちゃん。」

「お、お久しぶりです。ナカジマ三佐。」

中にははやてだけじゃなくて、ナカジマ三佐もいた。

「なのは嬢ちゃんも久しぶり。」

「お久しぶりです。」

ナカジマ三佐と向かい合うようにして応接テーブルに着く。

「それで、はやてちゃん。訓練を切り上げてまで私たちを呼んだのは？」

なのはがはやてに早速切り出す。

「ああ、まずは俺から説明しよう。」

ナカジマ三佐が、手元のコンソールをいじくって画像をいろいろ表示しながら説明を買って出た。

「まず、ここ最近ミッドで多発している不法侵入事件のことを知ってるか？」

「・・・いえ。」

なのはを見るが、彼女も首を振っていた。

「まあ、これが不可解な事件だな。空室になってるマンションや住宅、建設途中の建物なんか勝手に勝手に入ってくる輩がいるんだ。」

部屋の写真が撮られた画面が一番前に出てくる。

「それを追っているんだが、これがかなか捕まらない。何か魔法でも使っているようなんだが、種類までは特定できていない。そして、現場には必ずこれが置かれていた。」

画面が切り替わって別の写真が浮かび上がった。

「これって・・・」

「・・・グラス？」

四つに四角く並べられた透明なグラスが移っていた。

「正確にはシャンパングラスだ。俺たちが発見する直前まで液体・  
・シャンパンが入っていたようなんだ。グラスがぬれていたから  
な。」

「つまり、踏み込む直前、もしくは少し前に毎回感づかれて逃げ  
られている。」

ナカジマ三佐は頭をかきながら答えた。

「そうだ。・・・悔しいかな、いくら気配を絶って隠密に動いても感づかれる。相手は相当の手練れだ。」

「シャンパングラスが四つってことは、犯人は四人いる？」

今度はなのはが質問する。

「よくはわからんが、多分そうだ。・・・何せ犯人全員を一度に見たやつは一人もないからな。せいぜいが、近所のおばさん方が声を聞いたくらいだ。」

そこで、ふと疑問に思った。

なぜこんな話を私たちに？

「それで、さつき・・・もう五時間ぐらいたつかな。また情報が入って、踏み込んだんだ。場所はミッド都市の建設中の建物。もうほとんど工事は終わっていて、後は内装だけだったそうだ。不審な男たちが出入りしていて、踏み込んで見たら、案の定シャンパングラスが四つ、部屋の中央に置かれていた。今回もこれ以上の手がかりがないと思ったんだが、隊員の一人がな、こんなものを見つけたんだ。」

何か紙をコピーしたものが机の上に置かれた。

なのはと一緒にのぞき込んでみる。

“被験体活動報告”

NO:0001

名前:アストラル・シルビア・キャロメイ

報告内容：魔法技術習得に関する状況は順調に進行。先日、シルベ  
ンヌ出身者との接触を確認。詳細は不明。どうやら被験体の友人で  
あると推察される。対象を捕獲しようとするが、六課に保護される。  
今後は静観に移る。より詳細な報告は別紙を参照。

計画進行度：27.5%

「これって・・・」

「・・・どういう意味？」

思わずなのはと顔を見合わせて首をかしげる。

「俺にもわからん、ただその名前にアストラルの名前があった  
から一応おまえたちに報告しところと思ったんだ。」

たしかに。

この報告書とやらはアストラルに関係があるのは間違いない。

しかも、内容を読む限り、

「あまりいい予感はないね。」

「うん。」

いったい、アストラルに何があるっていの。

・・・いや、いつぱいありすぎるか。

レアスキル一つとつたって、かなり貴重なものだ。

もしかしたら、何かの実験にでも使われていて、

・・・憶測にとらわれるのはやめよう。

何も証拠はないんだ。

「それでな、なのは隊長、フェイト隊長。うちは今後ナカジマ三  
佐と手を組んでこの事件に当たるべきやと思うんやが、どうやらう

「？」

呼び方がいきなり隊長になった。

・・・これは個人じゃなくて、公で考えろと。

「私は賛成です。むしろ、そうすべきだと思います。」

「フェイト隊長は？」

「私もそう思います。」

くると、はやてがナカジマ三佐を見た。

「というわけで、我々機動六課もそちらの捜査に協力いたします。」

「

「そうか、わかった。・・・なら責任者をギンガにしよう。そっ

ちの方がはかどるだろう。」

「ありがとうございます。」

はやてはこちらを再び向いた。

「そういうわけで、ようわからん事件やけど二人とも、なるべく

アストラルや、シユリティからは目をはなさんようにしといてな。」

「うん、わかってる。」

「りょくかい、はやて。」

最後に、お茶を飲みながら近況を報告しあってから解散となった。

\* \* \* \* \*

「それじゃあ、午前の訓練はじめます！」

「『『『『『』』』』』』」

「はい！」

みんなが返事をするに合わせて、私も大きく返事をする。

今日は、シュリが六課に来てから初めての訓練。

朝練はちよつと諸事情で今日は私だけが休んだ。

昨日の夜の会話で一気に距離が近づいた私たちは朝起きてからもずっと一緒にいた。

「ねえ、そういえばシュリティは？」

「ほんとだ、今朝からずっとアストラルとベタバタしてたのにいないわね。」

べ、ベタバタって……ティアナさん、私たちそんなにいうほどベタバタしてませんよ？

朝起きて布団の中でいちやついて、廊下を歩いているときも手をつないでるだけだし、朝ご飯の時は別々のメニューを頼んでわけっこをしただけだ。

「えと、なんかシュリははよてさんの所に行くって言ってましたよ。」

なんかシュリは私にも内緒で朝から色々と駆けずり回っていた。

しかも、横について行っていた私にも内緒の話だそうで、部屋の外でかなりの時間待たされた。

「ああ、それね。」

私の返事になのはさんは何か変な理解を示した。

「え、なのはさん何か知ってるんですか。」  
「うん、知ってるけど……」

なぜそこで私を見ますか？

「……ない・しょ それにもうそろそろ……」  
「おゝい、アート!!」

なのはさんが続きを言う前に隊舎の方からシュリの声が聞こえた。振り返るとシュリがシャツにハーパンというラフな格好で、右手には……ペンダント？を持って走ってきていた。

「もうシュリ、どこ行ってたの？」

水を渡しながら聞く。

「……（ゴクツ）、ぶはあく生き返る!!で、どこ行ってたかって？はやて部隊長の所。」

「はやてさんの所？」

そう、と頷きながらペットボトルを横に置いて私たちから一步下が  
がる。

そして、ペンダントを握ると、

「スノーレイン、セーットアップ！」

叫んだ。

瞬間、シュリの体が深い青色の光に包まれ、淡い水色のセーラーに同じく淡い水色のチェックスカートを着、両手にはスライドガン

のような銃に片刃の剣が付いた・・・銃剣を持っていた。

「よし、成功成功！久しぶりだね、レイン。」

『Hello, Master. After an interval of three months. 《久しぶりです、マスター。三ヶ月ぶりですね。》』

「およ、もうそんなになるのか。」

『Yes, I have been leaving just now. 《はい、今の今まで捨て置かれてました。》』  
「ご、ごめん。そんなにほっとくつもりはなかったんだ。」

『... Well, you were variously very. 《まあ、あなたも大変でしたからね。》』

「わかってくれるか、相棒！」

『If you Don't forget me... 《まあ私を忘れないでくれるなら・・・》』

「ありがとうよ、相棒！」

デバイスとの会話も終わり、私の方を見ると、その場でくるっとターンした。

「ねえアート、どう、私のバリアジャケットとデバイス？」

「うん、とつても可愛いし、それに不釣り合いなほどデバイスは物騒だけど・・・似合ってるよ。」

「わ、いい、ありがとう！！」

「うわあ、銃を振り回すな、危ないだろう！」

「大丈夫だよ、ね、レイン？」

『Sure, Master. Hello, Ms. Astral. I had seen you after an interval of two years. 《もちろんです、マスター。久しぶりです、アストラル。あなたとは二年ぶりぐらいで



すね。》』

「え、私レインとあったことあるの？」

『Oh, did you forget me? 《え、私のこと忘れてしまったんですか?》』

「ああ、レイン。アストラルはね、今記憶喪失なの。」

『Really? That's too bad. 《本当に? それはお気の毒に。》』

「そうでもないんだけどね。実際覚えてないものは覚えてないんだし。ところで、シュリつてデバイス持ってたんだ。」

「うん、シルベンスの学校に通ってた頃、アートと一緒に戦闘訓練してたんだよ。」

「え、うそ!」

「ほんとほんと。」

「あの〜そろそろいいかな?」

二人で盛り上がっていると、なのはさんに注意された。

「というわけで、これからシュリテイとアストラルは私たちの部隊に民間協力者として所属することになりました。所属するチームは新しく作ってはやて部隊長直属の“ウィング”隊で今後は朝練からズ〜ツと一緒に訓練していきます。」

「それ、本当ですか!??」

私、聞いてない!!

「うん、そうだよ。というわけで今日からみっちり・・・といっても、シュリテイの話によると、相当強いみたいだけどね。・・・訓練していきます。」

へ、シユリって強いんだ。

「どのくらいの強いんですか？」

スバルさんが手を挙げて聞く。

「うんとね、アストラルとシユリティが手を組むとシルベンスで勝てる人は大人でもないとか。」

まあ、私の能力は話を聞く限りチートだからな。

「私の魔力とシユリの高等並列演算能力を合わせると、最強ってわけか。」

「え、アート、私のこと思い出したの!？」

「ふえ？」

「……ん、そういうえば、何で私シユリの演算能力のこと知ってたんだ？」

「なんか、口からぼろりと言うか、そういう感じで出てきたんだよな。」

「……そういうわけでもないみたいね。」

私の顔を見てハアツとシユリはため息をついた。

「……ため息付かなくなっただっていいじゃないか。」

「けど、ポロリと今出たんだ。」

「今後だつて少しづつ、記憶が治っていくかもしれない。」

「……そこら辺はあんまり期待しない方がいいかな？」

「とにかく、強いかどうかは模擬戦してみればわかるってことで。」

・いまからウィングvsライトニング・スターズの模擬戦を行います。」

「「「「「「はいつっ!」「」「」「」

「がんばろうね、シュリ!」

「うん!」

私はシュリと拳をぶつけ合うと今は森になっているシュミレータに踏み出した。

十分に離れると、なのはさんのホイッスルが聞こえた。

）to be continue）

## 第09話（後書き）

09話、いかがでしたか？  
次は、模擬戦になる予定です。

## 第10話（前書き）

今回は予告通り模擬戦です。

初めてこんな複雑な戦闘シーンは書きました。

まだまだ慣れていないので不備があればお教えください。

## 第10話

### 第10話

模擬戦を初めて早十分。

大分相手の攻撃がわかってきて私はシールドを張らなくてもよけられるようになった。

飛んできたオレンジ色の玉を先ほど地面に降りたときに拾った石を投げて爆発させる。

「アスター!!!」

『OK, Load Cartridge.』

鋭く叫ぶと、アスターは宝石の付け根部分をのばし、ガシャンと引き込む。

薬莖が飛び出し、宝石に一気に光が点る。

「エアリアル・カッター《Aerial Cutter》!!!」

横から伸びてきた青い道、スバルさんのウイングロードにむけて思いつき放つ。

振った杖の先から薄い魔力の刃が浮かび上がり後ろに真空のカッターを伴ってこっちに来ようとしていたスバルさんに向かっていく。彼女はジャンプでよけると、道を曲げていったん視界から消えた。次に牽制の意味を込めて、ティアナさんがいると思われるところにも放つておく。

案の定、オレンジ色の球が飛んでカッターと相殺した。

『そろそろ攻撃がパターン化してきたけど、どうする?』

遙か向こうでエリオ、キャロの相手をしているシュリに念話で話しかける。

『そうね、そろそろスパートを言ってみますか。』

『作戦は?』

問い返したところで、八方からオレンジ色の玉が同時に飛んできた。

もう石は持っていない。

私も魔力弾で相殺してもいいが、あの玉はかなりのスピードだ。作るのが間に合わないかもしれない。

だからといって、シールドを張るには威力が重すぎる。しょうがないので上に回避する。

すると、スバルさんが上から落ちるかのようなスピードで攻撃を仕掛けてくる。

カードリッジロードが見られるから、おそらくリボルバーキャノンだろう。

ということは、シールドも破られるか。

逃げようと下を見ると、先ほどの玉が、ぶつかるぎりぎりです昇っていた。

横を見ると、また八方から球が飛んでくる。

まだ先ほどのカードリッジロードの魔力が残ってるから、スバルさんに向かって、放つてもいいが、多分、ナツクルに打ち消されるだろう。

だからといって、ティアナさんの玉を打ち消すには数が足りない。それなら、

「アスター!」

『Load cartridge.』

「シールドx5!」

『All right!』

シールドを何枚も張るまでよ！

先にしたから飛んできた球がシールドに当たって弾かれていく。そして、スバルさんがシールドに思いつきり拳をぶつけた。

パリンと言う音と共に一気に四枚まで割られる。ゆっくりではあるが、五枚目も割れそうだ。

ここまでやって逃げるのはしゃく出しなあ。

「アスター！バウンドシールド！」

五枚目の下にさらにもう一枚シールドが出来る。

ちようど五枚目も割れ、続けて、カードリッジをロードするスバルさん。

そのまま突っ込む気だ。

拳を再度振りかぶって、シールドにぶつける。

瞬間、シールドが衝撃を吸収して、そのままスバルさんごとはじき返した。

「うわああ！！」

スバルさんが空中に戻って、ウインググロードで出直す。

バウンドシールド・・・相手の攻撃力と同じ力で魔力を与えて威力を消費。そのまま再度バリアをバーストさせて相手を弾くシールド。

これは大概の高威力単発魔法に強いが、広範囲魔法には無意味だし、魔力の消費も多い。

実際魔力無限な私のためにあるようなものだ。

『作戦だけど、結界は覚えてる？』



『うん、一応昔やってた魔法の知識だけは残ってるから。』

『ならそれでティアナさんをつままえましょう。確か勝利条件は、敵チームの誰かを捕まえるだったよね。』

『オツケー、ならその方向で。』

進んでいた方向を転換して、中心に向かう。

反対側からはシュリが来ているはずだ。

『中心に来たらあなたは高緯度上昇。私が援護するから結界を展開！さつさと片付けるよ！』

『了解！』

言われたとおり、私が中心に来て高度を上げると、その下でシュリが、魔法弾をいっぱい浮かべて皆を牽制していた。

「アスター!!!」

『Load Cartridge.』

ガシヤンガシヤンと上下五つずつ、最高装弾数十個すべてのカードリッジを消費する。

普通ならここで新しいカードリッジを入れるのだが、今はそんな暇無い。

自分の魔力のみでラウンドシールドを張ると魔法に入る。

「魔法効果範囲設定………、目標設定………、除外対象設定………、よし、いけるねアスター！」

『Sure, Master!』

「結界、展開！」

『Sweet Box, lying!』

私の声と共に下に集まっていたスバルさん達を一気に結界で覆う。慌てて結界を破壊しようとするスバルさんやエリオにシュリが弾丸で牽制する。

「捕獲、開始！」

『Divisioning!』

狭い空間内に仕切りのようなものが現れていき、スバルさん達をどんどん孤立させていく。

こうなるとシュリの玉も届かないのでスバルさんが結界を壊すため思いっきりナックルをぶつける。

しかし、ぶつけた部分だけ透き通り、体が仕切りを透過。体半ばで透過が止まりスバルさんは動けなくなる。

他の人も似たようなものだった。

キャラはフリードを使って結界に穴を開けようとするが、炎だけが透過して、自分たちはでられない。

エリオもストラーダで結界を切ろうとして透過。体半ばでスバル同様動けなくなる。

ティアナは冷静で、スバルさん達と同じ二の舞を食わなかった。

だから私が無理矢理、結界を追い詰めていき、結果現れた結界に身動きがとれなくなった。

皆、色々と魔法を発動させるが、結局身動きがとれないようだ。

「よし、完成！名付けて“お菓子箱の仕切り”作戦！」

『アート、そのネーミングはどうかと・・・』

念話でシュリに突っ込まれた。

ピーンという笛の音があたりに響き渡った。

「はい、模擬戦終了！結果はウィング隊がスターズ・ライトニン

グ隊を拘束。よってウィング隊の勝ち！」

「よっしゃ、シユリ！」

「うん、やったねアーク！」

地上に降りて思わずハイタッチを交わす。

「っ、強かった。」

「ちよつと卑怯というか、まあこれもありなんだろうけど。」

「けど、アストラルさんとシユリテイさん、お強いです。」

「お二人のチームワークがとてもいいんです。」

「やった、ほめられた！」

「というか、今まで私は個人スキルしか訓練したこと無かったからわからなかったけど、

「なんというか、強かったんだね私たち。」

シユリに水の入ったペットボトルを渡して、ついでにスバルさん達にも配る。

「だから言ったでしょ、私とアトが組むとシルベンス最強だったって。向こうでは、私たちのこと“無情のコンビ”って言われてたくらいだから。」

「・・・無情？」

無情・・・無情ってなんだ？

無敵や最強じゃなくて、無情？

・・・も、もしかしてこれは、ボケ！？

「な、なんでやねん！」

「別にぼけてないよ!!」

うわ〜ん、突っ込んだら叩き返された!!  
だって、ボケだと思えなかったんだもん。

「無情って言うのは、私とアートが組むコンビは、手加減できない最強バカコンビだったこと。」

「……この場合、その最強がどこにかかるかが問題だね。」

最強 バカ、もしくは最強 コンビ、なのかってね。

「けど、わからなくもないですよ。」

スバルさん達をシユリが見る。

彼女たちは今、ぼろぼろだった。

とは言ってもそんなにひどくはないし、訓練弾だったから体にダメージは与えてないんだけど。

それでも、地面にダウンしてる。  
一方私たちはケロリとしていて、ダメージらしいダメージも少ない。

「それに、手加減できないのはいいことではないからね。」

なのはさんも、話に入ってきた。

「手加減できないのは、制御がうまくいってないってことだし、もし何かあって、最悪の状況に陥ったとき、究極相手を殺すか、自分が死ぬかの選択になるからね。」

もちろん、ここで相手を殺すなんて選択肢はない。

「まあ、アストラルの場合手加減する必要性が今まで無かったんだらうけど。」

私のレアスキルのことを指しているんだらう。

「というわけで、一休憩したら個人スキルに入るよ。スバル、ティアナはヴィータちゃんと、エリオ、キャロはシグナムと、シュリテイとアストラルは私と組むよ。」

「「「「「はいっ！」「」「」「」」」」」

水を飲んで、汗をタオルで拭きながら、さっきの模擬戦のこともっばら話題になった。

「くそ〜悔しいなあ。」

「ほんとね、全然手加減してないのに、こっちは重傷、向こうは軽傷ってどうよ。」

スバルさんの言葉にティアナさんが賛成する。

「特に最後のティアを捕まえるための結界。あれは多大な魔力を持つアストラルにしかできないエコ技だね。」

「それだけじゃないわよ、シュリテイのあの弾丸の数と制御。あそこまで増えてあの精度はすごいものがあるわ。」

「あ、それ私も思いました。アストラルさんの方は何となく今までの個人訓練を見てたのであまり驚かないんですけど、シュリテイさんのあの制御はすごかったです。」

「僕とのクロスレンジでの技術もかなりのものでしたよ。」

おお、おお、シュリテイが誉められてる。

なんか私までうれしいぞ。

「そりゃあ、シユリのオーバーマルチオペレーションスキルの高等並列演算処理能力は伊達じゃないからね。あれには私も苦労したよ。こっちのガードが薄い点に集中して攻撃を受けたときは最悪だったよ。」

あのとき、まだ私はそんなにスキルを上手く使いこなせてなかったしね。

まあ、あれのおかげで私は実力を発揮できるけどね。

何せ、ちよつと大きな儀式魔法では発動までに時間がかかってその間に攻撃を受けかねないから。

「ねえ、私ってアートの昔話なんかしたっけ？」

シユリテイが不思議そうにこちらを見ていた。

あれ、私なんか変なこと言った？

「も、もしかして記憶が戻った！？」

そ、そういえば、何で私昔のことなんて覚えてるんだ！？

いや、まてまて、本当に記憶が戻ったのかも・・・

試しにほかの昔のことを思い出そう・・・

無理だった。

けど、今日はなんかよく記憶がポロツと出てくるなあ。

頭でも打ったか？

ちらつとシユリをみる。

期待に満ちた目が痛かった。

首を横に振ると、一気にシユリはしょげた。

「ご、ごめんシュリ。ただいま何となくぼんと言葉が出てきただけ……」

な、なんかシュリを見てるとすごい罪悪感に襲われる。

別に悪い子としてないんだけど、ごう、胸がうずくって言うか。

私シュリのこんな顔見たくないよ!!

けど、どうすれば笑ってくれるんだ？

「シ、シュリ、泣くな!!泣かないでくれ!!」

思わず手を握って叫ぶ。

「シュリが泣きそうだと、私もなんか悲しいから泣くな!!笑顔のシュリの方が可愛いんだから!!」

顔をのぞき込むようにして言うと、シュリは目をぱちくりさせた後、笑い出した。

「ハハハツ……アートっていつもそうだったよね。昔と変わってないや。」

何か昔のことを言ってるんだろうけど、……正直記憶がないからわからない。

「昔のアートもそうやって私を励ましてくれてたの。……たとえば記憶が無くてもアートはアートか。」

なんか自己完結されたが……まあ、笑ってくれたからいいや。

「なんか今アストラルさん、すごいこと言ったよね。」

「うん、聞いてる私たちの方が恥ずかしくなるような言葉を・・・

」

なんかティアナさん達が向こうでささやいているが、・・・よく聞こえない。

「ほら、そろそろ休憩終わりにして訓練に戻るよ！」

「「「「「はい！」「」「」「」

なのはさんに呼ばれて、それぞれ自分の訓練に散っていった。

↳ to be continue



## 第11話

### 第11話

「派遣任務？」

「そう、派遣任務。本局の方から依頼があつて私たち前線メンバ  
ー全員が出動だつて。」

「場所は？」

「第97管理外世界。文化レベルD、次元航行なし、魔法なし、  
現地名称地球だつて。」

「それって……」

「そう、なのはさんやフェイトさん、はやてさんの故郷だよ!!」

「けど、何で私たち機動六課が……」

「何でも」S事件に関係するものが見つかったらしいよ。」

「ふん、で、集合はいつ？」

「今日の正午。」

「そう……てもう後10分しかないじゃん、急げ!!」

「うわあ〜〜まっつて〜〜!!」

というわけで、派遣任務です。

\* \* \* \* \*

「ここが……」

「……地球。」

もう時刻は20時半でかなり暗くなっているが、海の音と緑の香

り、そして遠くからは車の音が聞こえる。

「正確には、ここは海鳴市ね。」

「なのはとはやての故郷であり、私と出会った場所でもあるんだよ。」

「へへ」

なのはさんとフェイトさんに説明を受けながら砂浜を歩き回る。ふと、スバルさん達は驚いていないのに気づいた。

「スバルさんやティアナさんは着たことがあるんですか？」

「うん、私たちは前に一度、ここにロストロギアを回収しにね。」

「あのときは現地協力者としてアリサさんやすずかさんにお世話になったわ。」

「アリサさん？すずかさん？」

「そう、なのはさんやフェイトさん、はやてさんの幼なじみなんだって。」

「へへ。」

幼なじみかあ。

そういうのでは私はシユリだよな。

シユリを見ると、目があった。

「ん？どうかした？」

首をかしげられるが、笑ってごまかした。

「今回も、アリサちゃんやすずかちゃんにお世話になるよ。」

「ちょうど今、はやてが・・・ほら、来た！」

フェイトさんが指さした先に大きな車がいた。助手席部分からはやてさんが手を振っていた。車が止まると、はやてさんのほかにふたりの女性が降りてくる。

「なのは、フェイト、それから六課のみんな、おひさしぶり!!」「アリスちゃん、ひさしぶり!!」

ショートの人になのはさんが答える。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、みんなも久しぶりね。」「すずかちゃんも！元気だった?」

もう一人のロングの人にも。

「アリスさん、すずかさん、お久しぶりです!!」「前回はお世話になりました。」

「あのときの夜ご飯、おいしかったです。」「温泉も気持ちよかったです、また行きましょう。」

スバルさんやティアさん、エリオにキャロがそれぞれ挨拶を交わす。

「アリスちゃん、すずかちゃん、この二人が新しい機動六課のメンバーや。」

はやてさんに連れられて、二人の目の前に連れて行かれる。

「アストラル・S・キャロメイです。」

「シユリテイ・S・ウォルティです。」

「アストラルとシユリテイね。私はアリス・バニングス。」

「私は月村すずかです。よろしくね。」

「はい。」

「よろしくお願いします。」

いくつか雑談をした後、なのはさんが集合をかけた。

「では、これからの流れを言うね。まず、前の時と同じコテージに物資を搬入、その間に手の空いている人は探査魔法を周辺にかけます。それが終わったら夕食食べて、温泉に行こう!!」

「『『『『『『』』』』』』」

「けど、その前に出勤があったらおじゃんやからな。そこら辺は運任せや。」

「まあ、早く見つかるに越したことはないんだけどね。どっちにしろ気を抜きすぎないようにね。」

私たちはしやぎように、はやてさんとフェイトさんが釘を刺す。

「じゃあ、分擔言うよ。まず、スバルとティアナ、エリオとキヤロが本部の設置。はやて部隊長の指示に従って。アストラルとシュリテイは私とフェイトちゃんと一緒に探査魔法をかけながら周辺の確認をします。では解散!」

なのはさんの指示に従って、皆が動き始める。

私はなのはさんの元に行く。

「よし、来たね。ならシュリテイとフェイトちゃん、アストラルと私のコンビでそれぞれここから北と南に網を張ろう。場所はデバイスの方に送つといたから、確認しておいて。」

「じゃあ、行くよ。」と言われて、私は慌てて飛行魔法でなのはさん

の後を追いかけた。

戻ってくると、すごくいいにおいがした。

「お、帰ってきた。お疲れ、なのは、アストラル。」

アリサさんが、外のコンロでバーベキューをしていた。

「うわ、いいにおい。フェイトちゃんは？」

「ん、まだみたい・・・あ、帰ってきた！！」

後ろを見ると、フェイトさんとシュリがちょうど空から降りてくるところだった。

「お疲れ、フェイトちゃん。」

「うん、なのはも・・・夜はバーベキューか。いいね。」

なにやら隊長さん達だけで話し始めたので、私は横にいるシュリ  
ティに話しかけた。

「シュリ、どうだった？」

「うん、こっつて昔のシルベンスに似てるね。」

「そうなの？」

「うん、・・・なんというか、私も資料でしか昔のシルベンスを  
見たこと無かったけど、こんなに綺麗だったんだね。」

「確かに綺麗だったね。ビルとかあるけど、自然も多い。」

「海のおいや波の音、森の香りや梢の音が心地いいよね。」

「うん。」

シユリが目を閉じたので私も目を閉じて、耳を澄ませる。  
青々と茂った緑の臭いが鼻をくすぐり、木々が話すように葉を擦る。

時々、鳥の鳴く声が耳に入ってくるのが気持ちいい。

「シユリテイ、アストラル、食べるよ!!」

なのはさんの声に振り返ると、もう皆すでに肉を焼いて食べようとしていた。

「うわ〜待って〜!!」

私たちは慌てて戻って、いっぱい食べた。

夜ご飯を食べ終わって、固唾家もだいたいですんだ頃。

アリサさんやすずかさんとも大分仲良くなれて、色々しゃべっていたときだった。

アラートがコテージに鳴り響いた。

すみません、と謝ってからコテージの前に集まると、なのはさんがすでにレイジングハートを起動させていた。

「よし、全員集合したね。網に対象が引つかかったよ。」

なのはさんが出した画面には円柱状の青い機械軍が・・・

「ガジェット1型・・・ですか?」

ティアナさんが聞く。

「うん、ほかに三カ所で同時に引つかかったみたい。かなりの数がいるよ。」

「まずは広域結界を張って、安全を確保。その後、この森の先に開けた場所があるからそこにガジェットをおびき寄せて、そこで一気にたたくよ。」

「チームはティアナとスバル、エリオとキャロとフェイト隊長、アストラルとシュリとなのは隊長。後の一つはうち一人で。五分後にこの地点でみんなを迎撃や。ええか？」

「……………はいっ！」「……………」

「なら出発や！」

私はアスターを起動させるとシュリと一緒になのはさんを追いかけた。

\* \* \* \* \*

はつきり言うと、ガジェットをおびき寄せるのは簡単だった。

ガジェットは近づくと攻撃しようとしてくるのでそのぎりぎりのラインを飛行し続ければ自然と付いてくる。

5分後には全員集まって、総攻撃を仕掛けた。

「クロスファイヤー、シュート！！」

ティアナさんがオレンジ色の球を打つとガジェットに向かって、

吸い込まれるようにして消えた。

アンチマジックファイル下  
AMFだ。

ということは、魔力重視の私はここでは足手まといか？

「リボルバーキャノン！」

スバルさんが、衝撃波をガジェットにたたきつける。ガジエットの右上の部分に当たりガジエットの動きが止まった。なるほど、魔力でなければ打ち消せないのか。それなら私にも出来る。

「アスター！！」

『Load Cartridge』

「メテオショット！」

地面にある小石を魔法で浮かせて魔力を込めて打ち出した。

案の定、魔力は消されたが、小石のスピードは保ったままでガジエットを貫通。

動かなくなる。

他の人も各個撃破していてもう私はいらないうつだ。

「みんな強いなあ。」

自分のことを棚上げして呟く。

そこにふと変なものを見た。

壊したガジエットが震えているのだ。

「アスター、調査を・・・」

アスターに調査を頼もうとした瞬間だった。壊れたはずのガジエットが宙に浮いたのだ。そのまま壊したはずの部分が修復していつて・・・治ってしまっ



「なのはさん!!」

治ったガジェットがちょうど向かった先は別の個体を撃破中なのはさんだった。

注意を促して、メテオシュートで撃破する。

「ありがとう、アストラル。」

「いいえ、それよりも気をつけてください。このガジェット、本気で壊さないと修復しますよ。」

話している間にもまた一機治って今度はフェイトさんに向かう。それに気づいたフェイトさんはバルディッシュを一閃。

今度は真つ二つにガジェットが割れた。

どうやらみんなもそのことに気づき始めたようで壊れたガジェットにも注意を払いながら攻撃を仕掛け始める。

そうになると、すごく非効率的だった。

壊しても壊しても治るのだ。

きりがない。

「みんな、適度に壊したら離脱!!私がバスターでぶっ飛ばす! はやてちゃんらはガジェットが逃げないように結界の準備。みんなが離れたら張って!!」

「了解や!!」

なのはさんが上空に上がりながら、言った。

みんな慌ててその場から離れ始める。

当たり前だ。

なのはさんのバスターなんかくらったら消し炭だ。

私もくるっと反転すると一目散に逃げる。

「アストラル、後ろ!!」

ティアナさんに言われて後ろを見るとガジェット全機がこちらに向かっていた。

「な、なんで〜!?」

魔力弾を打たれるので仕方なくシールドを張って応戦。そこに横から実弾が飛び出た。

「シュリっ!」

あの玉はシュリだ。

横を向くと、シュリがレインを構えながら次々と撃っている。

「潮時か……」

不意に頭上から声が聞こえた。

見上げると、目深くコートをかぶった人が木の上に立っていた。

「あ、危ないですよ、早く避難してください!!」

勧告すると、その人がこちらを見た。

底冷えをするような赤い瞳だった。

赤い髪に赤い目の男の人。

彼はニヤツと嫌らしい笑みを浮かべると手をかざした。

「うそっ!!」

シュリの慌てる声が聞こえた。

慌てて目線をしたに戻すと、シユリの球が外れていた。  
シユリは負けじと撃つがすいすいよけられる。  
明らかにガジェットの動きが変わった。

「じゃあな、アストラル。」

いきなり名前を呼ばれ、再び上を見ると男は姿を消していた。

「アート、前!！」

シユリの悲鳴に近い声に前を見ると、ガジェットがほんの目の前にいた。

慌ててアスターでクリスタル部分を付くと魔法を発動する。

「バースト!！」

魔力をガジェットないで爆発させる。

発生した爆風を利用して、一気にその場から離れる。

「はやてちゃん、今!！」

「了解や!！」

声に合わせて目の前に結界が張られた。

「レイジングハート、行くよ!！」

『All right! Load Cartridge.』

ガシャングシャんと3発カードリッジがロードされる。

砲撃モードのレイジングハートをなのはさんが構えると、レイジングハートが発動する魔力を杖先に収束させ始めた。

『Divine Buster Extension.』  
「シユート!!!」

なのはさんの声と共に轟音があたりに響き渡る。

結界がかなり揺れていて、張っているはやてさんもきつそうだ。  
というか、デイバインバスターって魔力攻撃じゃなかったっけ？  
AMFに阻まれるんじゃ・・・  
よくよく、ピンク色の光の中を見るとガジェットが跡形もなく灰  
になっていくのが見えた。

「・・・力おしかよ!!!」

AMFとは魔力結合をといていく魔法だ。  
つまり、それ以上の魔力を一度にぶつければ、AMFの処理が問  
に合わないというわけだ。

・・・こええええ!!!

光が収まると、そこにはガジェットはなかった。  
ただ、灰がいくつか積もっていて、地面もかなりえぐれていた。

「やりすぎた?」

『Isn't it all right.』《大丈夫じゃないで  
すか?》  
『

「そうだね。」

いやいや、やり過ぎでしょう。

明らかに地面が大丈夫じゃないし!!!

「よし、終わったからみんなコテージに戻ろう!!! 処理はまた後

でな。」

はやてさんが目をそらしながらコテージに帰っていった。  
ほかのみんなも穴を気にしないようにコテージに歩いて行っ  
てい

る。  
私もそれに倣って、コテージへと足を向けた。

久しぶりになのはさんの恐怖を味わった気分だ。

〈 t o b e c o n t i n u e 〉

## 第12話

### 第12話

カチツカチツと部屋に設置された時計が時を刻む。

「どうでした、被験体は？」

三人の男が空中に浮かび上がるモニターに話しかける。  
モニターにはフードを目深くかぶった赤毛の男が映っていた。

『ああ、上々だ。なかなか強くなっているよ。』

「技術の方は・・・」

『心配ない、あれなら今からでも計画を発動していいくらいだ。』

「それなら・・・」

『いや、待て。魔力の蓄積がまだ終わっていない。それにまだ失敗の可能性がある。しばらくは計画通りに。』

「・・・おおせのままに。」

『それにしても、あのシュリテイとか言う女。・・・使えるかもしれない。』

「・・・準備しますか？」

『・・・いや、あの女は最後に使おう。』

不意に、三人の男達が握っていた端末のランプが赤く点った。

「・・・時間です。」

「今回は早かったな。」

「・・・そろそろ捜査にも本腰か。」

『アストラルよ、我が世界に復興と栄光を与え、導きたまえ。』

いつの間にか男達の手元に現れていた四つのグラスが触ってもいないのにチーンと鳴る。

男達は一口あおると消えていった。

「管理局だ！！おとなしく武器を捨てて投降しろ！！」

ダンツと部屋のドアが開け放たれ、武装局員達が部屋に踏み込んでくる。

しかし、部屋にはすでに誰もいなかった。

「くそ、まただ！！」

一人の男がグラスを見て悔しそうに足踏みをする。

「どうした、またか？」

「ナカジマ三佐！！」

ナカジマ三佐が部屋に入ると局員達は敬礼をする。

「たく、六課の連中がいなくてに限りっぱを見せるとは・・・  
それで状況は？」

「はい、今回もグラスのみと思われる。」

「そうか、ならさっさと片付けて引き上げよう。グラスは回収しておけ。」

「了解しました！」

局員達が散らばって、部屋の捜査を始める。

ナカジマ三佐はため息をつきながら部屋を出た。

\* \* \* \* \*

「さて、お仕事も終わつたし、帰りますか。」

ガジエットの破片、・・・というより灰を片付けて、ついでに周辺調査を行い、任務完了でコテージに戻るとなのはさんがそう宣言する。

「ええ、まだ銭湯行つてません!!」

「ちよ、スバル。なのはさんに対して失礼よ。」

真つ先にスバルさんが不満の声を上げる。

「・・・というのは嘘で、今日一日だけコテージに泊まることにしました!!」

「「「「「わっ!!」「「「「「

私たちの喜び様を見てはやてさんが苦笑する。

「これは、いつもがんばっている前衛みんなへのご褒美な。今から明日の朝までは仕事のこととは忘れてのんびりするで!!」

「「「「「はっ!!」「「「「「

というわけで、みんなで早速銭湯に行くことになりました。  
なつただけ・・・



「ねえエリオくん。一緒のお風呂に入ろうよ。」

キャラロがエリオの服を引っ張っている。

「ちよ、まずいから、ね、キャラロ。」

「え、なにが？別にエリオくんは11歳以下でしょ？ほら！」

キャラロが看板を指さしながら女湯の方にエリオくんを引っ張って  
いく。

「だからキャラロ、他に人もいるんだし・・・」

「あ、私たちは気にしないからいいよ。」

「そうそう、エリオには一度一緒に銭湯に入ったことあるし。今  
さらでしょ？」

スバルさんとティアナさんが通りすがりに声をかけていく。

「あ、もちろん私たちはいいよ。」

「うん、久しぶりに一緒にはいろ、エリオ？」

「そうやな、別にうちはかまわんから、な。」

隊長陣も通りすがりにエリオを誘っていく。

「け、けど！！・・・そうだ、アストラルさん、シュリティさん、  
あなたたちは嫌ですよね！？」

期待に満ちた目で見られる。

とは言われても・・・

「別に私、11歳だから構わないよ。逆に男湯に入ってもいいんだし。」

法律上は平気なはずだ。

・・・私の記憶とシユリの記憶が正しければだけど。

「私もいいよ、・・・というか一緒のお風呂に入って一緒に親睦を深めよう!!」

シユリも苦笑いしながら中に入っていく。

私もそれについて行った。

「ほら、だから入ろう！エリオくん!!」

「ちよ、やっぱ、けど、・・・ごめん!!」

ガタンと言う音と共にとなりに気配が逃げ込んでいく。どうやらキャロの勧誘を振り切って逃げ込んだようだ。キャロは悲しそうにお風呂に入ってくる。

「ほら、キャロ！悲しそうな顔をしない!!」

「けど・・・エリオくんが・・・」

うつうつと、まだうつむいている。

「そういえば、前ははどうしたの？」

「さっきのティアナさんの話だと一緒に入ったみたいだけど・・・」

「あ、はい。あの時は私が男湯に入ったらエリオくんがなんか慌ててそのまま子供専用のお風呂に入って、そのまま女湯に引きずり込んだ・・・ああ!!」

キャラは急に顔を明るくすると、慌てて服を着てとなりに駆け込んでいった。

「「ふふふつ……」」

私とシユリはほくそ笑みながらその姿を見送った。

結局、エリオはキャラに引きずられるようにして女湯に入ってきた。

「ほらエリオ、こつち来て。背中洗ってあげるから。」

フェイトさんがキャラに加勢しながらエリオを洗い場に連れて行っている。

私はそれを見ながら湯船につかった。

「ふうふう〜。」

ゆっくり目を閉じると、様々な声が聞こえた。

スバルさんがティアナさんにちよっかいをかけて怒られている声。  
なのはさんとはやてさん、アリスさんとすずかさんの楽しそうな

声。

エリオの変な悲鳴。

フェイトさんとキャラの楽しそうな声。

そして、みんなが動くたびに聞こえる水の音。

「なんかいいなあ〜。」

思わず呟く。

「何が？」

目を開けると、となりにシュリがいた。

彼女は頭にタオルを乗っけて、こつちを見ていた。

「なにつて、・・・ねえ？」

「わかるか!!！」

いった〜い。

思いつきり頭をはたかれた。

「いや、こつしてね。みんなの楽しそうな声を聞いてると、こつ、心が落ち着くんだよね？」

「弾むんじゃなくて？」

あれ、そういえばそうだ。

普通楽しそうな声だったら自分も混ぜって一緒に楽しむのに。

「まあ、あれじゃない？ここはお風呂だから・・・」

「・・・なるほど。」

お風呂は体と心が落ち着く場所だ。

筋肉がほどよく弛緩して心地よい温度で頭の中が空になる。

嫌なことも、怖いことも、楽しいことも、恥ずかしいことも、魅  
くんなわすれることが出来る。

それに、こつやってみんな楽しくできるってことは・・・

「平和だよ〜」。

そつづくづく思ひ。

「・・・アートって本当に記憶無いんだよね？」

いぶかしむような目でシュリが私を見てくる。

「うん・・・ていつても六課に来たところかあらはあるよ。だからシュリのは知ってるし、なのはさんのことも知ってる。楽しい思い出も一杯。・・・いいよねえ。」

「・・・昔からそうだったね。」

「えっ？」

途端、シュリの声が変わった。

視線をシュリに戻すと、彼女は正面を見ながら、何かを懐かしむように言う。

「平和なひとときを、大事にする。楽しいことを目一杯楽しむ。・

・記憶が無くてもアートは変わらない。」

「当たり前だよ。・・・私は私だもん。」

「けど・・・」

シュリがこちらを見る。

彼女の瞳がのぼせたせいか、はたまた他の理由か、潤んでいるように見える。

「けど、やっぱり記憶がないと、私の知ってるアートじゃないよ。」

「えっ・・・」

「記憶がないと、アートはアートだけど、やっぱりアートじゃないな

い・・・」

「な、何を言ってる・・・」

「昔一緒に遊んで、テストと一緒に赤点取って怒られて、訓練で先生をこてんぱんに負かせて、クリスマスにケーキを食べて、誕生日に小さなアクセサリをくれて・・・」

「・・・」

「その楽しいかったり、辛かったりした記憶がないなんて、・・・共有できないなんて・・・!!!」

不意にシユリは立ち上がると、お風呂場から出て行った。

私はボーゼンとしてそれを見送ってしまう。

シユリがそんなこと思ってるなんて、考えもしなかった。

彼女はいつも私を助けて、私に助けられて、一緒に悔しがって、一緒に笑ってくれていた。

だから記憶喪失のことなんてどうでもいいと私は思っていた。そんなバカなはずがないのに・・・なんて、なんて私はバカなんだ。

「ほら、追いかけていいの？」

不意に後ろから声をかけられた。

振り向くと、なのはさんが笑っている。

「ごういう時、本でもテレビでも、そして現実でも追いかけるものだよ？」

肩を優しくたたかされると、私はお風呂場から出る。

脱衣所にはすでにシユリの姿はない。

慌てて服を着ると、外に出た。

伝えたいことがあった。

教えてあげたいことがあった。

私はすべてを忘れたわけではない。

たった一つだけ、きっかけは夢だったけど、今はちゃんと思いで出している。

その部分だけだけど、思い出している。

だから、だから・・・

道すがら、どこにも見あたらなかった。

コテージに戻ると、ドアには鍵がかかっている。

シユリは鍵を持っていないからこの中には入っていないはずだ。

慌ててきた道に戻ると、その途中で獣道を見つけた。

ここかな？

中に入っていくと、少し開けた場所に出た。

その中心でシユリが泣いていた。

そっと近づこうとすると、シユリは顔を上げた。

私を認識すると、半歩下がった。

「来ないで！」

近づく私の足が止まった。

「今は・・・一人にして・・・」

再び顔を覆って無くシユリを見て、心が痛んだ。

なぜ、私は記憶喪失になったんだろう。

これさえなければ、私はシユリを悲しませることなんて無かった。たとえ私の腕が一本無くて、シユリはここまで悲しんだりはし

なかっただろう。

心がくじけそうだけど・・・伝えることがある。

「アスター」

『Faintly Snow』

私が呟くと、私の意志を受けてスタンバイ状態のアスターがきらつと光る。

魔方阵が展開して巨大な光球が私とシュリの間に来た、そのまま空に消えていった。

しばらくして、光の雪が降ってくる。

その一粒がシュリに当たり、はじけた。

彼女はそれに気づいて顔を上げると、あの時のように呟いた。

「・・・うわぁ、相変わらず綺麗!!」

私は込めていた魔力を断ち切る。

途端、光の粒は消えた。

「・・・もう終わり?」

「うん、今日はここまで。」

彼女は少し不満そうにプクーと頬を膨らます。

その怒り顔に少し無理が見えた。

目が、悲しんでいた。

だから、続ける。

あの時のように・・・

彼女は少し不満そうに言う。

「それでね、もし仲直りしたら、今度はふたりに見せてあげる。」



途端、彼女の怒り顔が崩れた。

「アート、それって……」

信じられないというように、こちらを見ている。

「……そう、昔々の約束。」

「じゃあ、アート。あなたっ……!!」

うれしそうに弾む彼女に、私は首を横に振った。

「ごめん、まだ全然思い出してない。今覚えてる記憶はこれだけ。」

シュンツと彼女は再びうつむく。

「けど、けどね!! 私は絶対に思い出す。」

必死に言葉を紡ぐ。

シュリにはわかってほしいから。

シュリの悲しみを見たくないから。

「いつになるかはわからない。明日かもしれない市一ヶ月後かもしれない、最悪死ぬ直前かもしれない!!」

シュリには笑っていてほしい。

シュリの笑顔は私が一番好きだ。

「けど、私は少しずつでも思い出していく!!絶対に諦めない。」

だから、だから……」

悲しまないでとは言えない。

嫌わないでとは言えない。

それはシユリの思い次第だから。

けど、私はシユリが好き。

幼なじみとして、親友として、大好き。

「……………」

けど、この複雑な気持ちを伝えることは出来ない。

私のわがままにも近いこの気持ちを伝えるすべが見つからない。

言葉に詰まってしまった。

「アート、あなたが泣かないで。」

言葉に詰まって伏せていた顔を誰かがぬぐった。

顔を上げるとシユリが笑っていてくれた。

涙の跡はあるけど、目は笑っている。

「あなたが泣くこと無いでしょ？これは私のわがままなんだから。」

「そ、そんなこと……！」

「そんなことあるの。だって、記憶喪失はアートのせいじゃないんでしょ？」

「……………」

へ、返事が出来ない。

記憶がないからそんなことわからない。

「ふふふつ、やっぱりあなたって正直者ね。」

わ、笑われた〜!!

なんか今のはむかつく。

・・・けど、うれしい。

「ほら、あそこで少し休もう!! 涙の跡は消しとかないと。」

指された木陰に近づくと、一緒に腰を下ろした。

欠けた月が木々の間から光をおろして、草を照らしている。

上を見ると、星々が綺麗に瞬いていた。

「ねえ、シュリ。あの子とは仲直りできたの?」

不意に聞くと、笑い声が帰ってきた。

「さあ、どうぞでしょう。あなたが思い出しなさい。」

静かな森に、時々私たちの会話が響いていった。

\* \* \* \* \*

コテージの一室でなのはさんは先ほどの戦闘データを整理していた。

各デバイスのログから、状況を再現し、適切な対応が出来ているかをまとめていく。

「ん?これは?」

アストラルのデバイスログを見ていると不思議なところがあった。

「民間人？」

動画データがあつたのでそれを見る。

すると、彼が手を挙げた瞬間、ガジェットの動きが変わっているのに気づく。

「・・・犯人かな？」

とにかく資料を整理し、データを保管すると、フエイトちゃんやはやてちゃんに相談するため、それぞれの部屋を訪ねて回った。

↳ t o b e c o n t i n u e ↳

## 第13話(前書き)

お、遅くなりました〜!!  
今回は地球から帰るまえからのお話です。

## 第13話

### 第13話

地球から帰る日の早朝。

「……………ねむい。」

私はなぜか目が覚めてしまった。

昨日の夜は色々あって、かなり疲れたし、寝たのも遅かった。

「……………5時半」

なのに、何でこんなに朝早く目が覚めるのだろう。

いや、昨日遅く寝過ぎたんだろう。

それで体内時計が狂ったと。

「……………もう一回寝よ。」

今日の起床・集合時間は7時のはずだ。

もう一眠りできる。

「……………」

天井を眺めるが、いつこつに瞼が降りない。

「……………」

寝返りを打って、となりのベッドで寝ているシュリを見る。

口を少し開けて、とても可愛い寝顔だ。  
・・・なんか襲いたくなる。

「・・・・・・・・」

こ、こんなんでは眠れない。  
再び寝返りを打つと、今度は机が見えた。  
ポケーツとそれを眺めるが・・・

「・・・・・・・・」

やっぱり眠れない。

しょうがない、起きて自主練でもするか。

体を起こすと、周りを起こさないように着替えて、アスターを持って部屋を出た。

リビングを見るが、やはり誰も起きていなかった。  
外に出ようとすると、一冊の本が目に入った。

「・・・なんの本だろう。」

私の使っているベルカ文字とは違う文字だ。  
おそらく、こちらの世界の文字なのだろう。  
確か、看板とかにもこの文字が使ってた。

「アスター、これ翻訳できる？」

魔力を込めると宝石部分が光って『Sure』と浮かび上がった。

アスターに見えるように本を開いて、ページを見せていく。  
絵本のように、何かお猿さんのような人が棒を持って戦っている  
絵が描かれていた。

最後のページにたどりつくとアスターは画面を浮かべて、翻訳結  
果を映し出していく。

私はそれを読んでいく。

「……これだ!!!!」

思わず叫んでいた。

そのままアスターと色々話して、私の思いつきの案を煮詰めてい  
った。

\* \* \* \* \*

地球に帰ると、早速シャーリーさんの所に向かった。

「え、デバイスを改造したい？」

私の突飛な発言を聞きながら、しっかりと一緒に考えてくれる。  
そして、最後には、

「……それくらいなら2時間もあれば出来るから、なのはさん  
に聞いてみるね。」

そのあと、なのはさんも何とか説得して何とか私の案は通った。



夕方の訓練。

今日は午前中にミッドに帰ってきて、それから一休憩、訓練は夕方からだと言われていた。

「今日は、あまり時間もないから昨日の戦闘のおさらいをしたいと思います。」

なのはさんが、各自の機能の反省点を聞き、それにプラスして教導を行ってくれる。

私の場合は射撃・・・というかメテオシュートの狙いの甘さなどだ。

それにプラスして、

「今日はアスターの新機能を使って、より効率よく倒してね。」

とも言われる。

周囲は疑問符を浮かべていたが、私はハイツと大きく返事をした。

模擬戦。

昨日の海鳴市の風景が浮かび上がっている訓練シミュレーターにガジェット反応が出た。

昨日と同じようにチームで分かれてポイントまでガジェットを誘導していく。

あ、もちろん今回隊長陣は抜きだが・・・

「ほら、アストラル！！ちょっとスピードが速いよ！！これじゃガジェットが追いかけてこないよ。」

後ろを見ると、確かに数機別の所に行こうとしている。

私は慌てて少し後退し、注意を十分引きつけた後、再び先導する。ポイントに付くと、私は作戦通りの配置につく。他の皆もすぐに来て、それぞれの配置につく。

「よし、各個撃破―!」

「……………はいっ!」

試しに魔力弾を撃ち込んでみる。

見事にAMFでかき消えた。

「それなら……」

昨日と同じようにメテオシュートでガジェットを破壊。周りを見ると、同じようには会を終えていた。

「ここからが、いつもと違うところよ。」

ティアナの声に反応するかのようにガジェットが震えて、破損部分  
分が修復。

またそれぞれの所に攻撃してくる。

私は一歩前に出ると、今日付け加えた新しい機能を試してみるこ  
とにした。

「アスター、カードリッジロード!」

『Load Cartridge』

ガシャンと上下2発、カードリッジがロードされる。

私は杖の下端を持つと、振り上げてガジェットのいる方向に振り  
下ろす。

「伸びろ、如意棒!!」

途端、周りが皆こけた。

「あ、アストラル・・・もう少しましなネーミングを。」

なのはさんが突っ込んでくる。  
いやだってね。

他になんて呼べばいいんだよ。

一応デバイスは反応して、ちゃんと伸びでガジェットを破壊したぞ？

「じゃあ、ストレッチバー!!」

「そのまんまじゃん!!」

誰かに突っ込まれる。

けどやっぱり言葉に反応して私の思い通りに棒は伸びてくれる。

うん、アスターとは心がつながってるから平気なんだ!!

「アスター、何がいい？」

メテオシュートでしばらく攻撃しながら聞く。

『On your Willing.』《お任せします。》『

』《そんなこと言わないでさあ。》

『Even if it is said so.』《そっついわれ  
ましても。》『

「うん。」

なにかないかなあ。

特に思いつかないんだよなあ。

如意棒、伸びる棒、思いのままの棒、伸びる杖……  
そうだ！

「アスター、インテンションケイン！」

『Intention Cane!!』

先ほどと同じように棒が伸びる。

「お、それならいいかも……」

スバルさんが賛同してくれる。

「けど、それってまんま如意棒じゃん。」

シユリに突っ込まれた。

イヤーだってね。思いつかないんだもん。

いいじゃん、別の意味を見出してくれたって。

それに……

「ちゃんとした意味あるもん!!」

「どんな？」

「想いの杖。」

ちょっと本来の意味とは違うけど、こっちが私の思いだ。  
そうなら言葉なんてただの記号に過ぎない。

「ふん……いいんじゃない？」

シュリも賛同してくれた。

「「こらあ、話すのはいいけど訓練中だと言つこと忘れないように！」」

話し込んでいた私たちはなのはさんの声に慌てて意識を訓練に向け直した。

\* \* \* \* \*

「どうやった、アストラルの改良したデバイス。」

「うん、なかなかいいんじゃないかな。ネーミングに困ってたけど。」

「伸びる棒だからね。なんとでも付けようはあるよ。」

部隊長室ではやて、なのは、フェイトの三人は報告会をするために集まった。

「今回のガジェット、少し変わつとつたな。」

はやてちゃんが映像を出しながら言う。

「うん、今回は少し焦った。まさかガジェット自身で修復が行われるなんて。」

スーと名の波賀倒したはずのガジェットのキズが光を発しながら直っていく。

「これってやつぱり、魔力修復？」  
「だろうね、魔力光を発してるし。」

ガジェットが直っていく映像が何度も流れる。

「どういう仕組みなんだろう？」

「わからん・・・多分撃ちらのデバイスと同じ自己修復機能やとは思うけど・・・なのはちゃんが灰にしまったしなあ。」

「し、しょうがないじゃん。下手に手加減したらいつまでたっても修復が収まらないんだもん。」

「とは言ってももう少しなんかあるやろう。バインドで一機ぐらいは拘束とか、氷付けにするとか。」

「無理だよ。AMFがあるし、氷雪魔法、私苦手だもん。そういうはやてちゃんがやれば良かったじゃない。」

「現場の判断はなのはちゃんにお任せや。うちはそれに従っただけやし。」

「はやてちゃんの意地悪〜!!」

それはおいといて、となのははすぐに気持ちを切り替える。

「実は気になるデバイスログがあっただけ・・・」

なのはがガジェットの映像を切り替える。

現れたのはデバイスのログ映像に残っていた人物。

「・・・誰や？」

「民間人じゃない？」

フードを目深くかぶった赤い髪の人物を見て口々に言う。

「誰かはわからないんだけど・・・ほら、この瞬間。」

画面の男が手を挙げる。

すると、ガジェットの動きが途端に変わった。

「・・・ガジェットを操る男？」

「つまり犯人？」

「けど、あんだだけのガジェットをなんの道具もなしに操るんは、無理があるで。」

「けど、実際に操っているようにみえる。」

なのはさんがさらに手を動かすと、もう一つ画面が現れた。こちらは会話ログだ。

「最後にアストラルのことを名前で呼んだ？」

うん、となのはが頷く。

「この人物はアストラルに関係があるんだと思う。」

「それも嫌な方向に・・・だね。」

ズーンと部屋の空気が重くなる。

「そういえば、ナカジマ三佐から連絡が来とってな。うちらがあちらにいるときに、また例の不法侵入があっただって。」

はやてが机の所から紙を出す。

「いつも通り、証拠はシャンパングラス四つ。ただ・・・。」  
「ただ？」

「そのうちの一つはグラスにシャンパンがつかれていたんだって。」

「……………」

つまりだ。

その場にいた一人がシャンパンを飲んでいないということだ。  
いや、

「一人、どこかに行っていてその場にいなかった？」

フェイトのつぶやきに、はやてが頷く。

「多分、さっきの男とは関係ないと思うけど……一応別件としてナカジマ三佐に捜査してもらって、それとなくこのことも伝えとくわ。」

「うん、そうだね。」

「なのはちゃんも、アストラルとシュリテイのこと、ちゃんと見とってな。」

「まかせて。」

今日はそこで解散となった。

↳ to be continue ↵



第14話(前書き)

休日1日目です。

## 第14話

### 第14話

「アストラル、シュリテイ、今日から三日間お休みね。」

「はい？」

早朝一番、なのはさんに呼び出されてそんなことを言われた。

「うん、なんて言うのかなあ・・・まあ簡単に言えば、私たちがちよつとミスしちゃったんだよね。」

「はあ。」

「うん、で、法律に囑託魔導師の休暇の規定があるんだけど、二人はそれがちよつと足りないんだよね。だから。」

なるほど、そろそろ月末だからな。

今月・・・というか、ここに来てから色々大変で、休暇なんてそんなに無かったからなあ。

「というわけだから、さっきも言ったように今日から三日間のお休み。日頃の疲れでもリフレッシュしてきて。」

「はいっ!!」

というわけで、今日から三日間のお休みをもらうことになった。

\* \* \* \* \*

「とはいってもねえ。」

現在私とシュリは自分たちの部屋（実はシュリが来てから新しい部屋をもらえたのだ。）のベッドでごろごろしていた。

「急な休暇なんて、何したらいいか……」  
「だよねえ。」

町の情報を出して、色々調べるが今日は特に何もなし。  
平日だから、どこのデパートが服の安売りをしているわけでもないし。

だからといって、このままここでゴロゴロしているのも不摂生のような気が……。

「うん……、おっ！」

横でシュリも色々調べていたが、突然声を上げた。

「何？何かあった？」

バタバタと近寄ると、シュリは画面の一つをさしていた。

「……ゲームセンターのハイスコアイベント？」

画面にはそんなことが書かれていた。

「えと、“本日限定で各ゲームにおいてハイスコアを出した人は豪華賞品！！”だって。」

ゲームセンターか。

「そういえば私、ゲームセンターなんて行ったことない。」

記憶は無いけどね。

ここに来てからという意味で・・・

「そう、なら言ってみる？」

「おうっ!!」

散らかしていたチラシを隅にまとめて服を着て、髪を整える。  
ものの十分で終了。

「よし、行こう!!」

財布を片手に部屋を飛び出した。

\* \* \* \* \*

「おい、アストラル!!」

ゲームセンターに入ろうとすると、誰かに声をかけられた。  
振り向くと、スバルさんが手を振っていた。  
その横をティアナさんも歩いている。

「アストラルとシュリテイも今日は休み？」

「はい、そういうスバルさん達も？」

「そうだよ・・・何、アストラル達もゲームセンター？」

「はい、今日はなんかイベントをやっているみたいで・・・」  
「企画？」

「ハイスコアを出した人には、豪華賞品!!らしいですよ。」  
「ふん。」

スバルさんは何かを考えると、不意にティアナさんの方を向いた。

「ねえ、ティア。アストラル達と勝負しない？」  
「え？」

ウツシツシツとスバルさんが笑う。

「どちらが早くハイスコアを出せるか。」

途端、シュリが反論する。

「無理です、勝てるはずありません!!アートは今日初めてゲームセンターに行くんですから!!」

「あら、そうなの?」

ティアナさんに不思議そうに見られる。

「はい・・・記憶がある限りでは・・・」

ああ、とティアナさんが頷く。

「いいじゃん、・・・それとも勝てる気がしない？」

スバルさんがシュリに挑発する。

シュリはそれにかつんと来たようだ。

「いいでしょう！私が勝てばいいんですから！！ただし、やる筐体は私が選びます。」

「いいよいいよ。」

「後悔しても、知りませんよ！！」

「ははは・・・」

シユリとスバルさんは先にゲームセンターに入ってしまった。

「「はあ。」」

ティアナさんのため息が重なる。

横を見ると、何か心に通じるものがあった。

腕を出すと、向こうも出して、がんばろうとぶつけ合った。

\* \* \* \* \*

シユリが選んだのはゾンビ退治ゲームだった。

「ここに銃があるでしょ。これを使って画面に現れたゾンビを撃つていくの。」

スバルさんが撃つまねをしながら教えてくれる。

「装弾数は10発ね。打ち切ると、玉が出なくなるから打ち切る前にキャラクターを屈ませるんだ。」

「そんなの説明するより実演した方が早いわよ。ほら、貸して。」

ティアナさんはスバルさんからプラスチック製の銃を奪うと、コインを入れた。

ドロドロと暗い音楽と共にオープニングが流れ早速ゲームが始まる。

ゾンビが現れるとティアナさんは銃口を向けて引き金を引く。パキユンと言う少々間の抜けた効果音と共にゾンビは倒れた。

画面の隅にあるスコアに100Pが加算される。

次のゾンビは120Pだった。

どうやら打ち抜くところのよってPが違うようだ。

一番高いのが脳天と左胸で200P

そこからだんだん離れるとポイントも下がって、最低は50Pのようだ。

ティアナさんが最後のモンスターを打ち抜くと“Clear”の文字が浮かび上がる。

続けて“New Record”の文字。

ポイントは11340Pだった。

現れたモンスターの数は100体ほどだから、なかなかのレコードなのだろう。

「すごいです!!ティアナさん。」

「ティア、記録更新だって!!」

スバルさんと一緒にティアナさんを誉める。

「ふん、こんなの実践に比べたらたかがゲームだからね。チャライのよ。」

そういいながらもティアナさん、頬があがってうれしそうだ。

「へえ、ティアナさんもなかなかやりますね。けど・・・」

ニヤツとシユリは笑うと銃を持って、コインを入れた。さつきと同じオープニングが流れゲームが始まる。シユリは笑いながら次々とゾンビを倒していき……

「うそ……」

またまた画面には“New Record”の文字。ポイントは13150Pだった。

「すごい。シユリ!!」

シユリに思わず抱きつく。

「うわぁ、アート!!」

体勢を崩しそうになって、踏ん張るシユリ。

その顔はティアナさんを見ながら笑っていた。

「……」

ピクピクと頬を引きつらせながらティアナさんがシユリを見返す。

「わ、わたしだつて!!」

再び筐体に向かおうとするティアナさんをスバルさんが止める。

「ティア、次は私の番。順番は守ろう!」

そういって、ティアナさんを退けると、銃を持って、コインを入



れた。

再びオープニングが流れゲームが始まる。

スバルさんは時々首を傾げながらも次々とゾンビを倒していく。  
結果。

「・・・・・・・・」

“New Record”の文字。

ポイントは13210P

シユリはそれを呆然と見ていた。

ティアナさんも悔しそうに見ている。

「スバルさん、すごいですよ！1」

「え〜、まぐれだよまぐれ、今日はたまたま調子が良かっただけだつて。」

「けど、すごいです。」

誉める私と照れるスバルさんをおいてシユリとティアナさんが我先にと筐体に向かおうとする。

「ティア〜、シユリも。次はアストラルの番だよ。」

そういつて、スバルさんはふたりの首根っこを捕まえると筐体から引きはがす。

「あ、あの、スバルさん。私は後でもいいので・・・」

「ダメ、それじゃ賭にならない。それにアストラル、ゲームセンターでこんなのやったこと無いんでしょ？」

こんなどころか、ゲームセンターに来たことさえありません。

シユリとティアナさんはそれを聞いて、おとなしくなった。

「そ、そうね。アストラルやりなさい。」

「アート、ほらやってみ。」

ふたりに促されてプラスチック製の銃を持ってコインを入れる。オープニングが流れ、早速ゲームが始まった。

「こ、こっかな?」

現れたゾンビに向かって撃つと、脳天が吹き飛んだ。何回か撃つと玉が出なくなる。

「アート、屈んで!」

慌てて屈ませてから、再び立ち上がって撃つ。20体も撃つとなれた。

最後にボスを倒すと“Clear”の文字。

「ふう……」

銃をおろすと続いて“New Record”の文字が現れた。  
ん? New Record!?

ポイントは……18950P!?

「すごいすごい、アストラル、本当に初めて!」?

スバルさんに肩をたたかれて我に返る。

「嘘、うれし〜!」

思わずそのままスバルさんと抱き合う。

「ねえ、シュリ！！ど……う……」

シュリが白くなっていた。

ティアナさんも白くなっていた。

いつの間にか、知らない人もこちらを見て目を見張っている。

「おめでとございます！！当店開店以来のハイスコアです。」

店員さんがこちらにやってきて握手をされる。

「何度もこういうゲームをされていたのですか？」

店員さんにマイクを向けられながら聞かれる。

「いえ……実は今日が初めてゲームセンターというものに来たんですけど……うれしいです！！」

ちらつとスバルさんとシュリを見てから付け加える。

「銃が本職のガンナーにも勝てましたし。」

プツンと何かが切れる音がする。

しかし、店員さんに次の質問をされてそちらを見ることが出来なかった。

「それでは、こちらがイベントの景品になります。今後ともがんばってください。」

「ありがとうございます。」

やっとの事で解放される。

「ふう……」

深くため息をついて、いつの間にかいなくなっているシュリ達を探しに行く。

……いた。

さっきの筐体の前だ。

「ごめん、シュリお待た……」

すさまじい形相でシュリがゾンビを倒していた。

その横の筐体ではティアナさんも。

コインが筐体の上に山積みされている。

しばらくして、ふたり同時にクリアする。

ポイントは……14500P前後

チツとふたりは舌打ちすると、コインを入れようとする。

「ティア、シュリティ、もうふたりともやめようよ……!!」

スバルさんが後ろで泣きそうになりながら言うが、ふたりににらまれて撃沈する。

そのままずると時間がたって……四回目になる頃。

「……そうだ」

急にふたりがプラスチック製の銃を置く。

お、やっとやめる気になったか。

「こっちで殺れば・・・フフッ」「

デバイスを同時に展開させる。

「や、やめて〜!!」

「落ち着いてください、ふたりとも!!」

慌ててスバルさんがティアナさんを、私がシュリを押さえ込む。

結局、ふたりの気が収まることなく、他にすることもないので隊舎に帰ることとなった。

） t o b e c o n t i n u e （

## 第14話（後書き）

なんと、アクセス2万を突破しました。

うれしいです！！

ありがとうございます。

今後ともよろしく願います。

第15話(前書き)

休暇二日目です。

## 第15話

### 第15話

休暇二日目。

特に今日も予定がないので私とシュリは部屋でゴロゴロしていた。

「今日はどうする？」

「ゲームセンターに……」

「いかない。」

どうやらまだ昨日のことを忘れられないようだ。

一応他の話題には答えてくれるのだが、今日はどうすると聞くとかならずゲームセンターと返ってくる。

「また昨日みたいに暴走するんでしょう？そんなの駄目。」

「ねえ、暴走なんてしないから……」

「無理だね、昨日の自分を振り返ってから言っよ。」

「うううううう……」

ゴロゴロと床を転がってシュリがこちらに来る。

「そういえばさ、今日はエリオとキャロがお休みだったよね。」

コンソールを開いて、六課のサーバーにアクセス。  
そこから休暇一覧を取りだして確認する。

「どこか一緒に誘ってみる？」

「……そうだね。」



じいじでゴロゴロしていても、体には悪い。  
適当に身を整えると、部屋を出た。

\* \* \* \* \*

六課の隊舎内を探し回ったが、エリオとキヤロは見あたらなかった。

部屋から出たからついでに町へ行こうというわけで現在、町中をぶらぶらと歩いている。

「あ、ほら見てシユリ！あの髪飾り可愛いよ。」

蛙の付いた髪留めを指さす。

「え、どれ？・・・微妙・・・」

「え〜そうかな？・・・シユリはどれがいいと思う？」

「うん・・・これかな？」

シユリが指したのは少し大きな青色のビー玉が付いた髪留めだった。

「・・・ちよつと玉が大きくない？」

「そう？」

そのままいくつ指さした後、何も買わずに外に出る。

「あ、あそこにいるの・・・」

「ん？・・・あ・・・」

シュリが指さした先にはエリオがいた。  
となりにはキャラもいる。

「おーい、キャふお・・・」

声をかけようとすると、シュリに口をふさがれた。

「何考えてるのよ、バカ！」

シュリはそのまま私を物陰に引きずり込む。

「よくふたりを見なさいよ。」

物陰から顔を出してふたりを見る。

ふたりは手をつないで楽しそうに話していた。  
別に特に変なところはないけど・・・

「鈍感！」

私の顔を見てシュリが突っ込んだ。

「だから何が？」

「だから、ふたりは今デート中なの！！」  
「でーと？」

デート。

な、なるほど・・・

「それなら私たちは別の所に・・・」

「ほらアート、キャロ達を見失っちゃう。行くよ!」

あれ?

何で私の手をつかんでキャロ達のいる方に引っ張るの?

「やっぱりシュリもキャロ達に話しかけ・・・」

「静かに!!」

再び物陰に引きずり込まれる。

シュリは時々顔を出しながらキャロ達を見ていた。

「いい、アート? 私たちはキャロ達のデートを出歯亀・・・ゴホ

ン、もとい見守る必要があるの!!」

「そ、そうなの?」

なんかシュリがアツい。

「そうなの!! だから静かについてきなさい!」

「はい・・・」

こうなったらシュリは何も聞かないだろう。

従うのが吉だ。

それに別に人様に迷惑をかけるわけでもないし、いい暇つぶしになりそうだし。

「ほら、また動くよ。」

「はいはい・・・」

シュリに手を引かれて、別の物陰に移動をする。

キャラ口達は洋服店に入っていた。

「どつする？」

店に入るのは危険だ。

周りの目も厳しくなるし、第一隠れるところが少ない。

「もちろん、行くに決まってるわよ。」

シユリは店の中に入っていった。

私も後を追う。

「ねえ、エリオくん。こんなのかな？」

お、いたいた。向こうでキャラ口がエリオに服を見てもらってる。

「うん、似合つと思つよ・・・」

私とシユリは服を選ぶ振りをして、エリオ達を観察する。

「ならこれは？」

おおくしろいワンピースだ。

かなりにあってる。

「うん、可愛いと思つ・・・」

おお、エリオも少し恥ずかしそうだよ。

「えへへ、ほかには……これとこれはどうかな？」

お次は白いシャツに淡いピンクのスカートですか。  
ちよつとスカートが私的には……

「上はいいけど、下は……こっちの方がいいと思うよ。」

おお、エリオ、ナイス！

その薄い水色のスカートは似合いそうだよ。

「ほんとだ……うん、どれにしようかな。」

どうやら今日はキャロの服を見に来たらしいな。

不意に服を引っ張られた。

「何、シュリ。今いいところなんだけど……」

「いいからこっち見なさい。」

シュリの方を向くと……店員さんが怪しそうにこちらを見ていた。

「……」  
「……」  
「……」

こ、これは退散した方が……

目でシュリと会話をすると、愛想笑いをしながら洋服屋から出た。

しばらくして、エリオとキャロが洋服屋から出てきた。ふたりとも紙袋を持っているからそれぞれ選びっこをしたと思われる。

「エリオの服も見たかった。」

シユリが横で地団駄を踏んでいるが、まあスルーしよう。

「あ、ほら、キャロ達がどっか行っちゃう。追いかけるわよ!!」

シユリに手を引かれて再び出歯亀を続ける。

「今度はカフェか。」

こぎれいなお店に入っていくのが見えた。

「そろそろお昼時だからね。私たちも入ろっか・・・て、もういないし。」

いつの間にか喫茶店に入ろうとしている。慌てて追いかけてドアをくぐった。

「いらっしやいませ。お二人でしょうか？」

ウエイトレスさんがにこやかに大きな声で声をかけてくる。

「「「シート!!」」」

その声の大きさに慌ててしまう。

「？」

ウェイトレスさんは首を傾げていたが、

「こちらの席へどうぞ。」

仕事は忘れなかった。

さすがプロ。

・・・アルバイトかもしれないけど。

連れてこられたのはエリオキャラの真後ろの席だった。

仕切りがあつて、ちょうど二人の会話も聞こえやすい位置だ。

「ここいいお店だね。」

「うん、シャーリーさんに教えてもらったかいがあつたね。」

「うん・・・あ、私このハンバーグにする。」

「じゃあ、ボクは・・・スパゲッティとハンバーグとステーキとサラダかな。」

「いつもだけど、すごい量食べるよね。」

「うん、おなががすくからね。あ、注文お願いします。」

ふむふむ、いい雰囲気じゃないか。

「・・・ご注文はいかがいたしましたでしょうか。」

シユリと二人でしきりに張り付いているとウェイトレスさんに白い目で見られた。

「あ、はははは・・・私はアイスコーヒーとこのポテトを。」

「わ、私はオレンジジュースとチョコレートパフェを二つ。」  
「わかりました。」

ウェイトレスさんは注文の確認もせずに奥に引っ込んだ。

「「はあ。」」

思わず深く息をついてしまう。

「絶対変な風に思われたよね。」

「うん。」

なんか自分のしていることがむなしく感じてきた。

チョコレートパフェとドリンクが届いてまもなくエリオ達も料理が届いたようだ。

「うわ〜おいしそう。」

「いただきま〜す。」

カチャカチャと食器のふれあう音が聞こえる。

「そのスパゲッティおいしそうだね。」

「ん？おいしいよ、ちょっと分けてあげる。」

「わあ、ありがとう。」

おお〜またまたいい感じ〜。

「あ、他のも分けてあげる。ステーキに粉ふき芋に人参のグラッ



セとあと野菜。」

「あ、ありがとう・・・でも少し食べきれないから、ハンバーグ半分あげる。」

「うん、そうだね。」

「はい、あ〜ん。」

「えっ・・・」

おおお、こ、これは!?!?

「あ〜〜」

「えと、キャロ?それはちょっと・・・」

「あ〜〜ん。」

「・・・キャロ?」

「あ〜〜ん。」

「・・・(パクッ)」

おお、とうとう食べた!!

食べたよシュリ!!

思わずシュリと手を握り合っついたらに耳を付けていると・・・

「・・・(ジーンッ)」

ウエイトレスさんに白い目で見られた。

しかもかなり怪しそうにこちらを見ている。

や、やばいか?

けど、キャロ達が出ないと見つかる可能性が・・・

「けど、これでシャーリーさんの立ててくれたプランは制覇したかな。」

「多分・・・ちょっと難しかったけど、何とか計画通りに言ったね。」

お、お二人さん。

な、なんか変なこと言わなかったか。

「今度また別のプランをくれるって言ってたよ。」

「楽しみだね、エリオくん。」

「うん、キャロ。」

プ、プランって・・・デートじゃないのかよ!!

「あ、そろそろ帰ろうか。」

「そうだね、帰ってシャーリーさんに報告しないと。」

そのまま二人はカフェを出て行った。

「なんか・・・」

「・・・微妙だった。」

途中まではおもしろかったけど、おちが・・・おちが!!

「私たちも帰ろうか。」

「だね。」

飲み物を飲み干すと伝票を取る。

レジで会計して店を出る。

「・・・またのご来店をお待ちしています。」

ウェイトレスさんの目が最後まで白かった。

\* \* \* \* \*

「調査の方はどうだった。」

暗い部屋に目深くコートを着た男達が四人顔をつきあわせていた。男達を中心では例の防音の魔道具がくるくると回っている。

「はい……一応被験体のデータはとれるんですが、詳しくは……」

一人が紙を三人に渡す。

「……そろそろ次の段階に動くか。」

「そうですね。ついでに詳しいデータもとれるでしょう。」

「作戦は……お前に任せる。」

「了解しました。」

黒い髪の長い男が頭を下げる。

「あと、少しだな。」

「」「」「はい……」「」「」

沈黙が場を支配する。

『Master, A lot of Unknowns Co  
Mining Here!』

デバイスが声を上げる。

「ふむ、お前がたくさんと言うからにはそんなにはそんなにたくさん来るの  
だろう。では、帰るとするか。」

男がグラスを手にする。

「アストラルよ、我が世界に復興と栄光を与え、導きたまえ。」

チーンとグラスを合わせたときだった。

「管理局です！！武器を捨て投降しなさい！！」

金髪の女性・・・フェイトがバルディッシュを展開させた状態で  
突入してきた。

「ふむ、・・・六課のフェイト・T・ハラウンか。」

「とうとう管理局も重い腰を上げたか。」

「まあ、小娘一人に我が宿願は邪魔できんだろっかな。」

「だが、油断はするまい。」

『Master!!』

赤い髪の男の首に掛かった宝石が光る。

「ほう、結界を張ったか。」

「どうやら閉じ込める結界のようですな。」

「我々には意味がないというものを・・・」

「そうですね、ではまた後ほど。」

「待ちなさい!!」

フェイトがバインドで男達を縛ろうとする。  
しかし……

「さらばだ、運命の落とし子よ。」

縛る前に男達は消えた。

「転移魔法!？」

『Target Lost.』

バルディッシュからの報告を聞いて追跡にも失敗したことがわかる。  
フェイトは悔しそうにしたあと、回線を開く。

「捕獲に失敗しました。」

『そうか……まあしょうがねえ、次がんばるとするか。』

「すみませんでした、ナカジマ三佐。」

『いやいや、きにすんな。それよりこっちのモン送るから引き上げてください。』

「了解です。」

ピツと回線を閉じるとフェイトは深く息を吐いた。

「……バルディッシュ、帰ろう。」

『Sir.』

「あ、はやてとナカジマ三佐に報告書書いて送らなきゃ。」

バリアジャケットをとくと、フェイトさんは部屋から出て行った。

}  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
}

第16話(前書き)

休暇三日目前編です。

## 第16話

### 第16話

休暇三日目。

「シユリ、早く!!」

「ちよ、待ちなさいよ。そんな早く行く意味ないんだから!!」

「けど〜。」

「けどもでもなんにもない!!お店は逃げないんだから。」

「髪留めは逃げるかもよ〜。」

「それはあんたの運がなかったと思いなさい。」

「そんなあ〜。」

朝の十時過ぎ、私とシユリは昨日の商店街に来ていた。

実は昨日、夜に一個髪留めのゴムが切れてしまって、新しいのを  
買おうという話になったのだ。

「よし、ついた〜!!」

「ちゃんとしたのを選びなさいよ、アートは時々変なの選ぶから。」

「これのこと?」

早速、ワゴンに入っていた蛙の髪留めを持ち上げる。

「そう、それ。熊とか犬とかなら可愛いのに、何でわざわざ蛙を  
選ぶのか。」

「だって可愛いから。」

「……はあ。」



な、なんかかわいそうなものを見る目で見られた!!

「え〜と、他には・・・あ、これ昨日シユリが言ってたヤツ。」

大きな玉の付いた髪留め。

「ああ、それ可愛いけど・・・やっぱりアートに言われたとおり、少し大きいわ。」

「そう?・・・ああ、シユリはショートだからこんなんじゃないか?」

「そういうこと。アートならどうか。」

私の手からそれを取ると軽く結ってくれる。

「・・・なんか頭を回すと振り回される。」

「そんなに重い?・・・アートの頭が軽いんじゃない?」

「それって私がバカだって言うの!?!」

し、しつれいな!!

「ちがう?」

「・・・違います。」

うわ〜ん、シユリにいじめられた〜。

「ほら、あなたにはこっちの方が似合うよ。」

渡されたのは星形の装飾が付いたゴムだった。

4つの透明な星がそれぞれ、青、黄、紫、水色の四種で彩られて

いる。

しかも間には小さなそんなに音のしない鈴が付いている。

「可愛い!!」

一目で気に入った。

シユリが選んでくれたって言うのもあるけど、それでも形が気に入らないと買おうという気にはならない。

「アートは星形のもが好きだったからね。」

「そうなの?」

記憶にはないことだ。

「そうなの。別れる直前のアートの髪にも星形の髪留めが付いてたし。」

「ふん。」

そうだったんだ。

「ほら、早く買ってきなさい。」

「はい。」

お店の奥に言って、精算を済ます。

「ありがとうございました。」

お店から出て、カフェの方向に向かう。

あ、もちろん昨日とは違うカフェだ。

「アート、ちょっと後ろ向いて止まって。」  
「ん？」

言われたとおり、後ろを向く。  
すると、手に持っていた紙袋を取られ、髪がほどこれる。

「シ、シユリ!？」  
「いいからじっとして。」

髪を時々引つ張られながらもじっとしている。

「ほら、できた。」  
「もういい？」  
「うん、見てみ。」

近くのショーウィンドウに自分の姿を写す。  
髪が少し高い位置で一本にまとめられ、止めているのはさっき買った髪留めだった。

「ほら、これもなくさないように。」

シユリに今まで私の髪をとめていたゴムが入った紙袋を渡される。

「あ、ありがとう。」  
「どういたしまして。」

なんかうれしい。

胸の奥あたりが少しむず痒いけど、それが心を躍らせる。

ついつい歩く先々のショーウィンドウや鏡で自分の姿を確認してしまっ。

自然に足も軽くなる。

「ほら、アート。ちゃんと前向いて歩きなさい。」

「は〜グイッ!〜!」

言われた矢先に誰かにぶつかってしまった。

「ご、ごめんなさい。」

慌てて頭を下げてる。

「アストラル・S・キャロメイか？」

「ふえ？」

名前を呼ばれて顔を上げる。

フードを目深くかぶった男だった。

赤い髪が脇から少し出てる。

「我に同行してもらおう。」

「えっ!？」

腕を捕まれて引つ張られる。

「アート!〜!」

慌ててシユリが手を伸ばして私を捕まえようとするが、タッチの差で間に合わない。

「バインド」

男が呟くと、私の両手両足がバインドにとらわれた。

「動くな!!」

いつの間にか、シュリがデバイスを起動させてこちらを狙っていた。

「……ふっ。」

しかし男は笑っただけだった。

逃げようとするのでシュリが魔力弾を撃つ。

しかし、男の前でシールドに弾かれた。

それどころか、そのまま魔力弾は消えることなくシュリに跳ね返っていく。

「シュリッ！」

思わず叫ぶ。

シュリは冷静に玉を打ち消していた。

「お前はしばらく寝ている。」

「アートッ!!」

みぞおちを殴られて、私の意識は飛んでしまった。

\* \* \* \* \*

アートが、アートが目の前でさらわれてしまった。

「と、とにかく、レイン。なのはさんに緊急通信。」

『OK』

「なのはさん？」

『どうかした？』

「アートが、アートが……」

『いいから落ち着いて。』

すう〜と息を吸って吐く。

「アートが誘拐されました。」

『どこで？』

「ミッドの商店街です。」

『犯人は？』

「すみません……逃しました。」

『そうじゃなくて、特徴。』

「えと、目深くフードをかぶった男で、……赤い髪でした。あ

と、魔法が使えます。」

『赤い髪のフードの男！？』

「ええ。」

『……わかった、追跡は無理だろうからいったん隊舎に戻ってきて。すぐに対応するから。』

「私も探します!!」

『うん、戻ってきてからね。』

「そんな悠長な!!」

『いいから戻ってきなさい。』

「……はい。」

通信を閉じると私はレインを握りしめる。

『Master?』

「……私って肝心なときに無力だよね。」

『……』

「アートのいつも助けられてた。」

初めてあつた日の夜。

地球に行った日の夜。

泣いている私を一生懸命笑わせようとしてくれた。

『Master...』

「……』

『Go back to the base, Master!』

《隊舎に戻りましょう》

「……』

『And, rescue our best friends!』

《親友を助けましょう!》

「……うん、そうだね!」

私はジャケットを解いて走り出す。

後ろから警官が呼んでいる気がしたが、今回は無視!

一刻も早くアートを助けなきゃ!!

待ってて、アート!

\* \* \* \* \*

隊舎に戻ると、つい昨日までの平穩さはどこやらすおまじい慌ただしさに包まれていた。

「あ、シユリテイ。こつち！」

なのはさんが、司令室の前で手を振っていた。  
つれられて中に入る。

「シユリテイが帰ったよ。」

中にははやて隊長やフェイトさん、それと知らない人がいた。  
階級章から陸三佐ということだけはわかる。

「シユリテイ、こちらはナカジマ三佐。」

なのはさんが私の視線に気づいたのか、紹介してくれる。

「初めまして。嬢ちゃんが、シユリテイか？」

頷く。

なんか優しそうな人だ。

「早速だが、誘拐されたときの状況を報告してくれるか。」

私はレインを起動させて赤い髪の人と交戦したときの映像を出す。  
手早く説明する。

「この赤い髪の人、私がこの前交戦した相手の一人だよ。」

フェイトさんがいう。

「この前って？」



「実はこのところ、ミッド首都で家宅不法侵入が多発してて、その調査、及び検挙を行ってただけけど……この前また発見して追っかけてたら、逃げられたの。」

「相手は転移魔法を使うさかいなあ。今回もそのみたいやし。」

全面のスクリーンをはやて隊長が指さす。

「その赤い点がアストラルの現在位置や。」

「わかってるなら、早く追いかけてみましょう!!」

場所を記憶して出て行くことになると、肩をつかまれた。

「待ちなさい。」

「けど!!」

「いいから……ほら見てて。」

渋々見ていると、不意に点が消えた。

「二三秒後に全然違う方向に点が現れる。」

「……転移魔法。」

隊長陣が頷く。

「多分、あと五分もしたら連中のアジトに着くだろう。そしたら、……はやて嬢ちゃん。」

「わかつとります。うちのフォワードメンバー全員で落とすに行きます。」

「頼んだぞ。」

「はい。」

その場にいる全員が、メイン画面の点が止まるのをじっと待っていた。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

## 第17話(前書き)

休暇三日目、後編です。

一応ここら辺で一区切り。

## 第17話

### 第17話

目が覚めると、コンクリートの天井が見えた。

「いっつ〜」。

鳩尾のあたりが痛い。

思わず押さえようとして、手が動かないことに気づいた。  
いや、手だけではない。

足や体さえも動かない。

唯一動く首を起こすと四肢と胴体に鎖が巻き付いていた。  
そこで誘拐されたことを思い出す。

「シユリ・・・」

シユリの顔が頭に思い浮かぶ。

途端、ズキッと頭に痛みが走った。

「か・・・はっ・・・」

頭の痛みが擬似的な全身の痛みに変わる。

身をよじろうとするたびに鎖がジャラジャラいい、私が寝ている  
ベッドが揺れる。

目の前が、天井を、部屋を見ているはずなのに、知らない映像が  
重なっていく。

記憶。

そう、記憶の奔流だ。

すさまじい勢いで頭が開かれる感覚がする。  
私は、記憶の渦に意識を奪われていった。

\* \* \* \* \*

「アストラル・シュリティーム、前に。」

名前を呼ばれて、私とシュリは訓練室の真ん中に立つ。

「訓練開始！！」

途端、シュリはレインを前に出して、球を打ち出す。

私はデバイスを手に持ってないが、魔力弾を一度に三十個ぐらい  
浮かべる。

シュリは不規則に出てくる的に向かって、魔力弾をど真ん中に打  
ち抜く。

「アート、お願い！！」

シュリがカードリッジ交換に入ると同時に私は魔力弾を前に飛ば  
す。

時々、打ち抜いて引けないダミーの的が出てくるのがやかいだ  
が、この射撃訓練は学校の中では好きな方の訓練だ。

シュリがカードリッジ交換を終えたのが見える。

「シュリ、タッチ！」

再びレインが火を噴きはじめる。

その間に、再び私は魔力弾を浮かべていく。  
それを何度か繰り返すと、笛の音と共に出なくなった。

「終了！撃破数200オール、ダミー破壊数0、クリティカルヒ  
ット198、合格！」

「よしっ！」

ハイタッチを交わす。

周りからは賞賛のどよめきがあがる。

「つぎ、アニエルとクラッツ。前へ。」

他の人が呼ばれたので、私たちは後ろに戻る。

「やったね、シュリ！」

「アートもお疲れ様。大分上手くなったよね。」

「この調子でがんばろう！」

拳を付き合わせて、他の人の訓練を見ることにした。

\* \* \* \* \*

「これより、アストラル・シュリティチーム対ミーティ・ファン  
センスチームの訓練試合を行う。」

レインを構えたシュリが前にいた。

私も学校から借りた杖型のデバイスを起動させて、向こうにいる  
ふたりの男子生徒を見る。

「互いに礼！」

頭を下げる。

いよいよ、学年関係なしの学校一番を決める試合の開始だ。

相手は最上級生だから2学年上だけど、・・・私とシユリには関係ない。

「はじめ！！」

合図と共に私は飛び上がった。

建物の10階ぐらいの高さに来ると、魔力弾を大量に浮かべる。

『アート、突貫は早くない？』

シユリが念話で話しかけてきた。

「いいじゃん、さっさと終わらせようよ。」

『いたぶる時間も楽しいよ？』

「大丈夫大丈夫、これくらいじゃあの人達は落ちないよ。」

一方的に念話を着ると、百はあるだろう魔力弾を私の周りにまわって回転させる。

「アストラル、突貫いきま〜す！！」

叫ぶと同時に靴底で一つ爆破を起こす。

一気に加速を付けて、相手めがけて突っ込む。

障害物としておかれているポールを巻き込みながら相手にダメージを与える。

逃げようとする相手を追いかけて、次々と後ろで爆発を起こす。ものの10秒で、会場は更地と化す。

「こら〜！アストラル、あとで罰掃除だ！！」  
「ええ〜〜！！」

教官に怒られてしまった。

そうしているうちに、魔力によって会場が修復されて、元に戻る。

『次、私が攻撃してもいい？』

「うん、よろしくシユリ。」

さっきまで私の攻撃をよけるため、超高々度に逃げていたシユリが、その場からレインを使って狙撃の準備をしていた。

「どうせなら踊るようによけさせない？」

『そんな高度なことをしろと？』

「いいじゃん、おもしろそう。」

『・・・了解』

一息ついていた相手が今度はシユリの弾をよけ始める。私の注文通り、足下を狙って踊らせていた。

上空に逃げようとするふたりを私は魔法弾で牽制。

なかなかおもしろい。

「シユリテイ！お前も罰としてここの片付けをしろ！！」

遊んでいることがばれて、教官が怒鳴ってくる。

『・・・アート。』



恨みの一声が飛んでくる。

私は乾いた笑いでそれを流す。

『さつさと片付けようか。』

「そうだね。何で締めくくる？」

『サンセットフォールがいいな。あれ、めっちゃ派手だから。』

「え、あれくらわせるの？あの人達ごと会場が消滅しちゃうよ。」

『寸止めすれば？それでこの訓練は終わるし。』

「けど、あれバカみたいに魔力食うんだよね。」

『いいじゃんいいじゃん、これが最後の試合だからパーツと盛り上げようよ。』

「はいはい、・・・なら補助のほうよろしく。」

『了解。』

念話を終わると、私は超高々度に飛び上がる。

シユリもさらに高々度に逃げて、結界を張る。

相手は私を追いかけてくるが、シユリの狙撃で地上に釘付けだった。

「いくよ！！」

『了解！』

私は下に杖先を向ける。

すると、魔力が集まって光の弾が出来る。

さらに魔力を込めると、どんどん光球は大きくなっていった。

相手も気づいたのか私に向けて魔力弾を撃ってくるが、シユリにこつこつとく阻まれている。

「シユリ、そろそろバインドかけて。」  
『はいよー!!』

相手に5重のバインドがかかる。  
驚いて、何とか解こうとするが、何せ数が数だ、そうそう解けない。

そうしているうちに、私の魔力弾は直径60mぐらいまでふくれていた。

サンセットフォール・・・日の出落とし。

その名の通り、巨大な魔力弾を一度上空に集め、それを落とす。  
私を使う魔法の中でもずば抜けて魔力を食う高威力広域魔法。  
欠点としては、使ったあとにしばらく私が動けないことぐらいだろうか。

さらに魔力を込めようとすると、手に持っていたデバイスが粉々に砕けた。

「うそー!!」

どうやらガタが来たのを選んでしまったらしい。

「シユリ、デバイスが壊れたからこれくらいでいい?」

『嘘!?壊しちゃったの!?!』

「うん。」

『しょうがない、ならちゃっちゃと落としてしまおう。』

「寸止めしないといけないけどね。」

前に出していた手を下にゆっくり下ろす。  
すると光の弾もゆっくりと落ちていった。

あと相手まで5mと言うところでホイッスルが鳴る。

「終了！アストラル・シュリティチームの勝ち！」  
「よっしゃ〜！！！」

私は光の球を空に投げる。  
上空2000mほどで散らすと、光の雨が降ってきた。

「私たちの勝利を祝って〜！！！」

シュリと共に叫んだ。

下は完成と感激の渦に巻かれていた。

シュリと一緒に降りると、教官がニコニコと近寄ってきた。  
そして、

ガツンツゴツンツ

思いっきり頭を殴られた。

「お前達は！！遊びおつて！！死人が出たらどうする気だ！！」  
がみがみ怒られ続けた。

\* \* \* \* \*

再び目が覚めると、今度は部屋に男達が四人、こちらを見ていた。  
男達は全員目深くフードをかぶっていたが、一人、赤い髪が横から出ている人がいた。

「おい、放せ！！！」

叫ぶと、男達はぼそぼそと話をする。

「……アストラル、自分で抜けてみるがいい。」

赤い髪の男が言う。

「バカ言つな！その間に私をどうする気だ!!」

「どうもせんよ、……すでに処置はすんでおるしあとはお前の  
実力次第だ。」

「処置つて……」

「教えるわけにはいかん。……そうだ、一つ約束しよう。今は  
お前に危害を加えるつもりはない。」

「危害つて……誘拐は危害じゃないのか？」

「……それを言われると痛い。が、それも我らが宿願の  
ためだ。」

「宿願？」

そこに部屋のアラームが鳴った。

「ほう、もう嗅ぎつけたか。ほらアストラル、さっさと抜けてく  
る通い。タイムリミットは六課の連中がここに来るまで。それまで  
にもし私に一撃を入れられたらおとなしく捕まってやるつ。」

これは……挑発している？

「そんな手には乗らない。」

「ならこつしよつ。」

男は机の上にあった宝石……アスターを持ってきた。

「ここに置いておく。もし、六課の連中がここに来るまでにお前がその鎖を抜けられなければ破壊する。」

そ、そんな!?

「ほら、どうした。」

くそ、やるしかないか。

どうせこんな状況は学校の訓練で何度も経験した!!

「はーっ!!」

両手に魔力を纏わせ、薄い刃状にして思いっきり持ち上げる。

鎖はいとも簡単に切れた。

続いて手に魔力の刃を浮かべて両足、胴体の鎖を断ち切る。

すべてを終えると、そのままナイフを男に投擲した。

パリンッ

しかし、男からかなり離れたところでナイフは何かにつづかって消えた。

「・・・結界か。」

音からしてただの防御結界だと思われる。

しかし、それも割れた。

なら次は仕留める。

魔力弾を空中に浮かべると放った。

しかし、今度もまた男の前で何かにぶつかって消えた。

また結界だ。

それもさつきより頑丈な。

なら、結界破壊の魔法を使うまでだ。

どうせ、そのあとにもいくつか結界が張ってありそうだ。

「ニードルブレーカー。」

呟いて、手に魔力を練っていく。

デバイスがないと少し心許ない技だが、出来ないこともない。

身長にあたりを警戒しながらゆっくりと練っていく。

通常であれば手のひら大の魔力弾になる魔力量を小指より短く、針のように細く圧縮する。

「シユート!!」

それを思いつきり投げた。

まっすぐニードルブレーカーが飛んでいき、結界に当たる・・・

と思っただけなのに穴を開けて飛んでいく。

結界は穴が開くと基本壊れるものだ。

だから針ほどの穴さえ開けば、壊れるのも時間の問題だ。

ニードルブレーカーはそのまま進んでいき、男の目の前で止まった。

「上達したな。」

男が呟くと同時に針が進んできたところにあったと思われる結界が次々と割れる割れる。

・・・で、何枚あったんだよ。

「そろそろお別れだ。」

男がアスターを投げってくる。  
慌ててキャッチして、状態を見る。  
異常はなさそうだ。

「アスター、セットアップ！」

『Standby ready, set up.』

いつも通り起動して、杖状のデバイスになる。

ほっと息をついた途端、ドアがドカンと開けられた。

なのはさんだった。

「武器を捨て、投降しなさい！！！」

ガシャンとレイジングハートが男達に向けられる。

「アストラル、時間切れだ。いずれまたどこかで。」

「逃がしません、バインド！！！」

なのはさんが叫ぶが、何もおこらなかつた。

『Master!』

「AMF!？」

どうやらなのはさんの周辺だけにAMFが展開されているらしい。  
そういつている間に男達は消えた。

「アストラル、無事!？」

なのはさんが駆け寄って、私を抱きしめる。

「はい、平気です。」

「何もされなかった？」

「……………」

「何でそこで黙るの!？」

いや、何かされたといえはされたし、何もされてないと言えは、  
されてない。

「とにかく無事みたいだね。良かった〜。」

しばらくすると、シュリも駆け込んできて、私を抱きしめた。  
なんかかなり久しぶりに人肌の暖かさを実感したように感じ、  
とても安心した。

その後、結局この場からは何もわからず、隊舎に引き上げて報告  
書を大量に書く羽目に陥った。

〈 to be continue 〉



## 第17話（後書き）

明日の更新は私の都合で午後・・・三時過ぎになる予定です。すみません。

## 第18話

### 第18話

「シユリ、そっちに2体行った。」

『了解!』

数秒後、ドカ〜ンというすさまじい音があたりに響く。

『全機撃破を確認。ウィング隊は帰投してください。』

「了解!!」

破片の近くにマーカーを落としているシユリに近づく。

「お疲れ、シユリ。」

「アートも、おつかれ。」

「さつさと帰ってお風呂にでも入りますか。」

「そうだね、夜も遅いから。」

時計はすでに8時を回っている。

夜に突然、ガジェットが出現して、隊長陣、及びスターズ・ライ  
トニングが不在で仕方なく私とシユリが非番なのに出撃となった。

「けど最近ちょっと多いよね。」

「そうだね、まるでスターズとライトニングの不在を狙ったみた  
い。」

ここ最近、ガジェットの出現率が上がっており、中でも別の事件  
でスターズとライトニングがいない場合が多い。

「なんか作為的なものを感じる。」

シユリは報告書のフォームを浮かべながら呟く。

「……あの男達なのかな。」

「そうかもね……けど証拠もない。」

シユリはさつさと報告書を作り始めた。

しばらくあたりにキー音だけが響く。

上を見ると、次が二つ、綺麗に浮いていた。

「両方とも三日月か。」

なんか不思議な気がした。

私のいたシルベンスには月はやはり一つだけだった。

それにこんなに大きくもない。

「行くよアート。」

いつの間にか気負えたのかシユリは先を歩いていた。

「待つてよ。」

バリアジャケットをとくとシユリを追いかけた。

\* \* \* \* \*

「学校に転入、ですか？」

「うん、そうや。」

帰投すると、司令室でいきなりはやて隊長にそう言われた。

「転入するんはミッドの外れにある“私立カラミヤ小学校”で、そこにあさってから通ってもらう。」

ピツとはやて隊長が一つの画面を浮かべる。

「もちろん、ただ入学するんやなくて、任務やから。この男、ボム・レスティック・アリナっていうんやけど凶悪な爆弾魔でな。どうやらこの学校に爆弾を25個も仕掛けたらしいんや。」

「25個!？」

「そうや、で、そのうちの二十個までは何とか見つけたんやけど・・・なあ。」

言いたいことはわかった。

つまり、私たちがこの学園に入って爆弾を処理してこいと言っただけだ。

「生徒の避難は出来ないんですか？」

シユリがまっとうなことを言う。  
というか、そんなの当たり前だ。

「無理や。犯行予告に書かれとったんやけど、無理矢理学校を休校にすると爆発させるって。」

「けど、まだ今なら全員下校してますから例え爆発しても・・・」

シユリが突っ込んでいく。  
まあ、当たり前だ。  
私でもそういう。

「そうやけど・・・あそこは私立だからなあ。学園長が拒否したらしい。それに見つかった20個の中にはミッドの市街地まで一緒にぶっ飛ばすことの出来る爆弾があったらしい。」

「・・・他に道はないんですね。」

うん、と頷かれる。

「わかりました。」

「やってみます。」

「よろしく頼むな。」

\* \* \* \* \*

支給された制服を着る。

「シユリ！似合ってるよ。」

赤を基色にした制服だった。

淡い白に近いピンクのセーラーに赤いセーラーカラー。

オレンジと白のラインが綺麗に通っていて、アクセントをくれる。

下も赤いスカートで膝よりも裾が少し高い。

リボンは紫に近い紺色だ。

「アートも。これなら年相応に見えるね。」

「だね。実際私たち本当は小学校に通ってなきゃいけない歳だから。」

「私はいんだよ。飛び級で高校まで受けてるから。」

「あゝ、確かにそうだったね。」

アートはその頭脳を生かして一気に飛び級。

小学校では一年、中学校でも一年、高校も一年で卒業した。

そのあとは自分がしたいことがあるとかでミッドチルダに飛んでいったんだっけ。

「なに、アート記憶が戻ったの!？」

「え、話してなかったっけ? 少しかけど一昨日の誘拐事件の時に記憶が戻ったんだよ。」

「よかったじゃない。」

「うん。」

「アストラル、シュリテイ、そろそろ登校の時間だよ。」

「は〜い。」

なのはさんが声をかけてくる。

なんか私たちのお母さんみたいだ。

「それで任務だけど・・・爆弾を5個見つければいいんだよね。」

「そのはず。」

登校の道のりをシュリと話しながら歩く。

天気は晴れ。とっても気持ちのいい初日だ。

「それならシュリの探査魔法でちゃっちゃと見つけた方が早くない?」

「うーん、多分私が使える探査魔法でも無理じゃないかなあ。」  
「なんで？ シュリって探査も得意だったでしょ？」  
「そうだけど・・・あのアコース査察官でも見つけられなかったみたいだから。」

「そうなの！？ なら私たちには無理じゃない？」

アコース査察官は”無限の獵犬”ウンエントリヒ・ヤークトのレアスキルを持っていて、こういう探査にはうってつけの人物だ。  
そんなすごい人に無理なら私たちにも無理な気がする。

「ま、がんばるしかないってことでしょ。」

「だね、カウントダウンは一週間後。授業中だろうがなんだろうが探すしかないね。」

「いや、授業はちゃんと受けないと。はやて隊長にも言われたでしょ。」

「あ……………」

そういえば言ってたなあ。

「授業はちゃんと受けて、任務やけどしつかり学園生活を楽しくてもしも授業サボったりしたら、なのはちゃんにお仕置きしてもらおうから。」って。

うう……、嫌なこと思い出した。

「あ、ほら。学校見えてきたよ。」

綺麗な学校だった。

煉瓦造りの壁に脇にある花壇。  
かなり広そうだ。

「まずは職員室かな。」

「いや、事務室でしょ。手続きを済ませなきゃ。」  
「そうだったね。」

私立独特のランドセルでない制鞆をからいなおして校舎に入っ  
ていった。

\* \* \* \* \*

「今日から皆と一緒に勉強するお友達をふたり紹介するね。」  
「アストラル・S・キャロメイです。よろしく願います。」  
「シユリテイ・S・ウォルテイです。よろしく願います。」

パチパチと拍手される。

「ならふたりは、あの窓際の席二つに座ってね。」  
「はい。」

言われた席に座る。  
ちようどグラウンドと花壇が一望できる席だった。

「はい、今日の連絡はこれだけ。挨拶。」  
「起立、気をつけ、礼。」

ありがとうございました。と言う声が響く。  
先生がそのまま教室を出て行くと同時に、私たちは囲まれた。

「ねえねえ、ふたりの好きな食べ物は何？」  
「どこに住んでるの？」



「こんな時期の転校って珍しいね。どうしてなの？」  
「趣味とかは何？」

わいわいがやがやと矢継ぎ早に質問される。  
何とか答えようとするが、さすがに覚えきれない。

「ごらくー！みんな、ふたりが困ってるでしょ。少しは考えなさいよー！」

シヨートカットの子が声を上げた。

シユリの隣に座っていた子だ。

「あ、私はエリカ・ノステイね。」

「エリカちゃんね。私はシユリテイよ、よろしく。」

「私はアストラル、よろしくね、エリカちゃん。」

「あ、ずるいぞエリカ。私だって自己紹介したかったのに。」

「抜け駆けだ、抜け駆け。」

エリカちゃんが先に自己紹介をすると、それをうらやむ人が出た。

「シャラアップ。みんながふたりをいじめるのが悪い。」

「いじめてなんかねえよ。ただ質問してただけだろう。」

「ならその質問をどうぞ。」

エリカちゃん、このクラスではリーダー的存在なんだな。  
みんなを上手い具合にまとめるよ。

「じゃあ、ふたりの好きな食べ物は何なんだ？」

「えと、私は桃かな。シユリは？」

「果物系ならなしが好き。料理全般ならハンバーグだね。」

「得意科目は？」

「体育。一応勉強も出来るはずだけど、体を動かすのが好きだね。」

「私は算数と理科。」

結局その休み時間は質問攻めで終わってしまった。

まあ、予想道理だ。

とはいえ、次の時間は校内を見て回らないと、任務が果たせないからな。

『次の休みは校内を歩くんでしょう？』

『うん、何とか言い訳しないと・・・何かない？』

『・・・トイレ？』

『付いてこられるのが落ちね。』

『なら転校手続きは？』

『今朝したじゃん。』

『まだあるってことにすれば？』

『・・・それで行こう。』

念話でシユリと雑談しながら授業を受けた。

一応高校までの知識があるシユリはもちろん、私にも簡単な授業でとても暇だったの言うまでもない。

\* \* \* \* \*

授業を四つ受け、お昼休みになった。

「ふたりはお弁当？」

すっかり仲良くなってしまったエリカちゃん聞いてくる。

「うん、お母さんが作ってくれたから。」

ちなみにここでのお母さんとはフェイトさんのことだ。

「へえ、なら屋上で食べようよ。」

「うん、いいよ。シュリもいいでしょ？」

「うん。」

弁当袋と水筒を持って屋上に行く。

「それにしても大きいよね。」

「なにが？」

「校舎。小学校なのに高校並みの広さがあるよ。」

「あ、それ私も思った。花壇とかプールとかはわかるけど、畑だバラ園だ温室だってあるのはすごいよね。」

考えたらすごい。

「理科室だって二つあるし、家庭科室も二つあったよね。」

パンフレットを昨日熟読したから覚えている。

「そうだよね。私は他の学校なんて見たことないけど、二人がそ  
ういうならやっぱりそうなんだろうね。」

エリカちゃんも同意する。

「さて、早速食べますか。」  
「いったただつきまゝす。」

屋上に設置されたベンチに座ってたべる。

時々おかずを交換し合って、楽しく過ごした。  
食べ終わると、学校案内をエリカちゃんがしてくれることになった。

「まず南棟からね。1階だけど、ここは先生達が使っ部屋が多いよ。職員室に事務室、校長室に理事長室、印刷室に生徒指導室、あと保健室もここね。」

一通り歩くと、階段を上る。

「2階は1年生と2年生の教室。一応1〜3組までで、私たちと同じ組数だよ。3階が3・4年生の教室で、4階が5・6年生の教室。面倒だからこの上は省くね。」

渡り廊下を通って一度1階に下りる。

「渡り廊下は1階と2階と3階にあるから。で、北棟がここね。1階が美術室と家庭科室A・B、2階が図書室と理科室A。3階が理科室Bと歴史資料室。4階が音楽室A・Bだよ。」

4階まで昇りきるとさらに上があった。

「で、この上は屋上。ただし、立ち入り禁止ね。南棟の屋上はさつきお弁当食べたように入ってもいいけど、それも昼休みだけだから。」

へへ、こっちの屋上は入れないのか。

「ところで、さっきから廊下のおちこちに段ボールやらが置いてあるけど、あれは？」

シユリが廊下の一端を指す。

確かに歩いてくる途中にも色々ものが置いてあった。

「ああ、二人は知らないんだよね。この学校、一週間後が創立記念日なの。」

「創立記念日……」

一週間後か。

ちようど爆弾のタイムリミットと重なる。

犯人はわざとこれに合わせたってわけか。

「それで創立記念日にはお祭りがあってね。クラスごとに出し物を出してみんなで遊ぶの。……高校の文化祭みたいなものかな。」

へへ、文化祭ね。

普通小学校でそんなことするか？

「あ、そろそろ戻らないと、5時間目が始まる。」

時計を見ると、あと五分ほどで予鈴が鳴る時間だった。

「もどろつか。」

「うん。」

結局初日は爆弾を見つけることはかなわなかった。

}  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
}

## 第19話(前書き)

明日は更新を行いません。  
すみません。

## 第19話

### 第19話

学校二日目。

「よし、今から五分時間取るから教科書の問2の問題をといて。あとで答えを黒板に書いてもらうからな。」

ただいま2限目も算数の時間。

みんなは加減乗除を組み合わせた式を一生懸命解いていた。そして私は・・・

「・・・・・・・・」

睡魔と絶賛格闘中だった。

一日目はシユリと会話で会話をしている全然眠くならなかったのだが、二日目にもなると、ずっとしゃべることなどなくなる。

ちなみにシユリは・・・

「ZZZ・・・・・・・・」

すでに負けていた。

おいシユリ、まだ始まってから十分も経ってないぞ。

そんなんで負けてどうする！

気合いが足りん、気合いが！！

「・・・・・・・・」



とはいえ、眠いなあ。

窓際の席つてこの季節、気持ちいいんだよなあ。

廊下側は少し肌寒いけど、窓から秋の日差しがさんと差して  
いて、私を睡眠へ誘って……

いかんいかん、負けられないぞ。

「……………」

ね、眠い。

もうすでに問題も解き終わって、ひたすら眠い。

というか、このぐらいの式さっさと出来ないと管理局になんて勤  
められないからなあ。

ああ、気持ちのいい風が吹いてきたなあ。

梢の音も……なんか……耳に心地いい……………

「……………ではこの問題をアストラル、解いてみる。」

「ふああい!？」

い、いかん、寝ていた。

授業聞いてない。

「おいおい、寝てたのか?この問題だ、解けるか?」

算数の先生優しくして良かった。

ニコニコと笑って流してくれてるよ。

えっと、黒板の問題だな。

$(16 + 21) \times 6 \div 3$ だから……74か。

「74です。」

「正解だ。……出来れば黒板に書いてほしかったが、まあいいか。」

再び先生が説明に入る。

しかし、いつの間にも眠ってしまったんだ。

気づいたら寝てたぞ。

シユリは……

「ZZZ……」

相変わらずですか。

ま、今度は寝ないように気をつけますか。

とはいえ、まあ……暇だなあ。

授業がこれほど退屈だとは、思いもよらなかった。

いいや、外でも眺めてよう。

そとでも……ああ、きれい……だなあ。……

「アストラル、起きて！授業終わったよ。」

誰かに肩を揺さぶられて目が覚めた。

「ほら、シユリテイも。次は体育だよ。」

体育……体育！！

「やった！体育だ〜。」

一発で目が覚めた。

横ではシュリティがエリカちゃんにまだ揺すられていた。

「ほら、シュリ！次は体育だよ、起きてー!!」

私も参加する。

必死に揺さぶってやっとの事でシュリは目を覚ました。

「おはよう、アート。そしてお休み。」

「こらこら、寝るなよ。」

「だつて〜。」

「次は体育だよ。」

「・・・めんどい。」

エリカちゃんが、シュリの頭の上に体操着をのせた。

「早く着替えよう。」

「・・・はい。」

有無を言わせない目だった。

「今日は何するの?」

「えとね、たしか体力測定だったと思う。」

「この時期に?」

エリカちゃんの答えに思わずシュリが聞き返していた。普通体力測定というものは春の初めの頃にするものだ。こんな時期にするなんて聞いたことがない。

「先生によると、創立記念日の一ヶ月後に運動会があつて、その出場選手を決めるのに参考にするらしいよ。」

「なるほど・・・かなり本格的だな。」

運動会の選手決めなんて自薦と他薦ばかりだと思つていた。

「いいじゃん、楽だから。それに二人はまだはかったことないんだし。」

「そうだね。」

運動会には出場できないと思うけど。

「全員集合！！」

先生がグラウンドの中心で叫んでいた。  
慌ててみんなと並ぶ。

「今日は毎年恒例の体力測定を行う。運動会の選手名簿の参考にするからみんながんばるように。」

「ooooooooooはいooooooooooooo」

「内容は、25m走、幅跳び、走り幅跳び、ソフトボール投げ、反復横跳び、魔力測定だ。すべてが終わったら休憩か、あそこで魔法でも遊んでくれ。」

先生が指さしたのは小さなドームのような所だった。

エリカちゃんによると、中は対魔法用の壁で覆われていて、ちょっとやそつとじゃ壊れないらしい。

「それでは各自解散。」

先生は25m走の方に歩いていった。

「シユリ、どこに行く？」

どこに行くのか、木の下に向かっていているシユリに聞く。

「ん？サボる。」

おいおい、駄目だろう。

「だって、面倒じゃん。みんなと張り合ってもしょうがないし。」

「そうだけど・・・なら私と張り合おうよ。」

「いや、あんたとはいつも張り合ってるから。」

訓練のことを言っているのだろう。

「ほら、アストラルとシユリテイ、25m走から行こう。」

エリカちゃんがシユリの手を取って25mの方に引つ張る。

「いや、私はサボるから・・・」

「だーめ、そんなの私が許さない。ほらしゃきしゃき歩く。」

「うわーん・・・」

シユリは途中から引きずられていった。

「それでは、位置について。」

エリカちゃんが笛を持って指揮する。

「ねえシユリ。」

「何、アート。」

「そんなに嫌ならさ、私と賭けしない？」

「内容は？」

「全部の結果を通して、負けた方が勝った方にチョコレートパフエをおごる。」

「乗った。」

「よゝい、」

腰を浮かせて、クラウチングスタートの踏み出す体勢を作る。

「ドンッ！」

思いつきりスタートの器具を蹴って一步を踏み出す。

私とシユリにとって、25mはあっという間だ。

だから最初の一步で勝負が決まる。

より早く、より遠くに足をおいた者の勝ちだ。

あっという間にゴールにたどり着く。

ほぼ同時にゴールしたが、

「負けた〜〜！！！」

私は思わず叫んだ。

半歩、いや四分の一步、間に合わなかった。

「甘い甘い、この私にチョコパフェをかけるなんて、百年早いわ。」

うれしそうにシュリが言う。

「いやいや、まだまだこれからだ。すべての競技で勝ちの多い方がおごるんだから。」

「負けないから。」

「こつちこそ。」

「アストラル、シュリテイ、二人ともすごい！！タイムが5秒台なんて、人間じゃないよ！！」

エリカちゃんが私たちのタイムを見て歓声を上げる。周りもどよめきに包まれていた。

『やば、本気出してしまったよ。』

『チヨコパフェかかってるんだからしょうがないじゃん。』

『とは言っても、まずくない？』

『いいじゃん、ついでのこのまま最高記録マークしていこう。』

「次は幅跳びと走り幅跳びね。」

いつの間に計り終えたのか、念話で話している間にエリカちゃんがやってきた。

さっきまでそこで歓声を上げていたのに、もう計り終えてるなんて・・・何やつ。

そんな疑問をおくびにも出さずについて行く。

シュリもチヨコパフェが効いてるのか逃げなかった。

「次の人、どうぞ。」

砂場の前で並んでいると順番が来た。

「アート、次はより4 mに近い方が勝ちにしない？」

「・・・なるほど、飛びすぎを制限するためね。」

「じゃ、いくよ。」

「うん。」

「「いつせーのーがーせっ!！」」

目視で4 mと思われるところに思いつきりジャンプする。  
地面に足が付くと二人ともほぼ同距離だ。

「シュリテイ、4 m 3 5。アストラル、4 m 1 0。」

「よっしゃ〜!！」

これで同点だ。

「くっそ〜!！」

横でシュリは悔しそうに地団駄を踏んでいた。

「次二人は走り幅跳びね。私はまだだから先行つてて。」

エリカちゃんにそういわれて、二人で走り幅跳びの方に行く。

「次の人!！」

「お、エリカちゃんの番だ。」

エリカちゃんがびよんと跳ぶ。  
なんかかわいらしい。

「エリカ、2 m 1 5。」



お、まずまずじゃね？

「次、アストラル、シユリテイ」

「はい」

名前を呼ばれてスタート位置に付く。

「制限は？」

「うん・・・さっきの倍の8mでぶっ」

「りょーかい。」

「はじめ！」

号令と共に軽く助走を付ける。

そのままジャンプ位置で飛び、適当なところで足を付ける。  
シユリとまたまた似たような位置だった。

「シユリテイ、7m96。アストラル、8m20。」

「うわあ〜」

くっそー飛びすぎた。

「よし、チヨコパフェにまた一歩。」

横でシユリがガッツポーズ。

先生は私の方が遠く飛んだのにシユリが喜び私がうなだれているのを見て、首を傾げていた。

次は反復横跳びだった。

「今度は制限なしでいいよね。」

「OK、ならより多い方が勝ちね。」

「よ〜い、どん〜!」

パツパツパツパツと20秒の制限時間に一生懸命足を動かす。

ピーツと言う笛と共にその場に倒れる。

「かつた〜〜!」

シユリ25回、私26回でぎりぎり勝った。

「うう〜チョコパフェが〜。」

シユリがうなっている。

「まだまだよの、お主は。」

思わずからかうと、ガオーと飛びかかれた。

「二人ともすごいよね。私なんかと全然記録が違うよ。」

エリカちゃんが私の記録カードを見て呟く。

「何か訓練でも受けたの?」

「いや〜、ねえシユリ。」

「うん、まあ・・・。」

私たちのことはヒミツだ。  
ばれてはいけない。」

「まあいいや、次、ソフトボール行こう。」  
「よし、行こう！」

エリカちゃんと手をつないでソフトボールの方に向かった。

「ではエリカ、いつきまゝす！！！」

今度はエリカちゃんが先にボールを投げた。  
ポーンとボールは飛び、ボトツと落ちる。

「エリカ、16m20。」

えへへ〜とうれしそうにエリカちゃんが帰ってくる。

「どうしたの？」

「うん、この前よりも1mも記録が伸びたの。」

「へ〜。よかったね。」

「うん。」

どうやらこれまでの所を見ると、エリカちゃんは体育の記録は平均を行っているようだ。

私たちは異常なんだ。

「今度は制限も受けようね。」

「そうだね・・・なら30mにより近い方が勝ちでいい？」

「よし、乗った!!」

「アストラル。」

「はい。」

名前を呼ばれたので投球ゾーンの円に入る。

「いつきまゝす!!」。

30mのラインが引かれた地点をめがけて思いっきり投げる。  
ボールは予想通りの軌道を描き、オンラインで落ちる。

「アストラル、30m2」

「よし!!」

これなら勝ったも同然だ。

「次、シュリテイ。」

「はい!!」

シュリと場所を交替する。

「いきます!!」

シュリが投げると、ボールは私と似たような軌跡を描き、オンラインで落ちた。

ちよつとやばいか。

「シュリテイ、29m98。」

・・・同点。

シュリが不満そうにこちらを見ていた。

ここまでお互い2勝2敗1引き分け。

次は私の勝ちが目に見えている。

魔力量がものをいうからね。

「・・・悪いね。」

ほほえむと、シュリティは悔しそうこちらをみていた。

魔力測定。

これは機械に魔力を流して、純粋な魔力量を量る装置だ。

「次、アストラル、シュリティ。」

名前を呼ばれて前に行く。

棒のような物を渡され、それを握る。

「はじめ。」

私は一気に魔力を流し込んだ。

ボカンッ

ボカンッ

「「えっ・・・」」

二人の棒がつながれた機械から煙が上がった。

メーターを見るととうに振り切れている。

その上限値を見て・・・

『やばっ!!!』

『やつちやった!!!』

焦った。

これは小学校用の計量器で、上限値が六課においてあるものの4分の1しかない。

つまり、あまりの魔力量に計測機器が壊れたのだ。

結局、二人は記録不能で、体力測定を終わった。

「ふま〜ん。」

シュリティがドームに向かいながらぼやく。

「しょうがないじゃん、勝負が着かなかったんだから。」

「けどさあ、チョコパフェが消えたんだよ!？」

よっぱどチョコパフェが食べたらしい。

何とかならないか・・・けど私はゲームに負けてないのにおごりたくはない。

「そっだ、あそこで勝負しない?」

ドームを指さしながら言う。

「あそこでターゲットの撃ち合いしようよ。より点数の大きい方が勝ち。」

「なるほど。それなら負けない・・・けどターゲットなんてあ

るの？」

「ありますよ。シューティング用の動くのが。」

「お、いいねえ、やりがいがある。」

「けど難しいですよ。なかなか当たりませんし。」

「大丈夫大丈夫、何とかなるよ。」

三人はドームの中に入った。

） to be continue ）

第19話（後書き）

明日は諸事情により投稿ができません。  
すみません。



## 第20話（前書き）

なんか微妙なできです。

自分的にはつなぎの話なので気にせずスルーしてください。

今後の投稿なんですけど、今日で夏休みも終わり、私自身が学校に通わなくてはならないのでかなり頻度が落ちます。集に三回程度の更新を目指します。

よろしく願います。

## 第20話

### 第20話

ドームの中はかなり広がった。

「シューティングをしたいんですよ。」

端の方にエリカちゃんは私たちを連れて行く。

そして、機械の一つにさわった。

「おおー!」

「すごい!」

壁から5mほどのところから仕切りが出て、周りと隔絶した。さらにエリカちゃんは何かを機械で操作している。

「はい、準備できました。」

「よし、ならさっそく……」

「やりますか。」

先にやる順番はじゃんけんで決めた。

結果、私からやることになった。

「その白いラインサークルの中からしか撃ってはいけません。弾種に制限はなるべく訓練弾を使ってください。それで十分、的は破壊できるので。」

「オーケーオーケー。」

「なら準備はいいですか?」

私は深呼吸をすると、十個ほど空中に弾を浮かべた。

「いいよ。」

「スタート!!」

エリカちゃんの声とともに的が出た。

「はあっ!!」

小手調べにまず普通に弾をコントロールして当てる。  
普通に碎けた。

「楽勝楽勝！」

次はさっきよりも近いところに的が出た。  
なるほど、幅がないから前後させて距離感を狂わせるのか。  
しかし、そんなの私には関係ない。

「たあ!!」

あっさり碎ける。

「次からは難しくなりますよ。」

十個ほどの弾を壊したところでエリカちゃんが声をかけてきた。

「望むところ!!」

再び的が出てきた。

しかも今度は動いている。

「ていやあ！」

ホーミングをかけた的を追跡、的を砕け散らせる。  
おお！と声が上がった。

「まだまだ！」

次々と現れる的を確実に壊していく。

「さらにレベルがアップします。」

エリカちゃんが撃破数を見ていう。

現在の撃破数は50個だった。  
再び的が出てきた。

今度はさっきよりゆっくりと動いている。

楽勝じゃん。

そう思って、弾を普通に当てる。

・・・が、よけられた。

「はい!？」

今のが身をよじって弾を避けた気が・・・  
しかもぎりぎり当たる直前で。

「ず、ずるい……！」

もう一度、弾を向かわせる。

そして、当たる直前でまた避けようとする的に今度はホーミングをかけた。

しかし、ホーミングをかけたところで、さらに避ける。

「このっ！このっ！このっ！」

ぜ、絶対あり得ない。

というか、こんなの射撃でも何でもない。

こ、こっとなつたら・・・

「面倒だ、一気に焼き尽くしてくれる！！」

手のひらを前に突き出すと、魔力を集中させる。

円を思い浮かべるようにして、魔力を練る。

「てやあー！」

魔力弾が直径4mほどの円盤になったところで思いっきり投げつけた。

的は逃げようとするが、逃げ場もなく、あっさり碎けた。

「ふん、どんなもんだい。」

「エコッ！」

「大人げない・・・」

シユリとエリカちゃんに何か言われるが、まあ気にしない。

結局最後までそれでの的を壊す。

ぴびっーという音の的が出るのをやめた。

「終わりです、アストラル。得点は・・・105個です。」

「おお」と歓声上がる。

「シユリ、タッチ交代。」

「ふん、絶対負けないから。」

シユリが円の中に入った。

「始めます。」

「いいよ。」

「なら、スタート！」

さっきと同じようにまず静止した的が出てくる。

シユリは手を銃のような形にすると、指先を的に向けて撃つ。

魔力弾が指先から出て、かなりの速度で的に当たる。

「はい。」

さっきの私とは段違いのスピードだ。

おかげで早10個打ち終わって、動く的に次々と当てていっている。

・・・とはいえ、その的までは簡単なんだけどなあ。

「次、レベルアップです。」

50個撃ったところでエリカちゃんが声をかける。

シユリはさっきまで使っていなかった左手も銃の形にすると、的に向けて撃ちだした。

同時に二つの弾が、ジグザグに動いていく。

そして的に当たる直前、

「これも避けた!？」

的がひよいと避けた。

シユリはかなり驚いているようだ。

いや、私も驚いたけど・・・

普通あの弾は避けようがない。

動きが不規則だし、弾の間を避けるにはかなりの瞬発力と判断力がある。

「これならどうだ。」

シユリは先ほどと同じように二発同時に弾を撃つ。

再び的が避ける。

っと思つたら、弾がブーメランのように軌道を戻ってきた。

流石に的も避けられず、砕け散る。

「テクニック勝ちっ!」

・・・それって力押しの私に対する当てつけか？

結局シユリは器用に弾を操って確実に的を壊していった。

ピーッと音が鳴る。

「シユリテイの得点は108個。」

「ま、まけた・・・」

これなら負けなと思ったのに・・・

流石現役ガンナーか。

「アートっ！チョコパフエ忘れずにね。」

にこにこことシユリが笑っている。

くく、くやしい！！

「ああ〜！！！」

思いつきり叫びながら床に寝そべった。

天井もかなり高く、明かりもかなり遠くに見える。

「ん？」

不意に、赤いものが目に入った。

「なんだ？」

体を起こしてよくよく見る。

明かりのすぐ横に・・・四角い箱？

ま、まさか・・・

『シユリっ！』

『何？』

『爆弾！！！！』

『嘘！！！！』

私が指さした方向をシユリが見る。

『・・・とにかく、授業が終わってからにしようか。』



『だね。ここじゃあ解体もできないし。』  
『一応結界でも張っとく?』  
『そうしよう。』

さつと結界を張って、誰も触れられないようにする。

「みんな、集合!」

「「「はい」「」」

先生が遠くで呼んでいた。

時計を見ると、授業が終わる時間だ。

「それでは終わります。」

「ありがとうございます。」

皆は頭を下げると、教室にかけていった。

先生もこの場からいなくなり、シユリと私だけになる。

エリカちゃんには先に帰っておいてもらった。

「はじめますか。」

「だね。」

浮遊魔法を自分にかけて、爆弾に近づく。

そつと手にとって、地面に置く。

魔法でねじをあけ、中を確認。

「これなら楽勝かな?」

資料に載っていた爆弾とほぼ作りが同じだ。

「シユリ、まずその赤いコードを切つて。」  
「これね。」

シユリが手に魔力の刃をつけてコードを切断していく。

「後ラスト2ね。次はその赤に青ラインが入ったコード。」

「ほいよ。」

「で、最後にその白いコードを切つて終わり。」

「終了！」

画面が消え、爆弾の解体が終わる。

授業が終わってからすでに5分が経過していた。

「なのはさん、今いいですか？」

隊舎に連絡を開く。

『うん、いいよ。どうかした？』

「爆弾を1個無事処理しました。解体したのはどうしますか？」

『うん・・・うちに持つて帰ってきて。火薬には封印をかけて』

動かないように、基盤やコードはそのままでも平気ですよ。』

「了解！なら今日中に隊舎に持つて行きます。」

『うん、お願いね。』

通信を切る。

「というわけで、シユリが封印する？」

「もうした。」

さいですか。

「なら帰ろう。」

「だね。エリカちゃん心配してるかも。」

「だね。」

封印した火薬と基盤をアスターの中に入れて帰る。

ようやく1個爆弾を解体して、二人は一段落ついた。

「あ、アート。チョコパフェ忘れないでね。」

「くそ、せつかく話をそらしたのに!!!」

笑いあいながら校舎に入ってしまった。

） to be continue

## 第20話（後書き）

今後の投稿なんです、今日で夏休みも終わり、私自身が学校に通わなくてはならないのでかなり頻度が落ちます。集に三回程度の更新を目指します。

よろしくお願いします。

## 第21話(前書き)

一日ぶりの投稿です。今回は少ないです。

## 第21話

### 第21話

学校に通い始めて三日目。

タイムリミットまであと三日。

「ようやっと、一個終わりか。」

今日も学校に通うため、もう慣れた道のりを登校中である。

「しょうがないじゃん、そもそも学校に通ってるからって、そんなに捜査に時間が割けるわけじゃないし。」

「けど、やっぱりみんな期待はしているでしょ。」

「そりゃあね。だって、見つけれなかったら最悪ミッドがドカンドカもん。」

・・・それは考えたくないよ。

「けど、あとは見つかるでしょ。昨日見つけた爆弾に次の爆弾のヒントが書いてあったんだから。」

今朝、なのはさんから連絡があって、爆弾にヒントが書かれていたからこれを参考に探して見てっと言われた。

「そうかなあ・・・だって、ヒントがコレじゃあね。」

ぺらぺらと紙を揺するシュリ。

そこには爆弾に掘られた文字を撮った写真が印刷されている。

「木を隠すなら森の中」。

「どういう意味だっけ。」

「木を隠すなら、他に似たような物がたくさんある森に隠せて意味でしょ？たしか、なのはさんの故郷のことわざだったと思うけど。」

「へ〜。」

なるほどなあ。

昔の人はなかなかすごいことを言うではないか。

「つまり、爆弾も学校の木がたくさんあるところに隠されてるってこと？」

「・・・アート、今の私の説明聞いた？」

シユリが白い目で見てくる。

なんかバカにされてる〜！！

「だって、森に隠せて意味なんでしょ？」

「いや、まあ否定はしないけど・・・可能性もないわけじゃないし。」

「でしょ!？」

「とは言っても、まず浮かべるのは普通爆弾がたくさんあるところでしょ!！」

「あ、そっか。」

そうだな。

そうんだけど・・・

「そんなところ学校にあるの？」

「……………」

沈黙で返されてしまった。

つまり「ない」と。

いや、そうだよな。そんな爆弾がたくさんあるところなんてあったら怖いし。

「まあいいや、また後で考えよう。」

「良くないでしょ。……たく、アートは気楽なんだから。」

「しょうがないじゃん、もうそろそろ学校だし、ほら、前にエリカちゃんもいるから。」

エリカちゃんが校門のところで手を振っている。

私も手を振り替えて、エリカちゃんに駆け寄る。

挨拶を交わして、私の学校生活三日目が始まった。

\* \* \* \* \*

「アート、わかったよ!!」

昼休み、シユリがいきなり叫んで私の机の所に来た。

「シユリテイ、わかったって何が？」

私と一緒に雑談をしていたエリカちゃんが聞く。

「あ、いや、その……」



チラッと私を見た。

ああ、爆弾のことね。

さて、どうやってシュリがごまかすのやら……

「……なんだっけ、叫んだら忘れた。」

「は!?!」

シ、シュリがプライドを捨てた!!

いつもだったら絶対にそんなことがあっても口を割らないのに、  
プライドを捨てて口にした!!

というか、なんか……シュリが間抜け、もとい可愛い!!

「こら、アート笑わないで!!」

涙目でシュリが叫ぶ。

なんか、もう、止まらない!!

「アハハハハハッ!!」

バシバシ机をたたく。

横でシュリは拳を作って悔しがっていた。

「イヒヒヒヒヒッ!!」

ガッンッ

「ぐはっ!!」

シュリに頭を思いつきり殴られた。

な、なんか冗談抜きでいたい……というか、意識が……

「ごめん、エリカ。アートを保健室に連れて行くね。」

「私も手伝おうか?」

「いや、平気。引きずっていくから。」

教室を出て、人気のないところに来たところでシユリは私を引きずるのをやめた。

「アート。」

思いつきりにらんでいる。  
怖い。

「ごめんごめん、シユリがかなりのプライドを捨ててたからつい。」

謝ると、フウツと息をつかれた。

「まあいいや、それで例の隠し場所だけど・・・」

シユリが空中に画面を出して、地図を投影する。

「ここじゃないかな。」

「理科室?」

コクンとシユリが頷く。

「ほら、木を隠すならの暗号があつたじゃん。理科室だったら爆弾を作る薬品もあるし、危険物もたくさんあるから。」

「・・・なるほど。」

よく考えついたな。

「なら早速、」

「、いきますか。」

\* \* \* \* \*

「見つかった？」

「ない。アートは？」

「ない。」

もう何度この台詞を繰り返しただろう。

第一理科室を探して、全然見つからず、第二理科室もごらんの有様。

爆弾のばの字も見つからない。

「やっぱ、ちがうんじゃない？」

15分ぶりに別の台詞が出た。

「・・・なのかなあ。」

シユリも半ば諦めかけている。

「それに、こういう所はアコース査察官が念入りに調べていると思っし。」

「・・・そうだね。」

体を起こして伸びをする。

「諦めますか。」

「・・・そうだね、時間もないし。」

あと少しで授業の予鈴だ。

「ならいこう。」

「うん。」

肩を落としてシユリは理科室を出た。

\* \* \* \* \*

「見つからなかったね。」

「そうね。」

放課後、二人だけの教室でポケーとする。

机の上には爆弾事件の資料が散乱している。

「どこだろう・・・」

「さあ？」

地図を見て、一つ一つ場所を確認していく。

その時、ガラッと教室のドアが開いた。

「あら、まだ誰かいたの。」

私たちの担任の先生だった。

「はい、すみません・・・何かこの教室使いますか？」

シュリが優等生モードで聞く。

「いやね、このパソコンを直そうかと思ったんだけど、ほどよい広さの場所がなくてね。ここを使おうかと。」

先生の手にはパソコンがある。

「かなりレアなものですね。」

「でしょ？デバイスもいいけど、パソコンもなかなかいいよ。ゲームとかも出来るし。」

おいおい、教師がそれでいいのかよ。

「そうか!?!」

シュリがいきなり叫んだ。

「ド、どうしたの、シュリティさん？」

先生が驚いた様子でシュリを見ている。

しかし、シュリはそれを無視すると私の手を取って教室を出て行く。

「せ、先生、さようなら!」

慌てて先生に挨拶する。

廊下に出てしばらくしてからシュリに聞く。

「どうしたの？」

「爆弾の場所がわかったの。」

渡り廊下を渡って北棟に向かう。

「どこ？」

「情報端末教室。」

情報端末教室とは最近出来た教室で、主に調べ物やデータとかをまとめるときに生徒が自由に使っている教室だ。

この端末は普通は入っていないようなソフトまで入っているため、生徒が皆なかなか重宝している。

「どうして、そこ？」

「爆弾には何が付いてる？」

なについてそりゃあ。

「火薬。」

「ほかには？」

ほかについて……

「……ディスプレイや基盤……あ！」

「そっぴいっぴい。」

つまり、爆弾も一種の機械と考えれば、機械を隠すなら機械群の中ということ。

情報端末室に着くと早速探し始める。

「でってこいでってこい、爆弾ちゃん」

「うるさい、アート。」

・・・シユリが冷たい。

「あつた!!」

机の脚の横に置いてあつた。

なかなか巧妙で、よく見ないと他の機械と一緒にしてしまいそうなほどよくにて作られていた。

蓋を開けると、この前解体したのとよく似ている。

「ちやつちやつと解体しますか。」

シユリが魔力の刃を出して、解体を始めた。

数分後、

「おわった〜。」

シユリが息をつく。

無事に爆弾は解体されていた。

「ならさっさと封印して、片付けちゃおう。」

「あ、待って。」

シユリが蓋を持ちあげる。

「どうかした？」

「ほら。」

蓋の裏側を指さす。

「”二つの目より四つの目”？」

暗号が書かれていた。

「どういう意味だっけ？」

「たしか、二つの目、つまり一人で物を探しても見つからないけど、四つの目、つまり二人で探せば、見落としもなく物を見つけたり出来るって意味じゃなかったかな。」

「ふん、つまり、見落としがあるってわけ？」

「・・・そうね、この文からすると、まだここに爆弾があるってことなんじゃあ。」

「そんなこと言われてもなあ。」

グテエ、と床に寝そべる。

「そうそう簡単に見つかるわけない・・・」

「そうよね。」

何か黒い箱が見えた。

「あった。」

「へ、なにが？」



いきなり行ったのでシュリが聞き返す。

「爆弾。」

シュリが慌てて私の横に寝そべる。

「本当だ。」

机の裏に爆弾が張り付いていた。

これは確かに二つの目より四つの目。  
見落とすわ。

「コレも解体しよう。」

「だね。」

シュリが蓋を開けて爆弾を解体する。

「終わった〜!!!」

「よっしゃ〜!!!」

思わず歓声を上げる。

「よしよし、封印してっつと。」

ペラッと蓋を裏返してみる。

「”かなづち”?」

そう、書かれていた。

}  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
}

第21話（後書き）

明日は午後に投稿予定です

## 第22話（前書き）

最近時間がない星伝です。

大学受験生なんです、そろそろ本番が近くなって、投稿が遅れます。

明日もこのくらいの時間に投稿する予定です。

すみません。

## 第22話

### 第22話

学校生活四日目。

タイムリミットは明日。

「なんだけどなあ。」

今、私とシユリは朝早くから学校に来て用務員室に侵入していた。昨日の暗号が原因だ。

「シユリ、見つかった？」

「いいや、ない。」

次のヒントと思われる暗号は”かなづち”だった。

昨日は美術室を探したんだけど、爆弾はおるか、金槌さえ見つからず時間も遅かったので帰ることにした。

なのはさんには「2つも見つけてすごいね」と誉めてもらった。

「この調子でがんばってね」ともいわれたけど。

「ここじゃないのかなあ。」

「みたいだね。・・・第一お祭りが近いから、金槌なんてどこにでも転がってると思うんだよね。」

「そうだよ、・・・たく、ヒントにさえなってるない。」

ぶつぶつ爆弾魔に文句言ってみたり。

まあ、意味はないんだけど。

というか、爆弾魔は見つかってもらったら困るみたいなの。

「そろそろ時間だし、教室にもどろつか。」  
「賛成。」

二人で肩を落として教室に戻った。

「ねえ、二人は明日、どうするの?」

教室で次の授業の準備をしているとエリカちゃんに声をかけられた。

「明日?・・・さあ?」

今日の成果次第だからね。

今日中に爆弾を片付けられれば結果は吉で明日はもうここには来ないだろう。

今日中に終わらなければ、明日もぎりぎりまで搜索するまでだ。・・・つまり、遊ぶ時間など皆無であるというわけなんだが。

「さあつて・・・シュリテイは?」

「うん、一応アートと二人でお店を回るかな?」

「え、聞いてない。」

そんな話初耳だ。

「これから誘おうと思ってたのよ。」  
「じゃあ私も一緒にいい?」

え、エリカちゃんも・・・それはちょっと。  
捜査に支障を来すというか。  
とは言っても、ここで断るのはなんか不自然だし。

「いいよ。」

としか言えないなあ。

「なら明日、記念式典が終わったら一緒に回ろうね。」

「うん。楽しみだなあ、どんなのがあるんだろう。」

「えとね、ほとんどが展示なんだけど、一部飲食店みたいなものもあるらしいよ。ゲームを企画しているところもあるみたい。」

へ。

なんかいいよ文化祭だな。

というか、いいのよ、生徒がそんなことして。

私たち、まだ10歳だぞ。

「アストラルやシュリテイは何か企画に参加してないの？」

「いや、全然。」

「転校してきたばかりだし。」

この時期にやってきて、企画に入れてもらおうなんて肝っ玉も大きくないし。

そんな暇もないけどね。

「あ、そうだったね。・・・今からでも飛び入りで企画とか通るけどどうする？」

飛び入りって・・・ドンだけこの学校はルーズなんだよ。

というか、教師が嫌がりそうだな。

「どうするも、私たち、何がしたいかもわからないから今回はお客様に徹するよ。」

「同じく。」

「そう、少し残念。ま、一緒に楽しもうね。」

それだけ言うと、他の友達に呼ばれてエリカちゃんは席を外した。

「ハア、どうする、シユリ？」

「どうするって？」

「当日。もしみつかなかったら私たち、まだ搜索しなくちゃいけないんだよ。」

「え、だって今アートが了解したじゃん。」

「あそこはああいわないと、なんというか、・・・断れない雰囲気だったんだもん。」

「どうしようって・・・今日中に見つけるしかないでしょ。」

「・・・だね。」

それしか道はない。

\* \* \* \* \*

「金槌、ねえ。」

ボケーと考える。

現在は昼休みで、屋上にて食事中だった。



「他にどこがあるかなあ。」

「ん〜、金槌は至る所にあるよ。」

「そんな曖昧な物じゃなくてさ、こつやって暗号になるんだからしばらくはその金槌は使われないうか、移動しないってことでしょ？」

「普通、金槌は動くと思うけど・・・。」

それを言ったらおしまいよ。

というか、動かない金槌ってドンだけおもいんやねん。  
意味ないじゃん！！

「かなづち・・・。」

一口シユリがおかずをかじる。

「かなづち・・・。」

私も一口おかずをかじる。

「金槌。」

「金槌。」

「金槌がどうかしたの？」

「「うわぁ！！」「」

いきなり背後から声をかけられた。  
振り向くと、エリカが立っていた。

「なんだ、エリカちゃんか。」

「なんだはないでしょ？・・・それよりも二人でどうしたの？なんか暗いよ？」

う、そんなに二人とも沈んでたか？

「そ、そんなことないよ。ほら、元気元気！」

「うそくさ……」

シユリに冷たく言われた。

ひどい！

というか、少しはフォローしろよ。

「かなづちつて二人とも……ああね。」

いきなり納得された。

というか、なんなの？

「ああねって？」

シユリがおそろおそろ聞く。

「え、二人ともかなづちなんじゃないの？」

「「はい？」」

わ、私そんなに顔でつかちじゃないし硬くないよ！！

「ほら、二人してプール見ながらそんなこと行ってるからさあ、  
てつきり運動が得意な二人も水泳は苦手だとか。」

「ああ、なるほど。」

そついう意味だったのね……

……て、

「「そうか!!」」

「な、何二人とも!？」

いきなり立ち上がった私とシユリに驚くエリカちゃん。  
ごめん、説明することなんて出来ない。  
だけど・・・

「ありがとう、エリカちゃん。」

「ナイスよ、エリカ。」

「あ、ありがとう?」

何がかわかっていない様子。  
けど、それも仕方がない。  
それにフォローしている暇はない。

「いこ、シユリ!」

「了解、アート!」

といわけで、無事にプールの中から爆弾は見つかった。  
さつさとシユリが解体して、私が封印する。  
防水性の基盤に防水性のケースに入れられた爆弾の蓋には次の暗号が書かれていた。

「 ”人は集団を作る”?」

「そんなの当たり前じゃない。」

これはコレは、かなり苦戦しそうだ。

}  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
}

## 第23話（前書き）

全話の影響か、今回はむちやくちやく長くなりました。  
ここで一区切りとなります。

## 第23話

### 第23話

とつとつやってきてしまった、創立記念日。

爆弾のタイムリミットの日

「そういえば、タイムリミットって何時なの？」

「ん？確か・・・何時だっけ？」

おいおい、こんなんで平気なのか私たち。

「お、書いてあった。午後三時だって。」

シユリが事件の資料をめくる。

「ふん、・・・ちょうど閉会式の頃かな？」

「だね。つまり、お祭りの最中に探さなくてはならないと。」

「・・・どうするの？」

エリカちゃんと約束してるよ？

「そ、それは・・・しょうがないから回りながら探すと言っただ。  
で。」

「・・・だね。」

ハア、今日一日大変そうだ。

\* \* \* \* \*

創立記念式典は30分ほどで終わった。

「ふわあ〜・・・」

「アストラル、眠そうだね。」

式典を行った体育館で解散となり、いよいよ本番、創立記念祭が始まり私とシユリはエリカちゃんに合流した。

「だってアート、校長先生の話の時、寝てたもん。」

「あ、こらシユリ！！普通言わないでしょ！！」

手を振り上げると、シユリはさっとエリカちゃんの後ろに回って逃げた。

「まあ、しょうがないよ。アストラルじゃないけど、あの話は長すぎて私も寝そうだったし。」

校長先生の話はすごく長かった。

というか、創立記念式典自体がほとんど校長先生の話で、約二十分ほど先生はしゃべっていた。

あとは校歌を歌うのに五分という所だろうか。

まあ、誰でも興味のないこの学校の成り立ちや教訓などを永遠と語られれば眠くなる物だ。

「いいじゃん、寝てたのアートだけじゃなかったから。」

「え、他には誰が？」

シユリは無言である人物を差した。  
その指の先には……

「……もしかして私たちの担任？」

シユリがコクンとうなずく。

おいおい、先生よ。

模範となるべき先生が寝ていていいのかよ!!  
いや、先生だからこそ許されるのか?  
別に生徒の模範つて分けでもないから……

「まあ、そんなことはおいといて、二人とも早く行こ!!」

「りょうか〜い!!」

「よし、楽しむぞ!!」

エリカちゃんに引つ張られながらお祭りの行われている教室へと  
向かった。

\* \* \* \* \*

「シユリ、次はコレ食べよう!!」

「はいはい、あんただけで食べなさい。」

「そんなあ、シユリ冷たい〜。」

「アートには付き合ってもらえないのよ!!」

「そんな〜、まだたったの3つしかお店回ってないのに……」

「アストラル、そのお店の全メニューを一通り食べてたら十分だよ。」

「エリカちゃんまで〜。」



うう、みんな冷たい。

「ほらアート、次はコレに行くよ。」

シユリがパンフレットの一つを指さす。

「劇？」

そこは5分程度の劇を行う教室だった。

「え、シユリティって劇なんかに興味があるの？」

エリカちゃんも驚いている。

「バカ、アート。ここは賛成しなさいよ。私たちは今なんのためにここにいるの？」

「え、無事に爆弾を見つける・・・ああ。」

すっかり忘れてた。

「暗号から推測するに爆弾は人の集まるような所にあるみたいだから。」

「それで、あの言葉か。」

人は集団を作る。

確かにそんな感じだ。

「ほら、二人とも。早くしないと劇始まるよ?」

「はいはい、今行く!」

エリカちゃんについて行って、劇が行われる教室に着く。  
劇は桃太郎の簡易版だった。  
劇を見ながら周りに何かないか探る。

『見つかった？』

『ううん、ない。』

シユリに来聞くが、吉報は帰ってこない。

まあ、当たり前か。

そんなに簡単に見つかるなら苦労しないって。

『やっぱみつからないね。』

『探査魔法でも使ってみる？』

『ここじゃやばいよ。誰かに見つかる。』

『なら・・・コレが終わってから屋上でしようか？』

『エリカちゃんは？』

『・・・アートなんとかしときなさい。』

そんな無責任な。

そんなこんなしているうちに劇は終わった。

「結構おもしろかったね。」

「そうだね、特に最後の鬼退治の後の部分が原作と違って鬼が刑務所に服役してるのが現実的だったね。」

ぞろぞろと廊下に出る。

そこでいきなりシユリがおなかを押さえた。

「う、ごめん、ちょっとトイレ。」

さっさとトイレに向かうシュリ。

行く途中で目配せをしてきた。

ああ、なるほど、コレで屋上に行くわけね。

「わかった、なら私とエリカちゃんは1階の休憩室にいるから。」

りょうか、い、という声と共に人混みに消えていく。

「大丈夫かな、シュリテイ。」

エリカちゃんは心配そうにその方向を見つめる。

「大丈夫大丈夫。さっさと1階にいよ。私あそこのラムネとたこ焼きが食べたい。」

「・・・アストラル、まだ食べるの？」

私の発言にエリカちゃんは脱力しながら付いてきた。

シュリは5分もすると戻ってきた。

「つて、アートはまた食べてる分けね。」

私 গতこ焼きをほう張っているのを見てため息をつく。

「ひひはん、ほひひひんはは( )いいじゃん、おいしいんだから」

「はいはい、飲み込んでからしゃべりなさい。」

『屋上から—W A S《Wide Area Search》をかけたけど、反応はなかったわ。』

『やっぱり、探査で見つかったらアコース査察官が見つけてるか。』  
『・・・そうだね。』

「よし、食べ終わった。次どこに行く？」

「うん、私はもういいわ。エリカは？」

「うん・・・私コレに行ってみたい。」

「オツケ、ならレッツらゴッ！！」

三人でわいわいしながら次の展示場へと向かった。

もちろん、今度は忘れずに爆弾を探しながら・・・

\* \* \* \* \*

「もう2時50分か。」

今のところ、爆弾は見つかっていない。

タイムリミットは3時。

あと10分だ。

『ねえ、仕掛け忘れたとか言うことないかなあ？』

『そんな樂觀思考できるわけないでしょ！？』

『けど、こんだけ探しても見つからないというのは・・・』

『まあ、その時はその時ね。それよりも3時は生徒が体育館に集まっているってのはいいわね。』

『何で？』

『生徒の安全は確保できるから。』

『なるほど・・・』

「シユリテイ、アストラル、体育館に集合しよう。」

「うん、今行く。」

体育館にはすでに人が生徒が一杯並んでいた。

「なんか、みんな集まりがいいなあ。」

普通だったらみんなまだ遊びたいとかで校舎に残ってそんなモンだけ・・・

「ほら、私たちも並ぶよ。」

シユリに手を引かれて前の方に並ぶ。

『今思っただけで、爆発する時間って校舎はもぬけの殻なんだよね。』

『そうね、そのぶん安全ははかりやすいけど。』

『ならさ、爆弾をこの時間に校舎で爆発させる意味がない？』

『そうでもないよ・・・爆弾の種類によっては都市まで届く火力があるみたいだから。』

『そうだけど・・・私ならより確実性を求めてもうちょっと早い時間にタイマーをセットするけどな。』

『そうね・・・私も。』

壇上に司会の先生が上った。

なにやら整列指導をやっている。

『もうすぐ、タイムリミットだね。』

『うん……』

『飛び出す準備はいい？』

『飛び出すって？』

『え、結界張るんじゃないの！？』

『そうだったね、けど前に飛び出さなくてもいいじゃん。』

『それもそっか。』

司会の先生につづいて校長先生が姿を現した。

壇上のある中心にあるマイクに向かって歩いている。

ふと、校歌の歌詞が書かれた額縁の三脚の下に四角い箱が付いているのが見えた。

『ねえ、あの校歌の額縁の下に付いてるのって何？』

『は、なんか付いてる？』

シユリが背伸びして見る。

『あれって……』

『……もしかして』

『『爆弾！？』』

爆破時刻まで、あと……5分しかない。

みんなを避難させる余裕はない。

というか、こんだけ人がいたら、見つからずに爆弾を解体するなんて不可能だ。

『もう、四の五の言ってもらえない！！』

『そうね。』

私とシユリはさつと列から飛び出す。  
先生が列に戻るように叫ぶが、今回は無視。  
説明している暇もない。

「シユリ!!」

「わかってる。アートは結界。」

「はいよ!!」

アスターをつかむと起動させる。

そのままカードリッジをロードしてシユリの周り一体を包む結界を作る。

シユリもレインを起動させてそのままジャンプ。

浮遊魔法で爆弾の近くに行くと、そのまま持って降りてくる。

「あたり?」

「あたり。」

のぞき込むと確かにタイマーとおぼしきデジタル時計が後3分を差している。

「どうする?」

「解体するっきゃないでしょ。」

シユリが早速指に魔力場を付けて爆弾の蓋を開けた。

「ちょっと、あなたたち、それは何!?!」

先生が私たちの行動を見て問い詰めてくる。

「先生、説明は後です。邪魔ですからどいてください。」

「何を言ってるんですか、そんな言い分が・・・」  
「私たちは管理局です。あんまりうるさいと任務執行妨害で逮捕  
しますよー!」

さつと空中にモニターを出して管理局のロゴと身分証明書を表示  
する。

「管理局・・・」

先生達はその言葉にひるんだ。

さつと魔力を杖に巡らせて、私とシュリを囲む形で誰も入れない  
ように、そしてもしもの時のために結界を張り巡らす。

「シュリ、どう?」

「うん、後一本なんだけど・・・」

「ならさつさと、」

「それが・・・わからないのよ。」

「はっ?」

今、シュリはなんと?

「いやね、ここまではいつも通りに解体できたんだけど、後2本、  
赤と青のコードがあつてどちらにも同等の電流が流れててね。どっ  
ちを切つても爆発するわけよ。」

「ならタイマーは、」

んん、と首を振る。

「とまらない。多分どっちか切ればいいんだろっけど、どっちも  
大差ないのよね。」



ハア、とため息をつかれる。  
タイマーはあと三十秒を差していた。

「ん、コレは？」

シユリが蓋を裏返して呟く。

「君の勇気に二度目の人生を」？」

どういう意味だ？

ここに書かれてるってことは、何か暗号だよな。

多分、コレが最後の爆弾だから、爆弾を解除する暗号だろう。  
けど、はつきり言って意味がわからない。

「もう、2本とも切っちゃおう？」

投げやりにシユリが言う。

「ああ、その選択肢が・・・？」

ん、今なんか引つかかった。

というか、そもそも何で犯人は爆弾に暗号を残したんだ？

確か20個分には暗号なんて1個も書かれてなかったはずだけど  
・  
・

「ねえ、私赤が好きだから青切ってもいい？」

残りあと十秒。

シユリが魔力場を青のコードに近づける。

「そうか!！」

わかった!！」

「え、何? やっぱ赤を切るの?」

「シユリ、何も切らないで。」

「はっ?」

意味がわからないというようにシユリがこちらを見る。

「その暗号の答えは“どちらも切らない”だよ!！」

シユリがジーとこちらを見る。

タイマーの時間は後5秒。

「・・・そうなのね。」

3秒。

「うん。」

2秒。

1秒。

「んっ・・・!！」

思わず目を閉じる。

・・・が、何も衝撃はやってこなかった。

ゆっくりと目を開けてタイマーを見る。

3秒。

4秒。

5秒。

「やったー!!」

「すごい、アート!!」

思わず抱き合って喜ぶ。

「けど、よくわかったね。」

シュリが爆弾に封印をかけながらいう。

「うん、まあね。」

先生達はこちらをジーと見ていた。

生徒達も何事かと結界の外でこちらを見ている。

「理由、聞いてもいい?」

シュリが杖に爆弾を入れおわると、こちらを向いて聞いてくる。

「うん、なんというか、……この爆弾はなんかすごく私たちにコードを切らせようとしているように感じたんだよね。」

「……もしかして、それだけ?」

シュリが口をぽかーんと開ける。

「ううん、あとはその暗号。“君の勇氣に”の部分はここまで爆弾を見つけた私たちに対する賛辞と侮蔑。“二度目の人生を”の所はカウントが0の後に、爆弾のその使命は終わって二度目の人生が始まるってことじゃないかと思ったの。」

「そう、・・・勘じゃなかったのね。」

シユリがほっと安心の息をつく。

そして、皆の方に向き直った。

「さて、説明してさっさと帰りますか。」

「だね。」

二人で先生や全校生徒の前で説明をし、私たちは学校を去った。

\* \* \* \* \*

「二人とも、任務お疲れ様。」

なのはさんが報告書を受け取りながら労ってくれる。

「なんとかかすべての爆弾を無事解体したんだね。特に最後の爆弾解体はお見事でした。」

「いや、アートの機転がなかったら終わってましたね。」

シユリも私を誉めてくれる。

「お疲れの二人に、手紙が管理局に届いてたよ。」

「手紙？」

データディスクを渡される。

「今日はもう帰ってゆっくり休んで。また明日からがんばろうね。」

「はい！！失礼します。」

部屋に戻ると、早速ディスクを読み込む。中はビデオレターだった。

アストラル、シユリテイ、私エリカです。

お二人が管理局の人だと聞いてすごく驚いたよ。けど、ある意味納得かも。

体育の時の魔力検査や身体能力の高さ、あれは管理局でしごかれた成果だったんだね。

クラスのみんなも驚きと納得の雰囲気だよ。

あ、お礼がまだだったね。

私たちを救ってくれてありがとう。

あの後、二人が帰ってから学園長から事件の詳細について説明があったよ。

よくわからないけど、学園長は目先の利益におわれて安全を損なったとかで辞めちゃった。

いい先生だったのね。

今日、突然のお別れなんてなんか寂しいけど、もう会えないわけじゃないよね！！

同じミッドにすんでるみたいだから今度私が遊びに行くよ。

あ、けどお仕事があるのかな？

まあ、適当に連絡取り合って、今度も一緒に遊ぼうね。  
それじゃあ、またいつか会える日に。  
エリカ。

「・・・なんか寂しいね。」

「・・・こうなることはわかってたけど。」

しみりとした空気が部屋に降りている。

「ま、けど、エリカちゃんの言うとおり、もう会えないってわけじゃないから平気だよ!!」

「そうね、なるべく連絡取り合ってた遊びに行けばいいね。」

「そうそう、私とシユリの数少ない同年代のお友達なんだから。」

「友達と言うより、・・・親友?」

「そうそれ、親友!!」

学校での話をしながら夕食を食べ、エリカちゃんのことを話しながら私は眠った。

明日からはまたいつもの日常。

気合いを入れて、がんばりますか!!

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

## 第23話（後書き）

次回はまた少し、話全体が進む予定です。

## 第24話(前書き)

今回の戦闘シーンはわかりにくいですが、フェイト主観です。はい、下手で申し訳ありません。

だってだって、フェイトってどうもつかみ所がないんだもん。



## 第24話

### 第24話

「そろそろ、最終段階に入る準備を始めよう。」

薄暗い部屋に目深くフードをかぶった男達の一人が言った。  
珍しく今日は囲んだテーブルの上に小さなクッキーが置かれてい  
る。

「必要な物はなんだ。」

赤い髪の男の問いに水色の髪の男が必要な物を列挙していく。

「・・・細々したのはそこにあるとおりです。大がかりな物は・・・」

新たにモニターが開き、筒状の物の写真がうつる。

「これです。ほかにも、」

更にいくつかモニターが開きそれぞれ別の写真がうつっている。

「これだけです。」

「細々したのは何とかなるだろう。問題はその三つだ。」

男がモニターに触れて三つを指さす。

「どれも管理局にしかないロストロギアだろ。」

「はい。」

一瞬、沈黙が場を支配する。

「……どうやって手に入れる。」

「はい、私に提案があります。」

水色の髪の男の正面に座っている黒い髪の女が手を挙げた。

「実は先日、こんな物を見つけまして。」

大きなウィンドウが開き、一つの写真と説明とおぼしき文章が並ぶ。

「……やれるか。」

男は詳しいことを問わずに聞く。

「はい、我が国のためとあらば。」

三人が赤い髪の男を注目する。

「よし、それで行こう。」

男がさっと腕を振ると、シャンパングラスがテーブルに現れた。中にはなみなみとシャンパンが注がれている。

「……今日は管理局に気づかれませんでしたね。」

「そうだな、……まあ、もうすぐクリスマスだからな。」

「そうですね、……我々にとってもふさわしい聖夜になるでし

よう。」

「アストラルよ、我々を復興へと導き給え。」

チンツとグラスを重ねる音とシャンパンを飲む音だけが部屋に響いた。

\* \* \* \* \*

学校での爆弾事件から約2週間がたった。

今日は12月24日。

「世間はクリスマス・イブ・・・なんだよなあ。」

ピピピツとコンソールをたたく。

「そうぼやきなさんな。しょうがないでしょう？私たち管理局員は基本年中無休なんだから。」

シユリも横でコンソールをたたく。

「私、管理局員じゃない。」

「今は管理局に属しているでしょ？同じよ。」

「そうだけど・・・だれもクリスマス・イブに事件なんか起こさないって。」

「そうでもないよ、過去の事例を見る限り、この時期は人が局地的に集まるから事件は絶えないんだって。」

「それってスリとかでしょ？私たちが出るような大事件なんか起きやしないって。」

んん〜と伸びをする。

「そうね・・・まあ、いいじゃない。今はここでデスクワークをして、仕事を残さなければ今夜はクリスマスパーティーだってなの。さん達も言つてたでしょ。」

「そうだね、大きな事件でも起きない限り・・・」

途端、部屋にアラート音が鳴り響いた。

「・・・噂をすれば何とやら。」

「くそ、せつかくの聖夜なんだからおとなしくしとけて〜の。」

ぼやきながら集合場所に急ぐ。

失礼します、と部屋に入るとすでにスターズ、ライティング、隊長陣がそろっていた。

「みんな集まったみたいやな。」

はやて隊長が顔を確認する。

「早速やけど・・・なのは隊長。」

「はい、ほんの数分前、謎の巨大飛行物体がミッド軌道に出現しました。」

ピツとモニターにその物体が映る。

「推定サイズは横5m、縦6m、高さ7mほどで戦車のように砲身が確認されています。」

ピツと別のモニターが浮かび上がり何らかの文書が映る。

我々は、星の下に集いし者である。

管理局に以下の物を渡してもらいたく、この文章を送る。

1、クラシブル

2、魔力炉

本日三時までには物を渡されなければ、我々が持つ“アニヒレート・キャノン”をミッド都市に向けて発射する。

受け渡し場所は以下の場所とし、管理局員の一人が持つてくること。

もし多数で押しかけた場合も砲を撃つので下手なことをなさらぬよう。

以上、諸君が最善の手を打たんことを。

「このクラシブルというのは第1級指定ロストログニア“クラシブル・マジック”という物で、魔力を無限に蓄え、また一度に放出することができるものなの。」

「普通に使えば何ともない物だけど、使い方を誤れば魔力が暴走、最悪世界を一つ消すことができるくらいやばいものでもある。」

なのはさんの説明にフェイトさんが付け加える。

「アニヒレート・キャノンに関しては超巨大魔力砲が一門とその周りに小さな砲門が10門ほど確認されてる。」

ピツと画面がすべて消え、新しい画面が開く。

「そしてもう一つ、どうやら相手はガジェットも使うようや。」

はやて隊長が写真を指さしながら言う。

「ミッドの海上10kmのところにガジェットが同時に出現、現在はそこでもぐるぐる回ってるんだけど、もしかしたら、攻め入ってくるかもしれん。」

地図が浮かび、その予想進路が出る。

「現在の時刻は2時40分、犯行声明があったのが2時半で上からはクラシブル・マジックを渡す気はないそうや。というわけで、ピツとすべての画面が消える。」

「ライトニング、スターズ、およびフェイト隊長は海上ガジェットの殲滅。ウィングとなのは隊長はアニヒレート・キャノンの破壊。申し訳ないけど、うちは万が一に備えてダミーのクラシブル・マジックを指定場所に持って行くことになってるからこの作戦には参加できへん。ガジェット殲滅班は速やかにガジェット撃破の上、アニヒレート・キャノンの破壊の手伝いをしてやってな。では作戦開始や!!--」

「「「はいつ!!--」「」」

皆駆け足で作戦室を出て行く。

「さっさと帰ってクリスマスパーティーしようね!!--」  
「もちろん!!--」

私は気合いを入れ直した。

\*\*\*\*\*

「こちらライトニング1、ロングアーチへ。」

『こちらロングアーチ。』

「シャーリー、今迎撃ポイントについたよ。状況を教えて。」

『了解、現在がジェットは三群体に分かれています。一つは十時の方向に約30機、一つは十二時に40機、最後は二時方向に30機ほどです。』

「了解、これより迎撃に入ります。」

回線を切ると後ろからついてきているフォワード陣に言う。

「ライトニング隊は二時方向を、スターズ隊は十時方向をたたいて。私が十二時方向をたたくから。」

「了解!!」「了解!!」

さつと皆が散開する。

しばらくそのまま進むとガジェットの青い機影が見える。

「頑張ろつね、バルディッシュ。」

『Sir, Master. Load Cartridge  
and Haken Form.』

ガシャンとカードリッジをはき出し、鎌のような形に変形する。

「ハーケンセイバー!!」

思いつき振りかぶり、鎌をなく。

魔力刃だけがブーメランのように飛び次々とガジェットを切り落としていく。

「やっぱりだめか。」

しかし、ガジェットはその場で魔力修復を行い、すぐに戦線に復活する。

「こちらライトニング1、スターズ2、3およびライトニング2、3へ。ガジェットはすべて“改”型であると思われる。各自コアを中心に破壊をして。」

「「「はい!」「」「」

ガジェット改型。

地球派遣任務の際に遭遇したがジェットの種類を指していて、自力での魔力修復、および運動の学習機能が見られる物を指す。

撃破方法は今のところ核となっている魔力結晶部分、つまりコアを破壊するしか方法が見つかっていない。

ただ、魔力修復の際にはAMFが使えないこともわかっているため、比較的破壊はしやすいと思われる。

「は〜〜!」

得意の高速移動で敵の後ろに回り込みハーケンでコアを破壊していく。

地球での突然の行動変化は見られず、今回は楽々と落とせた。

『ライトニング1、こちらロングアーチ。前方200mのところに召喚魔法が見られます。』

「了解、確認します。」



もの一分で40機すべてを破壊すると一気に前進する。  
200mほどいくとたしかに魔方陣が見られた。

「でかい……」

規模がものすごく大きかった。

魔方陣の半径が50mを超えていた。

そして……ゆっくりとガジェット三型改の形が浮かび上がっ  
ていく。

その数……ざっと60機。

「これは……手こずりそうだね。」

三型はほかの2型や1型と違って大きさが大きい。

それなのにコアは小さく、見た目よりも堅い。

AMFの規模も馬鹿にならない。

それがこれだけの数。

「けど……やるしかないか!!!」

『LoadCarttride and Zamber Form .

』

バルディッシュが鎌の形から剣の形に変化する。

そして、予想されるAMF圏から離脱。

その頃には三型が姿を現していた。

「プラズマザンバーブレイカー!!!」

大きく伸びた剣を振りかぶる。

三型の下にあつた魔方阵が消え、三型が動こうとする。しかし、周りには雷が落ちて逃げ惑っている。

「雷光一閃！！」

その三型めがけて剣を振り落とした。

すさまじい雷光とともに三型がひしゃげ、爆発していく。光が収まる頃には三型は海に落ちていた。

『ガジェット三型、すべて撃破。お疲れ様です。ほかのがジェットもすべて撃破されました。』

「了解、これよりなのは隊長の加勢に行きます。」

『はい、お願いします。』

いったん通信を切ると一緒に来ていた四人に連絡を取る。

「いつかい初回撃破ポイントに集合。全員集まってからウィング隊を応援に行くよ。」

「……りようかい！！」「……」

通信をすべて切るとバルディッシュのカードリッジを新しいシリンドラーに替える。

「行こう、バルディッシュ。」

『Sir.』

さっと、自分が指定したポイントに飛んでいく。はやく行って、なのは達を助けなきゃ。

フェイトがその場から消えてしばらく後。

「管理局ライトニング1、フェイト・テストロッサ・ハラオウン  
執務官か。」

目深くフードをかぶった男が暗闇から現れた。

髪の色は黒。

輝く瞳の色は紺。

フードでよく見えないが、顔もたいそう整っているだろう。

「やっかいな奴らだ。機動六課のメンバーは。」

そのまま、男は陰の中に消えた。

↳ t o b e c o n t i n u e ↳

## 第24話（後書き）

次ははやてサイドの後になのはサイドです。

字数にもよりますが、たぶんこれでこの場面は終わると思います。

そろそろクライマックスに向けてゴーゴーですか？

## 第25話(前書き)

アニヒレート・キャノン事件後半です。

最初がはやて隊長主観で、次がアート主観です。

## 第25話

### 第25話

犯人がアニヒレート・キャノンを撃つ時間まで後5分ほど。

やっとうちは犯人が指定したホテルの地下1階駐車場についた。

「えーと、確かピンクのトラックの荷台やったよな。」

「そうですね、ピンクだから目立つと言ってましたです。」

よいしょ、と左手にジュラルミンケースを持ち直す。

「リイン、敵の反応は？」

「今のところは何もありませんです。」

「そう、・・・引き続きよろしく頼むな。」

「おまかせなのです。」

右肩の乗ったリインが空中に小さなモニターを出しながら再度索敵をする。

それにしても引っかかる。

何でわざわざピンクのトラックなんやろ。

逃走するには目立たんシルバーとかがベターなはずなのに。

「あ、はやてちゃん。ありましたです。あれじゃないですか？」

リインが指さした先には確かにピンクのトラックが止まっている。

「リイン、警戒厳に・・・もしかしたら仕掛けてくるかもしれへんから。」

「はいです。」

ゆっくりと近づき、声明文にあったとおりジュラルミンケースを荷台に載せる。

「これでいいんやな。」

「はい。」

「あとはどうするんやろ。」

「さあ・・・特に指定はなかったはずですよ。」

『お疲れ様、管理局の職員。私がこの計画を考えた者だ。』

突然、声があたりに響いた。

「リイン！」

「人の反応はありません。」

『届けてもらったものは私たちが有効に使わせてもらうよ。』

「はやてちゃん、運転席です。」

「よっしゃ。」

バンツと鍵の開いているドアを開ける。

そこには・・・カセットテープと、

「爆弾や!!」

叫んだ瞬間、突然車にエンジンがかかった。

誰も乗っていないが、魔力が染みついている。

「スイッチ式の魔法です。どうやらトラックに荷物が置かれると発動するようにくまれていたみたいです。」

「止めることは？」

「無理です。」

そうこう話しているうちに車が勝手に走り出した。

その時の爆弾のタイマーは30秒。

「このままケースごと爆破する気か!？」

そう叫んだ瞬間、ケースの下に魔方陣が現れた。

「はやてちゃん、転送魔法です。」

「くそ、逃がすか!！」

慌てて封印魔法をかけようとする。

が、消えてしまう。

「追跡は？」

「無理です。準備する暇ありませんでした。」

「くそ!.....それよりも爆弾は？」

トラックを見るとすでに入り口にさしかかっていた。

「まずい、このままだと外で爆発してまう。」

「外にはたくさんの方の管理員と市民がいますです!！」

くそ、どうする.....止めるしかないか。

「リイン、セーッとアップ!！」



「はい、マスター！」

ぱつと瞬間的にバリアジャケットと杖が現れる。

「灰白<sup>ほのしろ</sup>き雪の王、銀の翼<sup>も</sup>以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来<sup>こ</sup>よ、氷結の息吹。」

はやての周りに四つの魔方陣が現れる。  
そこに魔力が集中する。

「凍れ、アーテム・デス・アイセス！」

サーツと一面が凍り付いていき、トラックにも及ぶ。

そのままトラックは氷結魔法によって動けなくなり爆弾も凍ったから爆発することもないだろう。

「ロングアーチ。爆弾処理班をこちらによこしてください。」

了解、の声を聞くと回線を閉じる。

さつと渡して片付いたら、なのはちゃん達の手伝いに行く予定やっただけ……

「帰れそうもないな。」

「そうですね、なのはちゃん、頑張ってください。」

灰色の天井を見ながら二人はつぶやいた。

\* \* \* \* \*

「ねえ、シユリ。どうやってなのはさんはあれ撃破するんだろう。」

私はモニターに映るアニヒレート・キャノンを見ながら呟く。

「私に聞かないで。・・・多分高出力収束法でもぶっ放すんじゃない？ほら、アートのサンフォールの逆バージョンで。」  
「なるへそ。」

現在、ミッドチルダ上空2000m地点。

かなりの高度で通常の飛行魔法でここまで上ることはない。  
相当空気も薄いし、何より常人の魔力量では上っても降りるだけの力がない。

「とは言っても、これ以上近づくのは無理そうだね。」

「だね、私には無理かな。」

「そうだね、ここぐらいから一発ぶっ放してみよっか。」

なのはさんがその場に停止する。

「私がバスターで破壊するから、シユリとアストラルは私の援護して。多分、そう簡単には壊さしてくれないと思うから。」

「「はい!!」」

適度に三人は離れ、周りを確認する。  
特に異常はなさそうだけど。

「レイジングハート、カードリッジロード。」

『Load Cartridge』

ガシャンガシャンと四発ほど、レイジングハートがカードリッジをロードする音が聞こえる。

「デイバイン……」

魔力が杖先に収束していく。  
その少し下で私とシユリは見ていた。

「……バスター!!!」

ピンク色の魔力光がアニヒレート・キャノンに伸びていく。  
と、何かがその射線上を横切るのが見えた。  
ドーンッという音と白煙があたりを包む。

『It's a direct hit』

「うん……撃墜できたと思う?」

『No, It was obstructed.』《誰かに妨害  
されました。》

「ふん、誰だろう。」

霧が晴れるとレイジングハートの言うとおり誰かが射線上に立っていた。

たなびく灰色のコート。

目深くかぶられたフード。

赤い髪と深紅の瞳。

「やっぱりあなたでしたね。」

「機動六課スターズ1高町なのは一等空尉か。なかなかの砲撃だ。」

男は展開していたラウンドシールドを消す。

「私の直撃砲撃を止めたあなたも、オーバーSランク魔導師ですね。」

その言葉を聞いて私とシユリは呆然とした。だつて、だつてよ!?

あのなのはさんの砲撃をたった一枚のシールドで受け止めたんだよ!?

あり得ないどころの話じゃないよ。人間じゃないよ。

「ふん、魔導師か。・・・一時期はそうも呼ばれていたが今は違う。俺は研究者に転属したのだ。」

「研究者?どんな研究をしていたんですか?」

「お前の知ることじゃない。」

男はなのはさんから私に視線を向ける。

「アストラル、久しぶりだな。前は・・・ああ、誘拐したときにあつたな。」

確かに、この男は私が誘拐されたときにいた。というか、誘拐した張本人だ。

「あの時はすまなかつたな、手荒なことをして。」

「すぐく私をもてあそんでたじゃない!?!」

「そうだったか?まあいい、長話も巨大な花火の前には無粋だから」

らな。」

男はさっと動くと上を指さした。

「紹介しよう、あれがアニヒレート・キャノンだ。」

男の指さす先、ずーっと遠くに・・・って、

「遠すぎて見えんわ!!」

「ごま粒にも見えなくて思わず突っ込む。」

「いやゝすまんすまん、そこまでは考えてなかった。けどそんなところから砲撃しようなんて、すごい奴だなあ。」

感心そうに男がなのはさんを見る。

なのはさんは男の方に杖を向ける。

「陸士部隊権限によりあなたを拘束します。おとなしく武器を捨て、投降してください。あなたには弁護の機会が与えられます。」

惚けていた私とシュリも慌ててデバイスを男に向ける。

「はっ、弁護の機会？そんなモンで私が、いや私たちが救われるとでも思ってるのか!？」

「わかりません、しかし事情があるなら管理局が・・・」

「その管理局のせいで俺たちの仲間は殺されたんだ!!」

私たちは息をのんだ。

「そんな権力の犬に成り下がって俺たちが救えるならとつくにそうしてる!!」

不意に怒鳴る男の横にモニターが現れた。

男はそれを見るとニヤツと笑った。

「おっと、時間のようだ。少々しゃべりすぎたようだ。」

男が何かを操作すると大きなモニターにアニヒレート・キャノンが映った。

砲身の先が少し輝いて見える。

「おしゃべりついでに教えてやろう。このアニヒレート・キャノンはJS事件の名残を使った物だ。」

ビクツとなのはさんが一瞬震えた。

「このキャノンの威力は管理局お得意のアルカンシエルにも劣らないと言われている。あのように複雑な連鎖爆発は起きないが、一瞬で塵に返すところは同じだろう。」

男のモニターからアラート音が出る。

「おっと、そろそろチャージも終わったようだ。では、ごきげんよう、会うことはないだろうが・・・」

男がすつとその場から飛んで去ろうとする。

「まちなさい!!!・・・シュリテイ、アストラルは男の追跡と確保!!!」

「なのはさんは？」

聞き返すと、彼女は凄絶な笑みで笑った。

「あれを墜とす！！」

え、墜とすつて・・・

「レイジングハート、行けるね！！」

『All right・Load Cartridge』

なのはさんが杖先をアニヒレート・キャノンにむけると、カードリッジがロードされていく。

ガシャンガシャンガシャン・・・て、いくつロードしてるんだよー！！

すべてロードしたのか、新しいマガジンに取り替えるのはさん。お、恐ろしい・・・

「ほら、早く追いかけてさい！！」

「は、はい！！」

慌てて男を追いかける。

一応、見守るためモニターに映すと、更にレイジングハートはカードリッジをロードしていた。

目算、10発。

「おいおい、いいのかいアストラル。えっと、そちらはシュリテイさんかな？あと10秒で発射だよ？」

その時、なのはさんがカウントダウンを始めた。

男が止まったのでシュリと挟む形で男と対峙する。

「8」

「7」

男の声となのはさんのカウントダウンが重なる。

「ダブルトリプルバインド!!」

シュリと声を合わせて発動するとあっさり男は捕まった。  
抵抗も見せない。

「4」

「3」

「今は逃げないから見ておくがいい、管理局最後の日を。」

「0」

ズンツとすさまじい衝撃が襲ってきた。

まぶしいくらいの光が上と下からぶつかる。

どちらも一歩も引かず、ただ中心でぶつかり合って純粹な魔力だけの固まりとなって巨大な球が出来ていく。

「ガンバレーなのはさん!!」

思わず拳を握って声援を送る。

すると彼女は・・・笑った。

そう、まるで悪魔のような笑いだった。



『ブレイク、シユ、トツ！！！』

なのはさんの叫びがモニターから聞こえる。すると、魔力の球体が徐々に上に持ち上がった。いった

「ば、ばかなー！」

後ろで男が叫んでいるが気にしない。

そしてそのまま加速度的に持ち上げていき、・・・アニヒレート・キャノンに飲み込まれた。

対抗する魔力がなくなったためなのはさんのピンクの魔法が宙を駆け抜けていく。

そして光が収束すると、なのはさんがイエイとこちらにVサインをしていた。

なんか、・・・仕草は可愛いけどやってたことは・・・怖い。

「あ、アニヒレート・キャノンが・・・アルカンシエルにも勝ったことのある魔力収束法が・・・」

今、なんかすごいことが聞こえた気がする。

もしかして、男が言っていた話って、本当だったの！？

普通あんな話聞かされてもうそだと思っただけだ。

「あ、あいつは人間か！？悪魔じゃないのか！？」

なんか、否定できなくなってきた。

『シユリテイ、アストラル。男は捕まえた？』

なのはさんの声に私とシユリと男は我に返った。

「は、はい、シユリと一緒に3重×2のバインドをかけておきました。」

『そう、なら今行くね。』

「う、ここで捕まってたまるか!!」

男はあっさりバインドを解くと逃げ出した。

「あ、待てっ!!」

慌てて追いかけるが、男はある程度の場所で突然消えた。

「転移魔法・・・」

移動しながら転移魔法を使うなんてどんな神経してるんだ？  
下手したら死ぬかもしれない荒技だ。

「逃げられたね。」

シユリに近づくと、彼女は悔しそうに呟いた。

「せつかく、捕まえてアートの恨みを晴らそうと思ってたのに。」

結局、今事件での犯人は捕まらなかった。

せつかくはやて隊長が偽物を持って行ったのに、本物が管理局で盗まれていたのが発覚したのはこの3時間後だった。

↳ to be continue

## 第25話（後書き）

これでクライマックスの道具はそろいました。

後は突き進むだけです。

もし現時点でフードをかぶった男達の目的が正確にわかったらすごいですね。

もしわかってたら惜しみない賞賛のみをあげたいと思います。

## 第26話(前書き)

アニメレート・キャノンの報告会とアストラルのレアスキルについて  
ver1・・・みたいな。

## 第26話

### 第26話

「結果を報告しろ。」

静かな男の声が部屋に響いた。

「はい、結果から言うと、成功です。」

黒い髪の女が懐から筒状の物を取り出す。  
クラシブル・マジックだ。

「魔力炉の方は？」

「そちらは二機が限界でした。後は先日壊した管理局の船から取るしかないかと。」

「なんとかしろ。」

「はい。」

沈黙が一瞬場を支配する。

「それにしても、あの高町なのは一等空尉、すごかったな。」

「ああ、あれは人間業じゃなかった。」

「悪魔だった。」

「私が作ったアニヒレート・キャノンが威力負けするなんて・・・」

口々に意見を交わす。

赤い髪の男がパンパンと手をたたく。

「しかし、いくら彼女の魔力が高いからと言って、我々の女神にはかなわん。」

ニヤツと一斉に男達が笑った。

「替えないが、祈願成就まであと少しだ。気を抜くな。」

「「「はっ。「「「

男がテーブルの上のビスケットをつまんだ。

「それで、あとのくらかかる。」

「これから式の再確認と埋め込み、最終調整があるので・・・決行は元旦になるかと。」

「そうか・・・ちょうど1月1日からか。縁起がいい。」

男が手を振ると、空だったシャンパングラスにシャンパンが現れる。

「アストラルよ、我々を導き給え・・・」

チーンとグラスを重ねる音が響き渡った。

「それにしても、ここに何日も滞在しているが、未だにばれないとは・・・管理局も間抜け揃いだな。」

誰かがそう呟いた。

\* \* \* \* \*

「それでは、報告会議を開きます。」

はやて隊長の声がミーティングルームに響く。

「今回の事件・・・仮にAC事件とおきます。・・・が、概要を高町隊長、お願いします。」

「はい。」

はやて多町に名前を呼ばれて、なのはさんが席を立つ。

「今回のAC事件は管理局からのロストログア奪取が目的と思われ、犯人は複数犯と思われる、うち一人とは私とシユリテイ、アストラルが接触しています。」

ピツとモニターに例の赤毛の男が映る。

「この人物が接触した犯人なのですが、所属世界、及び職業、名前等は一切わかりません。当人は研究者であると言ってますが、魔導師経験もあるようです。推定オーバーSランク。」

画面が切り替わり、なのはさんがバスターを撃ったときの映像になる。

「この画面のように、Sランクの私のバスターを受けきったことから彼の戦闘能力の高さが伺えます。」

「おお」「うそ」などの声が会議室に広がる。

「犯人との会話より、目的の一部に管理局の破壊も含まれている物と思われませう。」

「“管理局のせいで俺たちの仲間は殺されたんだ”か。」

フェイトさんが悲しそうに呟く。

「そのことやけど、クロノ提督、最近何か管理局が大勢の人を殺してしまった事件とかあるやろか？」

人の代わりにクロノ提督の画面が浮かぶ席に問いかける。

「調べてみたんだが、ここ最近ではJS事件以外に管理局が直接殺した事件は見あたらない。今、間接的に死に追いやってしまった事件について調べさせているが・・・どうだろうな、難しいだろう。」

「

どこまでを管理局の制とするかの線引きが難しいからな。言い出したらきりが無い。」

「よろしくたのみませう。じゃあ次に、私が遭遇した爆弾についての報告を、ティアナ。」

「はい。」

今度はティアナさんが立ち上がった。

「使用された爆弾は簡単なワイヤーシレンマの爆弾でした。火薬の総量は1kg弱。重点魔力量もかなり少なく、あのまま爆発してもトラックのガソリンに引火しない限りたいた爆発にはならない物でした。」



ワイヤージレンマとはタイマーを魔法プログラムの止めるか、3本のワイヤーのうち1本だけど切ると止まる形式の爆弾だ。ただ、その切るワイヤーは作った本人にしかわからず、判断の根拠も少ないため、なかなか解体自体は難しい爆弾だ。

「起動スイッチは？」

「魔法ですね。ある特定の重さと材質の物を荷台に載せると起動するように組まれた形跡がありました。」

かなりすごいスイッチだ。

魔法によって重さを指定するのは難しくないが、材質となるとかなり魔法プログラムが綿密になっていく。

いわば、魔法の体重計は出回っているが材質の種類を特定する機械は専門家しか持っていないという感じだ。

まあ、必要がないからその手の魔法も研究されにくいからな。

「了解、なら次はガジェットや。フェイト隊長。」

「はい。」

今度はフェイトさんが立ち上がった。

「今回のガジェットも地球で見かけた型と同じガジェット1型改、2型改、3型改でした。今までのとの相違点はありません。ただ、一度に3型改の召喚が見られたため犯人は相当の召喚魔法熟練者です。」

「なら最後にアニヒレート・キャノンについて、なのは隊長。」

「はい、写真はこの通りで、形状は私たちの故郷の世界にある戦車に似た形状です。しようには莫大な魔力と発車までの時間が必要であることがわかっています。威力はアルカンシエルに勝ったこと

があるとの犯人の言動が確認されてます。もろに地上にくらえば、ミッド都市はもちろん、その周辺にまで被害が及ぶ危険性がありました。」

そのアニヒレート・キャノンに純粋な魔力砲撃で打ち勝ったのもなのはさんなだけだね。

つまり、なのはさんが本気になれば、世界の一つや二つ滅ぼせるってわけ!?

「その他詳細はわかっていません。破片の採集も出来なかったの  
で現在はユーノ・スクライヤ司書に書籍の調査を依頼しています。」

「わかりました。・・・じゃあ今後の対策ですが・・・」

『会議中すみません、よろしいですか?』

オフラインと書かれていた画面が浮かぶユーノ司書の席に新たなウインドウとユーノ司書の顔が写る。

「いいよ、ちょうどユーノくんの話をしよったところやから。」

『なら、報告です。依頼のあったアニヒレート・キャノンについてですが、今から150年前に作られた魔法と質量兵器を組み合わせた武器です。発明世界は不明ですが、犯人の言とおおり、アルカシエルをしのぐ武器であったと思われまます。』

「そう、・・・」

『詳しい資料はデータ転送します。それとこちらは別件なんです  
が・・・事件には関係ないのでとってことで。なのは、はやて、  
フェイトの三人だけに話があるから時間作っというて。それじゃあ。』

再びオフラインの文字が浮かび上がってユーノ司書が消えた。

「というわけで、今後の対策なんてしようもないと思うから今日

の所は解散。明日からまた通常任務やからがんばろうな。」  
「「「「「はい」「」「」「」

会議はその場で解散となった。

\* \* \* \* \*

みんながいなくなって、なのは、フェイト、はやての三人だけが部屋に残る。

「それで、他の報告って？」

ユーノが映ったモニターにははやてが話しかける。

「うん、・・・確かはやての隊の中にアストラルって子がいたでしょ？」  
「うん、おるよ。」

「その子のレアスキルについて、少しわかったことがあるから。」

ユーノが向こうで何かを操作すると横に別の画面が現れて何か古いほんの写真が写る。

「もうしわけないけど、リング・オブ・フェイト 運命の環の方はまだ資料が見つかってないんだ。けどエカリス 聖櫃エカリスに関する資料があつたんだ。」

写った文章を読むとそれは古い歴史書だった。

「この歴史書のここの部分、“星の下に生まれし子供には聖櫃の

才能が備わり”であるでしょ？どうやらこの聖櫃エカリストって聖櫃のことも  
たいなんだ。この前後を読むとわかるんだけどこの聖櫃の才能を持  
つ子供には魔力の制限がないみたい。ただ、あまりに使いすぎると  
肉体が滅んでしまって、最後にはこの子供も死んでしまうんだだけ  
ね。けど、このレアスキルってふしぎに思ったことない？」

「不思議って？」

今度はなのはさんが聞く。

「うん、だってこんな膨大な魔力、どこから出てくるの？魔法は  
精神エネルギーを変換してそれを魔力としているんだよ？人間が持  
つ精神エネルギーには限界があるに決まってるじゃん。もし限界が  
なかったら、魔法を發動する前に肉体は滅んでるよ。」

「た、確かに・・・ユーノの言うとおりだ。」

フェイトが頷く。

「昔の研究で先天的に魔力を大量に持てる人間を作ろうとしたこ  
とがあつたらしいんだけど、あつけなく失敗。その個体は灰と化し  
たんだって。だから膨大な魔力を必要とするにはベルカのカードリ  
ツジシステムや魔力炉なんていうものが作られるようになったんだ  
よ。」

「へへ、・・・そう考えると、魔力炉ってどんな仕組みなんだろ  
う？」

「はい、なのはちゃん、それはあとでな。ユーノくん、つづけて。」

「う、うん。」

ユーノが苦笑気味に続ける。

「じゃあ、<sup>エカリスト</sup>聖櫃はどういう仕組みなのか。どうやらこの本を読む限りじゃ何か神様みたいな存在と人間との間に子供を産むとその子供は神様の方の精神エネルギーとリンカーコア自体がつながって<sup>エカ</sup>聖櫃のスキル、無限の魔力を扱えるみたい。」

「神様って……」

「……オカルト？」

「オカルトはあんまりやろ、フェイトちゃん。」

なのはとフェイトが同じことを考え、はやてちゃんが突っ込む。

「とにかく、今はそこまでしかわかってないから。この本を読む限りじゃアストラルって子も髪の毛の申し子……って言ったらおかしいけど、そんな感じの子だから。気をつけておいてね。」

「わかった、ありがとねユーノくん。」

「うん。それじゃ。」

ピツとユーノが映ったモニターが消える。

「ますます謎な子になってしまったな。」

「アストラルが聞いたらなんて言うかな？」

「多分……記憶がないで済まされるんじゃない？」

「そやけど、一応言っとく？」

沈黙が場を支配する。

「……明日あたり、アストラルに話してみる。」

なのはがそう沈黙を破った。

そのままお開きとなってそれぞれのすることをしに職場へと向かった。

}  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
}

## 第26話（後書き）

申し訳ありませんが、明日・明後日の更新は出来ません。  
明後日も夜頃となる予定です。

## 第27話(前書き)

はい、一日繰り上げての更新です。

そういえば、休みますと宣言して、その通りに休んだことってないかも……。

今回はちょっと本筋から離れて番外編みたいな物です。



## 第27話

### 第27話

「それじゃ、ごめんけど私、はやて隊長に呼ばれてるから二人で地下の保管庫にコレおいてきて。」

そういつて、なのはさんにジユラルミンケースを渡された。

中身はついさつき回収したロストログアが入っている。

異世界の調査団が見つけた物で使い方や効果とかは全くわかっていないが、近くにあった古い書物からはあまり危険な物ではないと思われる。

一応、無限書庫にコレ関係の書物を今探してもらっている。

「了解。」

「お疲れ様でした。」

敬礼してなのはさんを見送る。

「さて、私たちもさっさと任務を完了しますか。」

なのはさんが見えなくなってから私はケースを持ちなおすと地下に向かって歩き出す。

「それにしてもコレ、なんだろうね。」

「しらな〜い、ど〜せまともな物じゃないでしょ。」

シユリに適当に返された。

「ま、確かにね。」

ロストロギアにまともな物なんて存在するわけがないのだ。  
まともな物だったらロストロギアになんか指定されないからね。

「こらヴィヴィオ！廊下は走らない！！」

「はい！！」

どこからかアイナさんとヴィヴィオの声が聞こえてきた。

「ヴィヴィオ来てたんだね。」

シユリがうれしそうに言う。

「みたい・・・なんか久しぶりかも。」

「だね、ちよつと最近忙しかったから。」

「よし、後で遊びに行つてやろう！！」

「賛成！！私とシユリはこの後オフだからね。」

そんなことを言いながら角を曲がる。

「っ！！！！」

と、曲がった先にヴィヴィオがいきなり現れた。

ぶつからないように慌てて後ろに下がるが、足が滑ってしまふ。  
ヴィヴィオも驚いて止まれないでいる。

「イダッ！！」

「んんっ！！」

そのまま一緒に廊下に倒れてしまう。

「いったゝゝ・・・ヴィヴィオ、大丈夫？」

「うゝゝん、大丈夫。」

すつと立ち上がったっている。

どうやら怪我はしていないようだ。

まあ、私がしっかり両手で受け止めたからね。  
・・・っん？両手？

「ちょっと、アート！！いくらヴィヴィオのためとはいえロスト  
ロギア入ったケースを放り投げちゃいかんでしょ！！！」

「うわ、やべー！！！」

慌ててケースを探す。

あつた、廊下の隅に転がっている。

慌ててケースに近寄り、中を開ける。

「よ、よかつたゝゝ。」

ケースの中には水晶のような物が入っている。

衝撃による傷は一つも付いてないみたいだ。

もし壊れていたら、しかられるとかの以前に・・・最悪六課が消  
し飛んでしまう。

「うわゝキレイ！！！」

ヴィヴィオがこっちに来て水晶に手を触れようとする。

「あ、ダメ！！！」

慌ててヴィヴィオの手をつかんで止める。

「あ……」

結果、二人で一緒に触ることになってしまった。

『Trade』

無機質な声と共にまぶしい白光が水晶から漏れる。

一瞬目がくらんだ後に、光が収まる。

「……わたし？」

そしてなぜか、目の前に自分がいた。

自分が自分の手をつかんでる……。

って、意味わからん。

正確には目の前にいる自分が今意識がある自分の手をつかんでいるってところか。

「何で私がもう一人？」

何が何だか全然わからない。

「アート、大丈夫!？」

「ヴィヴィオも平気？」

シュリとアイネさんが心配そうに駆け寄ってくる。

「うん大丈夫だよ、シュリ。何ともない。」

瞬間、空気が凍り付いた。

「……ヴィヴィオ？」

「ん、何？シユリテイさん。」

シユリが問うと目の前の私が答える。

その事態に私も固まる。

「……？」

ただヴィヴィオ一人が頭の上に？マークを浮かべていた。

「……アート？」

私を指さしながらゆっくりとシユリが聞いてくる。  
私が頷くとシユリは驚きの顔のまま、頭を抱えた。

「アート、ほら鏡。」

鏡を向けられると鏡はヴィヴィオを映していた。

「……コレが私？」

発音したとおりに鏡の中のヴィヴィオの口が動く。

ポーゼンとした。

落ち着け、落ち着くんだ。

状況を整理しろ。

ヴィヴィオと廊下でぶつかって、ロストロギアを開けて無事を確

認した。

それで、ヴィヴィオが触れようとするから危ないから止めようとして、一緒に触る結果となった。

そしたら突然光に目がくらんで、気がついたら、

「私とヴィヴィオが入れ替わった!？」

ということになってしまった。

\* \* \* \* \*

とりあえず、いったん場所を変えよう・・・というわけで私とシユリの部屋に四人はやってきた。

あれこれ戻る方法はないかと二人で一緒に水晶に触ったり、頭をぶつかけたりもした。

が、全く状況は変わらなかった。

「あの、私なのはさんに連絡を取ってきます。」

「「ま、待て〜〜〜!!」「」

まとも、というか当たり前のことをいうアイネさんを慌てて止める。

「お願いですからしばらくここで待っていてください。」

「そうです、なのはさんはもちろん、はやてさんやフェイトさんにもしばらくは連絡しないでください。」

「でも・・・」

いや、彼女は正しいのだ。  
正しいことをやるうとしているのはわかるのだ。  
わかるんだけど……

「私とシユリ、そしてヴィヴィオの命がかかってるんです!!」  
「ヴィヴィオもなのはママやフェイトママに怒られたくないよね  
!?!」

「うん、ママ達おこったら怖いもん。」  
「ほら、こついつことですから!!」

一気に色々理由をひねり出してアイナさんを説得する。

「……わかりました。」

ほっと、私とシユリ問ヴィヴィオの間に穏やかな空気が流れた。

「だけどです!!……明日の夜までに解決しない場合は報告し  
ます。いいですね。」

「はい、助かります。」

「それまでには何とかします。」

コクコクとアイナさんの言葉を受け入れる。

良かった、コレであと一日は命が長らえられる。

「だけど、どうやって戻るのが?」

ヴィヴィオが困ったように聞く。

「あ、それは今考えついたことがある。ちょっとまってね。」

シュリはモニターを出すとどこかにコールをかけた。

『はい、ユーノです。どうかした、シュリテイさん。』

現れたのはユーノ司書だった。

「はい、実はさきつきちようさを依頼したロストログアなんですけど……何かわかりました？」

『うーん、今ちようど調べてるんだけどね……ちょっとわかってることが少なすぎるんだよね。形状に発掘場所、およその年号……これだけじゃね。』

持っていた本をばたばたと振られる。

「あ、さつきわかったことですけど、効果は精神交換、もしくは魂の交換みたいです。」

『精神の交換？』

「はい、術者と術者の精神を入れ替えてしまうものみたいです。」  
『へへ、あれにそんな機能が……けどどうやってわかったの？』  
「えっ……」

あ、シュリが固まった。

こ、こつちを見るな……！

そんな目で見られたって答えられないよ……！

「そ、その……本、そうです本ですよ……！」

『本？』

「そうです、発掘された現場にあったほんの一部にそんなことが書かれていたんです。」

『へへ、なら後でそれ無限書庫で回収しないと……何かわか



「つたら連絡するね。」

「はい、よろしくお願いします!!。」

ピツとシュリが通信を切った。

「これで戻り方が見つかるかもしれないから・・・あとは今から明日までをどうやって過ごすかだね。」

「そうですね・・・。」

シュリとアイナさんが、私とヴィヴィオを見比べる。

「・・・ごまかすしかない。」

「ですね。それしかありません。」

うんうんと二人は頷く。

「・・・て、誤魔化すってどうやって?」

「・・・振りでしょ、そりゃ。」

「振りですよ。」

「「ふり?」

ヴィヴィオの振り、ねえ?

「なのはママ、フェイトママ、シュリティさん、アイナさん?」

「えと、シュリ、アイナさん、フェイトマ・・・フェイトさん、なのはさん?」

思いついた名前をそれぞれそれなりの振りで言ってみる。

「うんうん、そんな感じ。コレで今夜は乗り切ろうね。」

シユリはどこかうれしそうに頷く。

まあ、シユリはなんかヴィヴィオのことが好きみたいだから。いいんだけどね。

「じゃあ明日の朝、シユリはアイナさんにここに連れてきてもらって。ヴィヴィオはここで私と一緒に寝ようね。」

「こうやって、私とヴィヴィオの入れ替わり作戦(?)が始まった。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

## 第27話（後書き）

ヴィヴィオ、出てきました。

いや、実は先日。友にヴィヴィオの話を持ちかけられてそういえば自分の小説にはあんまし出てこないな、というかヴィヴィオの存在をすっかり忘れてたことに気づきました。

## 第28話(前書き)

ヴィヴィオ前編終了です。

え、なぜ前編か？

もちろん、続くからです。

## 第28話

### 第28話

アイネさんに連れられて、ヴィヴィオの姿をした私は、なのはさんとフェイトさんの部屋に戻った。

部屋に入るとすでに二人は部屋にいた。

「ヴィヴィオ、お帰り。」

「お帰り、ヴィヴィオ。アイネさんもお疲れ様です。」

「た、ただいま、なのはママ、フェイトママ。」

部屋で練習したようになのはさんの足に抱きつく。

いくら演技とはいえこの年で抱きつくのは……恥ずかしい。

「ヴィヴィオ、どこに行ってたの？」

ヒョイとなのはさんに抱きかかえられる。

「うん、シュリ……シュリテイさんとアストラルさんの部屋。」

「二人と何してたの？」

「おはなし、シュリテイさんの学校のお話やお仕事中的なのはママとフェイトママのこと。」

「へへ、私のことはなんていった？」

「うん、なのはママは厳しくて怖いけど、優しいしとっても格好いいって。」

「なら私は？」

「えと、フェイトママは基本優しいけど、訓練はきついつて。あ、人一番心配性だっていったよ。」

「あ、それはわかるかも。」

「え、なのは。それはひどいよ!？」

ハハハツとひとしきり笑う。

「よし、遅くなるから早くご飯食べにいこっか。」

「うん!」

下ろしてもらつと一生懸命ヴィヴィオのまねをしながら歩いた。

あ、もちろんなのはさんとフェイトさんの手をつないでだけど・

夜ご飯はハンバーグと野菜炒めだった。

「「「「ただただきまゝす。」」」」

挨拶をすると早速ハンバーグから手を付け始める。

フォークで小さく切って口に運ぶ。

会話を楽しみながら食事は無事に終わるかと思つたところだった。

「あれ、ヴィヴィオ。今日はちゃんとピーマン食べてるね。」

ア……。

「ホントだ、ヴィヴィオ苦いのダメだったのに……。」

や、やばっ!!

何も考えずに食べてしまった。

思えばヴィヴィオは苦いのダメだったよ。

「そ、その……ちゃんと食べないとなのはママみたいに大きく

なれないっていつてたから・・・」

く、くるしい。

いいわけとしては苦しすぎる。

普通そうはいわれても食べないのが子供だ。

実際私も煮た豆とかは嫌いだから残してたし。

無理矢理食べてたら普通顔に出るから周りは気づくはずだ。

「偉いねヴィヴィオ。好き嫌いなく食べるのはいいことだよ。」

あ、ありがたやフェイトさん。

気づかずに流してくれた。

「えへへ。」

一緒に頭をなでられて思わず笑い合う。

・・・と、なのはさんと目があった。

なんかジーツと見られている。

「な、なのはママ？・・・どうかした？」

「・・・ううん、何でもない。ほら、それよりも口の周りがソースで汚れてるよ。」

「あ、ホントだ。ほらヴィヴィオ、こっち向いて。」

「んんっ〜。」

フェイトさんに口をぬぐってもらった。

なんかとつてもちっちゃい子みたいで、恥ずかしい。

けど、ここで振り払ったりしたら余計に怪しまれる。

なんとか食事は笑顔で通した。  
なのはさんに気づかれたかも、とも思ったが、何も言ってこない  
のではいけないのだろう。部屋に戻ると少しおしゃべりした後、  
お風呂に入ることになった。

「ヴィヴィオ、今日はどっちと入る？」

「ふえ？」

一瞬私は頭が真っ白になった。

何せヴィヴィオにはいつも二人いるときは一緒にお風呂に入っ  
るといわれているからだ。

この質問は考えてなかった。

「う〜ん、・・・二人一緒がいい。」

こ、これでなんとか乗り切れないか。

「よし、なら一緒に入ろうね。」

「あ、なのはちよつと先に入って。私コレ片付けとくから。」

フェイトさんは机の上に散らかった何かの資料を指さす。

「了解、ほらヴィヴィオ、おいで。」

「うん。」

テテテツとなのはさんについて行く。

なのはさんに手伝ってもらいながら服を脱ぎ、髪留めを脇に避  
ける。

「ほら、まずは髪を洗うよ。」



「はい。」

いすに座ると裸になったなのはさんがシャンプーをしてくれた。なんか人に洗ってもらうなんてかなり久しぶりだ。ごしごしとしっかり洗ってくれるからなんかとても気持ちいい。

「ながすよ。」

ザバ〜とシャワーのお湯をかけられて泡が落ちていく。

「なのは、私も入るよ。」

「うん、いいよ。」

フェイトさんも服を脱いで中に入ってきた。

なのはさん達のお風呂場は広く三人でも余裕だった。

「あ、もう頭洗ってもらったんだ。なら私は体を洗ってあげるね。」

泡立てたタオルを持ってフェイトさんは後ろに回り込むと「し」と体を擦ってくれる。

「かゆいところとかない？」

「うん、へいき。」

その間なのはさんは髪を洗っていた。長い亜麻色の髪が水の流れに沿って揺れている。

「ヴィヴィオ〜、流すよ。」

「はい。」

フェイトさんにサーツと泡を流してもらおうと、私はなのはさんに向き合った。

「今日はヴィヴィオもなのはママとフェイトママの体洗ってあげる。」

「え、ヴィヴィオ。洗ってくれるの？ありがとう。」

フェイトさんからタオルを取ると石けんで泡立ててなのはさんの体を洗う。

これはいつもお世話になってる私とシュリ、そしてヴィヴィオからの贈り物だ。

ちよつと予定内行動だけど、やりたくなつたんだから即実行だ。

「きもちいい？」

「うん、きもち。」

「通りあらうと、フェイトさんにシャワーのお湯を出してもらおう。」

「ながしまゝす。」

「はい。」

さつきとは立場が逆転してゆつくりと泡を流していく。

背丈の差か、なかなか上の方が流れないがなんとか流し終える。

「次はフェイトママ。」

一度タオルを洗うと今度はフェイトママに向き直る。

「え、私はいいよ。疲れたでしょ、ヴィヴィオ？」

「うっん、やる。」

無理矢理後ろを向かせると背中から洗い始めた。  
「じじいと柔らかい肌をキレイにしていく。」

「ながしまゝす。」

「おねがいね。」

今度はなのはさんにシャワーのお湯を出してもらって流す。

なのはさんでコツを覚えたのかさつきよりも手早く流すことが出来た。

「できあがり〜!!」

「ありがとね、ヴィヴィオ。」

「ありがとう、ヴィヴィオ。」

「えへへ〜。」

湯船に三人で一緒につかる。

「くくくふ〜。」

深いため息が三人重なる。

「・・・つく、ははは。」

「ふふふ、ははは・・・」

「へへへ・・・」

それがおもしろくて思わず笑い合ってしまう。

「そういえば、ヴィヴィオ。今日は水鉄砲で遊ばないんだね。」

なにそれ!?

聞いてないよ、ヴィヴィオ!!

「ホントだ・・・あ、ちょっと届かないのかな?」

フェイトさんが立ち上がるとティアナのクロスミラージュに似た形の水鉄砲を取ってくる。

「はい、ヴィヴィオ。」

「ありがとう、フェイトママ。」

よ、よくわからないけど・・・コレで遊べばいいんだよね。

幸いお湯につければ水を吸って、お湯から出してグリップの部分を握れば水が飛び出す仕組みみたいだから適当にやったら遊んでるよつに見えるでしょ。

「えい!!!」

なのはママめがけて握ると水がピューと出る。

「アゝヴィヴィオ、なのはママを撃ったね。お返しだ!!」

なのはさんは手で水鉄砲を作るとピュッとお湯を飛ばす。

「うわ・・・なら次はこっち。」

今度はフェイトママを撃つ。

「あ、ヴィヴィオ。フェイトママも負けないぞ。」

三人とも笑いながら水鉄砲を撃ち合って、遊んだ。で、お風呂から出てみると一時間以上が経過していた。

「・・・ちよつと遊びすぎたね。」

なのはさんが反省するようについて。

「けど、たのしかったよ。」

無邪気に笑うとなのはさんとフェイトさんが一緒になでてくれた。

「よし、もう遅いから寝よっか。」

「うん!!」

フェイトさんとなのはさんの間に入ると目を閉じる。

「お休み、ヴィヴィオ。」

「お休み。」

「お休みなさい。」

瞼を閉じると睡魔はすぐにやってきた。

今日はいろんなことがあったから疲れてたのだろう。

明日が大変だけど・・・なんとか元の体に戻れるといいなあ。

\* \* \* \* \*

結果からいうと、翌日、あっさり元体に戻ることが出来た。朝になって、アイネさんに連れられてシユリと私の部屋に戻るとシユリはすでにユーノ司書と話をしていた。

「それで、何かわかりましたか。」

『うん、なんとか似たような資料はあったよ。多分それは“オポネントミラー《Opponent of mirror》”だと思うよ。』

「オポネントミラー？」

『そう、人の精神と精神を入れ替える魔道装置で効果は20時間ほどで元に戻るみたいだよ。』

「ほ、ほんとですか!!」

やったー、なら後1時間ほどで元に戻れるんだ!!

『うん、詳しい資料を後で送っとくよ。それじゃ、またね。』

というわけで、一時間ほどしたら体が光に包まれて元に戻った。

「ばれる前に戻れて良かった。」

胸をなで下ろした。

もしなのはさん達にばれてたら命なんてないからね。

ちよつといろいろ怪しいことになってしまったけど、コレで何もかもが元通り。

お仕置きもなし。

最高の結果！！

\* \* \* \* \*

いっぽう、訓練のためにシュミレーターの法に向かっていたのはさんとフェイトさんだが、

「ねえ、フェイトちゃん。なんか昨日のヴィヴィオ変じゃなかった？」

「そう？解くには・・・ちよつと気になる部分もあるけど、普通だったと思うよ。」

「そう・・・なら私の勘違いなのかな。」

エントランスホールを抜けて外に出ると、そこに連絡が入った。

『ごめん、なのは、フェイト。今いいかな？』

『どうしたの、ユーノくん。』

『えとね、アストラルさんとシュリテイさんに言われて昨日回収してたロストログアに関しての資料を新しく見つけられたから送るところかと思って。』

「え、アストラルとシュリテイが？」

「なのは、そんなこと頼んだの？」

なのはは身に覚えが内ので首を振る。フェイトも同様だった。

『え、二人とも知らないことなの？・・・まあいいや、一応送ったからね。』

ユーノはそれだけというと、通信を切った。  
何かと彼も忙しいのだろう。

「・・・そういうことか。」

「ん？どうかした、なのは？」

ユーノと通信をしながら送られてきた資料を読んでいたなのはが  
納得の声を上げた。

「うん、昨日のヴィヴィオの拳動不審にね、納得がいっただけ。」

「え、なに？」

「・・・ひみつ。後でのお楽しみ。」

なのは何か嫌らしい笑みを浮かべながらスキップをして訓練場  
に向かっていった。

↳ to be continue ↵



第28話（後書き）

もしかしたら明日と明後日の更新は出来ないかもしれませんが。  
ご了承ください。

## 第29話（前書き）

先日の修正ですが、なんと、話数が狂っていました。

まあ、上から順番に読んでいただけでしたら何も感じなかったはずです。すみませんでした。

今回は、ヴィヴィオ編後編の第1部という所でしょうか。

計三部ほどを計画しています。

## 第29話

### 第29話

「政府の命令！？ふざけるな！！」

男の人が部屋の中で電話に向かって怒鳴り声を上げている。

「・・・ああ、そんなことはわかっている！！しかしだな、」

私はその人をドアの隙間からじっと見つめている。

「そんなことは関係ない！！そんな計画くそくらえだ！！」

その人は手に持った紙をゴミ箱にぶちまける。

「私はそんなことのためにアストラルを生み出した訳じゃない！！」

ダンツと机をたたく音が部屋に響く。

「・・・それは脅しか。」

急に底冷えした声が静かに告げられる。

「それなら、私にも考えがある。」

それだけ言うと、男は受話器をたたきつけた。

ふうつと息をつく音とともに目があった。

「なんだアストラル、起こしてしまったか。」

男の人は近寄ってドアを開けると私の頭をなでてくれた。

「ううん・・・それよりもお父さん、平気？」

「ああ、平気だとも。心配することは何もない。」

彼は私を抱きかかえて肩に乗せた。

小さい私は彼の頭にしがみつく。

「本当？」

「ああ、本当だとも・・・そうだ、母さんに会いに行こうか。」

「うんっ!!」

私が頷くと、彼は笑いながら一緒に部屋を出た。

廊下の端にあるエレベータに乗って一番下にあるボタンを押す。

『認識番号、及び名前、パスワードを言ってください。』

機械音声がエレベータ内に響く。

「認識番号S0654ED、  
イ、パスワードASC072346」

『照合終了、ミスターキャロメイ、お疲れ様です。』

音声が途切れるとエレベータは下に動き出す。

どんどん階を示す番号が小さくなり1を超えたところで再び増え始める。

「お母さん、今日もしたにいますの？」

いつもお母さんに会いに行く時は地下に潜っている。

「ああ、母さんは下から動けないんだ。．．．けど、お前から会いに行けるからいいだろ？」

「うん。」

チーンという音とともにドアが開く。

私は未だにお父さんの肩に乗ったまま、きやつきやつとはしゃぐ。父さんは、細い分かれ道のない廊下を奥まで歩いていく。

そして、大きい広間に行き着く。

私は飛び降りると、叫んだ。

「お母さん、会いに来たよ！！！」

すると、目の前に女の人がスウツと現れた。

「久しぶり、アストラル。」

女の人は笑うと私の頭をくしゃくしゃとなでてくれる。

後ろからお父さんが歩いてくる。

「久しぶりだな。」

「ええ、あなたも。」

二人は近寄ると、ハグとキスをする。

そのまましばらく見つめ合った後、お父さんは急にまじめな顔をした。

「今日はお別れを言いに来た。」  
「そう……」

彼女は寂しそうに返す。

「……何もかもお見通しか。」  
「ええ……けど、アストラルのためだから。」  
「そうだな。」

「ねえ、お父さん、お母さん、何で悲しそうな顔をするの。」  
私はふたりが寂しそうにしているのに我慢できなかった。

「ん、そうだな……これから寂しくなるからかな。」  
「なんで？」  
「……アストラル。これからはばらく、私とあなたは会えなくなるの。」

お母さんがつらそうに告げる。

「いやだよ、どうして!？」  
「……それがアストラルのためだ。」

父さんが私の肩を抱きつく。

「わたしの？私のためなの？それなら別にいい。私は私のために  
お母さんと離れるなんていや!？」

「わかって、アストラル。」  
「アストラル。」

何を言っても無駄な気配に私は泣き出してしまふ。

「アストラル」

「アストラル、愛してるから。」

父と母もその場に私を挟んで抱きつきながら一緒に泣いた。

\* \* \* \* \*

ヴィヴィオとの一件の翌日。

私とシユリは作戦会議室に呼ばれた。

部屋に到着するとすでになのはさん、フェイトさん、はやてさんがいた。

他にもアイナさんやヴィヴィオがいる。

・・・なぜにアイナさんとヴィヴィオ？

「あ、ちよつと良かった。みんなそろつたし、本題に入ろつか。」

はやてさんがそういつて、なのはさんに目線を送った。

すると、なのはさんが一歩前が出る。

「ねえ、二人とも。一昨日のロストロギアはちゃんと保管できた

？」

ぎくっ～～～！！

「は、はい。後で管理室に行ってもらえれば、わかると思います。」

「ここは無難に乗り切ろう。」

「そう、・・・なら保管庫に持って行く前は？」

「ば、ばれてる？」

「これは絶対ばれてる！！」

ヴィヴィオを見るとごめんなさいと目が訴えていた。  
アイナさんもすまなそうに首を伏せている。

「ヴィ〜ヴィ〜オ〜！！しゃべったな〜！！」

「だ、だって・・・なのはママが正直に話さないと・・・」

ヴィヴィオがそこで言葉を切るとぶるぶると震えた。

あ、何かわかった気がする。

それはしょうがないかも・・・

視線を戻すとなのはさんは凄惨な笑顔を浮かべていた。

「任務上でのロストログアの取り扱い不注意、並びに報告義務の不備、その他諸々でお仕置きね」

即座に私とシユリはきびすを返した。

手を捕まれる前に部屋から出て行こうと扉に手をかける。

「あ、あかない！？」

鍵がかかって扉が開かなくなった。



振り返ると、はやてさんが両手を合わせていた。  
どうやらはやてさんがシステムで鍵をロックしたようだ。

「こら、逃げるのはダメだよ？ いけないことしたんだからちゃんと償わないと。」

いやいや、命を持って償うようなことをしたこと身に覚えありませんから。

というか、ここは結果往来で見逃してよ！！

「え、そんなの嫌だ。せつかくのストレス発散の機会を不意にするなんて・・・なんていうのは冗談で、」

いやいや、目が笑ってないから。

冗談にしては目が笑ってないから。

「まずヴィヴィオは今日と明日、ピーマン料理づくしね。」

「うえ〜、いやだ〜！！」

「泣いたってダメ。ちゃんとおいしいの作ってあげるから、ね？」

「ほんと？」

「ほんとほんと、ピーマンが大好きになるかもよ。」

「・・・うん、がんばる。」

や、やさしい。

むちゃくちゃヴィヴィオには優しい。

事の発端といえば、ヴィヴィオだったのに・・・

あ、もしかしたらヴィヴィオのおかげで私たちもそんなにひどいお仕置きは受けなくても・・・

「シユリティは後で私と一緒に模擬戦しようね。もちろん一対一

のガチンコ本気モードだね。」

ア、そんなわけないか。

シュリ、南無。

「で、アストラルは・・・」

き、来た！！

「これ！！」

なのはさんが何か服を広げて見せた。

「つて、それ聖王教会付属の幼稚園の制服じゃなですか。それがどうかしました？」

「うん、コレ着て今日と明日過ごしてね。」

はい？

・・・今なんていいました？

「あ、もちろんそのサイズじゃこの服は入らないから・・・レイジングハート。」

『Stand by ready, set up.』

レイジングハートがさつと起動する。

「幻惑呪文、スピリット・ムーン発動！」

『Spirit Moon, Starting.』

さつと私の下に魔方陣が出現して体が淡い光に包まれる。

まるで・・・そう、バリアジャケットを装着する時みたいに・・・  
光が収まると、私は・・・

「ち、ちいさー!!」

「「「かわいい〜!!」」」

縮んでいた。

いや、実際に縮むことはないだろう。

さっき幻惑呪文とか言ってたからこれは幻影。

「さあ、これ着ようね」

なのはさんにじりじりと追い詰められていく。

そこにがしつと背後から誰かに羽交い締めにされた。

「し、シユリ?」

「ん〜、かわいい〜。」

ひよいと私を抱きかかえて膝の上に置くと頭をなで始めた。

「ち、ちよつと!!髪がぼさぼさに・・・」

「なら後で私が梳かしてあげる。」

私の抗議はあっさりフェイトさんに打ち消された。

「アストラル、そのまま見えから聞いてな。」

唯一、蚊帳の外という感じで机に付いているはやて隊長が真剣な顔をして話し始める。

「実は先日、聖王教会から個人的にお願いされてな。附属幼稚園のある子の面倒を見てほしいそうなんや。難かいじめとかに遭ってるらしいんだけど・・・で、実際幼稚園に入れて、しかも子供以外にその子が心を開くとも思えんから、アストラル、頼んだで。」

「子供のいじめってどんな・・・」

「ああ、詳しいことは向こうから聞いて。うちはよう知らんから。」

な、投げやりだなあ。

「・・・はい。けど、それって私である必要性はないんじゃない。」

「そんな気にしたらあかん。あ、もちろんうちもアストラルの小さな姿を見たかったなんてことはないからな。」

本音ただ漏れですよ。

「ま、そういうわけや。今日一日ヴィヴィオと一緒に頑張ってきてくれや。」

「・・・りょくかい。」

そういうわけで、この後詳しい説明などを聞いた後、最後まで抵抗したにはしたが制服を着せられ、ヴィヴィオとなのはさんと一緒に幼稚園に向かった。

もちろん、さんざん髪をなで回され、たかいたかいをされ、しかもみんなであれをつけたらかわいいなどと言っておもちゃにされ続けた。

↳ to be continue

### 第30話(前書き)

投稿遅くなりましたー！ヴィヴィオ編後編第二部です。

## 第30話

### 第30話

幼稚園に着くと、私となのはさん、ヴィヴィオは応接室に通された。

中には以前、入院したときにお世話になったカリムさんがいた。

「お久しぶり、なのはさん、ヴィヴィオ、アストラル。」

「お久しぶりです、騎士カリム。」

「おはようございます。カリムさん。」

「えと、お久しぶりです。」

中にいるとカリムさんの横にいた女の方がお茶を入れてくれた。

「あ、アストラルは彼女と会うのは初めてね。シスターシャツハよ。」

「シャツハ・ヌエラです。聖王教会のシスターをやってます。」

「よろしくお願いします、シスターシャツハ。私はアストラル・

S・キャロメイです。」

「アストラルね。よろしく。」

席に着くと「早速だけど、」とカリムさんが本題に入った。

「この写真の子が今回お願いしたい子なの。」

ピッと写真が画面に映る。

活発そうな子だ。

赤……紅色のショートカットで笑顔がよく似合っている。

「名前は、エニス・ヒュノディア、四歳。ミッド出身で先生達はよく活発で利口ないい子だと噂されていたの。」

「あ、この子見たことある!!」

「そうだね、ヴィヴィオは見たことはあるかもしれないね。年も近いから・・・」

そういいながらカリムさんは別の資料を皆に見せる。

「実はこの子、先天的に魔力が強くて、将来はうちの教会に所属してもらいたいほどの。」

「ホントだ、魔力量だけで見ると現段階でAAランク。制御の部分がCだからちよつと不安が残るけど、それはこれから教えていけばいいから・・・教え甲斐がありそうだね。」

なのはさんはうれしそうに言う。

どうやら教導官の血がうづくようだ。

「そうなんだけど・・・実は今この子、いじめに遭ってるの。」

「いじめ・・・」

途端、皆の雰囲気沈む。

「本人があまり話さないからよくはわからないけど、遊びから仲間はずれにされたり、物を隠されたりしているみたいなのよ。」

典型的ないじめの例だ。

まだ幼稚園くらいだからホントにかわいらしいいじめだ。

「本人もかなり堪えてるみたいだから、出来ればみんなと仲良く

してほしいんだけど・・・お願いできるかな？」

じつとこちらを見られる。

「はい、出来る限りはさせてもらいます。」

「うん、よろしくね、アストラル。」

その後、色々と注意を受けて幼稚園の皆が集まっているという場所に向かった。

\* \* \* \* \*

「はい、みんな注目！」

私が入る組を担当するカミラ先生が両手をたたく。

「今日と明日だけ私たちと一緒に遊ぶお友達を紹介します。アストラル・キャロメイちゃんです。」

「初めまして、アストラルキャロメイです。仲良くしてください。」

「たった二日間だけど、みんな仲良くしてあげてね。」

「・・・はい」

「じゃあ、今からお歌の練習をしましょう。みんな、ちゃんと本はあるかな？」

みんなが動くのを見渡しながら私は目的の子を探す。  
・・・いた。

教室の隅で小さくなっている。



「あ、誰かアストラルちゃんと一緒に本を見せてあげて。」  
「はい。」

私がエニスちゃんに近づこうとすると横から腕を引っ張られた。

「アストラルちゃん、一緒に見よう。」

「う、・・・うん。」

見知らぬ子の厚意に思わず頷く。

あゝばかばか、ここでエリスちゃんに近づかなきゃ意味がないじゃない。

しかし、一度頷いてしまった物は取り消せない。

一緒にその子と本を広げた。

「あ、私はカナミ・ヤリニティ。よろしくね。」

「うん、カナミちゃんね。よろしく。」

一緒に歌を歌いながらチラツとエニスちゃんの方を見る。

彼女は未だに隅の方で小さく口を動かしながら歌っていた。

「ねえ、あのこと一緒に歌っちゃダメ？」

エツとカナミちゃんは私が指さしたエニスちゃんを見ると露骨に嫌そうな顔をした。

「ごめん、私は嫌。何かあのこのこと嫌い。」

「そう・・・ならいいや。」

どうやらカナミちゃんもあのこのことは好きじゃないみたいだ。

何か少し信じられない。

カナミちゃんはどちらかというところ、優しくていじめとかしない人だと感じてたのに……

しばらく歌を歌うと自由時間になった。

「ね、アストラルちゃん。一緒にあそぼ!!」

「あ、ずるい。アストラルちゃんは私と遊ぶの!!」

「あ、カレンちゃんずるい!! どうせご本読むだけでしょ。それよりも外で鬼ごっこしようよ!!」

わらわらと手を引かれて所々でけんかがおこる。

「ほらみんな!! そんなに言い寄ったらアストラルちゃん困ってるでしょ!!」

カナミちゃんが声を上げてみんなの手から私を守ってくれる。

「ちゃんとアストラルちゃんの見聞も聞かなきゃ、ね。」

「じゃあ、アストラルちゃんは何したいの?」

「そうだそうだ、カナミちゃんが聞いて。」

どうなの、とカナミちゃんに目線で聞かれる。

「えと、なら鬼ごっこで。」

「よっしゃ!!」

「なら私も!!」

「あ、私も入れて!!」

次々と仲間が増えていく。

「あの、・・・私も・・・」

そんな中にエニスちゃんもいた。

もちろん、私は快く承諾しようとするが、

「え〜、エニスも入るの。」

「お前が来るなら俺、鬼ごっこ辞めた〜。」

「マジ〜、なら私も。」

「アストラルちゃんも辞めといた方がいいよ〜。」

「そうだぞ〜、」

しかし、いろんな所から反発の声が上がる。

コレでは私がいいと言える雰囲気ではない。

ごめん、エニスちゃん。

心の中で謝りながら私はみんなと鬼ごっこをしに外へ向かった。

エニスちゃんは教室でポツ〜ンと取り残されている。

その姿を見ると、心がちくりとした。

「ねえ、なんでみんなエニスちゃんをいじめてるの？」

5分ぐらいしてから一緒に逃げている男の子に聞いてみた。

「は、エニス？別に俺たちはいじめてるわけじゃねえよ。」

「けど、さつきみんなエニスちゃんと遊ばないみたいなこと・・・」

「・・・正直わかんね。別にあいつが何をしたってわけでもないんだ。ただ・・・」

「ただ？」

男の子はしばらく黙りこくる。

「・・・ただ、近くにるのが嫌というか、・・・あゝもう、  
わかんねー！」

突然、今度はわめく。

「とにかく、だ！！俺はあいつと遊ぶ気は今のところない。それ  
だけだ！！」

そういうと、男の子は途中でさっとはする方向を変えた。  
なんかよう、わからん。

みんなで遊んだ後、お昼寝の時間になった。

私は眠くないのでみんなが寝静まった後、そつと抜け出した。  
幸い見張っていた先生も今は職員室に行っている。

階段を上って立ち入り禁止区域になっている屋上に出る。  
そこは一面花壇になっていた。

「うわゝ、広い。」

思わず呟きながら歩いていると人影が見えた。

チヨロツと服の端が見える。

こここの制服だった。

「誰？」

問いかけると、伸びていた影がビクツと震えた。  
ゆっくりと歩きながらのぞき込むとエニスちゃんだった。

「どうしたの、こんな所で。」

話しかけると、ゆっくりと彼女は顔を上げた。

「・・・アストラルちゃん？」

「うん。あなたの名前は？」

「・・・エニス。エニス・ヒュノディア。」

「エニスちゃんね。・・・さっきはごめんね。一緒に遊ばなくて。」

すると彼女はううんと顔を横に振った。

「私と遊んでるとみんなアストラルにも嫌がらせするかもしれないからいいの。」

どうやらかなり頭もいいようだ。

小さい子のパターンをよく読んでいる。

もしかして、経験者か？

まあいい。

「それよりも、どうしてみんな嫌がらせなんてしてくるの？」

当然の疑問をぶつけてみる。

ちよっと直球過ぎるが、小さい子にはこれくらいでも別に平気だろじ。

「わかんない・・・ただこの前の事件をきっかけにみんな私の周  
りからいなくなっちゃった。」

「この前の事件？」

コクンと彼女は頷く。

「なんか管理局が襲われたりした事件のこと。確か・・・JS事  
件だったかな？」

「ああ、あれね。」

しかし、「JS事件がこの子にどう絡んでいるんだ？」

「それよりも、そろそろアストラル戻った方がいいよ。」

「・・・なんで？」

「先生が戻ってくるし、こんな所誰かに見られたら・・・」

そこで彼女は言いよんどんでしまう。

「うん・・・別にいいや。どうせ明日までしかいないんだし。」

「・・・そういえばそんなこといってたね。どうして？」

「・・・」

こ、こたえられない。

まさか本人にあなたを助けに来ましたなんていえなし、ましてや  
私自身は実は10歳でしかも管理局の人間だなんて。

こつという時は・・・

「あ、嫌ならいわなくても・・・」

「実は今度家を引っ越すの。」

「引っ越しって、どこに？」

「うん、しらない。けど、それでお母さんもお父さんも手が離せなくなるから昼間だけでもここに預けようってことになったみたい。」

「へへ、なら今度また会える？」

「うん、会える会える。」

その時は多分、元の姿に戻ってると思うけど。

「あ、本当にそろそろやばいから・・・私先に戻ってるね。」

時間を見てエニスちゃんが屋上から出ていこうとする。

「あ、エニスちゃん。今度ヴィヴィオとカナミちゃんに声かけてみ。一緒に遊んでくるかもよ。」

彼女は立ち止まると笑った。

「ありがとう、でもいいや。無理だと思っから。」

しかし、とても乾いた笑いだった。

諦めたような、悲しいような、そんな笑顔。

「何とかしなくちゃ。」

彼女にそんな笑顔は似合わない。

写真で見たような満面の、皆を幸せにするような、そんな笑顔じゃないと。

「がんばるぞー!!」

大きな声を上げて、私は気合いを入れ直した。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵



### 第31話（前書き）

昨日は申し訳ありません。

実は寝ぼけて朝、投稿し忘れてました。

さらに、三部構成といいながら四部構成になりそうです。  
すみません。

では、どうぞ・・・

## 第31話

### 第31話

幼稚園から帰りながら私はヴィヴィオと今日のことについて話していた。

ちなみになのはさんは仕事が忙しくて、今日は迎えにこれないぞうだ。

ヴィヴィオだけなら、なんと少しでも迎えに来ていただろうけど、今日は私がいるから任せてくれたのだろう。

「つまり、ヴィヴィオにも原因はわからないと。」

「うん、なんか昔はよく遊んでいた人とかいたみたいんだけど、最近ではめつきり遊ばなくなったんだって。」

「うん、時期的にはやっぱり・・・」

「うん、JS事件。」

何かこのJS事件が鍵みたいなんだよな。

どうもそれまではみんなエニスちゃんと一緒に遊ぶことに躊躇はなかったみたいだし。

「けど、ね。」

関係性が全然わからない。

JS事件で教会が何かしらの過大なダメージを受けたわけでもないし、子供達に影響を与えるような物は何も・・・

「アストラルさん、ちょっと寄り道していこー!」

いきなりヴィヴィオが私の手をつかんで引つ張った。

「あ、ヴィヴィオ。ママに怒られちゃうよ。」

とくになのはさんあたりに・・・  
・・・こわっ!!

「や、やっぱり家に帰ろう!!」

「え、平気だよ。アストラルが連れて行ってくれたっていえば  
私は・・・」

「余計にダメじゃん!!」

「う、う、ケチ!!」

ケチ。

私はケチなのか!?

自分の命と寄り道を天秤にかけて、命を取ったとしてもケチなのか!?

「ほら帰ろう、ヴィヴィオ。」

手を掴みなおして歩こうとするがヴィヴィオは動かなかった。

「ほら、ヴィヴィオ。いつまでも駄々こねないで・・・」

「あれ・・・」

ヴィヴィオは私の後ろを指さした。

振り返るが見知った人は誰もいない。

「どうかしたの?」

「あの茶色の服を着た男の人。何か嫌な感じ。」

いわれた人物を探すと・・・いた。  
ここから20mほど離れた場所を歩いているおじさんだった。  
とくにどこが変という感じではない。  
どちらかというところ、何かしらの被害を受けそうなほどひ弱な人だ。

「あの人がどうかした？」

「うん・・・」

しかし、ヴィヴィオは何も言わなかった。

しょうがなくヴィヴィオの手を握ったまま、おじさんを観察する。  
50代後半くらいだろうか。

茶色の服はセーターで下はジーパン。

左手には枯葉色のコートを持っている。

男の人は道を歩きながら、何かしら手を動かした。

「「あつ!!」」

思わず二人で小さく声を上げる。

「みた？」

「うん。」

ヴィヴィオに確認を取るとヴィヴィオも頷いた。

おじさんは今、手を少し動かした際に横を通りかかったサラリーマンの人のポケットから財布を引き抜いていた。

サラリーマンの人は気づいていない。

「行くよ、ヴィヴィオ。」

「うん。」

手を引きながらヴィヴィオのペースにあわせて走る。

財布をすられたサラリーマンの人には悪いが、通り過ぎるときに魔法でマーキングをさせてもらった。

後で財布を返すためだ。

男は角を曲がった。

それに続いて曲がるとおじさんは歩道の端で何かをしていた。それを後ろから近づき、声をかける。

「すみません。」

途端、男はビクツとして、ゆっくりとこちらを振り向いた。

しかし私とヴィヴィオの姿を見てほっと肩を下ろす。

手には・・・さっきのサラリーマンから奪った財布が握られていた。

「どうしたのかな、お嬢さん方。」

男は財布をポケットに入れながら聞いてくる。

「すみませんが、その財布元の持ち主に返してあげてください。」

今度こそおじさんは固まった。

「な、何を言ってるのかな君たちは。コレは私の・・・」

「言い訳は無用です。先ほどしっかりと見させていただきました。」

男はしきりに辺りを見回している。

「ふ、ふん。証拠がなかるう。コレは私のだからな。」

「証拠というより、目撃者がいるのです。それに証拠というならその財布を貸してください。管理局で調べてもらいましょう。」

男はニヤツと笑った。

「誰がこんな子供の言い分なんか聞くか。管理局はそんなことには取り合ってくれないよ。」

勝ち誇ったようにこちらを見ている。

だが、コレは明らかに男の負けだ。

「すみませんが、私は管理局の者です。身分証はコレ、ちなみにただいま別件で捜査中にあなたをお見かけしたのですが・・・言い逃れをするなら現行犯逮捕で捕まえますよ?」

暗に今ここで財布を返せば逃がしてやるといつているのだが。はてさて男に通じたかどうか。

「・・・ツチ!」

男は急に駆け出すとヴィヴィオを突き倒して逃げ出した。

「大丈夫!？」

「うん、こっちは平気。」

抱き起こすとヴィヴィオはすっかり尻餅をついたみたいでとくに怪我とかはなさそうだった。

「ごめん、あいつ先に捕まえるから。」

「うん、行ってらっしゃい。」

さっと遠くなっている男を追いかける。  
人垣が割れてとても通りやすかった。

「こら待て！そこのおじさん！！」

叫びながら首に提げていたアスターを握る。

『Standby Ready, set up.』

さっと杖上のデバイスが出現する。

「こちら管理局囑託魔導師アストラル・S・キャロメイ。市街地  
路地裏での魔法使用許可を。」

『こちら管理局、状況を確認しました。許可します。ただし市民  
の安全の確保を最優先に。』

「了解。」

さっとバリアジャケットを纏うと男を追いかけた。

男はこちらをしきりに気にしながら角を曲がった。

ラッキーなことにそこは路地裏だった。

「逃走は諦めて、投降しなさい！！」

角を曲がりながら杖を向ける。

すると男は地面に転がっていたのか鉄パイプを持っていた。

「うるせえ！！」

「バインド！！」

男が突っ込んできたので足だけをバインドする。するとあっさり顔面からこけた。

「大丈夫ですか。」

ちょうどタイミング良く、他の管理局の人がやってきた。

「はい、男を一人、窃盗の容疑で拘束してます。」

すると管理局の人は私を見て一瞬驚いたが柔和な笑みを浮かべて頭をなでてくる。

「ご協力ありがとうございます。ところで、管理局の人を知らないかな？」

.....

今なんかすごいこといわれた。

たしかに、たしかにさ。

今は子供の姿をしてるけどさ。

「.....私が管理局の者です。」

身分証を出しながらいうと彼はすごく驚いた顔をした。

失礼な。

魔法使ってるんだからそれくらい想像つけよ。

「し、失礼しました。ご協力感謝です。後は私たちの方が。」

「了解です。あ、このマーキングされた人が財布の持ち主です。後で返してあげてください。」

「了解。」



マーキングのデータだけ渡すと私はヴィヴィオの所に戻った。

「おつかれさま〜。」

「うん、つかれた〜。」

ヴィヴィオと手をつなぎながら家路を進む。

「ところでさ、どうしてヴィヴィオはあの人が変だと思ったの？」

ヴィヴィオがあの人変だといったのは、おじさんがスリをする前だった。

どうしてわかったのが気になる。

「うん、よくわかんないんだけど・・・なんか怖い感じがしたのかな？」

「ふ〜ん、どんな？」

「嫌な感じ。何か纏ってる空気が他の人と違ったみたいな。」

「・・・」

・・・いまいち要領を得ない回答だ。

というか、最初にいって他のとあまり変わってない。

けど、なるほどね。

何となくわかった。

どこかの誰かが子供は繊細だという。

とくに周りの空気には・・・

ヴィヴィオは本能的にあの男の異常さを感じ取ったのだろう。

子供ならではの感知能力か。

「ん？という」とは・・・」

何となく、エニスちゃんのことの原因がわかった気がした。

\* \* \* \* \*

「で、こんな所に呼び出して何？」

隊舎に戻ると、早速私はシュリに相談した。

「うん、実はね。」

手早くエニスちゃんのことを話す。

「ふん、つまりそのエニスちゃんは何かしらが原因でいじめられていると。」

「うん。」

「で、その原因って？」

「うん、・・・実ははっきりとわかった訳じゃないんだけど・・・」

「いいからいつてみ。おかしかつたら即突っ込むから。」

「・・・多分だよ。エニスちゃんを取り巻く子供はみんなエニスちゃんが生来持つてる魔力が怖いんじゃないかな？」

「魔力？」

「そう、もともとエニスちゃんは魔力値が高いでしょ。それを本能的に子供は察知して怖がってるんじゃないかな？」

「魔力が・・・怖いかな？」

シユリの疑問はもつともだ。  
魔法とは私たちミッドに住む人たちにとって身近な存在だ。  
怖がる必要なんてないと普通は思うだろう。

「多分、トラウマになつてるんじゃないかな？ほら、ついこの間このミッド首都で大規模なテロがあつたでしょ？」

「JS事件ね。」

「うん、それでそのニュースを見た子供……つまりすべての子供達が魔法に対しての恐怖心を抱いた。」

よくある、精神的な病気だ。

集団……なんだつたかな。まあいいや。

「けど、それなら他のカリムさんやアストラルにだって恐怖心を抱くんじゃない？」

「うん、そうなんだけど……それは多分制御力によるんじゃないかな？」

「制御力……なるほど。」

「エニスちゃんは魔力の割に制御力がほとんどない状態でしょ。」

「制御されない膨大な力はただの凶器ってことね。」

「そういうこと。多分子供達はエニスちゃんから漏れ出る制御されない魔力に対して恐怖心を抱き、結果として集団で彼女を排除……とまでは行かないけど敬遠してるんじゃないかな？」

「アストラルやカリムさん達を怖がらないのは、力が制御されているからだね。」

「うん。」

ほう、どうやら最後まで聞いてもらえた。

……ということは間違つていそうな所はないということかな。

「うん、だいたい理解できたし、私もそう思う。」

よし、あたり!!

「けど、それって対策のしようがない？」

・・・

それをいわないで・・・。

「それを今からシユリに相談しようと思ったの。」

「・・・急にそんなこといわれてもねえ。」

シユリも相当困っているようだ。

というか、当たり前だ。

私だってわからない。

「別にただ魔力を制御するだけなら封印でもすればいいんだろうけど・・・」

「・・・それは何かねえ。」

あまりにもかわいそうだし、何よりエニスちゃんの将来を閉めてしまつようなものだ。

「なのはさんによるスパルタ魔力制御特訓・・・」

シユリが呟いた途端、部屋の空気がズクんと沈んだ。

今でさえ厳しい・・・なのはさんにとっては普通の、訓練がこれ以上厳しくスパルタに・・・

か、考えたくない。  
というか、あり得ない。  
その選択肢はない。

あの子の将来どころか人生を閉じてしまいそうだ。

「・・・ありにはありだけど、それは時間がかかりすぎるからまた今度だね。」

無難に流すことにした。

シユリもうんうんと頷いている。

「・・・あ、デバイスをあげたらどうかな？」  
「デバイス？」

私の意見にシユリが聞き返す。

「うん、確かデバイスを持てばある程度は魔力をデバイスが管理すること出来るでしょ。そうすれば、あの子は時間を見て訓練をすることも出来るだろうし・・・」

「確かにありだけど・・・肝心のデバイスは？あれ今から組み始めるのは時間がかかるし、何より本人の要望も聞かなくちゃいけないでしょ。」

「そっか・・・」

そっだよね。

私なんか誰かにデバイスもらったからそれで良かったけど、普通はそうは行かないモンね。

「どうしようか。」

「・・・どうしようか。」

延々と夜まで話し合ったが結局いい策は見つからなかった。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

### 第32話（前書き）

ヴィヴィオ編後編第四部、完です。

いやあ、嘉吉こと盛りだくさんなのに、字数が多すぎてまたまた、二つに分解するところでした。

少し長いですが、お楽しみください。

## 第32話

### 第32話

晴れ渡った空、透き通った空気。

「うん。」

そんな天気の下、私はヴィヴィオとなのはさんと一緒に幼稚園に向かいながら未だにうなっていた。

「どうしたの、アストラル。何か悩み事？」

ヴィヴィオが心配そうにのぞき込んでくる。

「うん・・・実は思いつかないんだよね、エニスちゃんのこと。」

「あ、お仕事の？」

「うん。」

ぼけーっと思わず宙を眺めてしまう。

「アストラル、そんなに悩まなくてもいいよ。いくら何でもたったの二日でそんな出来るとは誰も思っていないから。」

「けど！！・・・原因はわかってるんです。それさえ何とかかなれば・・・。」

「原因だけでもすごいんだよ。長年、カリム達が調べてわからなかったことなんだから。」

「それでも・・・。」



思わず足を止めてうなつてしまう。

私がこの姿で来られるのは今日までだ。

もし、今日エニスちゃんに友達が出来なかったらこれからも出来ないかもしれない。

少なくとも今、出来ることはまずないだろう。

一応、対策としてデバイスを作ってあげるといふことにはなっているけど、それでも出来るのは一週間後だ。

その間に何かがあるかわからない。

「ほら、アストラル。そんなに落ち込まない。」

深い考えに落ちていると、頭をなのはさんにたたかれる。

「なんていつても聞かないみたいだから、一つアドバイス。何事も無茶したらダメだよ。アストラルらしいやり方ですればきっと解決が思いつくよ。」

「・・・はい。」

私らしいやり方・・・か。

それはどんな方法だろう。

・・・

・・・さっぱりだ。

けど、無茶せずになるようになる。

そう思っとくのがいいのかもしれない。

エニスちゃんの笑顔を取り戻す側がこんな変な顔をしていたらそれこそ無駄足になる気がする。

・・・笑顔第一！

「よし、がんばろう！！」

「おう！！！」

私のかげ声になのはさんとヴィヴィオが応えてくれた。

\* \* \* \* \*

「は〜いみんな、おはようございます。」

「~~~~~おはようございませう。」「~~~~~」

「今日は外で遊ぶ日です。目的地の公園へ行くまでに道路を渡ったりするので、車に気をつけながら楽しく一日を過ごしましょう！」

「~~~~~は〜い!!」「~~~~~」

というわけで、今日は外の公園、詳しくは聖王教会管轄の私有地に遊びに行く日らしい。

全然知らなかった。

この幼稚園では半月に一回、外の公園へ行つて、めい一杯遊び、英気と友情をばぐむようにしているらしい。

「移動は、四人一組で行います。道を歩くときは二人ずつ手をつないで歩いてくださいね。」

「~~~~~は〜い!!」「~~~~~」

四人一組か・・・んっ！

「ねえ、ヴィヴィオ。」

「な〜に？」

となりにいたヴィヴィオに話しかける。

「ちょっと協力してくれない？」

「協力？」

「うん。」

「・・・いいよ、何すればいい？」

私は今思いついたことを実行すべくヴィヴィオと手を結んだ。

「なら、四人で一つのグループを作つて。」

先生の細かな注意が終わった後、その声と友に皆が友達に声をかけ始めた。

「いくよ。」

「うん!!」

早速、行動を起こす。

「ねえ、カナミちゃん!!」

どこかに向かおうとしていたカナミちゃんを呼び止める。

「なに、アストラル、それから・・・ヴィヴィオちゃんだけ？」

「うん。あのね、一緒にグループにならない？」

「えーっと、アストラルとヴィヴィオだけ？」

「うん。」

「そうだよ。」

そう答えると、しばらくうんと彼女は考えた後、

「いいよ、一緒に遊ぼう!!」

そう答えてくれた。

コレでひとまず第一段階終わり。

次は……

「よし、なら後一人を探しに行こう!!」

ヴィヴィオが手はず通りにエニスちゃんがいる方向に歩き始める。

私とカナミちゃんもその後についていく。

そして……

「あれ、エニスちゃんまだ一人？」

ヴィヴィオが無邪気に問いかける。

私の隣でカナミちゃんがピクツと震えた。

「うん、……私は一つも一人だから気にしなくても……」

「よし、なら一緒にグループになろう!!」

最後までいわせず、私が進言するとエニスちゃんは驚いたような顔でこちらを見る。

「カナミちゃんもいいよね？」

逃げようとするカナミちゃんの肩をつかんでもたれかかりながら聞く。

「わ、わたしっ!……」

何か言おうとするが、口をふさいで、耳元に小さな声で話しかける。

「ねえ、なんでそんなにエニスちゃんを嫌がるの？」

「べ、別に嫌がってなんか。」

「けど、実際嫌だっついていおうとしてるよ？」

「……………」

「ほら、別にいいじゃない。」

「か、カナミあの子が嫌いなもの。」

「なんで？」

「なんでって……わからないけど……」

「そんなのって差別だよ。カナミちゃんは理由もなしに差別するの？」

「別に差別なんか！！」

「してるじゃん。私やヴィヴィオはいいのにエニスちゃんはダメ。コレって卑怯だよな？」

「……卑怯？」

「うん、卑怯。」

「……………」

「そんな卑怯な子じゃないよね、カナミちゃんは。」

「……そうだね。何で嫌なのかはつきりさせるのもいいかも。」

カナミちゃんは意志が固まったように瞳の奥がめらめらと燃えていた。

よしよし、上手く誘いに乗った。

「というわけで、エニスちゃんはいいいよね？」

「うん……私はうれしいけど、カナミちゃんは？」

「もちろんOK。一緒に遊ぼう！！」

思わずヴィヴィオとぐつと親指を立て合ってしまった。  
エニスちゃんとカナミちゃんはその行動に疑問符を浮かべていたが、まあこの際ほっとこう。

こうして、私の“エニスちゃん、まずは友達一人から作戦”がはじまった。

・・・ひでえ、ネーミングセンスだ。

\* \* \* \* \*

「ここからは歩道が狭いから、二人一組で手をつないで歩いてね。」

そのかけ声と共に私はヴィヴィオと手をつないだ。

すると当然、グループ内ではエニスちゃんとカナミちゃんが残るわけで、

「手、つなぐよ。」

「うん。」

カナミちゃんがぶつきらぼつに、エニスちゃんはどこかうれしそうに手をつないでいる。

そうそう、その調子。

うまくいけば、そのままお友達へ一直線だ！！

「ねえ、なんでエニスはそんなに嫌われるの？」

いきなり直球でカナミちゃんがエニスちゃんに聞いた。

「え、なんでって……ごめん、わからない。」  
「わからないって……そうね。カナミ自身もわからないからし  
ようがないか。」

再び沈黙。

おいおい、何か話せよ。

こつちまで思わず固唾をのんでみてしまっじゃないか。

「……あの、カナミちゃんは好きな食べ物って何？」

「突然藪から棒に……一応桃が好きかな。」

「桃か……私はリンゴ。あのシャリツと感が好きなの。」

「ふん……」

「……」

ふん、で終わらせるなよ、ふん、で……！

たく、もうすぐ公園に……してしまっじゃないか。

「カナミちゃんはどんな遊びが好き？」

「ドッチボール。もちろん、魔法ルールは抜き。」

「へへ、ドッチはおもしろいよね。私も好きだよ。」

「そう。」

「……」

こ、この……！

カナミ……！お前は会話をする気はあるのか……！

「は……い、みんな。つきましたよ……！」

前の方で先生が声を上げた。

ここまでの進展はあまりなし。  
正直がつくりと来た。  
ヴィヴィオを見ると、彼女もがつくりと肩を落としていた。

\* \* \* \* \*

「カナミちゃん、一緒にあそぼ!」

公園に入ると早速他の子達がカナミちゃんを囲み始めた。  
エニスちゃんは人並みに押されるようにして外側にはじき出されていく。

「どうする?」

「うん・・・」

正直、ここまでしか考えていなかった。

ヴィヴィオに今後の策を聞くが、芳しい返事はえられなかった。

「うん・・・」

「うん・・・」

「あ～～～～～～～～～～もう面倒くさ!ここになったら最後の手段!」

思わず叫ぶとエニスちゃんの所に行く。

何事かとヴィヴィオも後ろからついてきた。

「エニスちゃん!」



木陰の下にいた彼女に近づく。

「何、アストラルちゃん、それとヴィヴィオちゃん？」

「うん、まずはこれ！！」

胸からかけていたアスターを突き出す。

「コレは？」

「うん、コレを首から提げて。」

「えっ!？」

「ほら、はやく。」

「う、うん。」

私の押しに負けて彼女はアスターを首から提げる。

『アスター、ごめんけどしばらくエリスちゃんの面倒見て。魔力の流れをコントロールして無駄に周りを威嚇しないようにね。』

『All right, my Master.』

念話で指示を出すとアスターは早速エリスちゃんの魔力をコントロールし始めた。

私専用に調整してあるからやりにくいだろうに……

ごめんね。

ちよつとだけがんばって。

「よし、かけたみたいだから、みんなと一緒に交ざろうっ!！」

「えっ、えっ?」

戸惑うエニスちゃんを引っ張ってカナミちゃんの所に行く。

「ねえ、カナミちゃん。何するの？」

「ん？ドツチボール。」

「なら私たちも混ぜて。」

「私たち？」

「うん、私とヴィヴィオとエニスちゃん。」

瞬間、カナミちゃんはア〜と悩む仕草を見せる。

「みんなもいいよね、お願い！！」

返事を待たずにコートと思われるところに入りながら周りにも聞  
く。

「え〜、あ〜う・・・」

周りから戸惑いの声上がるが、私の顔に免じてか仲間に入れて  
くれる。

ここで第二段階かな。

いつもなら、ここでみんなの反発をくらう。

けど、今はエニスちゃんから怖い気は出ていないから断る理由も  
なくなっている。

早速ジャンプボールをして、試合が始まった。

こっちのチームは私とエニスちゃんチーム。

対する向こうはヴィヴィオとカナミちゃんチーム。

私は自分で力を押さえながら試合を始めた。

結果からいうと私たちエニスちゃんチームが勝った。

エニスちゃんは写真で見たとおり、運動神経がよく、とても弾を当てたり避けたりするセンスも良かった。  
対するカナミちゃんもかなりのもので、最後の方は二人の接戦となった。

「すごいね、エニスちゃん。あのカナミちゃんに勝っちゃうなんて。」

「そ、そうでもないよ。かなり私も危なかったし。」

「でも、勝っちゃうんだから。」

「そうだよ、最近カナミちゃんに勝てる人いなかったからこれは新手のライバルだな！」

「そ、そうかな・・・」

試合の後はみんなエニスちゃんとカナミちゃんを囲ってわいわいとはしゃいでいた。

少しまだみんな怖そうにエニスちゃんに接する人もいるが、それも時間の問題だろう。

私がデバイスを貸したことで魔力を制御したから怖がる理由はない。

けど、コレで解決かといわれると、否だ。

だって、結局デバイスは今日限りだし、このままズ〜とデバイスに頼っておくわけにも行かない。

やはり、なにかおおきなきっかけでもあれば・・・。

「はい、みんな。そろそろ時間だから帰るよ!!」

「~~~~はい!!!!!!」「~~~~」

その声と共に再びみんなは四人グループを作り始める。

私とヴィヴィオ、エニスちゃん、そしてカナミちゃんは自然と集

まっつてグループとなった。  
かなりの進展だ。

「何笑ってるの、アストラル？」

私の顔を見てエニスちゃんが聞いてくる。

「うん？なんでだろうね。」

私自身も気づかなかった。

けど、自分的にかなりうれしいのだろう。

エニスちゃんとカナミちゃんが少しは仲良くなったことが。

「はい、しゅっぱつしま〜す！！」

先生のかげ声と共に私たちは歩き始めた。

\* \* \* \* \*

帰り道の約4分の3を歩ききった頃だった。

「あゝ、疲れた。また今度一緒に遊ぼうね。」

「うん、今度も負けない。」

「あ、生意気な！！今度はカナミが勝つんだから！！」

前の方で二人は楽しそうにしゃべっていた。

うんうん、何かほほえましい。

「そうだ、エニスちゃん。そろそろあれ返してくれる？」

「え、あ、これ？」

「うん。」

ちょっと早いけど、あまり魔力をデバイスに頼って制御するのは良くない。

ある意味封印と変わらない状況だからだ。

締め付けすぎた魔力は最後は暴発する。

そどこかで聞いたような気がする。

「はい、ありがとう。」

「いいえ。」

受け取るとエニスちゃんは立ったとは知って先を歩いていたカナミちゃんに並んだ。

一瞬、カナミちゃんが震えた。

そして、おびえた表情を一瞬見せる。

だが、プライドからか、すぐに引っ込めると不機嫌そうに先を歩き始めた。

「やっぱり、無理か。」

「みたいだね。」

思わずヴィヴィオとため息をついてしまつ。  
しかたない、他の方法を探るしかないようだ。

「あ、危ないよカナミちゃん！！」

「うるさい、ちゃんと信号は青だから。」

「そんな、危ないって!!」

その声に慌てて顔を上げるとカナミちゃんはちょうど交差点の横断歩道を渡っているところだった。

その歩道の手前からエニスちゃんが声を上げている。

「どうしたの？」

「車が!!」

指さした方向には速度をゆるめずに横断歩道に突っ込んでくる車が見えた。

「だから平気だって。向こうだって信号が赤なのはわかってるはずだよ。」

そういつてカナミちゃんのはのんきに歩いて渡っている。

しかし、どう考えてもあのスピードでは今からブレーキを踏んでも横断歩道の手前で止まることは出来ない。

「速く走って渡って!!」

私が鋭く叫ぶと、カナミちゃんは鬱陶しげにこっちを向く。

「だから大丈夫だって・・・っ!」

そのままトラックのスピードを見てカナミちゃんは息をのんだ。

そのまま怖くなって足がすくんでいる。

慌てて私がカナミちゃんの元に走り出そうとするが、状況に気づいた先生が私の肩をつかんで放さない。

すると、横をエニスちゃんが飛び出した。

「エニスちゃん、戻りなさい!!」

先生が叫ぶが、彼女は聞かずにカナミちゃんを歩道に突き飛ばした。

そして、車にひかれる直前、シールドを張る。

しかし、あまりのすさまじいスピードにシールドが割れてエニスちゃんが吹き飛んだ。

「『エニス!!』」

私は無理矢理先生の手を振り払うとエニスちゃんの元に行く。

カナミちゃんも慌ててエニスちゃんの手を触る。

すさまじい出血だった。

血の水たまりがゆっくりとだが、確実に広がっていく。

先生が慌てて駆け寄って、傷口を押さえるが、とうてい間に合わない。

「エニス、エニス!!」

何度も名前を呼びながらカナミちゃんがエニスちゃんを揺するが、彼女は目を開けない。

「エニス……!!」

終いには泣き崩れてしまう。

私は少し離れるとアスターを起動させる。

「アストラルちゃん？」

先生が不思議そうな目でこちらを見る。  
何をするつもりだというのだろう。

「すみませんが、先生とカナミちゃん、少し離れてくれますか。」  
「アストラル、まさか！」

ヴィヴィオが何をするか気づいたように私の袖を引っ張る。  
ばれてしまうといっているのだろう。

「ヴィヴィオは先生とカナミちゃんをどけて。はやく！」

ヴィヴィオはいわれたとおり、先生とカナミちゃんの血に濡れた  
手を握って無理矢理離れる。

それを確認すると、私は広域結界をはる。  
そして、ぐったりと横たわるエニスちゃんに杖を向けた。

『Time Control』

アスターが声を発すると杖先に魔力光が集まった。  
私はそれをゆっくりとエニスちゃんに近づける。

「戻す時間は・・・10分ぐらいかな。」  
『OK, Control Starting』

エニスちゃんが光の渦に飲み込まれる。

私は体から出ていく魔力に、倒れそうになりながらも踏ん張る。

ここで倒れたらすべてが無駄だ。

私がここに来た意味も。

今まで練った策も。



そして、新たに出来た友達も。

『Control Finished.』

声と共に光が収まる。

すると、そこにはキズ一つないエニスちゃんの体が横たわっていた。  
た。

さっきまで広がっていた血だまりも見あたらぬ。

「アスター、モードリリース」

ペンダント方になったアスターを首から提げ、エニスちゃんの頬を優しくたたく。

「エニスちゃん、エニスちゃん。起きて。」

んんん、という声が響く。

後ろで、先生が驚きの声を上げているが、そこは無視。  
こうなったらもう身分を明かさないうけにはいかない。

「エニスちゃん、目、さまして。」

「うう、・・・なに？」

エニスちゃんはゆっくりと目を開けた。

「どこもいたいところない？」

「うん、別に何ともないよ。」

「そう。」

それだけいうと、やっと救急車が到着した救急車に後は任せた。

精も根も尽き果てて、私はとても眠かった。

「大丈夫？」

ヴィヴィオが私を支えるようにして聞いてくる。

「うん、ちょっと無理かも・・・けど、このまま帰るわけにも行かないでしょ。」

先生を見ながら私は呟いた。

この後のことを考えると、私は頭が痛くなった。

説明はあっけなく終わった。

教会に戻ると、カリムさんがいたからだ。

私から簡単に説明を受けると、彼女は頷いて私を隊舎に帰してくれた。

なのはさんや隊長陣、フォワード陣、そしてシュリに会うことなく部屋に付くと私はそのまま眠り込んだ。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

### 第32話（後書き）

次からは本筋に戻る予定です。

### 第33話(前書き)

さて、本編最後に向けて物語が動き出します。  
とは言っても、まだ前段階ですが・・・  
次の更新はおそらく月曜になると思います。

### 第33話

#### 第33話

「そろそろ始めるか。」

少し寂れたビルの地下。

あちこちが崩れて、配線がむき出しになった部屋。

そんな中に目深くフードをかぶった男達が並んでいた。

「やっと時が満ちましたね。」

「長かったが・・・それももうすぐ終わりか。」

「やっと始まるのですね。」

赤い髪の男の声に他の三人が喜びの声を上げる。

「最終段階、第1フェーズを始める。準備をしろ。」

「はい。」

一瞬後、四人ともその場から消えた。

\* \* \* \* \*

「というわけで今回の任務は無事、完了しました。」

「はい、おつかれさん。正式な任務やないのに、しっかりこなしてくれてありがとな。」

「いえ、私自身も様々な経験が出来ましたから。」

現在、部隊長室ではやて隊長に幼稚園での報告をしている。  
カリムさんやシャツハさん、なのはさんにフェイトさんも同席している。

「あの後ですが、精密検査の結果エニスちゃんは特に異常もなく元気にしてますよ。」

カリムさんが横から補足を入れてくれる。

「今までであったいじめも収束の兆しを見せていますから、心配もなさそうですしね。」

「よかったです。」

シャツハさんの言葉に思わず安堵の息をつく。

一応私の任務・・・というかお置き兼お願いの期間も過ぎて目的も達したとは言え、ぶり返していたら意味がないからね。

今までの苦労はなんだったんだ〜って話になる。

「そういえば、エニスちゃんとカナミちゃんからお手紙を預かってますよ。」

カリムさんが私に手紙を差し出す。

それを受け取ると、はやて隊長を見る。

意図をくみ取ってくれたのか、頷いてくれた。

早速手紙の封を切って中から便箋を取り出した。

一枚目はエニスちゃんからだった。

アストラル・S・キャロメイさんへ。

げんきにしてる？わたしはとつてもげんきだよ。

このまえは、助けてくれてありがとう。

カリム先生にあのじこのあと、アストラルちゃんがおおしてくれたことを聞いたよ。

アストラルちゃんってすごいんだね。

わたしはまだシールドけいのまほうやかかるくモノをつかせるまほうしか使えないんだよ。

これからはシャツハさんがゆっくりと教えてくれるとやくそくしてくれました。

とてもたのしみです。

あと、わたしのいじめだけど、カナミちゃんがお友だちになってくれてからはいろいろな人とあそべるようになりました。

これもアストラルちゃんとヴィヴィオちゃんのおかげだね。

ありがとう。

なんかいろいろあって、さいごはまともにお別れもできなかったからこんどまたあそぼうね。

あたらしいお友だちもその時にしょうかいするから。

### エニス・ヒュノディアより

続いて二枚目を見る。

二枚目はカナミちゃんからだった。

アストラルへ。

げんき？

わたしはげんき。

その、あの、・・・エニスをたすけてくれてありがとう。  
あのままわたしのせいでエニスがしんでたらわたしどうなったた  
かわからないから。

とてもふつかかんだのしかったよ。

その、べ、べつにわたしがいつてるんじゃないからね。

まわりのともだちがそういつてただけで。

・・・すこしはわたしもたのしかったけど。

そ、それだけ。

あゝもう、てがみなんてきらいだ。

じをかくのはめんどろだし、ぶんしょうかんがえるのもめんどく  
さい。

だからこんどまたあそぼう。

つて、みんなもいつてる。

たぶんせんせいもアストラルがここにきてあそぶくらいはなんと  
もいわないだろうから。

そのほうがいろいろじをかかなくてすむし。

とにかく、ありがと。

げんきでな。

カナミ・ヤリニティより

「く、ふふふふ。」

思わず笑ってしまった。

カナミちゃんて、わたしの前では丁寧な言葉で話してたから気づ  
かなかつたけど、本当はこんなしゃべり方するんだ。

それにエニスちゃんも。

とつても手紙からうれしそうな気持ちが伝わってきた。

わたしはほとんど手伝いも出来なかつたけど、一つ大切な友情を



はぐくむ手伝いが出来てかなりうれしい！

またいっしょにあそびたいなあ。

むりだろうけど・・・

というか、この格好であつたら絶対目を丸くするよ、あの二人。

あ、なんかみてみたい。

「さて、なら報告会はここまでやな。アストラルも、その手紙はちよつとしまつといてな。」

「はい。」

深く息を吸つて気持ちを整える。

手紙を制服のポケットにしつかりと降りたたんで入れる。

「さて、今日集まつてもろうたのはアストラルに関してや。」

「え、私？」

「そうや。まずはアストラルが持つてるレアスキル“エカリスト聖櫃”についてわかつたことがあるから伝えとくな。」

エカリスト  
聖櫃。

個人が持つ魔力に限界がそんざいしない、つまりいくらでも魔法を行使できるスキル。

「なのは隊長とフェイト隊長はしつてるんやけど、先日ユーノ・スクライヤ先生から連絡があつて、送られてきた資料がコレ。」

紙にまとめられた資料を手渡された。

「まず、本来魔法というのは術者の精神エネルギーエカリストを変換して発動するモノなんやけど、アストラルの場合、エカリスト聖櫃のおかげでその再現が存在しない。」

そこまでは今までと変わらない。

「けど、それならその元となる精神エネルギーはどこから出てくるんやってはなしになるんや。」

「・・・考えたこともなかった。」

「そうやる、実際うちらもユーノくんに言われるまで疑問にさえ思わなかったから。」

そうだろう。

何せ隊長達も規格外の魔力を持ち合わせているからね。

「で、そのメカニズムがわかったんや。どうやら資料によると何か神様みたいな存在と人間との間に子供を産むとその子供は神様の方の精神エネルギーとリンカーコア自体がつながって聖櫃エカレストのスキル、無限の魔力を扱えるんや。」

「それって・・・」

フェイトさんの声にはやて隊長が頷く。

「そう、もしかしたらプロジェクトFが絡んでるかもしれん。」

ズーン、と部屋の空気が重くなる。

フェイトさんに限っては拳をギュッと白くなるまで握っていた。

「追い打ちをかけるようやけど、もしかしたらJS事件も何かしら絡んでる可能性があるんや。」

思わず私は唇をかんだ。

プロジェクトF計画。

JS事件。

この二つの共通点は、人造生命体。

つまり、私は人間。

普通なら私は生まれてはいけない存在。

ふいに、夢が思い出された。

「私はそんなことのためにアストラルを生子出した訳じゃない！」

夢の中の男の人・・・私のお父さんはそういった。

昔も、今までもその意味はわからなかった。

けど、今回の件を鑑みれば、わかる。

私は、お父さんによって生子出されたいてはならないもの禁忌の存在。

「けど、それならアストラルの素となった人は？さっきの話からするとアストラルのリンカーコアとその元となった人とはつながってるって話だけだ。」

私の素オリジナルとなった人。

それは・・・

「私のお母さんです。」

思わず呟いていた。

「「「えっ？」「」」

思わぬ方向からの応えにみんなが私を注目する。

「記憶が戻っていないので良くはわかりません。けど、私のお母

さんはいつも地下にいてそこから外には出られないみたいでした。」

いつもお母さんに会うときはお父さんに連れられて、地下へと向かっていた。

地下について少し歩いたところにある広間。

そこにいつもお母さんは現れる。

そう、現れる。

空中からいきなり。

転移魔法やそういうモノは見られない。

魔方阵は出ていなかったと思うから。

「ま、それはまたこんどにしよう!」

いきなりなのはさんが大きな声で言った。

皆ハツとしたようになのはさんを見た。

「あまり暗く考えすぎると、未来まで暗くなっちゃうような気がするから。感傷やそれぞれの思いに沈むのはあとで。それよりも、これからのことについて考えよ。」

その言葉にフェイトさんが頷く。

「そうだね、過去よりも未来について考える方が先だね。」

はやて隊長がそれに乗っかる。

「よし、ならまずは今後の方策について。みんなに話す前に少し考えとつたんやけど、こんどジェイル・スカリエツィに会いに行こ。」

「ああ、話を聞くんだね。確かにあの人はプロジェクトFの中心

人物だったから、もしかしたら何か知ってるかも。」

「そういうことなら私からも一筆書いとくね。捜査がしやすいように。」

「よろしくな、カリム。」

それから詳しい打ち合わせをする。

「なら、明日。うちとアストラル、シュリテイの三人でスカリエッティのいる隔離施設に行くわ。その間部隊の指揮はグリフィスくんにしたので、隊長陣は申し訳ないけど待機で。」

「うん、わかった。」

「気をつけてね、はやて。」

そういつて、私たちは会議を終了させた。

\* \* \* \* \*

部屋に戻ると誰もいなかった。

時刻はまだ5時。

シュリ達はまだ外で訓練に明け暮れているだろう。

「はあ~~~~。」

ボタンとベッドに倒れ込んだ。

かるい反発に一瞬からだがつくが、再びベッドに沈み込んで収まる。

とても静かだ。

「なんか、な・・・」

さっきの話の話を思い出していた。  
人造生命体。

それは人に限ったモノではないが、人によって作られた人の命。  
私はそれだという。

望まれて生まれたわけではない。  
ただ必要だから生み出された存在。

「何で私を生み出したんだろう・・・」

核心に迫る問だが、誰もいないこの部屋。  
記憶がない私。

たった一人しかいないこの場では誰もこの問には答えてくれない。  
答えられない。

「失敗作、だったのかな。」

私はなのはさんに拾われた。

出身はここからかなり遠いシルベンス。

何でそんなところからミッドチルダにきたのか。

少し考えれば簡単に答えにたどり着ける。

捨てられたのだ。

おそらく、シルベンスが減ぶ少し前に実験か何かにおいて私が上  
手く成果を出せなかったから捨てられた。

必要なしの烙印を押されたのだ。

つまり、どこに行っても私の居場所はない。

ここにいるのもある意味惰性だ。

どうしようもないからここにいます。

「ふ、ふふ……」

何か笑えてきた。

どこのアニメだよと突っ込みたい。

勝手に作り出されて、必要がないからポイ。

そして、運良くいい人に見つけてもらえて正義の味方ごっこ。

「はははは……あはっはっはっは……」

実に滑稽だ。

別に生きたいと思ってここにいるわけではなかった。

ただ、助けてもらったからここでその人に恩返しをしたい。

ここでなら私は少しでも恩返しができる。

そう、ただそれだけ。

そういえばこの間、この隊員の人が言ってた。

もうすぐ六課がなくなると。

実験部隊であるからその期限が切れると本局からは存在しなくなる。

つまり、あと少しで私は用済み。

私があの人に助けることの出来ることがなくなる。

つまり、生きていく意味がなくなる。

「はは……は……くう……ううう……」

頬を暖かいモノが伝ってきた。

とことん人間みたいな体だ。

本当の人間ではないのに。

心がむなし。

寂しい。

痛い。

ねえ、私はどうしてここにいるの。  
なんでつくられたの……。  
だれか、だれか、……

たすけて。

「どうしたの、アート!？」

誰かが部屋に入ってきた。

バサツという音と共に温かい手が肩に置かれた。

「うう……うう……」

その手に答えることも出来ずに私は泣いた。

声を出そうとするが、嗚咽が漏れて言葉が発せない。

「ねえ、どうしたの?」

かろく抱きしめられた。

その温かさに思わず抱きしめ返す。

暖かった。

とても気持ち良かった。

真綿にくるまれていたように、  
ぬくい羽に包まれるように。

心が温まっていく。

傷をなめてくれるように、胸のつつかえが消える。

「しゅり……しゅり……」



その相手の名前を呟きながら必死に抱きつく。  
すると、シュリもゆっくりと、だけどしっかりと抱きしめ返して  
くれた。

ポンポンと背中をたたいてくれる。

「しゅり……だい、すき……」

頭が混乱しながらも思ったことを何度も呟く。

ここ六課に来て私は初めて、本当の涙を流した。

） t o b e c o n t i n u e （

### 第33話（後書き）

誤字脱字等がありましたらご一報ください。

### 第34話(前書き)

一日ぶりの更新です。

シルバーク

連休中はもう更新できない予定です。

次は木曜日になると思います。

## 第34話

### 第34話

「おちついた？」

声をかけられたのはシュリが来てからかなり時間が経ってからだった。

外を見るとすでに暗い。

時間は・・・

「げ、もう8時。」

シュリが帰ってきたのを六時だと仮定しても2時間以上泣いていたことになる。

それだけ立ってからやっと落ち着いたとも言える。

「ありがとう。」

シュリの肩から顔を上げると、シュリの服が涙でぐしょぐしょになっっていた。

「う、うめんー!」

慌ててティッシュを取り出してそこを拭く。  
その手をシュリが押さえた。

「ううん、別にいいよ。それよりも、もう平気？」

真剣な目で見つめられる。  
彼女の瞳がきらきらと輝いて見えた。

「うん、大丈夫。」

頷くと、シユリはほっとしたように肩をなで下ろした。  
それから立ち上がると洗面所に向かう。

「アート、一緒にお風呂入るっか。」

上を脱いだシユリが洗面所から顔を出した。  
私は頷くと着替えを持って洗面所に入る。

体を洗い終わって、シユリと一緒に浴槽につかった。

「で、どうしたの？」

突然、切り出されてシユリが何を指しているのかさっぱり分からなかった。

しかし、泣いていたことを指しているのだとすぐに分かった。

「うん、・・・なんといっついていいか・・・」

私はシユリにレアスキルのことを話した。  
ついでに私がどう考えて泣いてしまったかも。

「ばっかじゃないの。」

すべてを話し終わると真っ先にそういわれた。

「人造生命体？そんなのどうでもいいよ。」

どうでもいいって・・・

「アートが人造生命体だろうが、ただの人間だろうが、犬だろうがミジンコだろうが、アートはアートでしょ？その姿、形状、生まれ・・・そんなものは先天的なもので自分でどうにかなるものではないじゃん。確かにそれで育つ環境は変わってくるけど、要は気持ちの問題でしょ？どう成長して、どう育っていかかがその人を決めるんだよ。」

すっごいありがちな言葉だけど・・・

それでもなんかうれしい。

私を否定しないでいてくれるというのは無性に救われた気がする。

「それに、生きる意味がない？そんなの誰にだって無いわよ。というか、そもそも事柄が逆なんじゃない？生きていられるからその意味を見出すことが出来るわけで、やりたいことやなすべきことなんて自分で決めて、自分が行う。ただ一つ誰にも干渉されない行動なんだよ。それなのに、その意味を他人に見出して、そして自分が生きる理由にしてしまうなんてその人に見れば、迷惑以外の何でもないでしょ。」

なんか、すっごい極論。

けど、入ってることは間違っていない。

現に私の心に響いている。

「アストラルはアストラル、私は私。それぞれ生きているんだか

らそれでいいの。意味なんて後付けしていけばいいんだから……」  
ぎゅっと突然、前からシュリに抱きつかれた。

「……けど、生きる意味が欲しいなら、私があげる。」

後ろに回された手がゆっくりと力が入っていく。

「私のために生きて……私と一緒にいるために生きて。私はそれを迷惑がりはしないから。いやだとは絶対に思わないから。だから必要のない人だなんていわないで……。」

しばらく私とシュリはそのまま抱き合っていた。

\* \* \* \* \*

様々な世界に置かれた軌道拘置所。

大事件を起こし、更正の意を示さない人などを拘束する所。

現在そのひとつ、ジェルスカリエッティのいる拘置所に来ている。

「情報提供？」

「そうです、あなたが携わっていたプロジェクトFについて詳しく聞きに来ました。」

目の前に座る囚人服姿のスカリエッティはにやにやと笑った。

「別にいいが……もちろん何か報酬はいただけるですよね、

はやて部隊長？」

「報酬？」

「ええ、たとえば・・・刑期の短縮とか。」

あ、厚かましい男だ。

「それは無理です。私の一存ではどうしようもないので・・・」

「そうか・・・なら今度シャンパンを持ってきてくれ。あとケーキも欲しいな。」

「シャンパンとケーキですか・・・それくらいなら。」

「ははは、もうすぐクリスマスですからね。私自身もたまにはぱーつと祝い事をしたいんだよ。」

「そうですか・・・それで話の方は。」

「そうあせるな。」

彼は手を挙げると部屋にあったコップに水をつぎ、一口飲んだ。

「で、詳しくはプロジェクトFのどんなところを聞きたいんだね。」

「まずは概要を・・・といたいのですが、時間がないんで簡潔にいきます。まず、レアスキルエカリスト聖櫃エカリストについて、何か知ってますか。」

「聖櫃エカリストか。懐かしい響きだな。」

彼は少し余韻に浸ったあと、話し始める。

私はそれを熱心に聞いた。

「そもそも聖櫃エカリストとは、人造生命体のことを指していた。ほら、ヴィヴィオがいるだろう、あんな感じた。」

ヴィヴィオ？



何でここでヴィヴィオが出てくるんだ？

「しかし、やはり生命を作り出すからにはそれなりに高い魔力を持ったものを作りたい。そうなるのは必然だろ？それで私は旅をしているときにある世界の星に立ち寄った。」

スカリエッティが何かを操作して写しだした写真は・・・

「シルベンスー！！」

「そうだ、よくそのお嬢ちゃんは知ってるね。」

「・・・」

「だんまりか、まあいい。それでシルベンスにはある伝説がある。神についての伝説が・・・」

「あ、聞いたことある。」

そこでシュリが声を上げた。

「たしか、シルベンスはもともと星屑のような小さな隕石だったんだけど、その隕石がシルベンスを創造し、私たちを作り上げたっていう話がある。」

「ほうほう、そちらの人もよく知ってるね。シルベンスの出身かな。」

「・・・」

「まただんまりか。で、その伝説。ある意味じゃ本物だった。」

「「「えっ」」」

スカリエッティの発言に思わず固まる。

「実はシルベンスは約250年前に滅びようとしていた。そこに

ある隕石が落ちてきた。その石は意思を持つもので同時に莫大な魔力を持つていた。その石……たいてい女の人の姿をしているから彼女とここでは呼ぶが、彼女はそのときのシルベンスの状況に心を痛めた。だから力を貸すことにした。当時の筆頭魔法士官長とよばれる、魔法が一番上手い人の力と彼女の無限ともいえる魔力、その二つをあわせてシルベンスは見事復活を遂げた。それがこの伝説の真実だよ。」

世界を創造って……なんか話が壮大だ。  
というか、嘘にしか聞こえない。

「信じる信じないはおまえたちの勝手だ。それで、ついこの間、シルベンスから私に接触があった。どうやらシルベンスは滅びかけているらしい。実際この間滅びたしな。それで、この伝説に頼って男たちは当時の状況を再現する手伝いを要求してきた。私としては、実に興味のないものではあったがここで恩を売っておくのも悪くないと思い、プロジェクトFの資料を渡した。結果、神と人との間に生命体を作り出すことに成功し神が住まう箱、<sup>エカリスト</sup>聖櫃のレアスキルを持つものが生まれたというわけだ。」

それが、私。

シルベンスに存在する神、おそらくここでは隕石のことだろう。  
その隕石と人との間に生まれたのが私。

「ほかには何か知りたいことはあるかね。」

スカリエツティが私をみながら聞いてきた。

「じゃあ、<sup>リング・オブ・フェイト</sup>運命の環については？」

「<sup>リング・オブ・フェイト</sup>運命の環……さあ？ただ聞いたことだけはああるよ。」

「どんなことをですか。」

「・・・物体に流れている時間を戻す力、もしくは速める力。・・・  
確かな情報ではないがね。」

「つまりが時間操作のスキルであると。」

「そういう話のようだな。私は一度は注目したが、消費する魔力  
がな・・・バカにならないのだよ。副作用もあるようだし・・・」

「副作用？」

副作用ってなんだ？

「私も詳しく知るわけではない。知っているのはそこまでだ。」

「そうですね、・・・なら、」

次の質問を使用としたところに突然、緊急通信が入った。

「どうした？」

発信源はグリフィスだった。

『緊急事態です。ミッドチルダ首都クラナガンの東西南北の各4  
カ所に高エネルギー反応。現地職員の情報から例のフードをかぶっ  
た男達と考えられ、出動要請が出ました。更に南西部からガジエッ  
トが多数接近、こちらにも迎撃要請が来ています。そのため、東にラ  
イトニングとスターズ、西にシグナム二尉、南に高町一尉、北にフ  
ェイト執務官、ガジエットにヴァイータ三尉とヴァイス陸曹が向かい  
ました。』

「了解や、うちらも早く戻るな。」

『よろしく願います。』

ピッと通信を切る。

「すみませんが、またお話は今度聞かせていただきます。」  
「ああ、気にするな。どうせ暇だからな。・・・ケーキとシャン  
パン、忘れるなよ。」

「もちろんです。よし、なら二人とも戻るよ。」

「「はい!!」」

私たちは一目散に転送ポートに向かった。

それにしても私のレアスキル。

とことんわからないことだらけだ。

） t o b e c o n t i n u e （

### 第35話（前書き）

投稿が一日遅れてしまいました！！  
すみません。

今回はティアナ視点です。  
おたのしみください。

## 第35話

### 第35話

「もうすぐ降下地点だよ。みんな、準備いい？」

へりの操縦席からアルトさんが声をかけてくる。

「……はい!!」「……」

「よし、ならハッチ開けるよ。」

機械音と共に後部ハッチがゆっくりと口を開けていく。すさまじい風が機内を吹き荒れる。

ハッチに近づくと外の景色が流れるようにして去っていくのが見えた。

「行くよ、スバル、エリオ、キャロ!!」

私は声をかけると返事も聞かずに外に身を躍らせた。

「クロスミラージュ、セットアップ!!」

『Standby Ready, Set up.』

オレンジ色の魔力光とともにバリアジャケットが展開、クロスミラージュのグリップが両方の手に収まる。

地上に降りるとスバル達に向き直る。

「まずはツートップで行くわよ。スバルと私は犯人のもとへ直行、説得・逮捕を試みるから。エリオとキャロは離れたところで待機。

もし抵抗してきたらサポートをよろしく。」

「了解！」「了解！」「よし、行くわよ！！」

走って現場に入る。

現場に着くとまず目に入ったのは地面に倒れた隊員達だった。全員がつめき声を上げている。

「大丈夫ですか!？」

そのうちの一人に駆け寄って抱きかかえる。

「く……あ、ああ……それよりも……気をつける……」

隊員は痛みからか苦悶の表情を浮かべながらある方向を指さす。

「あつちに、棒状の、魔道具、が……ある。……それを、止めて……くれ……」

「棒状の魔道具ですね。犯人は今どこに？」

「……魔道具、と、一緒に……かはつ。」

「了解です。今、回復魔法をかけます。」

隊員達を1カ所にまとめると強度の高い結界を張る。

同時に治癒の魔法を織り交ぜると、作戦を変更する。

『エリオ、キャラ、聞こえる?』

『はい、聞こえます。』

『作戦変更、エリオとキャラは魔道具の封印をお願い。私とスバルは犯人の逮捕をするから。』

『了解。』

『あの、気をつけてくださいね。』

念話を切ると通信で救助隊をここに呼び寄せる。

「さて、行くわよ。」

「おう!!」

隊員が指した場所には確かに犯人はいた。

そして、棒状の魔道具もある。

しかし……

「でかつ!!」

思わず声を上げてしまうほど、その魔道具は大きかった。

普通、魔道具とは戦艦などに備え付けのモノでない限り持ち運びがしやすいサイズである。

しかし、地面に建った魔道具は……全長4mにもなる巨大な棒だった。

太さも一抱えくらいはある。

「オレンジ色の髪に銃型のデバイス、水色の髪にナックル系のデバイス……機動六課のティア・ランスターとスバル・ナカジマか。」

『私たちの名前を知っている!?』

思わず、念話に驚きの声を送ってしまう。

「管理局機動六課、ティアナ・ランスターです。あなたを傷害の罪、及び危険魔法使用の疑いで逮捕します。武装を解除して投降してください。」



クロスミラーズの銃口を犯人の男に向ける。  
すると男はニヤツと笑った。

「私はライニー・シルベスター・アルティだ。」

男は目深くかぶったフードを取った。

下から水色の綺麗な髪が流れ出る。

「シルベスター……シルベンスの出身ですか。」

名前に男はシルベスター、女はシルビアと付いているのは第37  
観測指定世界シルベンス出身者独特の習慣だ。

「ほう、我が故郷を知っているか。」

ライニーは視線を私の瞳に合わせた。

彼の深青色の瞳が私を鋭く射る。

「ええ、私と同じ隊にシルベンス出身者がいますから。」

「アストラルとシュリテイ嬢か。」

こいつ、アストラルとシュリテイのことを知っている？

何かやばい感じがする。

警戒心からトリガーを握る指に力を少し強める。

「おおっと、怖い怖い。別に私はあなたとやり合おうなんて思っ  
てませんよ。ただここで今回の私の目的を果たせればそれでここを  
去りますから。」

「目的……どんなですか。」

「いえないな……当たり前だろう。言えるようならとっくの

昔に管理局に頼っている。まあ、私の仲間が同意しないでしょうけど・・・背に腹は替えられないからなあ。」

「とにかく、一度武装を解除してください。さもないと・・・」  
「さもないと・・・どうするのかね。もし私の邪魔をしてごらん。さっきやってきた管理局の奴らみたいに戻り討ちにしてやるから。」

男はポケットから何かを出すと呟いた。

「セットアップ。」

水色の魔力光が男の両手から漏れて右手からハンドガンタイプの銃が、左手からはライフルのような長い銃が現れた。

「ランダミックシールド」

パツと棒の魔道具がアオイ光の膜に覆われる。  
シールドのようだ。

『キャロ、解除できそう?』

『・・・ちよつと難しいですね。見たことない術式の上、一秒ごとに変化するプログラムの値が変化しています。』

「そう・・・ならエリオと協力して力づくでも突破して魔道具の封印をお願い。その間、私はスバルと犯人の逮捕に努めるから。」  
『了解。』

「どつする、引くなら今のうちだぞ?」

ライニーはハンドガンを私にライフルをスバルに向けて勧告して

くる。

「引けません、ここであなたを逮捕するのが私の仕事ですから。」  
「そうか……なら仕方ない。」

ライニーが指に力を込めるのを見て身構える。

「ここで倒れているがいい。」

ライニーがトリガーを引いた。

瞬間、青い弾がこちらに飛んでくる。

「はあっ!!」

私はオレンジ色の弾でそのまま一步も動かずにその弾を打ち落とす。

しかし、男は立て続けに五発こちらに向けて撃ち、同時にスバルに向けた方ライフルから二発の弾を撃ち出す。

「クロスミラージュ!!」

『Load Cartridge』

一度に三発をロードする。

そして十発ほど弾を空中に浮かべる。

「ファイア!」

精密コントロールをしながらそれぞれの弾に向けて七発を打ち出す。

そして、残りの三発をさん方向からライニーにたたき込む。

「ほう、なかなかやるな。資料通りか。」

男はシールドで私の弾を弾いていた。

そして、いつの間にか凝縮された弾がそれぞれ一発ずつ、それぞれの銃口に浮かんでいた。

「なら、コレならどうだ？」

パンツという音と共に高速で弾が飛んでくる。

私はためらわずトリガーを引いて弾に当てる。

しかし、私の弾の方が力押しに負けた。

「シールド!!」

左手からクロスミラージユが消え、掌にトライシールドが展開され、飛んできた弾を弾く。

そして右手の銃から収束した弾を二発撃ち出す。

「スバル、クロスシフト行くわよ!!」

「おう!!」

返事と共に反対側でスバルが叫んだ。

「ウインググロッド!!」

バツと水色の道が空中をかける。

その上をスバルが走っていく。

「クロスミラージユ。」

『OK・Load Cartridge』

再び三発ほどロードされる。

そして今度は二〇発ちよいの弾を浮かべた。

その間にライニーはこちらを撃とうとするが、スバルが上手くクロレンジで牽制、なかなか撃てないでいる。

その迫力と言ったら、いつものことながらすごい。

『行くわよ、スバル!!』

『オーケイ!!』

パツとスバルが攻撃の軌道からはずれる。

「クロスファイアーシユート!!」

スバルに当たらないよう軌道を考えながらあらゆる方向から弾をライニーに集中させる。

するとライニーはフツと笑った気がした。

ガシャンという音と共にライニーのデバイスがカートリッジをロードする。

そして、

「レイズ」

何も無い上空に向けて弾を撃ち出した。

「レイン」

そして弾が割れて、雨のように降り注ぎ始めた。

一発一発は小さいが、威力が高かった。  
私が撃ち出した弾はすでに降り注ぐ魔力弾で相殺されていた。  
そして、私と高速で移動するスバルの上にも弾が降り注ぎ始める。

『RoundShield.』

広域シールドが展開されて私に当たるのを防ぐ。  
スバルもシールドで足止めをくらっていた。  
ん、足止め？

「スバル、逃げて！！」

下でライニーが魔力を収束させていた。  
それもすさまじい量だ。  
収束砲。

「シュート」

ライニーが無慈悲に咄くと収束砲が発射された。  
それがスバルのシールドに直撃する。

『スバル、平気！？』

念話で問いかけると応答があった。

『うん、一応。・・・なのはさんの収束砲より全然弱いから。』  
『そ、れもそうね。』

確かに、なのはさんの収束砲は半端ない。  
ストレス発散・・・もといお仕置きで私たちに収束砲を撃つとき

でもどこか加減して撃っているみたいだから、底が知れない。

ヴィヴィオの話だと、全力の場合、非物理設定でも床がクレーターののようにへこむほどだとか。

考えたくない。

『ティアナ、私は大丈夫だから今のうちに……』

『そうね。』

「バインド、クリスタルゲージ！」

ライニーがハツとしたように砲撃を辞め逃げようとするが、あっさりと捕まった。

3重のバインドとクリスタルゲージがライニーを拘束する。

「終わりです。おとなしく武装の解除を。」

クロスミラージユを向けたまま近づく。  
スバルも地上に降りて駆け寄ってくる。

「ははは……やはりお前らは未熟だな。」

しかし、ライニーは笑った。

「何を言っ……」

「当初のお前らの任務はなんだった？」

ライニーに聞かれて思い浮かべる。

「犯人確保と……魔道具の封印……」

ハツと魔道具の方を見る。  
すると、塗りつぶさんばかりの白い光が魔道具から漏れだした。

「スバルさん、ティアナさん。すみません、どうしてもシールドが破れません。今エリオくんが全力でたたいてますが、ヒビさえも入らないんです。」

「一つ教えてやろう。」

ライニーがモニターを出してこちらに向けた。

モニターには時間が映っていた。

いや、正確にはタイマーが。

「あれは、指定された区域に存在する魔力を回収する道具だ。もちろん、リンカーコアもここには含まれる。このタイマーが0になると起動して魔力を極限まで吸収、吸われた人はしばらく魔力の行使さえ出来ないだろう。」

モニターにはすでにあと5秒しかなかった。

「エリオ、キャロ、逃げてー!!！」

慌てて叫ぶと共にタイマーがゼロになる。

まぶしい光が一体を覆って、あちこちから悲鳴が上がった。

私とスバルは慌ててその場から退避する。

そして、光が収まると、ライニーも棒状の魔道具も消えていた。

そして、魔道具があったところには、

「エリオ、キャロ!！」



二人がたれていた。

） t o b e c o n t i n u e ）

## 第36話(前書き)

今回はシグナム視点です。次の更新は月曜日になると思います

## 第36話

### 第36話

「こちらロングアーチ。シグナム二尉、もうすぐ目的地点です。現場局員の応答がありません。気をつけてください。」

「了解。状況を確認後、犯人の追跡、逮捕に当たる。」  
「よろしくお願いします。」

通信を切ると風を切る音だけが耳に届く。  
朱い魔法光が後ろに流れていく。

「そろそろか。」

下に浮かぶ雲に突っ込んで降下する。  
すると最初目に入ってきたのは白い棒状の物だった。

なんだあれは・・・  
犯人も見あたらない。

「別ポイントに向かったライトニング・スターズ隊から報告。各地点にあると思われる棒状の物体は魔道具であり、封印しなければならぬようです。可能ですか、シグナム二尉。」

「ああ、問題ない。こちらは犯人もいないようだ。これから魔道具の封印作業に入る。」

「了解です。よろしくお願いします。」

通信を切ると、再度周囲を見渡す。

特に人影もない。

そういえば、先攻した簡易局員はどこに行ったのだろう。おそらく、この手前で足止めをくらったのだろう。犯人もそこに潜伏しているか。

「……私には向かないな。」

地上に降り立って棒状の物に触れる。

そのとき、後ろに殺気を感じる。

「はああー!!」

レヴァンティを握り絞め、居合いの要領で上段からの攻撃を受け止める。

ガキンツと刃と刃がぶつかり、火花が散る。

いつの間にか、目深くフードをかぶった男が刀状のデバイスで斬りかかってきていた。

「ほう、我が一撃を受け止めたか、ベルカの騎士よ。」

ハラリとフードが滑り落ち、黒い短い髪が風に揺れた。

威圧の意味を込めて相手の紺色の瞳をにらむ。

「いきなり斬りかかってくるとは……騎士にあるまじき行為だな。」

ハツと思いつきり刀をはじき飛ばし、距離を取る。

「我はお主と違って騎士ではないのでな、機動六課所属のシグナムよ。」

「私の名を・・・お前は誰だ!！」

「我か。我が名はムサシ・S・レトヌール。古き忍者の末裔よ。」  
「ニンジャ・・・なんだそれは。」

男・・・ムサシはじりじりと動かしていた足を滑らせた。

「お主、忍者を知らぬか!？」

「ああ、お前も知らぬだろ、レバンティ。」  
『Y a r r .』

途端、ムサシは背中を向けていじけだした。

「どうせどうせ、忍者なんて古いんだ。昔は大活躍だったのに、いつの間にか世界から名が廃れていつて、いまでは忍者装束で歩く変人に間違われるし・・・この世が我は嫌いだ。」

今のうちに捕まえようと私は機会をうかがうが、

「・・・隙がない?」

思わず呟いてしまうほど、男には隙がなかった。

ただムサシは背中を向けていじけているだけ。

・・・つまり無防備なはずなのに、気のたるみという物が感じられない。

おそらく切り込めば、避けられてしまうだろう。

「それなら・・・」

さっと足を引いて、さやに剣をいったん収める。

「はあっ！」

思いつきり抜き放ち、魔力の刃を打ち出す。  
案の定、ムサシは真横に最小の動きで避けてこちらを向こうとす  
る。

「そこだ!!」

返す派手もう一度魔力刃を打ち出す。  
殺気よりも速いスピードで刃がムサシに迫る。  
だが、

「なに!!」

ムサシが消えた。

いや、魔法で転移した。

消える一瞬前に魔方陣が見えた。

「バカな!!」

思わず叫ぶ。

こんな短時間で転移魔法を発動させるなんて、聞いたこともない。  
少なくとも私の知り合いにはいない。

『Maitre!!』

レバンティの警告にハッと後ろを振り返る。  
いつの間にか、ムサシが刀をこちらに振りかぶっていた。

「やああ!!」  
「・・・くっ!!」

渾身の力が入った一撃に何とか剣を合わせるが、思いっきりはじき飛ばされる。

「せやっ!!」

二撃目もぎりぎりのところで間に合う。  
そのまま権威の方向にさっと飛び退る。

しっかりと距離を取ってから再び剣を構えなおして集中力を高めた。

「なかなかやるな。」

「シグナムこそ・・・俺のこの攻撃を受けきったのはお前が二人目だ。」

「一人目は？」

「・・・俺の師匠だ!!」

素早い動作で間合いを詰めてくる。

「レヴァンティ。」

『Schlangeform』.

カードリッジを消費して、連結刃を止めていたスイッチがオフになる。

「飛竜一閃!!」

ハッと気合いと共にさやに収まっていた剣を抜き放つ。

連結刃がとかれ、蛇のように連結刃がうねりながらムサシに飛びかかる。

「うおお!!」

しかし、彼は刃を一閃させて軌道を逸らす。

「せやあ!!」

こつちが手首を返して、再び彼に襲いかかる。

「くそっ!!ロードカードリッジ!!」

ムサシの刀の柄からカードリッジがロードされる。  
どうやらベル方式に近いデバイスらしい。

「滴斬り!!」

朱い、シグナムに似た魔力光が刀から溢れ、飛来してきた連結刃を水平にないで遠くにはじき飛ばした。

「ちっ。」

完璧にコースを外れたため、柄を振って、連結刃をつなげる。

次の攻撃に写るため、構えを取ったときだった。  
後ろから白い光が溢れているのに気づいた。

「なんだ!？」

慌てて振り返ると、棒状の魔道具が白く光っていた。



何がどうなっているか、全くわからない。  
だが長年の勘からか、脳裏にすさまじい警鐘が鳴る。

「くそっ!!」

思いつきり地面を蹴ると急上昇して、情報収集に努める。

「さて、コレで今回の目的も達せるだろうし……ここらで我は  
帰らせていただく。」

ムサシからの念話が響いた。

慌てて彼のほうを振り返ると、すでに姿は消えていた。

「なんだこれは……」

眩いた瞬間、白い光が視界を焼いた。

↳ to be continue ↵

### 第37話（前書き）

フェイト主観です。

え、ちよつと違うんじゃないか？

そこは気にしないお約束です。

次回の投降は、いつになるかわかりません。

多分、今週中にあと一回は投降できると思いますが・・・ああ、

なんか毎日更新を目指していた昔の自分が懐かしい・・・

## 第37話

### 第37話

「確かここら辺だったと思うけど・・・」

すさまじい風に私の金色の髪が崩れていくのを押さえながらつぶやく。

「ん、あれなんだろう。」

見えたのは白い棒だった。

薄く輝いているが、それ以外には特に変だと感じることのないただの棒。

強いて言えば、その大きさが3mを超えていることぐらいだろうか。

「Caution!」

突然バルディッシュが警告を発した。

ハッと辺りを見回すと、少し離れたところに何か大きな物を持った人が立っていた。

その大きな物が少しずつ、光を収束させていく。

「まずい!!」

慌てて急上昇、軌道を変えると同時に光の矢がさっきまで私がいたところを通り過ぎていく。

「あぶなかつた・・・」

光が通り抜けたところを見ると建物の一部が抉れている。  
相手にロックされないようジグザグに飛びながら撃つた人に近づ  
く。

「管理局です。あなたを危険魔法使用の疑い、並びに殺人未遂で  
逮捕します。武装を解除して、とうとう・・・」

言葉を続ける前にフードの人が手を横に振ると空中にナイフが浮  
かび上がった。

「管理局フェイト・テストロッサ・ハラオウン執務官・・・プロ  
ジェクトFの遺産ね。」

ざっとナイフが飛んでくる。

「バルディツシュ!!!」

『H a k e n F o r m 』

持ち前の早さでナイフの攻撃をかいくぐりながら確実に一つずつ  
墜としていく。

「はぁあ!」

すべて墜とすとそのままハーケンスラッシュをお見舞いする。

「なかなかの早さね・・・」

私の攻撃を避けたときにフードが頭から外れた。

下から黒い長髪の女が顔をのぞかせる。  
ミッドでは珍しい黒髪に漆黒の瞳の女だった。

「けど、コレならどうかしら。」

今度は女の手元に拳銃が二丁現れる。

どうやら空間を歪曲させてどこから取り出したようだ。  
女はこちらに銃口を向けるとためらいもせず撃ってきた。  
それも一発ではなく弾倉各六発すべて。

魔力で緑色に輝く弾が高速でこちらに飛んでくる。

「シールド!!!」

慌ててプロテクションを張る。

弾丸がすべてシールドにぶつかる。  
その威力に違和感を覚える。

「……もしかして実弾？」

魔力の光で良くは見えないが、物理的な物がぶつかった感触がある。

どうやらあいては拳銃に魔力を纏わせて撃ってきているようだ。  
ミッドチルダでは質量兵器の使用を固く禁じている。  
それを犯した場合はかなり厳しい判決が下る。

「気づいたみたいね……」

女は一度攻撃を辞めるとこちらを見た。

「そうよ、コレはただの拳銃。弾丸に魔力を通わせているだけ。」

「質量兵器の使用は禁じられているとわかっているの行為ですか？」

「当たり前よ、なんて行っただって私は『マテリアルメーカー』《Material Maker》、センチ・S・シユイプレストなんだから。」

マテリアルメーカー・・・昔ミッドで質量兵器の技術開発を行っていた人のことをそう呼んでいた。

とはいえ、それはかなり昔の、それもかなり限られた世界でしか呼ばれていない。

現に私も、スカリエツティが“聖王のゆりかご”を持ち出して、資料を調べるまではその俗名を知らなかった。

「・・・とにかく、武装の解除をお願いします。」

「いやよ、まだ今回の目的を達せてはいないわ。」

「目的って・・・」

「この地区の魔力の回収。」

「・・・はい？」

言われたことの意味がわからなかった。

いや、言葉上の意味は理解できるのだが、実質的な感覚が伴わない。

「だから、このクラナガンとか言う都市の人が持つ魔力をすべていただくの。」

「・・・魔力の強制蒐集ですか。」

つまりが、闇の書の拡大バージョンだろう。

闇の書はその資質を得るためにリンカーコアを吸収する。

今回の場合は、おそらく魔力蒐集だけだろ。

それにしても、

「そんなに規模の大きいことが出来ると思うんですか？」

「そう、規模が大きすぎる。」

闇の書は資質までもらうから一人一人に当たらなくてはならないが、ただ魔力をもらうだけでも、理論上は可能でも現実的には10人が最高だと聞いたことがある。

それを一度に数千人も人のを・・・

「できるわよ、私が改造したあのペンantがあれば。」

センチと名乗った女が白い棒を指さす。

「・・・どちらにしろ、それは犯罪です。今すぐ辞めてください。」

「無理よ、もう発動してるから。」

あっけらかんと言われる。

「それでも、止めます!!！」

さつときびすを返すと、ペンantに向かう。

いくら発動中の魔道具であっても、封印してしまえばその効力はなくなる。

「だめよ。」

私とペンantとの間に先ほどの拳銃の弾が撃ち込まれた。振り返ると、センチがこちらに銃口を向けていた。

どつやら、向こうを倒さない限り、封印は出来ないようだ。

「クロスファイヤー・・・」

いくつもの魔法弾を浮かべる。

そして、向こうが撃ってきた瞬間、

「シュート!!」

センチの弾丸にも劣らない速度で次々と弾同士をぶつけていく。そして、煙にまみれた瞬間、

『Sonic Move!』

高速移動で相手の後ろに回り込み、

「はぁぁあ!!」

思いつきりないだ。

手応えはあったが、切ったのは服だけのようだ。

センチは慌てたように上空に移動しながらこちらに向けて更に弾を撃ってくる。

「フープバインド!!」

センチの軌道の先にバインドの罫を仕掛け、通った瞬間に締め上げる。

するとあっさりとセンチは捕まった。

「終わりだ。」



バルディッシュの先を向ける。

しかし、センチはクスクスと笑った。

「ホントに終わりかな？」

「なに？」

慌てて周りを見回すが、特に畏らしきものはない。

「ホントにバカね。」

振り向くと、いつの間にかバインドから抜けたセンチが遠くにたっていた。

しかも手には巨大でバズーカのような筒を持っている。

「やらせない!!！」

『Load Cartridge.』

バルディッシュがカードリッジを数発ロードする。

「トライデント・・・」

右手を突き出すと、すさまじい光量が集まっていく。

魔方阵が展開され、砲撃のバレルが展開する。

「スマッシュャー!!！」

相手が撃つと同時にこちらでも発動する。

二つの光線が中央でぶつかり合い、風圧だけで地面をえぐっていく。

そして撃ち終わると、私は上空に退避して、状況を伺う。

「落とせたかな・・・」

かなりの風圧がこちらまで飛んできた。  
普通だったら飛ばされているところだ。

「なかなかやるわね・・・」

そんな声がかから聞こえてきた。  
ハッと上を向くとセンチが上空にぶかぶかと浮いていた。  
慌ててバルディッシュを向けるが、彼女は刃向かおうとしない。

「けど、もうそれもおしまい。」

彼女はある一方を指さす。

そこには、ペナントがたっていた。

そう、白く輝きが増していくペナントが・・・

「ミッション、クリアね。」

センチの宣言と同時に真っ白な光が視界を焼いた。

そのまま高々度まで上昇すると、上からその様子を見る。

光はしばらく放出され続け、

「・・・消えた。」

光と共にペナントとセンチが消えていた。

↳ to be continue

### 第38話（前書き）

昨日はリニユールと言うことを知らずに更新しようとしてアクセスを拒否られた星伝です。

きょうはなのはさんとシュリ観点です。

そろそろ最終話が近くなってきました。

最後までよろしくお願ひします。

## 第38話

### 第38話

現場には局員の陰は見あたらず、男が一人廃ビルの上に立っていた。

フードは取られており、特徴的な赤い髪と深紅の瞳がここからでも確認できた。

例のアニヒレート事件の犯人と思われる男だった。

「しばらくぶりだな、高町一等空。」

男は気さくに片手をあげて挨拶をしてきた。

「ええ・・・アニヒレート事件ではどうも。」

「ははは・・・あれには私も驚いたよ。何せあの威力攻撃を単体の収束砲で打ち破られたのだからな・・・おそろしい。」

男がぶるつと震えるまねをする。

「それよりも、今日はアストラルはどこに？」

「今はちよつと遠出をしています。直に部隊長と一緒にやってきてあなた方を逮捕するでしょうが。」

「そうか・・・ならいいのだが。」

「・・・」

「・・・」

しばらく、沈黙が降りる。

「なぜこんなことをしているのですか。」  
「目的、という意味かね。」

頷く。

「そうだね・・・我々のシルベンスのため・・・とでも言っておくか。」

「シルベンスの？」

「そうだ・・・まあ、直にわかるさ。」

「直では困るのです。あなたたちが何をしでかすかわかりませんから。」

「そんなの私の知ったことではない。それに管理局に知られるわけにもかないしな。」

「・・・つまりが、犯罪をこれ以上犯すと。」

「そうだ・・・時には正義でも悪事を犯さなくてはならぬ時があるのだよ。」

しばらく、見つめ合う。

「・・・辞めてはくれないですね。」

「ああ、辞めるわけにはいかない。」

それならば、しょうがない。

「なら、力づくで、止めさせていただきます!!」

さつと距離を取ると、レイジングハートを握り絞める。

『Load Cartridge』

ガシャンと二発カートリッジがロードされる。  
意識を高めると、周りに魔力弾が大量に浮かぶ。

「デイベインシュート！」

一発一発を精密にコントロールしながら男に向かわせる。

「はあ！！」

しかし、男が手をなぎ払うと弾が途中で拡散した。  
どうやらただの魔力で弾を拡散させたようだ。

「起動！！」

『Standby ready, Set up.』

いつの間に持っていたのか、男に手に握られた黒い宝石が光る。

そして、そのまま形を変えて杖が現れた

管理局のどこでもあるような汎用型の杖だ。

しかし、外見が似ているからと行って、同じ物とは限らない。

現に、男のデバイスはインテリジェントデバイスだ。

「この前の借り、返させていただく。」

男の周りに大量の弾が浮かんだ。

こちらにも負けじと大量の弾を浮かべる。

「ファイヤー！！！」

同時に叫ぶと弾が一斉に飛び出す。

あまりの数なので、途中でぶつかり、誘爆を起こす。

それでも互いにいくつかは弾を通せた。

「シールド!!」

弾丸がシールドに弾かれていく。

そのまま、レイジングハートをバスターモードに切り替える。

『Load Cartridge』

数発、ロードされ、魔方陣が展開する。

「デイベインバスター!!」

砲撃を入れると、直撃する。

しかし、男のシールドに阻まれる。

「今度はこちらだ。」

た。  
いつの間に収束させたのか、男の杖先に朱い魔力光が集まっていた。

「シュート!!」

「プロテクション!!」

男の砲撃と同時にプロテクションを展開。

すさまじい振動が魔法の壁を揺らす。

が、突き破られることはなかった。

「はあはあ・・・」

「・・・」

魔力の放出と運動によって、息が切れる。

それは男も同じようで、顔にこそ出していないが、肩が上下して  
いるのが見える。

当たり前だ。

デインシュートを打ちながら更に飛行魔法で弾をよけ、時に  
はシールドで弾く。

さらには砲撃を入れて、それをガードする。

普通なら魔力切れでブラックアウトしてもおかしくないほどの運  
動量だ。

「なかなか、やります、ね・・・」

新たに弾を浮かべながら話しかける。

息が整うまでの時間稼ぎだ。

まあ、それは相手も同じだろうが。

「そういうお前も・・・ランク的にはSSくらいか。」

「ええ、まあ・・・実際には総合SS+ですが・・・」

「そうか・・・まあ、そんなのは関係ない。」

男も弾を周囲に浮かべた。

「そういうえば、私はお前の名前を知っているが、こちらは教えて  
なかったな。」

「教えていただけるのですか。」

「不公平だろう・・・私はディステイ・S・アクリオッドだ。」

「そうですか・・・なら改めて。機動六課戦技教導官の高町なの  
は一等空尉です。武装を解除して、投降してください。」

「・・・今思ったんだが、それってはじめにいうものじゃないの



か？」

・・・いわないで。

どうせ無理だろうと思って忘れてただけなんだから。

「それよりも、どうですか。ここらで目的を話しては？ 私たち管理局は昔と違って今ならそれなりに協力してくれますよ？」

前回、協力を仰ぐように言われたときに激高されたのを思い出して言葉を少し換えてみた。

実際、最高評議会の3方は死んだし。

これから随時仕組みも変わっていくだろう。

「無駄だ。どうせ管理局は手を貸してはくれないだろう。それに時間も無い。」

そういうと、デイスティはモニターに何かを映し出した。ここからではよく見えないが、時計のようだ。

「それじゃあ、時間がないといったので私はそろそろ消えるよ。」

デイスティが転移魔法を広げた。

「待ちなさいー!!」

慌ててバインドをかけようとするが、弾かれる。

「いいことを教えてやるっ、あと二十秒ほどで、ある魔法が発動する。」

ディステイが一角を指さしながら言う。

その先には白い棒状の物が突き立っていた。

さつきも確認してどういふ物なのか調べようとしたが、ディステイがいたので諦めた。

調べている最中に闇討ちされる可能性が高いからだ。

「あと十秒・・・ではさようなら。」

あつという間もなくディステイは消えた。

すると、棒状の物が白い光を帯びて輝きだした。

『Master, It's dangerous. Go back! 《危険です、退避を。》』

「あれ、止められないかな?」

『Impossible. We have no time.』  
「そう・・・」

悔しい。

実際どういふものかはわからないが、ここはクラナガンからかなり離れているし、住宅も近くにはない。

発動しても、危険はないだろう。

「いこうか。」

さっと地面を蹴ると高々度に避難する。

ちょうどその時、光が棒からあふれ出し、視界を覆った。

\* \* \* \* \*

はやて隊長と共にクラナガンに戻ると、すさまじい光景を目の当たりにした。

「なに、これ・・・」

シユリが口を押さえながら呟いた。

無理もない、あちこちに人が倒れているのだ。

管理局の人間と白い白衣を着た救急隊員達が道に倒れた人を救急車に乗せている。

しかし、数が多すぎて、それも間に合っていないようだ。

「状況はどうなってる？」

はやて隊長がロングアーチに連絡を入れるが、誰も出ないのか応答がなかった。

「どうします？」

「うん・・・ここを手伝っていきたいけど、今は基地に戻るのが先や。行くで、二人とも。」

「はい!!!」

デバイスを起動させ、宙を飛行しながら六課の隊舎へと向かった。

六課の隊舎も戦争状態だった。

通りすがりの人の話だと、魔力を持っていた人はたいいてい倒れてしまったそうだ。

原因は不明だが、おそらく魔力を吸収されたせいらしい。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、聞こえる？」

『うん。』

『こっちも聞こえるよ。』

あちこち指示を出しながらはやて隊長が二人に連絡を取る。

「状況は？」

『うん、例のフードをかぶった人たちが犯人。行使した魔法はわからないけど、おそらく魔力蒐集の魔法。』

『クラナガンにいる魔力を持った人たちから魔力を奪って逃走していったみたい。』

「そうか・・・フォワードメンバーは？」

『スバルとティアナは平気だけど、エリオとキャロが、この魔法に巻き込まれて魔力喪失状態。現在は近くの病院で治療を受けてるみた

い。』

「エリオとキャロが・・・了解や。なら二人とティアナ、スバル達は現地で住民や隊員の救助、それが終わったら現地調査をして。」

『『了解』』

二人の通信を切ると、はやて隊長はこっちを向いた。

「二人も、住民達の救助に当たってくれるか。」

「はい。」

「わかりました。」

そういつてきびすを返したときだった。

「ここにいたか。」

私の前を誰かが遮った。  
顔を上げると、フードをかぶった人が四人。  
うち一人は、赤い髪に朱い瞳の、あの男。  
不意を突かれたが、さつと距離を取る。  
後ろでシュリがデバイスを起動させた。

「ああ、今日はシュリテイ嬢にはようはない。」

「ようはないって・・・あなたになくても私たちにはあるのよ！」

牽制のためか、銃剣にカードリッジをロードして男達に向けている。

「ならさつさとして済まして退散するか。」

赤い髪の男がさつと手を振って、私に向けた？

「Versiegle Absage 《封印解除》」

途端、指すような痛みが全身を駆け巡った。

押さえ込まれていた何かが血液の流れに沿って全身を回り、頭の中にたまっていく。

「か、あ・・・はっ・・・」

あまりの痛み膝をつく。

「大丈夫アート!？」

慌ててシュリが私の肩を抱いて支える。  
しかし、答えることが出来ない。

「……………うっ……………うっ……………はぁ……………」

以前の、記憶を思い出そうとしたときの痛みに似ていた。  
しかし、前と違うのは、明らかに収まる気配がないこと。  
熱い鉄の棒を頭に突き刺されたかのような灼熱感がする。

「あ、コレ、待て!-!」

はやて隊長が脇を走り抜けていくのが気配でわかる。

「アート、しっかりして!-?」

シュリが何か叫んでいるが、よく聞こえない。  
フツと瞼が重くなる感触に少し安堵する。  
どつやら気絶するようだ。

コレで、痛みを感じないですむ……………

） to be continue }

### 第39話(前書き)

過去編、もとい記憶編です。

ここで最終部前編が一区切りとなると思います。

次からは中編となり、最後が後編でしょうか。

## 第39話

### 第39話

私が最初に見た物は父さんの顔だった。

髪はぼさぼさで、ひげも伸び放題。

あげくに着ている白衣は所々シミが付いている。

いわば、どこかの落ちこぼれ研究者のようだった。

「私ができるかい？」

にこつと笑いながら訪ねられ、コクンとうなずいた。

すると、部屋の中にすさまじい歓声が上がった。

見回すと、たくさんの白衣を着た人たちが手をたたき合い、喜びの声を上げていた。

何が何だかわからないままゆっくりと体を起こす。

すると、小さな私の体につけていたコードがするつと流れた。

コードの先は私の胸に付いていた。

もう片方は何か機械のような物だった。

「どこか痛いところとかあるかい？」

首を横に振る。

「そうかい、・・・そうだ、私がお前の父親だ。意味がわかるか？」

父親。

親族の中で一番近い存在。



一番近い血縁者の一人。

「おとう・・・さん。」

自然と私の口から声が漏れた。

すると、いつそううれしそうに父さんは笑った。

「そうだ、私がお前のお父さんだ。そしてこっちが、」

そういつて父さんが一步身を引くと若い女性が見えた。

父さんとは対照的に長いつやつあの髪が後ろに流れていて、肌も白い。

「お前の母親だ。」

少し不安そうに、だけど期待の目で母さんがこちらを見る。

「・・・おかあ・・・さん。」

「はい。」

フワツと花が開くように笑ってくれた。

それが何かうれしくて、私も笑った。

そのあと、色々と体を調べられた。

どれくらい経ったかわからないが、三時間はゆっくに経っただろう。

「そういえば、お前の名前がまだだったな。」

「名前？」

名前。

その個体の名称。

他の個体と区別するために付けられる言葉。

一部では、この名前に意味を込めてその将来に期待をかけるという。

「何がいいかな？」

「綺麗なひびきのがいいですね。」

父さんと母さんが色々候補を挙げながらあー出もない、こーでもないと考えている。

そして、

「アストラル、というのはどうだろうか。」

「アストラル・・・いいですね。」

こちらを父さんが向く。

「お前は今から、アストラルだ。」

「アストラル？」

「ああ、アストラル・S・キャロメイ。アストラルが名前で、キャロメイが苗字だ。」

「アストラル・S・キャロメイ・・・」

「星、という意味があるんですよ。」

横から母さんが補足説明をする。

「あなたはこの星<sup>シルベンス</sup>みん<sup>Astrai</sup>なの希望のもとに生まれたのです。だから輝ける未来を願って、星、と。」

\*\*\*\*\*

私が生まれてから約一ヶ月後。

八月と季節は夏。

初等教育学校の廊下に立つ私を蒸し暑い空気と強い日差しが攻め立てる。

「今日からみんなと一緒にこのクラスで学ぶお友だちを紹介します。アストラルちゃん、入ってきて。」

先生に呼ばれて教室に入る。

中には私と同じくらいの子達がたくさんいた。

「アストラルちゃん、自己紹介して。」

先生に小声でささやかれる。

「アストラル・S・キャロメイです。家の事情で今日から皆さんと学ぶことになりました。よろしくお願いします。」

家でお父さんに言われた通りのことを言う。

ついでに頭を下げる。

「というわけだから、みんな仲良くね。」

はい、という声の後に私は先生が指した席に着く。

一番後ろの一番窓側。

そこからはグラウンドが一望でき、遠くには灰色のビル群が見えた。

「ねえねえ、アストラルちゃん。何が得意なの？」

「好きな科目とかは何？」

「誕生日っていつ？」

「食べ物って何が好き？」

ホームルーム終了後、たくさんの人に囲まれる。

一度にたくさん質問をされ、どれから答えれば良いかさっぱり見当が付かない。

それに、パツと耳に入っただけの質問でも、答えられるかどうかわからない。

だって、私は生まれてからまだ一ヶ月しか経っていないのだから。

「ほら、みんな！そんなに一度に聞いたってその子が困るだけだよ！！順番に一つずつにしろなさい。」

「はぐ、うるさいな。いつもお前がしきんなよ。」

「そうだそうだ、お前に言われなかったってそれぐらいわかってるやい。」

私の前に飛び込んできた女の子にみんなの非難が向く。

正直、何か嫌だった。

私のせいで、その子がクラスのみんなにいじめられるのが・・・

「あ、あの・・・一つずつなら答えられるから・・・その・・・けんかしない？」

みんなの女の子に向く気迫に少しおびえながらもなんとかそういえた。

すると、女の子はこちらを向くとニコツと笑った。

「お、私をかばってくれるのか？うれしいなあ。」

そのまま身を乗り出して私の頭をなでてくる。

「そうだぞ、アストラル。こいつにそんな気遣いは無用だ！いつとも俺たちを殴ってくるぶじっ!？」

男の子が一人、女の子に殴られてうずくまった。

い、いたそう・・・

「なんのことかなあ？別に私は殴りたくて殴ってるんじゃないんだけどねえ？」

指をパキパキさせてにつこりほほえんでも意味ありませんよー！！

「あ、そうだ。」

女の子がパツとこちらを向いた。

「私、シュリティね。シュリティ・S・ウォルティ。よろしくね、アストラル。」

男の子に向けていた笑顔とは違い、とても小学一年生とは思えない綺麗な笑顔で笑った。

行こう、私はシュリ、ことシュリティと一緒に過ごす毎日が始まった。

\* \* \* \* \*

それはいきなりだった。

「ザリユート・S・キャロメイ。あなたを国家反逆罪で逮捕します。」

黒服の男達がデバイスをこちらに向けながら私とお父さんを取り囲んだ。

「くそ・・・アストラル！お前だけでも逃げろ！！お母さんのもとへ行くんだ！！」

父さんは私を唯一黒服の男達がない方向に押した。私は2・3歩つんのめって振り返る。

「取り押さえろ！！」

黒服の男達が一斉に父さんに襲いかかっていた。

「逃げろ！！アストラル！！」

その声にビクツとして、私は後ろに下がる。男達の一人がこちらに気づく。

「アストラル様。我々とご同行ください。」

ゆっくりと手を差し出される。

怖かった。

ゆっくりと差し出されたはずなのに、何か脅威を纏っているよう

に感じた。

思わずビクツとなると男はひくつとこめかみを揺らした。明らかに気が立っている。

「お願いします。我々と一緒に同行くください。」

再度差し出された手を私は見つめる。

彼の後ろでは父さんがぼこぼこに殴られていた。

そう思うと、彼の手が朱く染まっているように見えた。

「・・・いや。」

一歩後じさる。

すると男が一気に距離を詰めてきた。

「いや!..!」

私は慌てて身を翻す。

しかし、男は身軽で私はすぐに捕まった。

「はなして!..!」

捕まれた手を一生懸命ふりほどこうとする。

「すみません、少しお休みください。」

その声と共に後頭部に鈍い痛みが走る。

そのまま私は気を失った。

その後、私は気がつくとも見知らぬ白い部屋にいた。それきり外に出ることは許されなくなった。

私に優しい研究員の話だと外で私は田舎の学校に転校したことになるらしい。

そのまま、どういふことか考える暇もなく、何度も魔法の実験をさせられた。

変な薬を投薬され、激痛で眠れない日もあった。

何度か魔力が暴走して、人を消し炭に変えたこともあった。

そして、3年ほど経った運命の日。

前日は睡眠薬を飲まされ、強制的に眠らされていた私は目が覚めるとベッドの上に固定されていた。

研究員達が話すことを今まで余裕があるときに考えた結果、私たちの星シルベンスは今、滅びかけているらしい。

そして、それを回避するために私はここで実験させられていると言ふことも何となくわかった。

だから、私はこうやってベッドに縛り付けられても、何も言わなかった。

私一人が犠牲になってこの星が・・・ひいては親友のシユリを助けられるのなら、それでもいいと思った。

「準備は整った。」

ふいに広い空間に、その声は大きく響いた。

「これより、最終実験を行う。」

声の主と思われる男・・・どうやらこの男が研究の責任者のようだ・・・が私の縛られているベッドに近づく。



「アストラルよ、我が世界に復興と栄光を与え、導きたまえ。」

そう呟きながら、彼は私の胸に手を置いた。

「どうやら、いよいよ世界を救うときが来たようだ。」

世界が救われた後、私がどうなるかはわからない。

「いや、何となく想像は付くが、考えたくない。」

「けど、私は諦めていた。」

今の私にはどうやってもここを逃げ出すことはかなわない。

彼はそのまま目をつぶる。

すると、床に白い魔方陣が浮かび上がる。

それは今までに類ない複雑な、それでいて美しい模様だった。

その魔法に反応するように私の体がベッドから浮いた。

縛っていた綱は私の溢れる魔力の前に炭とかがしていた。

空中にいくつもの魔方陣が表れる。

その一つが光ると呼応するようにしてほかの光る。

そして、幾度かそれが起こる激痛が体を貫いた。

「く……かは……つつ……」

光る頻度が高くなるにつれ体が悲鳴を上げる。

「バチンツ」といういやな音とともに負荷に耐えかねたのか体の毛細

血管がはじけ飛ぶ。

白い床が赤く染まっていった。

しかし、それを認知するまもなくあたりは光の渦に巻き込まれていく。

「実験は中止だ!!」

「早く術を取りやめろ!!」

「無理だ、制御が出来ない!!」

「危険だ、逃げろ!!」

研究員達が叫ぶ声が聞こえるが、それを認識することが出来ない。そのまま、私は意識を白く染められていった。

最後に、魔法光が淡い紫色に染まるのが、何となく感覚でわかった。

そして、世界が一つ滅んだ。

私の手によって、世界が滅んでしまった。

・・・私が、世界を殺した。

｝  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
｝

## 第40話(前書き)

超々シリアス・・・

なかなか女の子の心情という物は難しいですね。

## 第40話

### 第40話

「……………んん。」

目が覚めると、灰色の天井が見えた。

もうここ数ヶ月の間何度も見ている私とシュリの部屋の天井。つまり、ここが私の部屋であると言うことだ。

ゆっくりと顔を右に向けるとシュリがいた。

いや、正しくは寝ていた。

私の右手を握って、もたれるようにして沈んでいる。

「……………」

不意にキュツと胸が痛んだ。

ふと、先ほどの夢……記憶が思い出される。

私がシルベンスを滅ぼした。

その事実が私の上に重くのしかかった。

シルベンスを滅ぼしたと言うことは、草や木、鳥を殺した。

そして、そこにいた人間も殺した。

つまり、

シュリの両親、友達も私が殺した。

「……………ごめん。」

謝って許されることではない。

そんなことはわかっているが、シユリを見ると謝らずにはいられなかった。

思わず涙が溢れる。

私の責任だ。

私がへまをせず、制御をしつかりしさえすれば今頃はシユリもシルベンスで元気にシユリの両親と生活を送っていただろう。

それを私が壊したのだ。

そんな私に、泣く資格などない。

「ん……あ、アート？」

シユリが気づいた。

まだ寝ぼけているのか、眠そうに目を擦りながらこちらをボーッと眺められる。

無防備な姿にズキッと再び胸に痛みが走った。

「おはよう、シユリ。」

「おはよう……って、大丈夫、アート!？」

急に肩を思いつきりつかまれた。

そういえば、私、フードを目深くかぶった赤い髪の男……例の計画の研究員になんか変な魔法をかけられて、それで気を失ったんだっけ。

そりゃあ、急に人が目の前で倒れたら誰でも心配するよな。

「ほら、涙拭いて……」

手の甲で涙をぬぐってくれる。

とてもうれしい。

うれしいんだけど・・・心が痛い。  
だましているような物だ。

シユリは何も知らないからそうやって血に染まった私を優しく扱  
っってくれる。

癒してくれる。

・・・けど、もし私がシユリの両親を殺した犯人だって知ったら・

・

私、憎まれるだろうな。

例えどのような状況であっても、私にはあそこで何か実験を、も  
しくはシルベンスの崩壊を止めることが出来たかもしれない。

しかし、そんなことをする気力さえ、あの時にはおこらなかった。  
どうせ自分は死ぬんだからと言う思いが先だって、他の人のこと  
を考えなかった。

そして、他の人は死に、私は生き残った。

・・・現実とは残酷だ。

どうせなら私一人を殺して、他の人を生き残らせれば良かったの  
に。

「どうしたの、アート？」

いつまでも涙が止まらない私に優しくシユリが話しかけてくれる。  
すごくその優しさが痛い。

「・・・ごめんね。」

思わず口から謝罪が漏れ出る。

主語や目的語がないのは、未だに自分のしでかしたことから逃げ  
ているからだ。

シユリに嫌われたくないからでもある。

「なにが？」

シユリは訳がわからないという感じに首をひねって、それでも優しく背中をさすってくれる。

「ごめん、ごめんね、シユリ。」

許されるはずがない。

人を一人どころか、何億人と殺しておいて。

そして、謝罪の一言で、私の罪が消えるわけではない。けど、言わずにはいられない。

「ごめん、ごめん、・・・シユリ、ごめんね。」

何度も何度も私は謝った。

それしか、私には今、出来なかった。

あまりの現実には、私は考えることすら出来なかった。

\* \* \* \* \*

すっかり日が暮れた。

私が目覚めたのは夕方ぐらいだからちょうど3時間ぐらい経ったのだろうか。

そういえば、以前も私は泣いて、こうやってシユリに慰めてもらった気がする。

「ねえ、シユリ。」

「ん、何？」

シユリは首を傾げる。

「話があるの。」

そういうとシユリは私の真剣な表情に居住まいを正した。  
何か、緊張する。

「あのね、私・・・記憶が戻ったの。」

「・・・ふえ？」

シユリは理解できないというように首を傾げた。  
突然のことで頭が混乱しているのだろう。

「・・・それ、ホント!？」

そして、うれしそうに抱きついてきた。

目に歓喜の涙を浮かべて。

うれしい、というのがわかる晴れやかな表情で笑いながら。

ギョツと、抱きしめてくれた。

だから、私は。

次に話すことが余計に辛くなった。

「うん。・・・それでね。」

「うん、うん。」

まだ何かいいことがあるのかとシユリが期待の目でこちらを見る。  
とても言いにくい。



うれしそうな表情を見せられて、思わず尻込みしそうになる。  
このかわいらしい綺麗な笑顔を私が壊すのは嫌だ。  
・・・けど、逃げてばかりもいられない。  
シユリには知る権利がある。

「私がシユリの両親を殺したの。」

思い切って言った。

「いま、なん、て・・・？」

シユリは再び理解できないという顔をした。  
しかも今度は、どちらかという理解したくないという顔を。

「私が、シユリの両親も、友達も・・・シルベンスの人すべてを、  
殺したの。」

528

今度こそ空気が凍った。  
すう〜っとシユリの目が細められていく。  
冷たい、こちらを拒絶するような目。  
目の端には涙が浮かんでいる。  
それも、さっきとは打って変わって悲しみの涙。

「それ、ほんと？」

シユリは確認するように私を見下ろした。

「・・・ごめん。」

私はシユリの問にただ頭を下げた。

すると、バタバタッという音と共にシュリが部屋を出て行った。  
暗い部屋の中に、私は一人取り残された。

「ごめん、・・・ほんとにげめん・・・」

私は唯唯誰もいない部屋で、誰に向かってか、謝った。

トオベコニトヌエ

## 第41話(前書き)

二日連続の投稿です。

・・・何か連続投稿は久しぶりのような気がします。

明日の投稿は出来ない予定です。えっ、こんな所で区切るなんて？  
すみません。としかいいようがないです。はい。

## 第41話

### 第41話

シユリが部屋を出て行ってからしばらく経った。

私は謝るのを辞め、ボケーと窓から外を眺めていた。

「嫌われた・・・よね。」

当たり前だ。

人の両親を殺しておいて私を嫌いにならないでというのが無理な話だ。

「・・・はあ。」

思わずため息を漏らしたときだった。

私のデバイスにコール音が響いた。

「はい。」

発信者を見もせず回線を開く。

「久しぶりだな、アストラル。」

相手はフードをかぶった赤い髪の男だった。

「・・・久しぶりです。」

敵・・・犯人だというのに私は悠長に返事なんかを返す。

実際何もかもがどうでも良くなっていた。

いつもなら“なぜ私の通信先を”とか“犯罪者がなんのようだ！”なんて言っているんだろうけど・・・

『おやおや、返事を返してくれるか。ところで記憶は戻ったかね。』

どきっとした。

「・・・なぜあなたが知っている。」

思わずにらむ。

『理由は簡単だ。私たちがアストラル、お前の記憶を封じ、そして先ほど接触した際に封印を解いたからだ。』

こいつらが・・・

「・・・・・・・・・・だ。」

こいつらが私の友達を・・・

『ん、なんだ？よく聞こえんが。』

「お前らが私の記憶を戻したのか!!」

『ああ、そうだとはいってるが。』

私の激昂に思わず身を引くような仕草をする。

「何でだ!!」

何で今なんだ。

なぜ戻ってしまった。

何で封じておかなかった。

何でシュリとけんかするきつかけを作った！

『なぜって・・・そりゃあ、こちらの計画とも関係があるし、何より不便がなくなっただる？』

普通ならそうだろう。

普通の記憶ならな！！

だが、なんで！！

『フム、そちらのシュリ嬢と仲違いでもしたか？』

「そうだ！！お前らのせいだ！！」

『ハハハツ！！』

男は私の言葉に高笑いした。

「な、なにがおかしい！！」

『いや、おかしいというか・・・情けないな。アストラル・S・キャロメイ。』

男はすぐさま笑いを納めた。

『例え思い出さなくても、罪とは消えないものなんだよ。』

ガスツと胸を刺されたようだった。

その通りだ。

この言うことは当たり前のことだ。

『逃げるな、アストラル。』

「に、逃げてなんかっ……」

『現に逃げてるではないか。罪を我々のせいにして、自分はそのうと生きようとも思ってたか。』

「っ……」

いちいち男の言うことは正しい。

何も言い返せない。

『とまあ、前振りはそこまでだ。』

男はんんつと咳払いをした。

『罪を償う気はないかね。』

「……どうということだ？」

すごく惹かれる内容だった。

例えそれが犯罪者の口から出たものだとしても。

『生き返させるのだよ。シルベンスの人々を……』

「……ハ、ハハハツ」

『どうした？なぜ笑う？』

「無理だよ。一度死んだ人は帰らない。それがこの世の摂理だ。」

当たり前の話だ。

そういえば、アルハザードという次元の狭間に存在する世界には死者をも蘇らせることの出来るテクノロジが存在するとか。

けど、そのアルハザード自体を見たものはいない。

私の<sup>リンク・オラ・ラフェイト</sup>レアスキルというものもあるが、あれは死者まで蘇らせることは出来ない。

『いや、無理ではない。』

しかし、男は至極まじめに続けた。

『まず、コレが見えるか。』

男が横から石のかたまりのようなものを取り出した。大きさは1m四方ぐらいだろうか。かなりの大きさの隕石だ。

『コレはシルベンスの核だ。』

言われた瞬間、ハツとする。

私は・・・コレを見たことがある。

場所は確か、お母さんの部屋だ。

いつも地下にいるお母さんの側に必ずそれは存在していた。

しかし、だからといって、それが本当にシルベンスの核かどうかはわからない。

父さんも母さんも一度もそんなことは言っていなかった。

『信じる信じないはこの際置いておく。それでだ。今この核には約2兆人の魂と記憶が保存されている。』

約2兆人・・・シルベンスに存在する人口のほぼ100%だ。

『その記憶と魂・・・そしてお前の“リング・オブ・フェイト運命の環”のレアスキルを持つてすれば、必ず、人々は生き返る。』



男の言っていることは本当のように聞こえた。  
実際、男自身は信じているようだ。

しかも、それが本当なら・・・私はシュリの両親を、友達を、シルベンスの人全員を救うことが出来る。

『詳しい話は直接会ってからにしよう。こっちへ来ないか、アストラル？』

男がモニターの向こうで手を差し出した。

私はその手をゆっくりと、つかもつとして・・・辞めた。

「・・・考えさせてください。」

そう答えた。

私はこの手で殺してしまった人が生き返る可能性があるなら、それにかかる責任があると思う。

けど、本当に生き返らせて良いのだろうか。

生き返らせるというのはその人を2回死ぬ運命に引きずり出すというものだ。

死ぬというのはすごく恐ろしいものだと思う。

実際、私は死にたくない。

それでも・・・

だから、私は聞いてみることにする。

それからでも遅くはないだろう。

『・・・わかった。なら、もし来るのなら明後日の正午に町の中のこの座標に来てくれ。』

男が向こうで何かを操作するとこちらにあたらしいモニターが開

く。

そして、町の地下のある座標をさしていた。

『そこで待っている。』

それだけ言うと通信は切れた。

履歴を見ると、着信記録は残っていなかった。

「……どうするか、か。」

まずは話をしよう。

そう思った。

\* \* \* \* \*

「なんで……なんで!!」

頭の中が混乱しながら廊下を走る。

どこに向かっているかはわからない。

唯唯、あの部屋から……アートから離れたかった。

遠ざかりたかった。

「何で……アートが……殺したの!？」

アートに言われたときは意味が全然わからなかった。

わかりたくなかった。

けど、どこかで感じていたのかもしれない。

なのはさんはアートが血みどろでそらからぶってきたと言ってい

た。

はじめはアートもシルベンスの崩壊に巻き込まれて、唯一残っただけだと思っていた。

どこかでちらりと疑いもしたかもしれない。

だって、アートは変わっていた。

私と一緒に小学校に入っつてしばらくしてから、アートは転校したと伝えられた。

そして、それ以来、一度も顔を合わせていない。

最後にあつたのは・・・もう2年くらい前だろうか。

そういえば、その頃にアートのお父さんが逮捕されたという話も聞いた。

アートのお父さんは何をしようとしたの？

もしかして・・・シルベンスの破壊？

「・・・そんなわけない!!」

そんなことあるわけない。

目の前に立ちふさがったドアを蹴破るようにして開ける。すると、屋上に出た。

いつの間にか、階段を上っていたらしい。

冬の冷たい空気が上気した頬をなでていく。

そのまま手すりまで歩くと、寄っかかった。

「ふう・・・」

頭の上っていた血が寒さでゆっくりと降りていく。それと同時に理性が戻っていく。

「・・・きれいだな。」

夜のとばりが降りた空を見上げながら呟く。  
星が満点の宙に光っていた。

アートと一緒にみたいな。

アートが見たらキャツキャツとはしゃいで、そして、今度私の目の前で再現してくれるかもしれない。

アートのあの魔法はキレイだ。

魔法は人の心を映す。

そういえば、小学校の頃の先生がそんなことを言っていた気がする。

魔法というものは精神エネルギーを変換して発動するものである。

故に、術者の心を魔法の光はよく映すと。

悪者の使う魔法はとても醜く、邪悪である。

善者の使う魔法はとても美しく、キレイである。

「……アートの魔法はキレイだったな。」

淡い紫色……言うなれば紫水晶に光を通した色だろうか。

とてもきらきらと輝いていた。

つまり、アートは先の理論から行くと、善者である。

けど、アートは殺した。

私の両親を、友達を殺した。

「……つく……」

いつの間にか止まっていた涙が再び流れる。

「どうしたの？」

不意に後ろから声をかけられた。  
驚いて、慌てて涙をぬぐい、声の主を見る。  
六課の制服に包まれたなのはさんだった。

「い、いえ・・・別に。」

「別にじゃないでしょ？泣いた顔してそんなこと言われても説得力がないよ？」

言い返せなくて、思わず黙る。

「・・・ほら、話して。力になれなくても、話したら気は晴れるかもよ。」

なのはさんは私の隣に來ると、空を見上げた。  
私もつられるようにして空を見る。

やはりそこには満天の星が輝いていた。

「・・・アートが記憶を取り戻したそうです。」

ぼつりと切り出す。

一瞬なのはさんが身じろぎをしたが、何も言わなかった。  
それだけで私が泣くわけないと考えたのだろう。

「それで、先日・・・といっても大分経ちますが、シルベンス崩壊の原因はアートにあるそうです。」

「えっ・・・」

横を見るとなのはさんは驚いた顔をしていた。

そりゃそうだろう。

私だつて最初は驚いた。

「そして、私の両親を・・・友達をアートが殺したそうです。」  
「アートが殺した。」

自分の言葉に私は思わず、胸がちくりとした。  
それが何かはわからない。  
けど、ジクジクと私の胸をさいなむ。  
しかし、私はその痛みを意識して忘れる。

「それ、アストラルが言ったの？」  
「はい。」

するとなのはさんはフッと息を吐いた。  
無性にそのため息がかんに障った。

「・・・どうかしました？」

とは言つても、相手は目上の人だ。  
なんですかと聞くわけにはいかない。

「ねえ、シユリ。聞いてもいい？」  
「はい？」

「アートからちゃんと詳しい話は聞いたの？」

「・・・いいえ。」

聞いていない。

だって、私は両親の敵かたきを知った時点で頭に血が上っていたから。

「それっておかしくない？」

「えっ？」

おかしい？なにが？

アートが両親を殺して、両親は死んだ。

それ以外に何があるというのだろう。

「ん・・・少し長いけど、付き合っただね。むかしね、小学校三年生の小さな子同士が戦った事件があったの。」

なのはさんは屋上に設置してあったいすに座りながら話す。

「原因はジュエルシードというロストロギア。一人はそのロストロギアをなくしてしまった人から頼まれて捜していて。もう一人はその母親からロストロギアを回収するように言われて。それで一つのジュエルシードを取り合う形となって大激戦が繰り返されたの。」

なのはさんは手でレイジングハートをいじり始めた。

私が聞いているかどうかは眼中の外のようだ。

「結局、母親に頼まれたこの方はその母親が次元犯罪者だった。

少女のほうもそれを知ってはいたけど、母親の言うことだから聞いてあげたいと思ってそれを叶えてきた。けど・・・それも一応犯罪だよな。」

こちらを確認するようになのはさんを見る。

私はいともいいえとも言えなかった。

「そして、最後は次元震を引き起こすほどの大事件に発達したの。」

けど、それもなんとか解決した。そしてすこしして、」

再びなのはさんは空へと視線を向けた。

「今度は管理局の魔導師が襲われる事件が多発した。少女二人もそれに巻き込まれた。原因はとあるロストロギアの発動。そのロストロギアの主は病気を患っていてそれを救おうと四人の守護騎士達が管理局員を襲っていた。」

なのはさんは懐かしむように視線を扉に向けた。

特に扉に何があるわけではないのだろう。

おそらく視線の先は・・・過去に向いている。

「その事件もなんとか解決した。けど、その守護騎士や主は犯罪者のレッテルを貼られる。」

でしょ?と再びこちらを見る。

「二つの事件どちらとも人のためを思って起きたもの。けど、それは間違っていた・・・ていうのは違うけど、志や目標は良くても、方法がいけないというのかな?そういうこと。」

なのはさんの言いたいことが何となくわかった。

「今回の件・・・アストラルがシユリのご両親を殺したって言うていたけど、それは本当かな?客観的に見たらそうかもしれないけど、事実と真実は違うものだよ?」

本当のことを知らずに、人を憎むのはいけない。

状況を鑑みず、それを否定するのは良くないことだ。



そう、なのはさんの心が伝わってきた。

「アストラルを憎むのをいけないとは言えない。けど、二人は親友でしょ？」

私はバツとかけだした。

アートに悪いことをした。

両親を殺したと言うことばかりが先攻して、何もかも見えなくなっていた。

アートに会いたい。

会って話したい。

けどその前に、

ごめん。

そういつて謝らなくては。

「ありがとうございます。」

私は屋上の入り口で振り返ると頭を下げてからアートがいる私たちの部屋に走った。

\* \* \* \* \*

私は、屋上から出ていく小さな姿を見送っていた。

「・・・話してもうたな。」

「だね。かなり脚色・・・というか、いいところ取りがされてる話

だったよ。」

私の後ろにはやてちゃんとフェイトちゃんがいた。  
シュリティは気づいていないようだったが、私たちはもともと屋上にいた。

あまりの彼女のオーラに思わず三人とも飛んで屋上の一つ上の屋根に隠れたほどだ。

そのあと、じゃんけんで、誰が話を聞きに行くかを決めた。  
もちろん、三人共が行きたがったわけだが。

「これで、仲良くなれるとええな。」

「なのはのアドバイスは適切で、心がこもってるから・・・大丈夫だよ。」

「そうだといいな。」

三人で手をつなぎながら空を見上げる。

「懐かしいな。」

「かなり時間が経ったからね。」

「複雑な思っただけど・・・いい出会いだと私は思うよ。」

「あ、うちも。」

「わたしも。」

三人はしばらく笑った。

そして、・・・

「それでさっきのシュリティの話、ホントかいな。」

「シルベンスの話？」

「そうや。」

「多分ホントなんじゃないかな？魔力量的にも問題ないと思うよ。」

「  
「・・・とにかく、調べてみるか。」  
だね。」

三人はゆっくりと、屋上から出ていった。

↳ t o b e c o n t i n u e ↳

## 第42話（前書き）

活動報告通り、今日投稿させていただきます。

今回は明日か、月曜日になると思います。

話は終盤中編、閑話話題と言ったところでしょうか。

次で中編が終わり、その次でクライマックスへ・・・もっていかれたらなあ。

## 第42話

### 第42話

さて、どうやって相談しよう。

喧嘩しているから話辛いなあ・・・なんて考えていたら。

「アート!!」

と、いきなりシュリが部屋に飛び込んできたので驚いた。

「アート!!」

再びシュリが名前を呼んで私の目の前に立つ。

正直、怖い。

次にどんな言葉が飛んでくる?

憎しみ?

卑下?

罵詈雑混?

何にしても私を傷付ける言葉に違いない。

けど、逃げることは許されない。

私はその言葉を受け止める義務がある。

「ごめんなさい。」

そう思っていたから、正直この言葉は想定外だった。  
頭が真っ白になる。

「え、・・・」

思わず我が耳を疑う。

私を憎んで、恨んでいるはずのシュリが私に謝る？

コレは私が望んだ幻聴なのでは？

「私、アートのことを何も考えずに、最後まで話を聞かずに部屋を飛び出しちゃった。それでアートを憎んだ。本当にごめん！！」

シュリがガバツと頭を下げる。

「い、いや・・・私が悪いんだし・・・その、謝られても。というか、謝るの私。ごめん。」

こっちも目一杯頭を下げる。

「.....」

「.....」

「.....ぶっ。」

「.....くくくっ.....」

そうこうしているうちに、なんだか笑いがこみ上げてきた。いや、なんか。

シュリなら何か、私を許してくれるような気がした。

私が殺したことに違いはない。

だから、今までと同じ関係というのは無理だろう。

けど、人と人との関係なんて、そう変化しないわけがない。変化して当たり前なんだ。

こうやって笑って、ちよっと不謹慎だけど.....

シュリとなら良い方向にかわれる気がした。

例えば私がシュリの両親を殺していたとしても。

逆に、シュリが私の両親を殺していたとしても。

「それで、ちゃんと話してくれるよね。」

うん。と私は頷く。

さて、何から話したものか・・・

まあ、シュリのことだ。

わからないことがあればすぐに話の腰を折ってでも聞くだろう。

\* \* \* \* \*

「なんというか、・・・スケールが・・・」

「うん。」

話し終わった後、シュリはしばらくポカーンとしていた。

いや、だってね。

シルベンスの存亡の危機とか、それを救おうとして逆に滅亡させてしまったとか。

うん、微妙だ。

スケールがでかすぎて、字面は理解しても、感覚的なものが理解できない。

そんな感じだろう。

あ、一応シルベンスが滅んで、私がシュリの両親を殺してしまったと言うことだけを話した。

シュリが部屋を出て行った後に犯人・・・ディステイからの通信があったことは伏せておいた。

これ以上、シュリに悩みを、迷惑をかけたくない。

そう思ったから。

「つまり、アートが私の父さん母さんを直接殺したというわけじゃないのね。」

「うん……どうだろう。結果的には私の魔力で傷ついて殺してしまったから。」

「そんなの、見方を変えればアートも被害者だよ。」

「そうだけど……」

何かその言い分は、私の腑に落ちない。

客観性を伴うならシユリの言い分にも一理あるんだけど……  
ほら、自分の感情的にね。  
納得がいかないのですよ。

「けど、よかった。」

シユリはフツツと息を吐くと、備え付けの冷蔵庫に向かってお茶のペットボトルを取り出した。

1本を私に投げてよこす。

「なにが？」

「ん？だって、アートを憎まなくて良くなったじゃん。というか、普通アートがそんな子とするわけないってわかってははずなのに……」

なのはさんのおかげだな。」

「え、なのはさん？」

突然出た関係のないはずの人の名前に思わず聞き返してしまう。

「うん、あのね、屋上でなのはさんに言われたの。何事にも原因と理由があるって。本当にそうしたくてそうなったのかって。」



「原因と理由・・・ね。」

一瞬、なのはさんの本質を垣間見た気がした。おそらくなのはさんも何か昔にそういうことがあったに違いない。だって、あまりに適切な、そして経験からしか出てこないような言葉だと感じるから。

あれだったら今度聞いてみよう。

・・・今度って、いつになるかわからないけど。

「あゝ、何かすつきりした。ね、ご飯食べに行こうー!」

「う、うん・・・」

シユリのテンションにひきずられぎみになりながらも頷いて、後に続いた。

\* \* \* \* \*

昨日、シユリに話を切り出すことが出来ないまま私は寝てしまった。

そして翌日。

起きたらなぜかシユリがベッドにいなかった。

今日は訓練も休みで、さらに私とシユリはオフだから時間はたっぷりあると思っただけけど・・・  
しょうがないか。

「どっしりよう・・・」

何もすることがない。

だからといって部屋でブーツとしておくのももったいない。  
シュリと二人なら、例え話がなくても町に出かけたりするけど、  
ひとりじゃねえ。

「……ほつつき歩こう。」

何となく、何かないか隊舎内を歩き回ることにした。  
そして、

「フェイトさん!!」

部屋に入ろうとする彼女を見つけた。

「ん、アストラルどうかした?」

扉を開ける前に彼女は振り向いた。

「あの……フェイトさんもオフシフトですか?」

「うん。けど、なのはもエリオもキャロも今日は待機だから私も  
部屋で仕事片付けようと思って。」

「そ、そうですか。」

ならお邪魔は出来ない。

シュリにしようと思っていた話を聞いてもらおうかとも思ったけど。  
しょうがない、シュリが帰ってくるまで外でもお昼寝しよう。

「なら、私はコレで……」

「あ、ちょっと待って。」

踵を返そうとしたところでフェイトさんに呼び止められた。

「ねえ、今暇？」

「は、はい。暇です。」

「うん、なら一緒に部屋でお茶でも飲まない？」

「はい？」

「こ、この人は何を言っているのだろう。」

「ついさっきまでお仕事しようとか言ってたっけ？」

「あ、嫌ならいいんだけど・・・。」

「いえ、ご一緒させていただきます!!」

「うん。」

そのまま一緒に部屋の中へ入る。

「ソファーにでも座ってて。」

フェイトさんはそういつて、キッチンへと入っていく。

「一瞬私がすると申し出ようかとも思ったが、ここは他人の部屋だ。以前一緒に住んでいたとしても、失礼に当たるかもしれない。にしても、」

「・・・変わってないなあ。」

品の良さそうな装飾に囲まれた部屋。

所々にかわいらしいぬいぐるみなどが置いてある。

部屋の隅にはヴィヴィオの遊び道具が積まれていた。

「そういえば、ヴィヴィオはどうしたんだろう。」

普段は部屋にアイナさんと一緒にいると思ってたんだけど……  
もしかしてなのはさんの所なのかな？

けど、なのはさんは仕事だし……まあ、いいか。

「はい、どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

目の前に紅茶とクッキーが置かれた。

カップを口元に持って行くと紅茶のいいにおいが鼻をくすぐる。

紅茶を一口飲むと甘酸っぱい味が口に広がる。

好みの味だ。

ふと、部屋を見回すと、ベッドの所に写真が飾ってあるのが見えた。

小学生の頃のなのはさんとフェイトさん。

すずかさんやアリサさんも一緒に写っている中学生の写真。

あれはユーノ司書となのはさん、フェイトさん、はやてさんが写ってる。

そして、フェイトさんによく似た少女と女性の人の写真。

その右にはクロノ提督の家族写真。

「そういえば……フェイトさんは二人のお母さんを持ってるんですよね。」

「うん。プレシア母さんとリンディ母さんのふたりね。」

その答えを聞いてしまったと思った。

あまりに無神経すぎた。

「あ、気にしなくていいよ。プレシア母さんのことも大切でいなくなっただけで少し寂しいけど、その分リンディ母さんやハラオウン家の

みん

ながいるから。」

「すみません……。」「

謝りながらある質問が浮かんだ。

この人なら私がしようとしていることをどう考えるだろう。

あ、もちろん本当のことは話せないから要点というか、ぼかして聞くことになるけど。

私がディステイの側についてシルベンスの復興……もとい時間を逆行させて星を復元する。

その際に死んだ人も戻ると私は考える。

魔法では新しく魂を作ることとは出来ても死んだ人の魂を作ること  
は出来ない。

それでも、できるなら……

「それでアストラル。何か聞きたいことがあったんじゃないの？」

いつの間にかフェイトさんが真剣な目でこちらを見ていた。

どうやら私が声をかけたときから気づいていたようだ。

何でこの人はそんなに鋭いのだろう。

というか、隊長陣の人たちはみんな鋭いし、強いし、優しい。

そんな彼女たちを信頼できる。

だから、確信はばかしても聞いてみることにした。

「フェイトさんはプレシアさんやアリシアさんに会いたいですか  
？」

すると、フェイトさんは一瞬悩むそぶりを見せた。

顔の表情が曇るのがわかる。

けど、すぐにその面影も引っ込んだ。

「会いたいかっていわれたら会いたいかな。だって、まだいっぱい話したりしたいこともあったから。」

「・・・ですよね。」

予想通りの回答だ。

はたと、そこで気がつく。

・・・私は卑怯だ。

死んだ人に会いたいかと聞かれればそれは会いたいと答えるに決まっている。

それが肉親だったり大切な人だったりすればなおさらだ。

それなのに、私は自分の意志の決定を決まり切った答えによって人の責任にしようとした。

・・・いけないな。

私の意志は自分で決めなくては。

「ありがとうございます。」

「それだけ？」

「はい。」

私は紅茶を飲み干すと頭を下げて部屋を辞した。

すでに私の意志は決まっていた。

↳ to be continue

### 第43話(前書き)

中編終了……です。

たぶん……(おいつ!)

次は明日の昼頃を予定しています。





というわけで、

「見に行っちゃえ、食堂へゴー！」

私は食堂の入り口に向かった。  
しかし、

「ダメって言ったでしょ！！！」

いつの間にかシユリが後ろにいた。

「多分、ああやって書いたら来るだろうなあ、とは思ってたけど。  
けど来ちゃダメー！」

「けど、」

「けどもくそもない！！！」

「・・・シユリ、汚い。」

「うるさい！！ほら、さっさと散る！！！」

無理矢理食堂の階から追い出された。

・・・

とはいっても、それで引き下がる私ではない。

「ここならどうだ？」

裏口へと回った。

ここは一般に食堂へ材料を搬入する入り口で普通の人は知らない

場所だ。

「ここならシユリにも見つからな・・・」

「こら〜！ダメって言うてるでしょ〜！」

見つかってしまった。

くそ、ここも知ってたか。

それなら・・・

今度は食堂の窓に回り込んだ。

ちようど食堂の窓が面するのは下に茂みが生えているので身を低くして歩けば見つからないは・・・

「しつこいよ！！ダメなものはダメ！！」

「何でわかるの！！！」

これだけ身を低くしてたら普通、窓から見えることはない。  
な、なぜだ！！

「とにかく来るな！！！」

むー、追い出されてしまった。

とは言っても、他に食堂には入れる場所なんてない。  
こうなったら最終手段だ。

「アスター」

『Standby ready, set up.』

アスターを起動させると、魔力を練る。

『Pinpoint Search.』

サーチャーを起動させてスフィアを一つだけ食堂に送り込む。  
コレなら絶対にはれない。

「ねえ、アストラル。何やってるのかな？」

何か背筋に寒いオーラを感じるんですが・・・

「魔法による盗撮・盗聴は違法だって知ってるよね？」

ゆっくりと振り返る。

白いバリアジャケットに杖状のデバイス。  
杖の先端付近には朱い宝石が輝いている。

髪をとめている白いリボンが風もないのに揺らいでいた。

「ちよつと、教育し直そうか。」

『Ring Bind.』

「な、なのはさん？」

桜色の魔法光のバインドが私を絞める。

「あ、アスター!!」

『Bind Break.』

私の焦り声にアスターが反応する。  
パリンとバインドが割れた。

「し、失礼しまゝす!!」

私は慌てて逃げ出した。

「まちなさ〜い!!」

後ろから破滅が追いかけてきているのがわかる。

だから、懸命に敷地内を逃げ回った。

どうやら私の暇な時間もつぶれそうだった。

\* \* \* \* \*

「よし。教育的指導終わり!!」

いつの間にか訓練場に引っ張っていかれ、私はなのはさんにいじめられ・・・もとい指導を行ってもらった。

訓練がどんな内容だったかは聞かないで。

いきなりレイジングハートがエクセリオンになったり、まわりから魔力を収束させて一星の光の破壊光線《Star light Breaker》を浴び

たなんて思い出したくないから。

時間はすでに四時半を回っている。

「ほら、アストラル。5時にシュリテイに呼ばれてるんでしょ？  
いったんお風呂に入ってきたら？」

「は〜い。」

なのはさんに促されて、私はお風呂に入る。  
あちこちがひりひりするが、血が出るほどのキズはどこにも見  
たらない。

さすがなのはさんという所だろうか。

どんなに高威力の魔法でも必ず訓練弾というのが優しさだ。  
けど、血は流れてないけど、私の心はボロボロです。

「はあ〜〜。」

さつと体を流して手早く服を着る。

時間を確認すると5時まであと5分だった。

「……うい。」

ちょうど、呼ばれている時間に食堂に着くだろう。

ドアに戸締まりをすると私は食堂へと向かった。

私は思わず、食堂のドアの前で足を止めてしまう。

目の前には閉ざされた扉がある。

まわりの窓はすべてカーテンが閉められ、足音一つ聞こえてこ  
ない。

普段ならこの時間、食堂の扉は開いているはずだ。

実際、私がお昼に見に行ったとき閉まっていなかった。

しかも、いつも誰かがいて、こんなに静かなのは夜中ぐらいな  
ものだ。

とても気味が悪い。

「……時間、合ってるよね。」



遅い

けど誕生会をしようってことになったの。」

シユリは説明しながら私を部屋の奥へと引っ張っていく。

一番壁際にはなぜか一段高い台がおいてあった。

そこに私をのし上げると、どこから取り出したのかマイクを一つ私に持たせる。

「え、それでは皆様。まずは開会の言葉としてアート本人に今の心情を聞いてみましょう。」

それだけ言うと、私に目線で何かしゃべるように促してきた。

そう、促されてもね。

・・・何をしゃべったらいいかわからないよ。

『ほら、何でもいいからしゃべって。うれしいとかありがとうございますとか、何でもいいから。』

シユリが念話でも促してきた。

「・・・え」と、今日は突然こんな会を開いてくださいます。ありがとうございます。正直驚きとうれしさで頭が真っ白で、何しゃべっ

たらいいかわかりませんが、皆さんと会ってからまだ少ししか時間が経っていませんが、色々お世話になっています。ありがとうございます。いま

す。今日は一緒に楽しみましょう!」

ガバツと頭を下げる。  
すると、再び会場が拍手に沸いた。

「え、では。話も終わったところで、さっさとパーティを始めますか。」

その言葉を待ってましたと言わんばかりにみんなが料理に群がった。

もしかして、私の誕生日というのはおいしいものを食べるための口実？

「はい、アート。」

壇から降りるとシユリが近寄ってくる。  
そして、何か小さな紙袋を差し出した。

「これ・・・」

「うん、誕生日プレゼント。」

何かうれしかった。

こんなものをもらったのは何年ぶりだろう。  
たしか、シユリと別れてから一度ももらってないから二年ぶりか。

「ありがとう!」

早速中を開ける。

すると、紫水晶の綺麗な髪留めが出てきた。

「綺麗・・・」



光にすかすと、きらきらと反射して紫色の光を私に注いでくれる。早速今付けていた地味な髪留めをほどくと、もらった髪留めで結びなおす。

「どうかな？」

頭を傾けてシユリに見せる。

「うん、似合ってる。」

「・・・へへへ。」

思わず照れて頬をかく。

何か感情をストレートに言われると恥ずかしい。

「あ、シユリティ、それフライング！！みんなで渡そうって言うたじゃない！！」

背後から聞いた声がした。

振り返ると、エリカちゃんが私服姿で立っていた。

「わあ、久しぶり！！」

「ホント、久しぶりね。」

「あれから学校はどう？」

「ううん、しばらくあんた達の話で盛り上がったよ。けど、今は平穩無事な毎日。少し刺激が足りないぐらい。」

「へ〜。」

「あ、そうだこれ。」

エリカちゃんがポケットから何かを取り出した。

「私からの誕生日プレゼント。」  
「わあ〜い、ありがとう!〜!」

開けてみると、中から品のいいブレスレットが出てきた。  
白いヒモに紫色のルビーがブドウのようになっているものだ。

「ありがとう!〜!」

しげしげと眺めていると下から服を引っ張られた。  
見てみるとヴィヴィオとそれから・・・

「エニスちゃん!!カナミちゃん!!ひさしぶり〜!〜!」  
「「うあああ!〜!」」

思わず抱きついてしまう。

「やっぱりアストラルなんだね・・・何か複雑。」

カナミちゃんが呟く。

「あはは・・・あの時は任務でね。背が小さくなってたから。」  
「けど驚いたよ。あ、年上だから敬語の方がいいのかな?」  
「ううん、そのままでもいいよ。」

「じゃあこのままで。私とカナミちゃん、一週間ぐらい前にいきなり知らない人から手紙が届いて、今日の5時からアストラルの誕生日  
生曰

パーティを行うって書かれててさ。しかも場所が管理局。はじめはアストラルが何か悪い子としたのかと思った。」

「バーカ、エニス。もしアストラルが捕まったら誕生日パーティーどころじゃないでしょ。」

「あ、それもそうか。」

ハハハッとエニスのポケに会場が沸く。

「あ、はい、アストラル。私とカナミからの誕生日プレゼント。」

手渡されたのは一枚のカードだった。

めくると、私と三人で遠出をしたときの写真が入っていて、ついでに押し花もはってある。

他のもの比べると見劣りはするが価値は同じくらいある。うれしい。

「ありがとね、二人とも。」

もう一度ギューと抱きしめる。

そのあと、色々と後日談を聞いたり、世間話を話し合いながら楽しいパーティーは過ぎていった。

\* \* \* \* \*

午後十時。

当の昔にエニスちゃん達は家に帰っていて、パーティーの後片付けも済んだ。

私はシュリと屋上で涼んでいた。

「楽しかったね。」

備え付けられたベンチに座りながら話しかける。

「うん、けど驚いた。任務で友達になった人たちがいるんだもん。」

「ああ、エニスとカナミとエリカね。」

「うん・・・もしかして、シュリが呼んだの？」

「そうよ。まったく、幼稚園行った時、アートの友人だって言ったらみんなに囲まれてね。いったい何したの？」

シュリは思い出したのか疲れたようにベンチにもたれかかっている。

けど、その目は笑っていた。

「ううん・・・ただ、カナミとエニスを友達にしてあげただけなんだけどね。」

「わたし、アートは神様なの？とか聞かれたわよ。」

「えっ・・・ああ、多分、エニスが事故にあったときに私が運命の環グ・オブ・フュイトでキズを回復させただけだよ。」

「・・・・・・・・」

急にシュリが立ち上がると私の前に立った。

そして・・・

「痛い痛い痛い！！！！」

いきなりこめかみに拳をぐりぐりされた。  
本気で痛い。

「たく、アートは少し不用心なのよ。そうホイホイレアスキル使

うなんてどうかしているよ。しかもあれって魔力食うんでしょ？ど  
うせ

使った後に今度はアートが倒れたんじゃない？」

「……おっしゃるとおりで。」

正直に答えるとハア、とため息をつかれた。  
なぜ？

「とにかく、今度からそんな無茶はしないこと。」

「……善処します。」

絶対にうんとは言えないお願いだ。

だって、今日で私は……

そうだ、一応シユリにも聞いておこう。

「ねえ、シユリ。」

「ん？」

隣でシユリが星を眺めていたので私も空を見上げた。  
満天の星に月が一つだけ綺麗に輝いていた。

「シユリは両親や友達に会いたい？」

「うん、会いたいと言われてれば会いたいね。」

「そう……」

なら、迷う必要はないか。

「けど、アートがいるから大丈夫だよ。どちらかというと、ア  
トが無茶していなくなる方が今は怖いな。」

一瞬どきつとした。

もしかして、シュリは私がしようとしていることを知っているのか!?

けど、よく考えればそれはあり得ないことだ。

だから、私は流した。

「うん、・・・そうだね。私はいつもシュリと一緒にいるよ。」

ちょっとだけ嘘で、ちょっとだけホント。

私自体はシュリの近くにいられないけど、私の心はいつもシュリと一緒に。

そして、計画が終わった後にすこしでいいからシュリにあって一緒に過ごせるように・・・

そついつ思いを込めて。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

### 第43・5話（前書き）

閑話休題です。

というか、前振りという所でしょうか。

え、今日の話はコレで終わりかと？

いいえ、昼頃にちゃんと本編を投稿する予定です。

あくまで、予定ですが・・・（おい！）

## 第43・5話

### 第43・5話

朝、私は早い時間に目を覚ました。

時刻を見るとまだ四時半。

普通ならここで寝直すところなのだが・・・

「・・・・・・・・」

私は起き出した。

静かに身を起こして、服を着替える。

シユリにもらった髪飾りで髪を結び、昨日から準備をしていた荷物を引つ張り出す。

中には最低限生活に必要なものが入っている。

ふとベッドで眠るシユリの顔をのぞいた。

「・・・・・・・・」

ふふ、何か可愛い。

普段のシユリからは考えられないほど頬をゆるめて、ニタニタ笑っている。

いったいどんな夢を見ているんだか。

「じゃあね、シユリ。今までありがとう。」

最後にシユリの髪をなでてから、私はベッドから離れた。

あらかじめ用意していた辞表と全てではないが、あらかたのいきさつを書いた手紙をシユリ宛てに机の上に置いておく。



その上にシユリへのプレゼントの袋を置く。

実は昨日、かなりドキツとしたのだ。

いきなりパーティを開かれたときに私が企んでいることが全て筒抜けになっているのではないかと。

シユリの誕生日はまだまだ先だが、コレはせめてものお礼とお詫びの印というわけだ。

昨日のパーティは私への最後のご褒美。

「行つてきます。」

シユリへの感謝とお詫びと・・・全ての人に対するお礼を、そして少しの席料を込めて私はこの日<sup>帰る家</sup>管理局を出た。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

### 第43・5話（後書き）

アート視点の話。

今後はしばらくシユリ視点となりそうなので書けるうちに書いてしまえと。

この話は思いつきの投稿なのでいつ削除されるかわかりません。つまり、読まなくてもいい、というわけです。

## 第44話（前書き）

予告通りに昼の更新です。

どこかスランプ気味です。

おもしろくないと思ったら即カット。

・・・は話がつながらないので斜め読み程度で。

次からは連続で戦闘シーンと鳴りそうです。

なんか、アートの救われない感じに・・・

どう結末を持って行こうか・・・

## 第44話

### 第44話

ピ。ピ。ピツという目覚ましの音に私は起こされた。

まだ回らない頭に倣って緩慢な動きで手を動かし、目覚ましの頭を手の自由落下で殴る。

しばらくウンウンうなって、それから体を起こした。

「・・・朝か。」

カーテンの隙間から射す朝日がまぶしい。  
時間を見ると六時だった。

「ア～ト～、朝だよ～。」

ベッドの上で伸びをしながら言う。  
しかし反応がない。  
これは爆睡しているな。

「ア～ト～。」

ベッドから降りるとアートのベッドが空なのに気づいた。  
私をおいて先に起き出したのだらう。

たく、アートは時々こうだ。

友達で親友なんだから一人で散歩するときや朝練するときにも私も起こしてくれればいいのに・・・

それとも私ってそんなに軽い人・・・んんん、んなことは思われ  
ていないはずだ。

これだけ私はアートが好きなんだから。

あ、もちろん恋とかじゃなくて・・・そう、愛だよ、“愛”！  
家族愛とか友愛とか、そんな感じ。

というか、アートに恋するって・・・私は女だ〜！〜！みたいな。  
それでも少し、そういう特別な関係になったりしたら・・・  
ブルルルルッ！

いかんいかん、私はなんていう妄想をしているのだ。

これはまだ理性の脳部分が起きてないな。

さつさと顔を洗って、アートを探しますか。

そう思って、洗面所に向かう途中、テーブルの上に何か置かれて  
いるのに気がついた。

「なになに・・・辞表!？」

わたし、アストラル・S・キャロメイは今日をもって管理局地上  
遺失物管理局通称機動六課の嘱託魔導師を私事で辞めさせていた  
だ  
きます

。後任の人事を選出するまもなく、なんの整理も出来ておらず大変  
ご迷惑をおかけします。今までありがとうございます。

「って、ホントに辞めたの!？」

取り上げた紙の下に何か別の紙があった。

そこに、アートが辞めることとなった経緯が書かれていた。

「贖罪をしに行く？」

よくはわからないが、そんなことを書かれていた。

そして、脇に置かれた袋は私宛らしい。  
中を開けると・・・

「・・・これ。」

綺麗な守り石だった。

つい先日、町に出たときに私が見つけたもので、買おうかとも思ったが、値段が値段・・・というか、むちゃくちゃ高かったので諦めた

ものだ。

この石には簡単な魔法が込められていて、事故や最悪から守ってくれることがあるらしい。

あくまで噂程度だが。

紫色をしたその石は窓から差す光を反射した。

「・・・アート。」

思わずそれを握りこむ。  
すごく悲しかった。

アートがシルベンスのことをそんなに罪に思っていたなんて、思いも・・・いや、どこかわかっていた。

というか、当たり前だ。

私だって人を殺したら罪に思うのは当たり前だ。

コレはアートをケアをしなかった私の咎だ。

何をするのかは一切書かれていないが、何もしないわけにはいかない。

「待ってて、アート。」

私は石を再び握ると紙をつかんで部屋を飛び出した。  
紙がクシャクシャと鳴る。  
まるで、アートが助けてと言っているようだった。

\* \* \* \* \*

言われた場所は廃ビルの地下だった。  
入り口から入るとすでにディステイ達はいた。

「早かったな。」

ディステイが無表情に、けどどこか嬉しそうに言う。

「いえ、・・・人の目を盗んできただけです。」

「いけないなあ。ちゃんと友人には話してきたのかね。」

「言ったら止めるでしょうし・・・それに私たちがするのは犯罪  
ですから。」

「犯罪・・・そう、犯罪だ。」

何か忌々しいと言わんばかりにディステイが呟く。

「我々が行うのはいわゆる善というヤツだ。多少まわりに被害は  
起きるが人が死ぬほどではない。しかもそれによって多くの命が救  
われ

る。なら何を戸惑う必要がある？例え犯罪だと言われても、私は救  
える命のためにその泥をかぶろう。なあ、皆のものよ。」

「はい、そのとおりです。」

「犯罪は好きじゃないけど、しょうがないからな。」

「私は別に・・・あの人が救えるなら。」

ライニー、センチ、ムサシも賛同の意を唱える。

まったく、コレで私にメリットがなかったら絶対つぶしてたのに。

けど、この人達の言うこともわかるから・・・私は手を貸す。

私は私の罪を償うために・・・

「それで、私は何をしたらいいのですか？」

けど、あまり時間をかけるわけにも行かない。

最悪、なのはさん達が動いて私を見つけてしまつかもしれない。

「なに、別に難しいことではない。今からは移動する。ちょっと

距離があるから時間がかかるが。」

「どこにですか？」

「もちろん、シルベンスがあった、そして復活する場所<sup>世界</sup>へだよ。」

\* \* \* \* \*

「なのはさんフェイトさんはやて隊長！！たいへんです！！」

私は時間も考えずに隊長室に飛び込んだ。

予想通りなのは三とフェイトさん、そしてはやて隊長はそこで何かの作戦会議をしていた。



「どうしたん？」

はやて隊長がモニターを不可視モードにしてから聞く。

「アートが、アートが、いなくなりました。」

「いなくなっただって？」

「こ、これが!?!」

手に握っていた紙を隊長達の前に広げる。

さっと読んだのか、隊長陣は頷きあった。

「セキュリティ、今から十分後にミーティングルームや。他のフォワードメンバーも呼んどくから、長期任務の用意をしよう。」

「はい、わかりました。」

「なのは隊長は、本局のクロノ・ハラオウン提督と連絡を取って緊急任務の依頼を。」

「わかりました。」

「フェイト隊長は至急町中の転送ポートの封鎖と検閲を依頼。あと、ミッドチルダ全域に捜索隊を出して。」

「了解。」

十分後、ミーティングルームには大勢の人が集まった。

「今回の任務は通達のあったように長期任務や。本局と協力してアストラルの救出と保護、そして都市攻撃、及び危険魔法使用の疑いで

指名手配されているディステイ、ライニー、センチ、ムサシの四

人を逮捕、護送が任務。」

「ついさつき、大規模転移魔法の発動が確認されて、そこにアストラルの魔力反応が見つかりました。おそらく次元空間へ移動したと思

われます。」

「というわけで、移動はおそらくクラウディアになると思う。相手はオーバースランク魔導師が勢揃いや。みんな気を抜かんようにな。

」

「……はい!!」

「それでは出発!!」

みんなはさつとミーティングルームから出て転送ポートに向かった。

私も向かおうと、席を立つ。

すると、後ろからなのはさんに抱きしめられた。

「あ、あの……私も行かなくちゃ、」

「大丈夫だよ、シュリテイ。アストラルは帰ってくるから。」

「え、……あ、……」

「うん、帰って来るじゃなくて、連れて帰るかな?」

「は……はい。」

「肩の力を抜いて……別にシュリテイは一人じゃない。みんながいるでしょ? だからね。」

「大丈夫、ですよ。」

「うん。」

心配してくれたのだ。

親友を失う痛さを少しでも和らげようと気を回してくれた。  
ちよつと泣きそうだけど、心細いけど、・・・がんばれる気がする。  
る。

アートのためにも、私のためにも、さつさと助けなくては。

それだけ言うと、なのはさんはぱつと身を離した。

「ほら、早くいこ！さつさと連れて帰ってお仕置きしなくちゃ。」

さつさと部屋を出て行くのはさん。

どこか嬉しそうだ。

・・・やっぱり連れて帰らない方がアートのためなのかな。

\* \* \* \* \*

「作戦・・・というより、計画を覚えておこう。」

民間船・・・にしては移動速度が速いが、次元航行船に乗って私は他の四人と食事を取っていた。

「まず、流れるにはこのままシルベンスのあるべき場所に移動する。そのあと、コア・・・あの岩だな・・・を解放してアストラルお

前のレアスキル“リング・オブ・フェイト運命の環”と“エカレスト聖櫃”をつかって、復元。場所の復元をする。」

「場所の復元・・・出来るの、そんなこと？」

「ああ、そのための補助魔方陣も編んだ。後はお前が発動させる

ただだ。少し次元心もおこるが・・・まあ、世界が崩壊するほどではな

い。

「信じて、いいんだね？」

「・・・もちろんだ。」

まだ少し信じられない。

事前に資料を渡されて読んだとはいえ、あくまで机上の空論だ。

まあ、実験が出来るわけではないからしょうがないのだろうけど・・・

けど、どうせ失敗しても死ぬのは私一人だろう。  
まわりに迷惑はかけない。

「デイスティ、管理局だよ。」

ライニーがデイスティに声をかけた。

「やっぱりな。で、どこの部隊だ？」

「それが・・・本局のクロノ・ハラウン提督率いるクラウディア艦隊のようだ。」

「げっ、まじかよ。少しコレは苦戦しそうだな。」

「とは言っても、接触時間はまだすこしある。その間に説明して、作戦を実行しよう。」

「ああ、」

そのあと、色々と注意点を話された。

今まで漠然としか使ってたこなかったレアスキルの本当の使い方もも教わった。

これで、何とかなると思いたい。

ねえ、シユリ。

この作戦が成功したら、一緒にまた会えるといいな。

↳ t o b e c o n t i n u e }

## 第45話(前書き)

予告通りの投稿です。

今回は視点がころころ変わります。

わかりにくかったら済みません・・・

次回は・・・時間があれば土日のどちらかで、多分無理なので月曜か、火曜日になりそうです。

## 第45話

### 第45話

アート、大丈夫かな。

私はアートからもらった石を指でいじりながら考える。

現在は私はクラウディアの船内食堂にいた。

時々、お茶を取りに来たり、お菓子を取りに来る船員が食堂に入ってくるが今は誰もいない。

まあ、当たり前だ。

今は作戦行動中なのだから。

普通なら私も自分の部屋でデバイスの調整をしたり、仮眠を取ったりするのだが・・・

どちらも手に付かなかった。

デバイスを調整をしていたらカードリッジを落としたり、かといって眠ろうとすると今度はアートのことが気になって眠れない。

いや、どちらもアートが気になっているから出来ないのだろう。

今頃アートは何してるかな。

空中をポケーと見つめながら考える。

食事だろうか。

それとも何か行動しているのだろうか。

はたまた、仮眠でも取っているのだろうか。

あ、もしかして私のことを・・・いや、それだけはないだろう。なんせアートのことだ。

私のことを考えたら、戻りたくなくなってしまっからとか思って別のことをしているに違いない。

考えないように、考えないように・・・

「私もそうしよっかな。」

口に出して呟くが、無人の食堂にむなしく響いただけだった。もしここにアートがいたら笑って突っ込んでくるだろう。

何言ってるんだって。

けど、やっぱりアートはいない。

・・・はは、何を期待しているのだろう。

いくら声を出したところでアートはいない。

出てきやしないのだ。

それを期待するなんて・・・

「はあ・・・」

頭がバカになっている。

シルベンスで天才の並列思考<sup>マルチタスク</sup>と言われた私がコレじゃあ。

『クルー全員に報告。 検索対象を補足。 フォワードメンバー及び突入隊は中央ミーティングルームに集合してください。 繰り返します。』

・・・

自虐していると不意に館内放送が入った。

検索対象・・・つまり、アートかディステイ一味のことだろう。

『Master・・・』

胸元から心配そうなレインの音が響く。



「大丈夫だよ、・・・さあ、いこつか。」

顔をパンと両手でたたいてからコップをカウンターに返却する。  
そのまま駆け足でミーティングルームに向かった。

\* \* \* \* \*

「敵艦に補足されたよ。」

操縦席に座る黒髪のセイステイがサーチャーを確認しながら言う。  
その声にデイスティが飲んでいたワインをテーブルにおいた。

「そうか・・・案外早かったな。」

「相手はクラウドディア、管理局の最先端新造艦ですから。この船との接触時間は5時間・・・といったところですね。」

「・・・少し作戦時間には早いですが、始めるとするか。」

デイスティが自分の腕に巻かれた二つの時計を見ながら呟く。

彼の話だと、片方はミッドチルダの標準時、もう片方はシルベンスの標準時をさしているらしい。

「少し気が引けるが・・・本気で行かせてもらおう。」

私の後ろに座っていたライナーが立ち上がる。

私たち・・・とは言いたくないが、デイスティ達の作戦はこうだ。

まず、管理局に見つかるのは時間の問題で、本命の魔法発動前に絶対に止められてしまう。

だから、途中途中の次元で寄り道をしながら相手を攪乱、同時にいくつかの地点で相手を足止めするのだ。

まずはライニー。

作戦が行われる次元は・・・第104管理外世界。

そこに浮かぶ一つの星、現地名称“アクアフィル”溢れる水世界。

その星は地表の約95%が水で覆われた世界。

ライニーの得意な銃術ガンと魔力相性の良い水世界。

これは例え1対多の状況でもライニーのレベル・・・Sランクがあればかなりこちらが有利となる状況だ。

いや、ある意味相手が多勢であるなら撃てば当たる的な勘定になってもおかしくない。

「あ、あの・・・なるべくでしたら、」

「ああ、わかっている。」

私が言おうとするとディステイがそれを制した。

「なるべく戦闘は避けるし、殺しも極力抑える・・・というか、多分変なのがでてこない限り衝撃で気絶させるだけだ。」

「・・・よろしくおねがいます。」

私は思わず頭を下げた。

彼らは全員が根からの悪者というわけではない。

シルベンスを助けたい。

その気持ちが暴走しているだけ。

そして、それは私も同じ。

シユリの心を、私の心を助けたい。

それだけだ。

\*\*\*

クラウドディアにアラートが鳴り響く。

すさまじい衝撃と共に急制動が船にかけられた。

ミーティングルームにいた私たちはその衝撃をこらえきれず皆が全面のスクリーンに突っ込んでいた。

・・・いや、クロノ提督となのはさん、フェイトさん、はやて隊長は別だ。

クロノ提督は今さっきまで説明していて、一番被害が大きそうなのに、プロテクションを掛けて自分の身を守っている。

その壁のまわりにはクルー達が折り重なっている。

・・・ひどい。

なのはさん達は空中に浮かんでいた。

これはコレでずるいかも。

ちなみに私は、他のクルーと同様全面のスクリーンにべちゃっと頬をぶつけていた。

「どうした。」

クロノ提督がブリッジに連絡を取る。

『はい、全面にアンノウン・・・いえ、視覚情報よりライニーと思われる人物が次元空間に立って我々の航行を妨害しています。』

「なに！？次元空間にだど？」

『はい、おそらくは幻影でしょう。しかし、そのまま突っ切ろうにも攻撃スフィアが前面に展開されていて進めません。』

「・・・ここで我々を足止めする気が。」

『おそらくは。』

「よし、Aグループ出るぞ。五分後に時空間装備を付けた後、八

ツチに集合。」

「『『『り、りようかい。』』』」

「六課メンバーからも幾人欠かしてほしいのだが。」

「ああ、かまわへんよ・・・そうやな、スバルとティアナでどうやろう。二人ならライニーとの戦闘経験があるし。」

「じゃあ、その二人を頼む。こちらはスフィアを撃墜した後、応援に向かわせるから二人は先行してライニーの行方を捜してくれ。」

「『了解。』」

「他は艦で待機。」

\*\*\*\*\*

『近くの世界にライニーらしき魔力反応を検出、スターズ2及び3は転送ポートより第104管理外世界の惑星アクアフィルに飛んでくだ』

さい。』

「『了解』」

あらかじめ立っていた転送ポートが輝き始める。

そして数秒の後、私とスバルは海の上にいた。

・・・て、

「『お、おちる〜！！！！』」

『Wingroad』

間一髪、マツハキヤリバーが展開したウイングロードに足が付く。あ、危なかった。

「たく、何で陸に降りないのよ。」

愚痴りながら周りを見ると、そこは一面青かった。

「うわあ〜〜ひろい!!」

スバルが感動の雄叫びを上げている。

「スバルうるさい! 私たちは今任務でやってきてるのよ。」

「でもでも、ティア。海だよ海。一面の海!!」

「そんなの見ればわかるでしょ。」

思わず冷たくあしらう。

一応、私だって感動しているけど・・・それを前面に出すのは恥ずかしい。

こんな時、スバルの素直な性格がうらやましくなる。

そんなことを考えながらクラウドディアからの情報を確かめる。

「うそ、この星約9割が海なの?」

「え〜、なら一割の陸はどこ?」

「うっさい、少しは自分で探せ。」

そっついながら、私はクロスミラージユを空に掲げる。

『Wide Area Search』

いくつものスフィアが空中に浮く。

そのまま、引き金を引くと私を基点に散弾していった。

数秒後、探査スフィアから陸地の報が入る。

「ここからだいたい5キロ先か。いったん行ってみよ、スバル。」  
「りょーかい、ならいこ。」

スバルが走り始めるのでその後ろを私も走る。  
数分後、

「ほう、スバルさんとティアナさんがやってきましたか。」

見えた陸地にはライニーが立っていた。

「管理局です。あなたを任務執行妨害、都市危険魔法の使用、その他諸々で逮捕します。武装を解除してください。」

私は一步前になるとクロスミラージユをライニーに向けた。

「それは出来ない相談です。・・・いや、条件次第ですね。」  
「条件？」

いきなり妙なことを言い出した。

「ええ、私はおとなしくここで捕まります。その代わりに、私の仲間を追いかけないでください。」

「それは無理です。」  
「当たり前だろう。」

いや、わかってていっているのではないだろうか。

「そうですか、・・・ならコレならどうです？私はここでおとな

しく捕まりますからあなた方は全員、クラウドディアで私をミッドチルダ

に護送する。その間、私の仲間を見逃してくれる。それでいいです。私をミッドチルダに護送し終わったら再び追いかけていただいで構い

ません。」

「……………時間稼ぎ、ですか。」

何となく、この男の行動が読めた。

彼は時間稼ぎをしているのだ。

おそらく、この条件をのめば、ライニーを護送している間に何かしらの行動を起こされる。

それは出来ない相談だ。

「回答は無理です。あなたの全面降伏しかありません。」

「そうですね……なら本気であなた方をつぶさせていただきます。」

男がそう答えた瞬間、後ろからすさまじい音が聞こえた。

振り返ると、波が押し寄せていた。

いや、そんな生やさしいものではない。

津波だ。

それも高さが優に20mを超えている。

「あ、言い忘れていましたが私の魔法光は青。ついでに属性は水。

この星とは相性がとてもいいですよ。」

そういつている間にも、津波が私とスバルの上に覆い被さるうとしていた。

)  
t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
)



## 第46話(前書き)

次話投稿の日時等は活動報告にて。  
誤字脱字・感想等ありましたら、ぜひご指摘ください。

## 第46話

### 第46話

津波がもう間近に押し寄せる。

迎撃しようにも、相手は波。

下手に魔力弾を撃つと、そこから波が崩れて多量の水が私たちを飲み込む。

それなら、

「スバルッ！」

「了解!!！」

スバルが地面に拳をたたきつける。

同時にウイングロードが波に向かって突き抜ける。

私はスバルの背中に乗るとカードリッジを3発消費する。

「レディ〜〜・・・」

「ゴー!!！」

スバルが猛スピードで私を乗せたまま走り出す。

振り落とされないようしがみつきながら、銃を正面に構える。

魔力を収束させ、より高濃度の魔力弾を練る。

「行くわよ！」

「おう!!！」

「クロスファイヤーシュート!!！」

さんざん練った魔力弾を真つ正面に打ち出す。

一足早く私たちの前を弾が通っていき、一瞬波に穴を開けた。

「いつけ〜〜〜〜!!」

スバルが全開で波に出来た穴を走り抜ける。

そして、私たちの後ろで波が崩れた。

「ほう、あの波をそのようにして回避されますか・・・なかなかおもしろい。」

いつの間にかライニーが私たちの前にいた。

「これくらいなんでもなるわ。さっさと怪我をしないうちに投降した方がいいんじゃない？」

「ふん、あれしきの攻撃で・・・そうだ、ティアナ・ランスター。確かあなたも私と同じガンナーでしたね。」

「・・・それがどうしたのよ。」  
「あそんであげましょう。それまではスバル・ナカジマはコレと戯れていてください。」

男が手を振ると、私たちの真上に攻撃スフィアが大量に現れた。

照準は・・・全てスバルにあっている。

「逃げて、スバル!!」

「けど、ティア・・・」

「いいから、あの男は私が何とかする。スバルはこっちにスフィアの攻撃が来ないようにしといて。」

「・・・了解。気をつけてね。」

さっとスバルが横に走っていく。

私は走ってウィングロードを降り、地表に足を付けた。  
そして、弾を大量に浮かべる。

「では、いきます。」

途端、いきなり視覚から魔力弾が飛んできた。

「はぁあ!!」

浮かべていた弾をで迎撃、そのままいくつかをコントロールして  
男に当てようとする。

軌道をよまれないよう、ジグザグに動かしながら。

「はっ!!」

しかし、男に当たる直前、魔力ではじき飛ばされてしまう。  
ただの魔力弾は男には通用しないようだ。  
少なくとも通常の二倍は魔力を練らないと通らないようだ。

「面倒だ・・・な!!」

さつと次々と弾を撃ち出す。

飛んできた弾を相殺し、その代わりに同じ量の弾をお見舞いする。  
しかし、そのことごとくを打ち落とされる。

相手を球数で牽制しながらスバルの方を見る。  
スバルも大変そうだった。

何せ、数十を超える数のスフィア群だ。  
しかも、かなり反応速度が速い。

攻撃でつぶしても、その隙に別のスフィアが撃ってくるようだ。

「よそ見か、余裕だな。」

ハッとして前を見る。

いつの間にか男の姿がなかった。

「しまった!!」

慌てて後ろを振り向く。

そこには魔力を収束させたライニーが立っていた。

それにしても変だ。

もし、彼が移動したのならクロスミラージユが反応するはずだ。それに照準が動くから私も気づくはず。

なのに、彼はまるで瞬間移動でもしたかのように後方に現れた。

・・・ということとはだ。

「・・・幻影。」

私と同じ技だ。

魔力シルエットを生み出し、相手を攪乱させる。

ある意味私の十八番とも言える魔法技。

「ほう、一回見ただけで見抜いたか。なかなか目利きがいいよう  
で。・・・けど、わかったところで対処のしようもなからう。」

男が力んだかと思うと、一度に十人に男が別れた。

どれがどれだか全然わからない。

「クロスミラージユ、一つずつ打ち落としていくから、解析よろ  
しく。」

『Yes, Master. Load Cartridge』

ガシャンと、カードリッジがロードされる。

「いくわよ、クロスファイヤーシユート!!」

本来は複数浮かび上がるはずの弾を一つにまとめる。

そして、コントロール重視で一気に打ち出した。

狙いを違わず一番は時から順に攻撃していく。

しかし、最後の一つを貫いても、男の姿は現れなかった。

「全て幻影!？」

慌ててまわりを確認するが、見あたらない。

『Master』

クロスミラージユの声にハツとする。

焦るな私。

今までたくさん訓練をこなしてきたんだ。

JS事件だって無事に解決した。

私はその頃より更に強くなっている。

目を閉じて、気を静める。

ガンナーに大切なこと。

集中。

「そこか!!」

わずかな気配の揺らぎに弾を注ぎ込む。

「くそ!!」

何も無いはずの空間が私の弾で揺らぎ、男が姿を現した。  
更に追い打ちを掛けるように弾を撃ち込んでいく。

「仕方ない・・・こうなったら本気だ!!」

男はいきなり陸にあった足を水につけた。

「ウィップスライス!!」

ライニーの銃口から魔力を帯びた水が一筋の流れとなる。  
それをふるうと、私が撃ち込んだ弾をことごとく打ち落としてい  
く。

「うおりゃ!!」

そして、そのまま水の糸を私へと向けた。

「くつ、散弾!!」

『Shotgun』

細かい魔力弾を打ち出し、爆発させる。  
その熱量によって水は蒸発した。  
しかし、

「甘い!!」

ライニーは更に水の鞭を繰り出した。  
数がさっきの五倍の十本に増えている。  
コレを蒸発させるのは無理だ。

「ちい！」

慌てて思いっきり飛んで上空に逃れる。  
すると、先ほど待て私がいいたところが鞭に切り裂かれた。  
地面は無残にも爪痕のような形に抉れた。

これは、なかなか手こずりそうね。

そう思いながらクロスミラージユを構えなおしたときだった。

『連絡、艦船前方にあったスフィアを排除終了、クラウディアは敵船の追跡を再開します。機動六課のティアナ・ランスター二等陸士、

及びスバル・ナカジマ二等陸士はその場にて犯人の逮捕任務を続行。こちらから局員十名とエリオ・モンディアル二等陸士及びキャロ・ル

・ルシエ二等陸士を派遣します。もう少しがんばってください。』

「りょうかい、逮捕終了次第、報告をします。」

返事をする、再びカードリッジをロードして、弾を撃ち出す。

「どうする、ライニー？コレが最終通告よ。ここで無条件降伏するならよし、しないなら、全力でぶつつぶす！！」

「……増援が来るようだが、ここで引くわけには行かん！！」

再び私のオレンジ色の魔力光とライニーの水色の魔力光がぶつかり合う。

もう少して増援も来る。



それまで持って、みんなでゆつくりと捕まえればいい。  
アストラルを助けるのは私の役目ではない。

「シユリテイ、がんばってね。」

思わずそう、呟いた。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

## 第47話(前書き)

明日の投稿は無理そうです。  
すみません。

## 第47話

### 第47話

『クラウドディア前方のスフィア、全て排除完了しました。コレよ、追跡任務を続行します。』

『エリオ・モンディアル二等陸士および、キャロル・ルシエ二等陸士は現次元にてティアナ・スバル両隊員の援護を、他の局員はそれ

ぞれ艦に戻って追跡任務に就け』

オペレーターの声の後にクロノ提督の声が響いた。  
どうやらスフィアを全て破壊できたようだ。

アート、大丈夫かな。

私はボケーと食堂の天井を眺める。

私に与えられた任務内容は一つ、アートの救出。  
だから私がここで出しゃばってティアナさん達を助けるわけには  
いかない。

一人で先行してアートを追いかけることも出来ない。  
いや、こつそりやればこの忙しい中だ。  
隊長陣も気づかずアートを追うことが出来るだろう。  
出来るけど・・・

「それでどうするの?」

直面する疑問を口に浮かべる。

何せあいてはディスプレイだ。

オーバーSランク魔導師にただのAAランク、・・・技術面を加味してやっところさSランクの私が彼にかなうわけがない。

それにアートを助けるといっても・・・今回の場合はアートから六課を出て行ったのだ。

おそらく、私や他のシルベンスの人たちに対する責任を感じすぎ  
て。

・・・別に私は憎んでなんかないよ。

この前も行ったけど、アートのせいじゃない。

どちらかと言えばアートも被害者なのだ。

そう何度もいったのだけど・・・

「無理だよなあ。」

どだい、そんな言葉では罪の意識は消えないのだ。

実際私でも、無理だろう。

というか、そんな簡単に消えるなら、この世から自殺なんてほぼ  
なくなってしまうのでは・・・

・・・話がそれた。

「・・・私、バカみたい。」

ただつらつらと考えるしかできないことがない。

私は、無力だ。

\* \* \* \* \*

「クラウドディアが追跡を再開したようだな。」

「え、ならライニーは・・・」

デイスティの言葉にムサシが慌てたように聞く。

「いや、まだ捕まってははいないようだ。どうやらライニーの相手をしているのは優秀な魔導師らしいな。」

「ライニーのやつ、捕まらなければいいが・・・」

ムサシが心配そうに呟く。

「ムサシさん、ライニーさんとは仲がいいんですか？」

あまりの心配しようだ。

「いや、仲がいいわけではない・・・というかむしろ悪い。アヤツは私の忍術をバカにするのだ。けしからん。」

「ならなんで・・・」

「この前の酒代と、掛け金を返してもらってないからな。かなりの額になっているのだ。」

「そ、そうですね・・・ところでおいくら？」

「72500シス(約12500円)だ。」

「・・・高っ！」

「そうだろ！？あやつが管理局にでも捕まったらその返済がパーだよ、パー！」

クソツツとムサシさんが壁に向かって拳を振っている。  
なんか、びみょー。

もうすこし、友情みたいなものがあると思ったのに・・・

「エッ、ムサシ、あなたも!？」

センチが操作していたコンソールから手を放してこちらを向いた。

「え、もしかして、お前も・・・」

「ええ、この前の麻雀で2900シス(約5000円)と花札、トランプで6960シス(約12000円)ほどよ。」

「くそ、あいつもしかして・・・」

「・・・逃げる気かね。」

「そうはさせない。」

「そうだ、例えば管理局に捕まっても地獄の底まで・・・」

「おいかけてやる。」

なんか、戻ってこない方が良さそうですよ、ライニーさん。

「センチ、ムサシ。あまりライニーをいじめるな。曲がりなりにも同じ陣営のヤツだろう。」

「それはそれ、コレはコレですよ、デイスティ。」

「そうです、公私は分けますから。」

「ならいいが・・・」

いいのかよ！

「ムサシ、次の第34管理外世界でクラウディアを足止めしてくれ。」

「了解、・・・そろそろシルベンスが近くなってきましたね。」

「ああ、あと少した。がんばってくれよ。」

「はいはい、この忍者ムサシにお任せください。」

シュツとムサシが消える。

「あと、すこしだ・・・」

デイスティが私の頭に手を置いてグシャグシャとなでた。

\* \* \* \* \*

ブリッジで私がクロノ兄さんと今後について話しているときだっ  
た。

「センサーに魔力を感知！しかし・・・」

コンソールの前に座っている一人が声を上げる。

「どうした？」

「はい、モニターには何も映っていません。」

「モニターに映ってない？」

クロノ兄さんがピピッと手元を操作すると、センサーの状況と死  
人モニターが浮かび上がる。

「確かに写ってないね。」

私は二つのモニターを見比べていう。

「そうだな・・・フェイト、どう思う？」

「・・・一人だけ心当たりはあるかも。」

シグナムが彼らと戦ったときに相手した一人だ。  
確か名を・・・

「ムサシ・・・だったかな。本人は自称ニンジャとかで潜伏と隠遁、あと転移魔法が得意みたい。」

「ニンジャ？」

「うん、後で調べてみたんだけど私の故郷の地球に昔あった種族？みたいなものらしいよ。」

「そうか・・・それで、対抗策は？」

「特に今のところはわかってない。ただセンサーに反応があるなら・・・必ずいる。」

「・・・フェイト執務官、行つてくれるか？」

「了解。何人が局員借りていってもいい？」

「なら、第六小隊と第七小隊を連れて行け。どうせ、探查魔法で相手をあぶり出したあと、得意のスピードで勝負しようとか考へてるんだろ？」

「よくわかったね。なら行つてきます。」

「気をつけて。我々は追跡任務を続ける。」

私は身を翻すと転送ポートに向かった。

\* \* \* \* \*

付いた先は暗闇だった。

否、光が存在しなかった。

「バルディッシュ」

『Flash Bullet』



「ファイア！」

天に向かって打ち出すと、まばゆい光があたりを照らした。まわりには転送された局員が整列していた。

「局員は散開。円形陣形にて閃光弾を中心に円を描いて並んで。そして、広域探査、及び敵補足後はロックオン探査を行ってください。

「了解！！。」「」「」「」

言われた通り、さっと散開した。

「バルディッシュ、カードリッジロード」

『Load Cartridge』

ガシャンと1発カードリッジを消費する。

そのまま私は静かに目を閉じた。

先ほどまわりを確認したところ、この世界は光がないだけの広大な陸地が広がっているらしい。

転送前にデータを確認したが、管理外世界と言うこともあり特に有益な情報は得られなかった。

特徴と言えば、先ほどの暗闇とあとは地面に凹凸が多いこと。スピード系の私には少し辛い戦場だ。

だが、

「そこだ！！」

ある一点にバルディッシュを向けて魔力弾を打ち出す。

すると、さつと気配が移動した。

「敵を補足、現在三時から四時の方向に移動中。」

『了解、範囲を狭めてより探査精度を上げます。』

借りた局員の対応の良さに内心感心しながら再度集中する。

すると、5時の方向にかすかな揺らぎを感じた。

「はああ!!」

今度はハーケンで空間をなく。

・・・空間!?

「やばいつ。」

慌てて横に回避する。

すると、今まで立っていたところにするさまじい打撃と土煙が上がった。

そして、一人の男が見えた。

「・・・ムサシですね。」

確認を取る。

「いかにも。私が忍びのムサシだ。」

ムサシは手に持った刀を握りなおした。

「私の隠遁術が破られたのは久しぶりだ。」

「隠遁術・・・先ほどの隠れている術のことか。」

「そうだ。・・・お前はフェイト・テストロッサ執務官だな。」

私は一步前に踏み出した。

「そうです。私は時空管理局機動六課フェイト・テストロッサです。あなたを公務執行妨害、並びに危険魔法使用等の罪で逮捕します。」

武器を捨ておとなしく投降してください。」

「管理局の決まり文句か・・・ところでフェイト執務官。一つ聞かせてもらおう。」

男はモニターに何かを映し出した。

「あなたがプロジェクトFの遺産、ジェイル・スカリエッティJSの研究の一部、そして、アリシア・テストロッサのクローンで

よろしいかな？」

「・・・それがどうした。」

「おお、こわいこわい。そうおこらないでください。あなたに感謝しようと思ったのですよ。」

「感謝？」

「そうです。あなたの実験データを参考に、我々は見事、計画を進めることが出来たのですから。」

「どういうことですか。」

何となく、聞かなくてもわかる。

「アストラルですよ。」

やっぱり。

前回のユーノの連絡時に言われたことが頭に引つかかっていた。

レアスキル“<sup>エカリス</sup>聖櫃”。

神様みたいな存在と人間との間に子供を産むとその子供は神様の方の精神エネルギーとリンカーコア自体がつながってこのスキルを手

手にする。

しかし、小説や物語にもよくあるように、神と人間の間には子になすことは出来ない。

そう考えると、自ずと選ばれる手段は限られてくる。

その一つが、人造生命体。

神の遺伝子、もしくはそれに匹敵する情報と、他の人間の情報を掛け合わせて生命体を作る。

その技術があれば、アストラルは生まれることが出来る。

「そう、あなたの考えているとおりアストラルはプロジェクトFの延長線上に存在する作品です。とは言っても、あくまで技術を流用し

ただけ、計画自体は全然別のものですがね。」

「・・・アストラルはどんな存在との間に生まれたんですか。」

あまり説明を聞いていては長引くだけだ。

現にあっては私が聞いたような情報を少しずつ公開して話を延ばしている。

確かに有益な情報ばかりだが、それも逮捕すれば、後でたつぷりと聞ける。

それなら今関係ありそうな情報を先に引き出すまでだ。

「もちろん、我々の神、ですよ。」

いまいち要領を得る答えではなかった。

しかし、これ以上は聞いても教えてくれなさそうだ。

「ありがとうございます、では後の話は署の方で聞きます。」

「あら、もしかして、長話に飽きた？」

「ええ、あなたを逮捕します。」

バツと足下で魔力を爆発させる。

そして、相手を捕縛するため、一気に間合いを詰めた。

） t o b e c o n t i n u e （

## 第47話（後書き）

ついさきほど、読み返していて前後のつじつまが合わないところがあつたので修正しました。

## 第48話

### 第48話

「ふむ、ムサシは足止めにはならなかったか。」

デイスティがモニターを見ながら呟いた。

まあ、しょうがないよな。

ライニーみたいにスフィアを大量に操れるわけでもないみたいだし、得意技と言えば召喚と潜行による闇討ち。

次元空間での召喚は意味がないから潜行によるセンサーの攪乱と戦力の分散。

まあ、見る限りではよくやっている。

けど、相手はフェイトさんだ。

どれだけ時間が稼げるか。

「まあいい。戦力が分散できれば上出来だ。後六課で残っているのは部隊長と高町なのは一等空尉、それと、ヴォルケンリッターにシユリテイ嬢か。」

「シユリ……」

シユリの名前が出てきて脳裏にシユリの顔が浮かんだ。

シユリは今頃、クラウディアの中で何をしているのだろうか。ご飯かな？それとも訓練？

いや、そもそもクラウディアの中に訓練スペースなんてあるのだろうか。

ないなら……書類仕事？

うわー、私あれ嫌いなんだよね。

シユリは鼻歌交じりに片付けていくけど、あの字面が……

「そういえば、私書類仕事残してきたんだっただけだ。他の雑務は片付けたんだけど、あれだけはどうしても片付かなくて……」

「そろそろ、予定次元に出ます。」

ムサシが出てから黙々とモニターに向かっていてセンチが報告してくる。

「そうか。やっとだな……長かった。」

デイスティがモニターで位置を確認しながら呟く。

長かったと行ってもたったの半年……いや、それ以下か。

それぐらいしか立ってないのに……まあ、犯罪者生活はかなり過酷なのだろう。

過ごした時間が濃密なほど長く感じると言うからね。

……いや、逆か？

「では、そろそろ準備を始めるぞ、アストラル。」

「はい……ていつても、何をするんですか？」

皆目見当が付かないんですが。

「そうだな……まずはメシか。」

飯……なんてのんきなんだろうか。

他の同志は戦っているというのに。

「デイスティ様、私は第37観測指定世界に出たら、近くの星で足止めに入ります。おそらく稼げる時間は15分……後は頼みま



す。」

「わかった・・・準備が出来たら俺も行く。それまでがんばってくれ。」

「了解。」

少し会話を交わすとデイスティは部屋を出てった。私もそれについて行った。

\* \* \* \* \*

「目標減速を確認。どうやらここら辺の世界に出るようです。」

コンソールに向かって一人の局員が報告をあげる。その声に、私は周辺に存在する世界の地図を広げる。

「・・・ここら辺ならやっぱり。」

「ええ、おそらく彼らの目的地は第37観測指定世界、そのシルベンスでしょう。」

横でクロノくんが呟いた声にも私も同意する。

ここら辺で彼が向かいそうな世界は底しか思い浮かばない。いや、ミッドチルダを出た時点で私たちは予測していた。

「そろそろ、彼らの“計画”とやらも最終段階に入ったのか。」

「おそらくは・・・アストラルを誘致した時点でそのことは予測してました。」

「で、彼らの計画の全貌は？」

「・・・わかりません。思い浮かぶことと言えば・・・」

一つの可能性を脳裏に浮かべる。  
しかし、それをすぐに打ち消した。  
たしかに、アストラルのレアスキルを持ってすればあり得ない話ではない。

しかし、あまりにも壮大で、想像できないというか。

「シルベンスの復活。」

不意に私の後ろから声が響いた。  
シュリティがブリッジに入ってきていた。

「アートは多分、シルベンスの復活を実行しようとしているのだと思います。」

はっきりとこちらを見て彼女は言う。

「なぜ、そう思う？」

クロノくんがシュリティを見る。

「彼女の罪の意識からです。そして、私がアートなら例えどんなに確率が低かろうともそれを実行しようと考えます。」

「だが、あまりにも突飛なことだぞ？」

「別に突飛なことではありません。」

え？

突飛じゃないって・・・いや、どう考えても突飛でしょよ？  
普通、星を復活させるなんて実行しようとも思わないよ。

「実際、シルベンスでは星の復活の神話がありますし、その研究も行われていました。」

「・・・そうだとしたら、どんな被害が出る？」

クロノくんが話を前に進めた。

「どうやら、そこを議論していても意味がないと判断したのだろう。それにシルベンス出身で、アストラルの親友の彼女のことだ。

他にも何か根拠が存在するのだろうか。」

「わかりません。ただ、アートの話ではシルベンス崩壊の原因はその研究の失敗にあると教えてもらいました。」

「つまり、星一つは軽く吹っ飛ばすと言うことか・・・」

それだけ呟くとクロノくんは一人で何かを考え始めた。

彼の指示に間違いは少ない。

だから私は信頼して彼の命令を待てばいい。

頼られれば、それを助けるまでだ。

だから、私はゆっくりとアストラルのことを思い出していた。

「そもそも最初に遭遇したのは私じゃなかったんだよね。」

アストラルはフェイトちゃんの頭上に落ちてきた。

そして、私がお見舞いをしに病院に行くと、彼女はベッドから立ち上がったのだ。

落ちてきた当初は私の制服がちでべとべとになるほどの重傷だったのだ。

リング・オブ・フェイト

今考えれば、あれはレアスキルのおかげだと理解できるのだが、当初はかなり驚いた。

そして、記憶喪失であることがわかって、一時的に私たち六課で預かることにした。

もちろん、教会から彼女のレアスキルの危険性を考慮に入れての判断でもあったが、何となくほっとけなかった。

フェイトちゃんもはやてちゃんもそう感じたのだろう。寂しさ。

みんなそれを味わってきたから、そんな思いをさせたくなかった。結局、私たちでは彼女の寂しさをぬぐうことは出来なくて、せめて気晴らしにと遊園地に連れて行った帰り、シュリティと出会った。結果、彼女のまわりの環境は劇的に変わった。

傍目から見るとただシュリティが加わっただけのような気がするが、よくよく見ていると明らかにアストラルが浮かべる笑顔の瞬間を見る回数が増えた。

そして、二人はそれぞれ互いの絆を強めあい、助け合ってきた。

「犯人は第37観測指定世界に入りました。」

観測員の一人が声を上げる。

「よし、我々もその世界に出る。武装局員は突入準備。」

クロノクンの声にブリッジが騒がしくなる。

しかし、それを上回るアラート音が船内に響く。

すこしして、砲撃魔法がクラウディアの前面を横切った。

「なんだ、今のは!？」

「砲撃魔法です。近くの惑星から狙い撃たれました。魔力パターンから犯人の一人、センチと断定。」

『うちがいく。』

新たに回線が開くとはやてちゃんが映った。

『うちなら彼女の物理攻撃も魔力でカバーできるし、広範囲からの攻撃も食い止められる。』

「そうか、ならたのむ。」

『了解や。』

通信が切れる。

「第2波来ます！」

局員の一人が声を上げる。

「回避！！左三十度緊急回頭」

クロノくんの指示でさつと船が回る。

すると、その横を砲撃魔法が通り過ぎていった。

「いよいよ、相手も佳境か・・・」

ぼつりと、私は呟いた。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

## 第49話(前書き)

明日の投稿は無理そうです。  
すみません。

## 第49話

### 第49話

クロノの指示で私は第37観測指定世界のある星に降り立った。底は空気こそあるが、一面が赤色の世界だった。

「砂地……か。」

つま先で地面を蹴ると、ポロツともろく地面が削れた。

「おや、部隊長自らご出陣ですか。」

響いた女の声に頭を上げた。

黒い髪に黒い瞳……

「センチですね。」

「おいおい、初対面で呼び捨てかよ……。」

「失礼しました。センチさん。私は時空管理局機動六課部隊長八神はやてです。あなたを都市での危険魔法使用、その他諸々で逮捕し

ます。武装を解除して、おとなしく投降してください。」

「ねえ、それで武装を解除する悪党っているのか？」

「……さあ？」

「いるワケねーダロ、バカ!!」

「んな。バカとはなんやねん。そういうあなたの方がうちよりあほやる。」

「それはどうか？ なんとってあんたはここに単身で乗り込んで

きた。例えSSSランク魔導師でもアウェー敵地にこのこやってく

るなんて、バカかあほでしかないだろ。」

「あ、あほあほいうな!!」

む、むかつくやつやなあ。

何か報告にあったのと違う気がせんでもないけど・・・

そんなの関係ない。

「とにかく、武装を解除するんですか、しないんですか?」

「だから答えは一つって行ってるだろ!!」

いきなりセンチは後ろに手を伸ばした。

来る!!

「パラダイス・ボックス展開、スフィア!!」

センチの前にスフィアが展開されていく。

「させるか!!リイン、ユニゾンや!!」

「はいです。」

「ユニゾン、イン!!」

「ホーミング弾!!」

パツと私のまわりに魔力弾を浮かべる。

そのいくつかをスフィアにたたき込む。

すさまじい爆発と共にスフィアが次々と壊れていく。



「ターニングダガー!!」

センチのいると思われるところから短いナイフが飛んでくる。それをすレイプニールで飛びながらぎりぎりのところで回避する。

「リイン、魔力チャージ。」

「はい!!」

「させない!!」

魔力弾が一度に5つ飛んでくる。

それをなんとかシールドでしのぐ。

「キューブブラスト!!」

魔力を直方体の形に押し込め、相手に向かって放つ。

スピードがあまりないから当然簡単にセンチは避ける。

そして、次の攻撃に移ろうとして、

「もろうた、ブレイク!!」

箱中の魔力圧を一気に膨らまして爆発させた。

その威力が多数のかまいたちと魔力刃となつてセンチを襲う。

「ちつ。」

センチは次に出そうとしていた道具を放り出し、一気に急上昇する。

その手際で彼女に魔力刃は掠りもしない。

「なかなかやるな。」

「そつちこそ、・・・けど、まだまだだよ。」

その言葉はある意味本当だ。

だが、ある意味では嘘でもある。

もともとこちらは高威力広域攻撃が得意なんやけど、それを打ち出すには少なくともさつきぐらいのチャージ時間がある。

何度かは相手の攻撃を回避できても、そうそう振り切れるものでもない。

「なら、少し本気になるか。」

センチはそういうと、またあの後ろから出す仕草で何かを出した。

「・・・銃？」

それは地球でよく知る銃の・・・いや、マシンガンの形を模してあった。

「ご丁寧に弾のつなぎがセンチの後ろへと流れている。」

「よく知っているね。そう、これは世界で最初の短機関銃M1915を渡しように改良したもの。この通り、球数に制限がないし、魔力付与が

出来るからあらゆる付加効果も出来る。こんなふうだね。」

センチはあっさりトリガーを絞った。

すると、轟音と共に弾が私に向かってくる。

慌ててシールドを張るが、あまりの威力にシールドが揺らぐ。

一歩踏み出そうにも動こうとすると、相手は足下を狙ってくる。

つまり、どうにも動くことが出来なくなってしまった。

\* \* \* \* \*

「敵船内部に転送ポートをつなげました。」

「よし、武装局員は乗り込め。」

「了解。」

ブリッジに入るとクロノ提督が慌ただしく指示を出していた。  
「というか、今・・・」

「敵船に入れるんですか？」

思わず駆け寄って聞く。

「あ、ああ。一応相手も動いているから座標確定までは出来ないけど、最近開発されたシステムのおかげで自動追尾が出来るようになっ

たからね。」

「つまり、乗り込めるんですね。」

「うん、そういうことだ。」

私はそれだけ聞くと、踵を返した。

「待て、セキュリティ。どこに行くつもりだ。」

「もちろん、転送ポートです。私も乗り込みます。」

「ダメだ。」

「な、何ですか!!」

私はこの時のためにじつと艦船でおとなしくしていたというのに。さっさと行って、アートを止めなくちゃ。

「まだ船の内部が安全だと確認されたワケじゃない。いま、なのは隊長も潜入に向かった。もう少ししてから行け。」

「けど!!」

それじゃ、間に合わないかもしれない。

また、私は全てを・・・アートを失ってしまうかもしれない。何もしないでそんなことになるの末なんて、出来ない!!

「こら、待て!!」

私は走って転送ポートに向かった。

クロノ提督が後ろで叫んでいるが今回は無視させてもらう。転送ポートに着くと、システムを起動させる。

しかし・・・

「なんで!!」

ブリッジからのロックに弾かれた。

クロノ提督の仕業だ。

「・・・そっちがその気なら。」

私はレインを握り絞めた。

さっと起動させて、クラウドディアのシステムにつなぐ。

「甘く見ないで！」

『Hacking Start!』

ザーツとクラウドディアの転送システムプログラムを解析していく。解析が終わるとセキュリティシステムを妨害して転送履歴から敵船の座標を割り出す。

5分くらいかかったが、なんとか終わった。

「システム、起動!!」

さっと目の前が白くなり、私は転移魔法に身をゆだねた。

） to be continue

## 第50話(前書き)

お久しぶりです。

もう、一週間ぶりの投稿となります。

## 第50話

### 第50話

デイスティに連れてこられたのは白い部屋だった。そう、白い、何も見あたらない部屋。ただポツンと、中央にベッドが置かれているだけ。

「ここって……」

見覚えのある……というか、嫌な記憶の部屋だった。

ここは、私がシルベンスを延命しようとして失敗した部屋。

いや、それを擬似的に再現してあるのだろう。

よく走らないが、白というものには意味があるのかもしれない。

「そうだ、ここでやる。」

デイスティはそれだけ言うと、中央に歩いて行く。

彼も苦い記憶が蘇っているのだろう。

失敗するかもしれない。

そんな感情を抑えきれないようだ。

「そこに寝ろ。」

あの時のように体をベッドに横たえる。

すると、金具で体を固定された。

あの時と同じだ。

これで私は天井しか見ることが出来ない。

「そんなに緊張するな。あの時とは違う。」

デイスティが何かモニターで操作をしながら声を掛けてくる。気がつけば、いつの間にか私は拳を力一杯握っていたようだ。汗で手がぬるぬるする。

「術式もよりよいものにかえた。起動魔力も保持魔力も十分にある。使う装置もミッドチルダの最新式だ。なにより、お前の思いと相棒のデバイスがあるだろ。」

左手にあるデバイスを握り治す。

そうだ、あの時とは違う。

何も知らずにやらされるわけでも、補助器具であり、心強い相棒のアスターもある。

そして、覚悟と思いが違う。

人の思いは魔法に影響する。

どこかの学者もそういつていた。

だから今度こそ、成功する。

シルベンスの人が蘇る。

シュリティに家族と会わせてあげることが出来る。

「気分が落ち着いたら始めてくれ。焦ることはないが、なるべく早くしてもらえると助かる。そろそろ・・・」

デイスティの言葉を遮るようにアラートが鳴る。

続いて開いたモニターには転移魔法でこの船に転送されてくる管理局員の姿が見えた。

「ほら、お着きのようだ。俺はあいつらの相手をしておく・・・」



なに、一度始めたら止めることは出来ない。後は、お前次第だ。」

そういうと、彼は部屋の出口に向かった。

「・・・私が管理局に寝返るとは思わないんですか。」

そう聞くと、彼は笑った。

そう、笑った。

頬をあげてアハハツと言わんばかりの剛胆な笑顔だ。  
初めて見る彼の笑顔は輝いていた。

「俺はお前の思いを信じてるからな。」

・・・何か思っていた人と違う。

彼はもつと根暗で陰湿で酷な笑みを浮かべるとばかり思っていた。  
そして、気持ちの面でも。

案外いい人なのかも。

そう思いながら、私は心が落ち着くのを待った。

\* \* \* \* \*

私の口から荒い息が漏れる。  
息を整えようとすが、

「っ!」

遠くから飛んできた弾を慌てて避ける。

さつきからこうなのだ。

いくら私が攻めてもライニーは息をつくまもなく次々とターゲットを変えて撃ってくる。

おかげで私たちはさつきから息が上がらっぱなしだ。

ライニーもそれなりに息は上がっているようだが、時々笑うぐらいには余裕があるようだ。

それもそうだ。

彼は私たちと違って最初に大波を作ったとき以外はほとんど動いていないのだ。

『スバル、もう一度クロスファイアーやるよ!!』

『オウ!!』

『キャロは後ろから援護お願い。エリオは私が失敗したら攻撃の手が止まらないようにして。』

『了解。』

『わかりました。』

念話で指示を出してから、私はカードリッジをロードする。

ガシャンガシャンと2発、カードリッジを消費すると、大量の魔力弾が空中に浮かんだ。

ふと、ホテル・アグスタでのことを思い出す。

あの時と同じ・・・いや、それ以上の弾が私のまわりに浮かんでいる。

私はあの時一人で無茶をして取り返しのミスショットをした。

あの時はかなりきつい毎日で、そして、もっともバカバカしい日々だった。

けど、今は違う。

毎日が充実した、楽しい毎日だ。

それにあの時よりも成長した。

だから・・・

「やれる!!」

引き金を次々と引いてく。

数十発に及ぶ弾が違う軌道でライニーを狙う。

その間をかいくぐるようにしてスバルがクロスレンジに持ち込んでいく。

ライニーは落ち着いたもので次々と私の弾を落としていく。

そして、最後の一発を落としたとき

「行け〜!!」

スバルが叫びながら突っ込む。

ちょうどクロスレンジに飛び込んだところだ。

コレならイケる!!

そう思った瞬間。

「クッ!!」

スバルが弾かれた。

まただ。

なのはさんのガードでさえ貫くスバルの一撃がいと簡単にガードされた。

「はぁあ!!」

エリオが横から不意打ちを食らわせようとするが、それさえも弾かれた。

それどころか、逆に弾が飛んできて避けなくてはいけないほどだ。

(何かないのか!?)

ライニーを一撃で倒すことの出来る方法。

いや、倒さなくても攻撃を入れられるだけでもいい。

それで少しでもダメージがあれば彼にも隙が多くなるはずだ。

(・・・やるしかないか。)

なるべくならコレは使いたくない。

いや、使うのはいいが、後が続かなくなる。

最悪、全滅ということもある。

けど・・・

(迷ってる暇はない、か。)

腹を決めた。

『みんな、フォーメーションFB、やるわよ。』

『え、やつちゃうの!?!』

『しょうがないでしょ、あのガードを抜くにはそれ以外は思いつかないんだから。』

『けど、もし外れたら・・・』

『外さないから大丈夫。エリオ、だからサポートよろしくね。』

『私もがんばります。』

『ブーストの管理とかは任せたわ、キャロ。』

私は息を思いつきり吸う。

弾が飛んでくるが、軽く横に避ける。

『行くよ、みんな!』  
『『『おう(はい)!』』』

エリオとスバルが一気に最前線に飛び出す。  
その間に私とキャラはライニーから距離を取った。

ある程度離れたところに来ると、私はクロスミラージュを構える。

「クロスミラージュ、セーフティ解除。フルドライブ!」

『Full Drive, Ignishon!』

カードリッジが二発消費される。

マガジンが空になったのであつらしいものと交換する。

「ケルケイリオン、ブーストアップ・フルドライブアクセル!」

ピンク色の魔力が私のデバイスに受け渡される。

「行くよ、クロスミラージュ!」

《OK, Master. Load Cartridge》

ガシヤンガシヤンと次々とカードリッジが消費される。

その数、10発。

さっきのブーストとあわせて、やっとこさ使える私の最大の攻撃  
魔法。

オレンジ色の私の魔力とピンクのキャラの魔力が目の前でどんど  
ん収束していく。

空気中に存在する魔力も、次々と蒐集し、魔力を練る。

こちらの異変に気づいたライニーが攻撃してこようとするが、ス

バルとエリオが邪魔をする。  
いける!!

「カウント、開始!!」

《All right・Count 10, 9, 8, …》

『後3秒したら全員回避!!』

『はい!!』

『了解!!』

《3, 2, 1, 0!!》

「スターライト・ブレイカー!!」

ちりちりと空気を焼いていた魔力を一気に解き放つ。  
すさまじい光と共にライニーを包み込む。

しかし、さすがというか、それでも彼は防いでいた。  
けど、負けられない!!

「ブレイク・シュート!!」

反動で振り返りそうになるのを全力で我慢しながら全ての魔力を  
注ぎ込んだ。

すると、パリンツというこぎみい音と共にライニーのバリアが  
やっとなされた。

何か、彼は叫んでいるかもしれないが、さすがに収束魔法の轟音  
でかき消される。

余波が収まると、地面にクレーターが出来ていた。  
そして、

「やった・・・」

ライナーが地面に倒れていた。

見たところ、キズはさっきのスターライトブレーカーの余波だけのようだ。

意識を失っているので、軽くバインドを掛けると、私は地面に座り込んだ。

「・・・つかれた。」

ぼつりとそうつぶやいた。

向こうから他の管理局の魔導師がやってくる。

やっと終わった。

そう思った。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵

## 第51話(前書き)

今回は短いです。

今後の活動については活動報告をご覧ください。



## 第51話

### 第51話

目を閉じて、意識をとがらせる。

周囲に気を配り、少しの気配も逃さないよう細心の注意を払う。

「そこー!!」

手に持っている魔力弾を投げつける。

すると、さっと高速移動の気配と共に再び相手の気配が消える。

(かなり・・・きつい)

体力的には問題ない。

いや、むしろ有り余っているぐらいだ。

魔力の方もほとんど消費していない。

現にカードリッジは一発も消費していない。

けど、・・・この膠着状態がすでに数十分続いている。

相手は気配を経つのに特化した人、ムサシ。

気配をよむのをやめた時点で私の負けが確定する相手だ。

何せ、ホントに間近に来るまで気がつかないのだ。

「もらった!!」

いきなり真横からほぼゼロ距離の攻撃が来る。

とつさにバリアを張って、防ぐ。

そのままカウンターを仕掛けようとするが、再び気配がたたれて姿が見えなくなった。

(ついさっきまでは・・・)

そう、ついさっきまでは徐々にムサシを追い詰めていたのだ。後一步というところで、一切彼の気配が消えた。

他の局員が行っている探査魔法にも引つかからない。いったいどうやっているのやら。

「せいやっ!!」

かすかな気配を感じてバルディッシュのハーケンでなく。

確かな手応えがかえってくる。

捕らえた!!

「フォトンランサー!」

気配に向かって打ち込む。

しかし、すんでの所で避けられた。

そして、再び気配がなくなる。

逃げられた。

あの状況でどうやって・・・考えても仕方がない。

何か打開できるような方法はないだろうか。

広域型攻撃を加えるか?

けど、それでは私が呪文を唱えている間に効果範囲から逃げられる。

一瞬で捕らえて、かつぶっ飛ばせる方法・・・

罠に掛けるか? 数撃てば当たる作戦。

・・・現実的じゃないな。

というか、魔法探査でも引つかからないのにどうやって罠を発動させるんだろ。

トリガーが設定できないんじゃない意味がない。  
なら他には・・・  
考えても仕方がない。

やっぱりここは神経すり減らしてでも相手の気配を探るしかないか。

そう思って、再び目を瞑ったときだった。

「うわあ！！」

すさまじい強風が辺り一面をないだ。

風に吹かれてまわりの土が砂嵐のように舞い上がりあたりを覆っていく。

不意に大きな気配を感じた。

目に砂が入らないよう薄目にしながらそちらを向くとムサシが砂から身を守ろうとしていた。

あまりの風の強さに私は攻撃も出来ないが、不意にひらめいた。  
風が収まると局員に指示を出す。

『そんなの、我々の魔力では10秒しか持ちませんよ!?!』

「結構です。よろしくお願いします。」

『・・・わかりました、我々も最善を尽くします。』

「よろしくお願いします。準備の方はどれくらい・・・」

『すぐにでも始められます。』

「では、10秒後をお願いします。」

『はい、わかりました。』

私はゆっくりと息を吐くと、バルディッシュを握りなおした。

『10、9、8・・・』

カウントダウンが始まると私は叫んだ。

「バルディッシュ、ライオットザンバー!!」

《Riot Zamber Calamity Form, ignition》

カードリッジが数発消費されるとバリアジャケットがソニックブームに切り替わると同時、バルディッシュが巨大な大剣となる。

『3、2、1、0!!』

カウントがゼロになると同時、遠くから超高濃度の魔力が辺り一帯を満たす。

私が編み出した策はこうだ。

先ほどの砂嵐の際、彼は気配を立つことが出来なかった。

これはおそらく、常に動く物体と共に自分の防御に手を焼かれたためだと思われる。

ならば、こちらが似たような状況を作り出せばよい。

砂嵐は私まで動けなくなるから論外だが、つまりが空気以外の何か異物が流れるようにしてまわりをうごめけばよい。

それが水でも、炎でも、・・・高濃度の魔力であっても。

「そこだ!!」

辺り一帯を覆う魔力にかすかな揺らぎを感じた。

そこを私のライオットザンバーでなぎ払う。

いくら相手が早く回避能力が高いと言っても振り回される武器の早さから逃れることは出来ない。

例え防御が間に合っても私のザンバーなら・・・

「貫け、雷光!!」

ムサシがとつさに張ったバリアをあつさり打ち砕き彼をそのままぶつ飛ばす。

ぐうの音も出ないのか彼はそのまま受け身も取らずに地面にたたきつけられた。

逃げられるような気配もない。

「終わりました、お疲れ様です。」

通信を入れると、あたりを覆っていた魔力が霧散する。

念のため逃げられないようにバインドでムサシを縛ると私はクラウディアへと連絡を入れた。

「状況、終了しました。」

私の任務はコレで終わりだろう。

「あ、私砂まみれだ。」

帰ったらシャワーを浴びよう。

そんなことを考えながら周囲に散った局員が戻ってくるのを私は待った。

〔 to be continue 〕

## 第52話（前書き）

今後の活動等については活動報告にて。

## 第52話

### 第52話

うちは今、すごく、苦戦していた。

いや、別に相手をぶっ殺すなら話は早いやけど、それじゃ意味がないから。

「くうっ!!」

あまりある魔力を使ってシールドを張り相手のマシンガン攻撃を防ぐ。

相手に球数の制限がないというのがきついな。

というか、そもそも道具を使うのは反則やないかな？（デバイス  
はのぞくで。）

魔導師なら魔導師らしく純粋な魔力で勝負しや!!

・・・あ、彼女は魔導師じゃないのか。

「このままじゃ埒があかな。リン、いけるか？」

『はいです、シールドをバーストさせた後、小規模結界と魔力弾によるノックダウンですね。』

「そうや、いくで。」

スーツと息を吸い込むと一気にシールドへ魔力を流し込む。

シールドはキュ〜と魔力を高めていき、そして、はじけ飛んだ。すさまじい爆発に紛れてうちは上空に逃げる。

「リン!!」

『はい、封鎖領域“ゲフェングニス・デア・マギー”』

杖先から悔いる球体が急速に広がり、センチを閉じ込めた。

「今や!」

「『シューティング・レイ×20』」

轟音と共に封鎖領域内が莫大な光に包まれる。

封鎖領域と言っても囲っている範囲は半径10mほど。

その中を魔力弾であるシューティング・レイを20回分ぶち込まれたらどんな相手でもかすったただけで回避反応が鈍り、致命的なダメージを負うことになるだろう。

「ふう・・・危なかったわ。」

かすればのはなしだが。

それにしても・・・確かに封鎖領域内に閉じ込めたはずなんやが、どないな方法で抜け出したんやろう。

まあ、考えられるのは一点集中砲火、やな。

封鎖領域はコンクリートの壁と同じで全体に広がる攻撃には強いけど、一転に高圧の攻撃を加えられるともろい。

そこを利用して抜け出した。

「どないする?・・・手詰まりやで。」

「はい・・・防ぐことは出来ても、攻撃方法がないんじゃ捕縛も出来ませんよ。」

ラインに尋ねるが、彼女も手詰まりのようだ。

何も思い浮かばないようだ。



「いつそのこと手数で攻めるか。」

「力押しというわけですね。私としては魅力的ですけど、管理局の法律に引っかけりますよ?」

「それはあかなあ・・・」

こうやって相談している間にも次々と攻撃を加えられる。

魔力の量に地震はあるから、後はミスを専用に防ぐだけ。

最終的には相手が疲れるまで相手するしかないやろう。

まあ、疲れるのを速めるためにちょこちょこ攻撃は加えるけど・

・

「そうや。」

「ん、どうしましたはやてちゃん?」

「いいこと思いついた。」

「・・・?」

「どうせなら罠仕掛けてみよう。」

「罠?」

「そうや、運が良ければ相手が引つかかってくれる。うんがなくてもこっちに被害はない。いい案やろ?」

「けどどこにどのように仕掛けるんですか?」

「適当や。」

「・・・はやてちゃん・・・」

ラインが白い目で見ってくる。

「とにかくたくさん仕掛けとけばセンチが引つかかる確率も上がる。そうやる?」

「・・・はいはい、なら捕縛と気絶のトラップでいいですね。」

「うん、頼むでライン。」

十分後。

「うあああー!!」

見事センチが引つかかってくれた。

「よし、成功やなりイン。」

「そうですね。そりゃ全部で1200も仕掛ければ引つかかってくれないとこちらの苦労がありませんよ。」

「けど、センチ気絶してへんで?」

「・・・反射で防御したんですよ。立派なものです。それに比べてはやてちゃんは・・・」

「あ~~~~ああああ~~~~、小言は聞きとつない。さっさとしっかり逮捕してもどるで。」

「・・・はやてちゃん・・・」

ラインが疲れたように方を落としてクラウドニアへの転送ポートを開いた。

↳ to be continue

## 第53話(前書き)

なのはさん視点です。  
更新遅れてすみません。

## 第53話

### 第53話

「一班二班は艦内の制圧、及び制御の奪取。三班はアストラル・S・キャロメイの救助、四班はディステイ……いや、駆動炉の選挙をお願いします。」

「います。」

「ディステイの逮捕は……」

「そつちは私がやります。各員、どこにどのようなトラップが仕掛けられているかわかりません。注意しながら行動してください。」

「……了解。」

一部の局員が私の指示に怪訝そうな表情を浮かべるが、結局艦内に散っていく。

転送先選ばれた艦のエントランスホールのような場所には私一人が残された。

私は壁際まで行くとそつとその表面をなでる。

ざらざらとした金属のような土のような……そんな感じの手触りがする。

「……どうして他の奴らをこの部屋から追いやった。」

後ろから声がする。

私は別段、驚くでもなく振り返った。

そこには赤い髪に燃えるような深紅の目をした男……ディステイが立っていた。

「・・・私の魔法は規模が大きいのでここでは他の局員を巻き込みかねませんから。」

シューティングモードのレイジングハートをディステイに向ける。

「そうか・・・なら忠告だ。お前と私がここでぶつかれば、船ごと沈みかねないぞ。他の部屋に追いやるよりもこの艦から避難させる方

が先決ではないか？」

「それに関しては大丈夫です。この部屋はどうやら模擬戦専用の対魔法素材を使った壁で覆われているようですから。」

「・・・そうか。」

ディステイはそれきり、黙ってしまふ。

「あなたを危険魔法使用・窃盗・並びに傷害等の罪で逮捕します。武装を解除しておとなしく投降してください。」

「・・・断る。」

彼が手を振る。

するとその手にはいつの間にか長さが3mにはなるであろう長杖が握られていた。

「・・・怪我をしても知りませんよ。」

「それはこっちの台詞だ。」

これ以上は何を言っても無駄だ。

しばらく、にらみ合いが続く。

先に動いたのはディステイだった。

「カードリッジロード。」

彼の杖元が開き、カードリッジをはき出した。  
杖がほのかに朱く染まった。

「行くぞ!!」

そのまま彼は突っ込んできた。  
杖を振りかぶるようにしてこちらを殴るつもり。

『Protection』

私が張るまでもなくレイジングハートがバリアを張る。

「カードリッジロード。」

私もカードリッジをロードする。  
そのまま、魔法弾を浮かべ、いくつかをディステイに放つ。

「嘘!!」

彼は私の放った球を一別すると、引くでもなくそのままバリアに加える力を強くした。

てっきり離れると思っていた私は一瞬、反応が遅れる。

パリンッ。

場にそぐわぬ軽い音と共にバリアが割れる。

「はぁぁぁー!!」

彼はそのまま私を殴ろうとする。  
慌ててレイジングハートで彼の杖を受け止める。

「くうっ!!」

すさまじい力だった。

もともと私は女で彼は男だから腕力の差はあるだろうが、そこは私。

魔力であらかじめ体を補強しておいたのだが・・・

押されてる。

彼の圧倒的な力に私はじりじりと杖を押されていた。

このままでは押し込まれる。

集中。

私の周囲に浮かべていた弾を制御してディステイに向かわせた。

「ふんっ!!」

彼は息を吸うとそのまま杖で私を吹き飛ばした。  
壁にぶつかって衝撃に一瞬意識が飛ぶ。

「・・・っ痛。」

当然、私に制御されていた魔力弾も私の意識が飛ぶと共に消えた。

「・・・あの状況で撃つか。」

しかし、彼も無傷ではなかった。

私ほどではないが、左腕に焼けた痕のようなものがあつた。

吹き飛ばされた瞬間レイジングハートが私の弾の一つを制御して彼にはなつたのだ。

私は体勢を立て直しながら、作戦を変更する。

力押しで行こうと思つたがそれは今を見れば無理だとわかる。

だから、技で勝負だ。

『Load Cartridge.』

私の意志に反応してレイジングハートがカードリッジを数発、ロードする。

同時に周囲にたくさんの数の弾が浮かぶ。

それも様々な種類の。

集中力を上げると、私は彼に少しずつ時間をずらしながら球を放つた。

彼も、複数の魔力弾を宙に浮かべた。

さすがにこの量の弾を全てかわしながら私に突っ込んでくる気はないようだ。

そこからはすさまじいことになっていった。

私はいつこの間リミッターを解除して現在S+、彼も以前からの戦闘データからオーバーSランク魔導師。

互いに魔力と技術は豊富。

相手の飛んでくる弾をよけるでなく、自分の弾で落とす。

落ししながら相手に向かって球を放つ。



当然ながら彼も弾で受けて、弾をこちらにはなってくる。

その状態が数秒の間に20コぐらいという、何ともすさまじいことになって、あたりが魔力弾の衝突による光であふれかえる。

撃ち落とせなかった弾をシールドで防ぎながらこちらにも仕掛ける。

そのとき、コールが入った。

通常、戦闘中は通常回線を切つてあるので繋がらないのだが、こうやってはいると言うことは緊急通信だ。

「なに！？今忙しいんだけど！！」

再び束となってやってくる弾をうちとしながら叫ぶ。

叫ばないと、通信の音でさえ聞こえないほどすさまじい爆音が続く。

『すまん、緊急事態だ。今誰と戦っている。』

相手はクロノくん・・・もといクロノ提督だった。

「デイスティ。今集中砲火浴びてるどころ！！」

『そうか、まあお前なら大丈夫だろう。』

「ちよつと危ないけどね！！」

『お前でぎりぎりと言うことは・・・ちゃんと一班の局員は退避させてるんだろつな。』

「他の搜索に当たらせてるよ！！ねえ、なんの用事！？早く言ってくれると助かるんだけど！！」

全て裁ききつて、次に私から攻撃をしかける。

三十に及ぶ弾を浮かべるとそのうちの二十を放つ。

『ああ、なら今すぐディスプレイの逮捕は諦めて、お前もアストラルの捜索に当たってくれ。』

「なんで!!！」

『さきほどユーノ館長から連絡があつてな。アストラルのレアスリンク・オブ・フェイカリストキル運命の環と聖櫃につ

いて書いてある資料がまた見つかったそうさ。』

「それで!?!」

『それによると、昔にもこの二つのレアスキルを持った人がいたそうだが、その二つのスキルのせいで若くして死んでしまったそうさだ。』

『

「えっ……」

一瞬言われたことがわからなかった。

おかげで集中が乱れていくつか弾を撃ち漏らしてしまう。

「シールド!!！」

シールドを張って弾を受け流し、弾を更に浮かべて相手を攻撃しながら怒鳴る。

「なんで!?!」

『死因は魔力の過多使用。』

つまり、体が魔力の使用しすぎで崩壊したと言つこと。

『運命の環リンク・オブ・フェイトを使えばそこは何とかなるんじゃないの!?!』

『それはあくまで机上の空論だ。』

「どこが!?!」

『リング・オブ・フェイト運命の環とは、あらゆるものの時間を戻すスキル。だから、この二つのスキルがそろった場合、無限とも

言える魔力を扱うことが出来る。ただし、リング・オブ・フェイト運命の環に制約がなければの話だ。』

「制約?」

『リング・オブ・フェイトああ、運命の環はある一定時間内・・・本人時間だが・・・に何度も使用すると、使用回数に比例して魔

力消費が激しくなるそうさ。つまり、一日に膨大な魔力を扱うと、リング・オブ・フェイトその人は魔法を発動させる前に運命の環の

魔力使用で体が崩壊するそうさ。』

「・・・ごめん、言っている意味がわからない。」

『リング・オブ・フェイト簡単に言うんだ。運命の環のスキルを使いすぎるとアストラルは死ぬと言うことだ!!!』

その言葉に、思わず私は攻撃の手を止める。  
かなりの数の弾が飛んでくるが、シールドを張って防御。  
すさまじい衝撃だが、全てを受け流した。

「・・・どうした、もう我を捕まえるのはやめるのか。」

攻撃の手がやんだことを怪訝に思ったのだろう。  
デイスティが攻撃をやめてこちらに聞いてきた。

「・・・あなたは知っているのですか。」

静かに、静かに聞く。

「何をだ？」

頭が、理性が、感情が、

「リング・オブ・フェイト運命の環を使いすぎるとその使用者は死んでしまつと言つことです。」

少しずつ、塗りつぶされていく。

「……知っている。」

怒りに。

「アストラルは……」

悲しみに。

「……知っている。」

やるせなさに。

全てが、とんだ。

「止めなかつたのですか。」

「なぜ止める。我はその危険性を示して、あえてその計画を持ち込んだのだ。その我がなぜ止める。」

「人が……アストラルが死ぬんですよ！？それを放っておくん

ですか？」

「彼女が決めたことだ。我としてもホントは彼女を殺したくはない。」

「なら・・・」

「けど、仕方のないことなんだ！！」

デイスティの怒声が部屋に響いた。

「私だって、長い間彼女の側にいた。そんな彼女をみすみす殺したくはない。それでもだ！！私にはやるのが、やらねばならないこと」

がある！！そのために、シルベンスが崩壊した後も研究を重ねた。彼女が死ななくて、それでシルベンスを復興させるすべを探したけど

、万全なものは何一つ得られなかった。期限も間近に迫っていた。どうしようもなかったのだ！！」

デイスティが叫ぶ。

彼が今まで抱えてきた苦悩をはき出す。

「私は彼女と、私の家族とを天秤に掛けなくてはならなかった。そして、当たり前のように傾いた。だから、彼女に提案した。いや、  
嗚

けた。コレは私の罪だ。後でどうとでも贖おう。しかし、それもこの計画が終わってからだ。」

デイスティは出口の前で杖を構えた。

私をここから出さないという意味表示だ。

「そう・・・ですか。」

私は杖先を下に向けた。

彼は怪訝そうにこちらを見るが、そんなのを気にしていらなかった。

たまらなく悲しい、辛い、そして怒りがどこからともなくこみ上げてくる。

ギョツと杖を握ると、レイジングハートが反応した。

『Exceed Mode lireace』

エクシードモードに切り替わる。

「なら、私はあなたを倒しても、止めに行かないといけません。」

杖をしっかりと握って、構える。

「そうはせん!!」

私の大威力攻撃を感じて彼は魔力弾をこちらに打ち出す。

「レイジングハート!!」

『All right・Set up the collecting mode and StarLight Break rex.』

大量にカードリッジを消費しながら杖先に魔力が集まっていく。

同時に、こちらに飛んできてきた魔力弾が消えた。

「なに!？」

デイスティが驚いたような声を上げる。

コレが最近考えた私の必殺技だ。

ブラスターモードは本当にやばいときにしか使えないし、今回はシャマル先生からも止められた。

なら、どうやって相手と対峙するか。

結果、大威力砲撃で仕留めると言うことになるが、それには隙が多すぎる。

みすみす相手に攻撃の機会を与えるわけにはいかない。

そこで編み出されたのが今回のモードだ。

もともとスタライトブレイカーは私自身の魔力の他に周辺に存在する魔力を吸収して放つ攻撃だ。

それを応用して、相手が結合した魔力までこちらに取り込んでしまっわけだ。

ちよつと負担が大きいか、ブラスターに比べれば軽いものだ。

それに、相手も状況が理解できなくて焦る。

そこが私の狙い所だ。

「すこし、頭を冷やそうか。」

怒りと、悲しみと、つらさと、願いを込めて、私は引き金を引いた。

「こちらスターズ1。デイスティの逮捕に成功。他の局員に引き渡し後、アストラルの救出に向かいます。」

『了解。よろしく頼みます。』

クラウドディアに報告を入れると私はやってきた局員にディスプレイを引き渡してかけた。

↳ t o b e c o n t i n u e ↵



## 第54話(前書き)

さて、ラスト一つ前のお話です。

後は、エピソードだけです。

明日、最終話の更新をします。

何かありましたら、メールかメッセージボックスへ。

感想でも意見でも、何でも構いません。

## 第54話

### 第54話

「リング・オブ・フェイト運命の環のスキルを使いすぎるとアストラルは死ぬと言っことだ！！」

私がこの言葉を聞いたのは偶然だった。

クラウディアの転送システムへのハッキングが終わって転送されたのだが、いまいち座標が上手く固定されていなかったらしく、本来付

くべき部屋には出ず、その廊下に出た。

一応、中の確認をしておこうと思って扉をすかすと、先ほどの声が聞こえたのだ。

この声は・・・クロノ提督！？

けど、微妙に雑音が入ってるからおそらく通信だろう。

そんなことはおいといて・・・

今、なんて言っただ？

アートの、死ぬ？

「・・・急がなきゃ。」

ギョツとレインを握り絞めると私は廊下を急いだ。

私は意識を集中させながら走った。

いや、飛んだ。

飛行魔法を使って、低空を滑走する。

次々と飛び去っていく扉には目も向けず、ひたすら前進した。

時折、局員の人を追い越すが、敬礼するだけでそのまま飛び続ける。

私はなのはさんの訓練で何となくだが相手の魔力反応を見分けられるようになった。

特にアートはいつも組んでいた影響もあって、一段とわかりやすく感じる。

いま、私は右斜め前にアートの反応を感じる。

その直感を信じて私は無機質な廊下を高速で飛んでいく。

そして、……

「ここだ。」

ギョツと急制動を掛けて一つの扉の前で止まった。

あまりの青銅に一瞬胃の中がひっくり返りそうになるがなんとか飲み込む。

ゴクツとつばを飲む。

「……何緊張してんだろう。」

なかなか扉に手を掛けられなかった。

アートにあつたら最初になんて声を掛ける？

どうやってアートを止める？

いや、その前にカ一杯アートを抱きしめよう。

そして殴ってやるんだ。

心配させんなって。

けど、アートが変わってたらどうしよう。

もしかしたらもう、手遅れかもしれない。

いや、そんなわけない。  
そんなわけない……よね。

「……開けよう。」

開けて、会ってみる。

そうすればわかることだ。

何をするかは私次第。

その時になればわかる。

扉に手を掛けて、横にスライドさせた。

力に反応して、扉が自動でスライドする。

私は漏れてくる光に目を細めた。

まぶしい。

あまりにも明るい部屋だった。

いや、部屋の照明が明るいのではない。

壁が白いから明るく感じるのだ。

そして。

「……アート。」

その白いキャンバスに影を落とす人影が見えた。

その影はゆっくりと頭を上げるとこちらを向いた。

「……シユリ。」

いつもと変わらない笑顔を浮かべた……いや、違う。

これからの自分の運命を諦めた投げやりな笑顔を浮かべたアート

がいた。

\* \* \* \* \*

ぼけーつと部屋で寝っ転がっているとシュツと扉の開く音がした。ディスプレイがやってきたのかと思って体を起こす。すると、そこにはシュリがいた。

「・・・アート。」

間違いない。

シュリの声だ。

「・・・シュリ。」

にっこりとほほえんでみる。

シュリにあえて嬉しい。

それを伝えるために。

シュリはツカツカとこっちにやってくる。

私はベッドから降りて、待つ。

シュリは私の前に来ると、歩みを止めて、

パシンッ

「・・・えっ・・・」

私の頬をたたいた。

何がどうなっているのか、さっぱりわからない。

けど、……シユリは泣いていた。

「バカ……バカ……アートのバカ。」

ぼろぼろと涙を流しながら言われる。

ポケットからハンカチを出すと、シユリの波をダフこうと顔に手を掛けるが、ぱしっとはたかれた。

「何で……どうして……勝手にいなくなったのよ!!」

かと思ったら、いきなり私に抱きついてきた。

優しい、シユリの香りが私の鼻をくすぐる。

その香りに安堵を覚えながらも私はどこか、寂しい。

「ねえ、アート!! 答えて!!」

ぼかぼかと胸をたたかれる。

何で私がシユリの前からいなくなったのか。

そんなのは決まっている。

シユリの……デイスティの……私のためだ。

私の力があれば、死んだ人が蘇る。

シユリの大切な人が戻ってくる。

そんなことは口が裂けても言えない。

「……こうするしかなかったから。」

かろうじて、そう絞り出す。

「こうするしかって……何で私に一言の相談もなかったの!？」

「……シユリを巻き込みたくなかったから。」

「うそよー!!」

断言される。

いや、嘘ではない。

本当の理由ではないが、それも一部には含まれる。

「そんなの嘘よ、どうせ私に止められるからとか思ったんでしょ  
!..?」

・・・ブンゴ。

よくわかっていらっしやる。

「わかるわよ、アートの考えることなんて。いつも単純なんだか  
ら。」

・・・今、すぐくけなされてる？

「単純で、バカで、鈍くさくて、そして、優しい。」

誉められてるのかけなされているのか・・・微妙だな。

「だけど、そんなアートだから私は好き。」

「・・・シユリ。」

嬉しい。

どんな状況であっても、私がどんな存在か知っても、彼女は私が  
好きだって言ってくれる。

たまらなく嬉しい。

そして、そんなシユリが大好き。

「アートは私の大切な親友。」

「・・・私もだよ、シユリ。シユリは私の親友。」

ギュッと抱きしめる。

「だから、もうやめよ?」

彼女は私の腕の中から見上げる。

涙と鼻水でせつかくの綺麗な顔が台無しだ。

ぐちゃぐちゃになっっている彼女の顔を今度こそハンカチでぬぐう。  
ぬぐいながら、私は首を横に振った。

「何で!?!」

必死な顔で彼女は私を見る。

「ねえ、シユリ。シユリは両親に会いたくない?」

その顔が一瞬揺れた。

決まっている。

彼女は会いたいのだ。

そんなの誰でも当たり前のこと。

そんなことを聞く私は・・・卑怯だ。

けど、・・・そうじゃないと、私は・・・

「会いたいよ、会いたいけど・・・アートが犠牲になるなんて嫌だ!!」

こう言われると、弱い。

私は計画をやめたくなる。



やめて、安穩とみんなで過ごしたくなる。  
けど、・・・それは逃げることとかわりがない。  
だから、私は首を横に振る。

「だって・・・アートはその計画とやらを実行すると自分が死ぬ  
ってこと知ってるんでしょ!?!」

「・・・うん。」

「なら!?!」

「けど、・・・私はやめない。」

しっかりと彼女の瞳を見つめる。

そのまま逸らすと、彼女の肩を抱いてドアへと連れて行く。  
ドアのところで肩を離すと一歩下がる。

「・・・ごめんね。」

そういつて一歩下がる。

シユリはじつと下を向いていた。

「・・・る。」

「ん?」

シユリが何かを呟いたが、よく聞こえない。

「・・・なら、私が止める!?!」

そういつてシユリは魔法を唱えた。

「バインド!?!」

瞬間、私はバインドに捕まる。  
しかし、私は慌てなかった。

「ブレイク。」

ぼつりと呟く。

それだけでバインドは跡形もなく碎ける。  
私はベッドに戻ると手に持っていたアスターを起動させた。  
そして、振り返る。

「止める、力ずくでも止めてみせる！！」

シユリはそういつて、レインの銃口をこちらに向けた。  
けど、遅い。

「システムリミッター解除。トランスミグレーションシステム、  
起動。」

パアアアツと部屋全体が光り始める。

同時に私の下に巨大な魔方陣が現れる。

シユリが慌てたように何かを叫びながら魔法を発動しようとする。

しかし、私の魔力に弾かれて、上手く発動できないようだ。

同時にこちらの魔法も部分的にだが崩れる。

コレでは・・・成功しないかもしれない。

「クリスタルケージ、対象シユリテイ・S・ウォルティ。」

『Crystal Cage』

手の中にあるアスターがクリスタルケージでシユリを囲む。  
ガンガンとシユリはケージをたたたくが壊れる気配はない。

さつと私の体がシステムによって宙に浮かぶ。

ここからが本番だ。

目を閉じて、意識を外に向ける。

周囲に浮かぶ魔力と感応して流れを作る。

「アート、やめて〜!!」

不意に、声が届く。

うつすらと目を開くとシュリがケージを叩きながら泣いていた。

こっちに真摯な、そして必死な思いを向けながら叫んでいる。

不意に、全開の失敗の光景を思い出す。

私は・・・全身の毛細血管が破れて血まみれになったのだ。

おそらく、今回もそうなる。

いくら私が運命の環のスキルを持って肉体を再生させても、リング・オブ・フュイト限界

は存在する。

シュリはその光景を、ただ壁の向こうから見せつけられる。

・・・むごい。

すごくむごいな。

「アスター、出来る？」

『OK, Master. Load Cartridge and Transporter High.』

「アート!!」

シュリの叫び声と共に転送魔法が発動する。

ものの数秒でケージの中は空になった。

「ついでに、艦内にいる人もお願い。」

『Sure, . . . . Mission complete . . . .』

『

「ん、ありがとう。」

そう呟くと、私はアスターを握り絞めた。部屋はとても静かだった。

いや、微かにだが機械の駆動音が聞こえる。

魔法を発動しているから光景はさまざまいものだが、音自体はほとんどない。

いや、もしかしたら私の聴覚がすでにいかれ始めたのかもしれない。

「……ごめんね、アスター。ダメなマスターで。」

『Don't worry, Master. You are my master of the only 《あなたはただ一人の私のマスターです。》. It goes together even where .』

《どこまでも一緒にします。》』

「うん……ありがとう。」

最後に私は髪留めに手を伸ばした。

シュリにもらった髪留めだ。

本来は防御の魔法が込められていたのだが……今回のシステムで、その機能はいかれてしまったようだ。

それをアスターと一緒に握り絞める。

「……ありがとう、シュリ。」

そういって、私は魔法の最後の引き金を引いた。

世界に奇跡が起こった。

死んだはずの人が、動物が、星が、生き返った。

ほのかに紫を帯びた光と共にそれらはまるで滅びたことなんてなかったかのように現れた。

一人の命と引き替えに転生したただ一つの星。<sup>Prima Star</sup>

一人の少女の真摯な願いがかなった星。

シルベンスが、再興した。

to be continue to the epilogu  
e

## エピソード（前書き）

とうとう最終話です。

意見、感想等がありましたらメール等へ。

今まで本当にご愛読くださりありがとうございました。

こんご、もしかしたら短編の番外編を書くことになるかもしれないが、その時はよろしく願います。

## エピローグ

epilogue

アートが禁断の魔法を発動させた事件、私が聞いた魔法のシステム名から—TMS《Transfiguration System》  
事件と呼ばれるようになった

事件から三ヶ月がたった。

かの事件に関わった四人の男女・・・デイスティ、ライニー、ゼンティ、ムサシは現在、高軌道拘置所にて裁判を待つ身となっていた。

彼らは事件調査にも協力的で、クロノ提督の話だとそれなりの刑は受けるが、ものの数年で出てくるそうさ。

それ以降は保護観察・・・といったところか。  
発動した魔法は完全とは行かないもののほぼ、成功した。

シルベンスは時空の狭間から姿を現し、時計が逆戻りするように惑星の自転が反転した。

死んだ人も、見事生き返った。

ただ一人・・・アートをのぞいて。

空港の電光掲示板に表示された時間を確認していると声を変えられた。

「シュリテイ、本当に行くの？」

なのはさんが心配そうにこちらを見ていた。

その後ろにはフェイトさんやはやてさん、それに他のフォワード陣もそろっていた。

「はい。」

私はしっかりと頷く。

「よし、なら最後に全力全開の模擬戦でもする!？」  
「……遠慮します。」

なのはさんがレイジングハートを起動させるのをみながら遠慮する。

あたりまえだ、向こうに変える前に死にたくはない。

アートがあ的事件を起こしてからというもの、彼女は何かにつけて全力全開で私に挑んできた。

私は、それに全力で答える。

そして、終わると気分が少し晴れた。

おそらく、彼女は私に気を遣ってくれたのだろう。

時々うつむく私に元気をくれたのだ。

……ちよつとやり方を考えてほしかったけど。

もしかして、アートを助けられなかった私を責めてるのか？

……まさかね。

「またなんかあったら連絡しや。こっちに帰ってくるときでもええからな。」

はやてさんがニコニコと笑って言う。

「そうですね、また会いましょう。」



ライン曹長も手を振っている。

「これ、私たち機動六課からのプレゼントね。機内でも食べて。」

そういつて、フェイトさんが何かのお菓子を手渡してくれる。

他にも色々と声を掛けてくれる。

この六課はただの部隊ではない。

不意にそう思った。

みんながみんな、信頼という絆で結ばれ、そこに入るものに暖かいものを与えてくれる。

困ったときには全力で答えてくれる。

そんな・・・そう、家族のような場所だ。

『五番搭乗口のシルベンス行き航行船はまもなく出発します。お乗りでないお客様はお早めにお乗りください。』

アナウンスが入る。

私は鞆を持つと、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。」

そういつて、私は機動六課を退役した。

ざつと三時間ぐらいの旅が終わる。

シルベンスは今まで通り、ミッドチルダと航行を結ぶこととなっていた。

何せ、シルベンスにいた人たちにとっては自分たちが死んだことは知らなかったのだ。

現地の調査団によると、時間を戻す際に記憶まで戻ってしまったからだと言うことだ。

変な混乱を避けるため、管理局はコレまでと同じ待遇でシルベンスに接することとなった。

「あああ〜気持ちいい。」

私はシルベンスに付くと、まっすぐ自分の住んでいた町にやってきた。

シルベンスは開発によって灰色の鉄で覆われた惑星。

それはあくまで全体を見た話で、所々には自然の緑が存在した。

私の町の近くにもそれはある。

ここは私の好きな場所だ。

もちろん、町中にも公園があつて木もあるのだが、やはり緑に囲まれた部分となると、こういう所しかない。

手に持った鞆をそこら辺の木下に置くと芝生の上に転がった。

「ふうう……」

ゆっくりと息を吐きながら目を閉じる。

さやさやという草のすれる音とヒュッという風の音、遠くからは車の音が聞こえてくる。

同時にゆっくりと吸った空気からは青いにおいがする。

「……そういえば、今冬なんだよね。」

立った今思い出した。

普通、こんな風に草木がこの季節に茂っているわけがない。

何かしら、魔法の影響が出たのだろう。

ま、私には関係ない・・・か。

おそらくミッドの調査団が調べているところだろう。

不意にメッセージが届いたことを知らせるアラームが鳴った。

「だれだろう・・・」

宙に浮いたモニターを操作してメッセージを表示する。  
ゆっくりと読んでいって・・・ガバツと身を起こした。

「うそ・・・」

メッセージの最後には署名があった。

「うそ・・・うそ・・・」

壊れたレコードのように何度も同じ言葉を呟きながら鞆を持つことも忘れて私は走り出した。

メッセージの最後に、こう記されていた。

“ アストラル・S・キャロメイ ”

\* \* \* \* \*

指定されたビルのエレベーターに乗って、地下に向かう。

押したボタンには地下 階と書かれているのにも気づかず、私はただ、早くエレベーターが付くのを今か今かと待つ。

数分が過ぎて・・・エレベーターの扉が開いた。  
そこには細い通路が続いていた。  
私は転びそうになりながらも廊下を走り抜ける。  
そして、広い場所に出た。  
そこにきて息が切れ、足が止まる。

「久しぶり、シユリ。」

そして、その広い場所の中心に立つ人影を認めた。

「アート・・・」

彼女に違いなかった。

最後に会った服とは違うが、顔や仕草、何より雰囲気が彼女のものだ。

「アートッ!!」

私は彼女の胸に飛び込んだ。  
嬉しかった。

失ったと思っていた親友が生きていたのだ。

アートが生きていた。

嬉しい、嬉しい、嬉しい!!

「アート・・・どこに行ってたのよ。」

声があわずつていることに私は泣いていることを自覚した。  
慌てて涙をぬぐうが、止まらない。

「うん・・・どこ、かな？」

「こっつてどこよ……」

「……シルベンス。」

「シルベンスのどこ？」

「……どこでも。」

理解できない。

「だから、シルベンスの……」

そこで初めて気づいた。

彼女は……浮いていた。

地面に足が付いていない。

「……アート、足。」

私に指摘されて、彼女は慌てた。

「うそ、やばっ！！まだ慣れないんだよね。何で簡単に浮いてしまっただろ……」

「……もしかして幽霊？」

そう思わざるを得ない。

いや、飛行魔法を使えば別だけど、そんな風に浮くことなんて普通出来ないから。

そういうことを考えれば自ずとそういう……

「うっん、違う……ワケでもないのかな？」

「……何その微妙な答え。」

「うっん……」

私の切り返しに彼女はしばらく悩んだ。  
そして、ポンツとをついた。

「神様!?!」

とりあえず殴った。

もちろんグーで。

「あんたが神様なわけないでしょ!?!」

自称神様はウウウウ・・・と頭を抱えてうめいている。  
たく、神様がコレじゃあ、みんな神なんて信じないよ。

「全くの嘘じゃないんだよ。殴らなくてもいいじゃない・・・」

「嘘じゃないって・・・なら本当に神様にでもなったの?」

「うん、私はシルベンス。シルベンスの中心、アストラル・S・  
キヤロメイ。」

意味わからん。

「だから・・・この前の魔法を使って、私の肉体は崩壊したけど、  
もともと聖櫃エカリストのスキルを持つ私は神の末裔なワケだか

ら精神が残って、このシルベンスになっただって言うわけ。」

そういえば、そんな話もあった。

聖櫃エカリストは人ならざらぬものとのリンカーコアのつながりによって成  
り立つスキル。

ということは、彼女は神様と言うことで、間違いはないのか?  
けど、体が崩壊して精神が残ったって・・・

「やっぱりゆうれいじゃん。」  
「ひっで〜。」

八八ハツと二人で笑った。  
ごく、自然な流れだった。

「ねえ、あの後どうなったか聞かせてよ。」  
「う〜ん・・・すごいグロイけどいい？」  
「・・・ごめん、要約して教えて。」  
「了解。」

彼女はこういった。

あのあと、魔法は無事に発動して、私の魔力をバカスカ喰いながら進行した。

当然、何度か二つのスキルを発動して自分の体を治したが、それを上回る速度で魔力は消費していった。

復元の段階では二つのスキルも自分には回せなくなってきて、そこからからだが崩壊したそうだ。

そして、気がついたら・・・

「ここにいたと。」  
「うん。」

うん、じゃないだろ。うんじゃ。  
それじゃ何もわからないじゃない。

「あ、でも。私の核はわかるよ。」  
「核？」

「うん、いくら私が神様になったからって、依り代がなくちゃここにどまれないからね。だからほら。」

そういつて、彼女は手を差し出した。

その掌には・・・髪留め。

「コレが私を救ったの。もともと魔法が入るように出来ていたからね。そこに私を割り込ませたというわけ。」

私があげた、髪留め。

「だからね、シユリが救ってくれたんだよ。」

ニコニコと彼女は笑いながらそれを自分の髪に留めなおした。

そっか・・・私がアートを救う手助け、出来たんだ。

「ん、どうしたの？また泣くの？」

アートが私の顔をのぞき込んでくる。

「うるさいうるさいうるさい！！ほら、その石があったらアートは外に出られるんでしょ！？」

「う、うん・・・」

「なら、行くよ！！」

「どこに？」

「もちろん、機動六課に！！」

「えっ・・・何か嫌だな。フェイトさんやはやてさんはいいけど・・・なのはさんが・・・」



「そんなの自業自得。」

「そんなあ。私はある意味、シルベンスの英雄なのに……」  
「英雄は常に損な役回りなのよ……！」

私はアートの手を取って、再び通路を戻った。

後ろからアートがしっかりと私の手をつかむ。

暖かい感触が、手から、腕から、体に広がっていく。

「アート、これからもよろしくね……！」

「……うん、こちらこそ……！」

私たちは張り切ってエレベーターに乗った。

これから、また幸せな毎日が続くのだ。

私が願った、大切な日々が。

）END（

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6310h/>

---

魔法少女リリカルなのは Prima Star ~この星に願いを~

2011年10月9日18時59分発行